
フラグメント・オブ・タイム

Izumo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フラグメント・オブ・タイム

【Zコード】

Z2520E

【作者名】

Izumo

【あらすじ】

人々の永きに渡る戦争を終え、安息の時間を得た世界、グラルス。そんな世界のとある村に住んでいた少年はある日、他世界の人間と名乗る青年に出会い、そこから運命は大きく変わっていくのだった。そして少年は、時を超えた力を得る代わりに交わした契約に従い、世界を変える旅に出る事となつた。その先に、数多くの困難がある事を知らずに・・・これは、少年達の旅を記録した運命の物語

第一話・逃げる者、導かれる者

どうしてあなたは戦い続けるのですか?
それが運命だから?

どうしてあなたはこの世界を守り続けるのですか?
この世界が愛おしいから?

守りたい人たちがいるから?

ではその世界が偽りであると告げられても
あなたは戦い、守り続けられますか?

もし、それでも続けると言つのなら
どうか最後まで足搔いてみて下さい。

どうせ結果は絶望なのですから.....

耳障りなくらいに鳴り響く警報音。
それと同時に通路は赤く点滅している。

「……者が逃げたぞ！ 脱走だ！」

遠くからは男達の叫び声が聞こえる。
それは命令と言つ名の罵声だ。

「絶対に捕まえろ！ なんとしてもだ！」

俺はずっと走り続けていた。

一本道のような通路を、ずっと。

ただただ、後方から聞こえる男達の声から逃れるために。

「 ッ！！ いたぞ！ 逃がすな！」

考える暇も与える事もなく、男達はしつこく追つてくる。
その為、角を曲がり空いていた部屋にとつたに駆け込む。
そして、急いでゲートをロックした。

「はあはあはあ……ふう」

壁にもたれて一呼吸。

……いつの間に俺は捕まつてたんだろう。
たしか研究所に侵入して…… ッー？
嫌な事に、思い出そうとする頭痛がする。
思い出すなと誰かが言っているみたいな感じだ。

「そんなことよつ！」から逃げる事が先か……

咳き、未だに荒い息を整えながら何か無いかと辺りを見回すと、
不思議な形をした影があった。

「……何だ？ これ……」

疑問はすぐに好奇心となり、立ち上がって近くのパネルを操作してみる。

パネルには試作型移動用航空機”アサルト”と映し出されていた。これはとんだ掘り出し物だな……。

「……逃げ込んだ場所で、戦闘機を見つけるなんて……」

瞬間、ゲートを壊そうとする轟音が、部屋中に響き渡った。

「これを使うしか方法がない、か」

言っている間に「ツクピットが開き、急いで飛び乗る。身体にフィットするシートに身を沈め、目前にある「コンソールのスイッチを入れた。

すると画面に光が宿り、文字が浮かび上がる。

「アサルト、全システム起動中……全システムオールグリーン、発進準備完了」

よし、動く。

動かし方は……何となくわかる。ツクピットが旧式の戦闘機とあまり変わらない感じがするからだ。

丁度右手の近くにあるスピードレバーを最大にし、足元のペダルを踏み込んで最大速で開いたゲートへと突っ込む。そして、外に出た瞬間だ。

コンソールの画面が、ピーッという電子音を立てて文字を出した。

「時空壁突破機能作動」

何を言つてゐるのかわからなかつた。

だが次の瞬間、意識が飛びそつなほどの眩暈と、体が揺れるような感じがした。

「 ッ！？」

いつまで続くのかわからないまま、強い衝撃と共に意識は飛んだ……。

たくさんの人々が住まつてゐる世界の名は、”グラルス”

この世界ではかつて、世界中を巻き込んだ戦争があつた。

それは、突然の惨劇が開戦の合図となり、されど武力の差が大きい戦争となつた。

多くの命が失われ、多くの村や町が被害を受け、多くの自然が消費された。

そんな、悲しみだけを生んだ戦争が終結して平和が訪れてから数年が経つた。

未だに戦争を忘れない者達が活動していながらも平和を保つているこのグラルスの中で少し小さめにあたる、”ミーン大陸”の端にある、小さな村”アルグ”

のびかな朝を迎えたこの村に大声が響き渡った。

「 しまつたああ！ 寝坊しちまつたあ！…」

銀髪の少年、カイ・エーティファイエスは大急ぎで学校へ向かっている
最中だつた。

「おや、カイ。また遅刻かい？」

そんなカイに、中年の女性が話しかけた。

彼女は呆れたような表情でカイを見、両手を腰に当てた。

「あ、キリーおばさん。またつてなんだよ。昨日は遅刻しなかつた
じゃん」

「昨日だけは、でしょ？ ぱうぱう、こんなおばさんと話して
る暇があつたら急ぐんだよ」

「あ、そうだつた。それじゃ行つてくる」

そう言い残してカイは学校へと再び走り出す。

途中、何人もの村人が彼に声を掛けている姿が見える。

「ほんつと元気だけがとりえだねえ」

キリーは笑いながら家に入つて行つた。

カイは教室の方へ全力で向かい、勢いよくドアを開ける。

「ギリギリセーフー！」

突然響いた大声に、教室内の全ての視線がカイに向けられる。全員の表情は、驚きだ。

「何がセーフだ、授業はとっくに始まっているのだぞ？」

教卓に立つて腕を組み、ピンク色の長髪を揺らして、首だけをカイの方に向けた女性は、呆れた表情をしながら彼を睨み付けた。

「え？ シヴァ先生、冗談きついッスよ」

一息。

「……マジで？」

「大マジだ！」

シヴァが一喝。

その一喝と同時に教室中に笑い声が響き渡った。

「さて、廊下に立っているか、今日一日寝ないで授業を受ける、どっちがいい？ ちなみに後者を選んだ場合、寝た時の罰は今まで以上だ

「ね、寝ません……」

「そりゃ、頑張れよ。それじゃ席につけ

まだ笑い声が聞こえる中、カイはブツブツ言いながら席に着いた。すると、隣の席の少女が笑いながら彼に話しかける。

「災難だつたね～、ドンマイドンマイ」

「あのなあ シルク、そういうのは余計なお世話つていうんだぞ？」

「あはは、それは失礼～」

彼女、シルク・セシールは笑いながらふざけた様子で謝る。

「ま、寝ないように気をつけてね～」

「当たり前だつて。今回の罰はいつも以上だからなあ……」

「おい、そこ、いくら幼馴染みで仲がいいからといつても、私の授業を邪魔していいわけではないぞ？」

言いながらシヴァはチョークを投げ、カイの額にヒットさせる。すると、教室中に拍手と笑い声が響き、対するカイは苦笑しながら額を撫でていた。

結局、時間がたつにつれてカイはうとうとし始め、最後には机に突っ伏して寝てしまい、廊下にバケツ（水入り）を四個持ちながら立たされる事となつた。

時刻は昼下がり。

カイ達の学校は少し早い放課後を迎えていた。

「さて君達、いい知らせだ。こんな小さな学校にも夏休みがあるそうだ。……つというわけで明日から夏休みだ。宿題は出さないが復習はしておくれよ！」　では終わりだ

全生徒から歓声が上がり皆、急ぐよつこにして学校を飛び出して行つた。

シルクは誰かを探すようにキヨロキヨロしていると、田先にカイを確認したため一直線に走る。

「カイー！　この後の『予定は？』

問い合わせられた事に気づいたカイは、後ろから来たシルクの方へと向く。

対するシルクは、ニヤニヤしながらカイの返事を待つ。

「特にないけど、何？　またいい所見つけたの？」

「正解ー、でも今は今まで以上にすごいよ。森の動物達がみんな集まってる場所なんだよ、しかもいっぱい！」

腕を円を描くよつにして大きく回す。
いっぱい、というのを表すよつに、だ。

「へえ、面白そうだなあ……。それじゃ、行ってみるか
「きつまりー、じゃ今すぐ行くよ、着いてきてね」

カイの同意により、二人は村を出て近くの森へ向かう事にした。

一人が向かつた森の名は”ゼク”というが、地元の人々からは昔から”時の森”と呼ばれている。

入り口付近はよく村人が立ち寄るが、奥の方へは誰も行こうとしなかった。

その理由はモンスターが出るからである。

最近、全く姿を見せなかつたモンスターが少しずつではあるが、森などに現れるようになつたのだ。

そんな危険な場所へ、一人は進んでいるのだった。

「なあシルク、まだ着かないのかよ～」

「もう少しだよ、たしかこの木を抜けると……あつた！」

シルクが抜けた先には……たくさんの動物達が集まる憩いの場だつた。

その光景を見たカイは驚きを隠せないでいた。

「す、すげえ……たしかに今まで以上だ……」

ゆっくりと歩み寄つて行くと動物達は人懐っこいのかカイ達に飛びつく。

「どう? す」「こでしょ?」

「ああ、すげえよ。あとは猫がいれば完璧だつたんだけど……」「え? 何か言つた?」

カイの咳きに反応したシルクは、小首を傾げて彼に問い合わせた。だが、カイは両手を振りながら、何でもない何でもない、と言つた為、彼女は軽く言葉を返して動物達の方へと向き直す。そしてしばらぐの間、一人は動物と戯れていた。

森がざわめきだす。

空には黒い雲が広がつていぐ。

それと同時に、動物達が一斉に止まつた。

「あれ? どうしたの?」

すると、その間にに答えるかのように動物達は森の奥へと走つて行つた。

「ど、どこの行ぐのー? どうしあがつたんだろ?」

「さあ?」

『えり の わ ちびき た ょ』

「ん? なにか言つた? シルク

「え? 私は何も言つて無いよ?」

『と の らを よみ』

「まだ 」

『ひちかな』

そう呟くとカイは一人で森の奥へと進んで行つた。

「え？ ちょ、ちょっとカイー、どこ行くのー？」

言いながらシルクがカイを追おうとした刹那、空からバケツをひっくり返したかのように大量の雨が降つてきた。

「ひや、い、いきなり降つてきた！？ ま、待つてよー」

シルクが追つて行つた先には見たことの無い洞窟があつた。

「ここだ」

「こんな洞窟、あつたっけ？ あ、先に行かないでよー」

中に入ろうとするカイをシルクが追つ。

洞窟の最深部に着いたのだろう、行き止まりだった。

「……結局、何も無いね」

言つてシルクが、帰ろつ、と言葉を続けようとその時だった。急に強い光が射したかと思つと、田の前に小さな時計が落ちた。そして、声がする。

『……私が見え、私の声が聞こえる者よ。我を手にし、そして時が

来るまで持つている……』

「この声だ……」

それは、カイにしか聞こえない声。

「え？ 何？ 何が起きたの？」

戸惑うシルクとは違い、カイは冷静だった。
そして、言われた通りにその時計を手に取る。

第一話・回り出す歯車

カイが手に取った時計は針が止まつた少し大きめの懐中時計だつた。

「……ねえカイ、どうしてそんなに冷静でいられるの？」

シルクが不思議そうに問い合わせる。

「驚きすぎて逆に冷静になつてしまつてゐるんだよ」

「それ、意味わかんないよ……」

シルクは少し呆れた様子で溜息をつく。

そんな彼女を見たカイは苦笑しつつ、洞窟の外を見た。

「お、雨止んでるわ。そろそろ出よ! ばせ」

そういつと、走つて出口へ向かう。

「あ、待つてよー。また置いてけぼりじゃーん」

その後を追つようにして、シルクは大声でカイの名を呼びながら走り出した。

そして、洞窟の外に出た時、雨はいつの間にか止んでおり、空は元通りの青空になつていた。

シルクは、葉と葉を伝つて水の雫が落ちていくのを間近で見ながら、先に進んでいくカイの後を追つ。

「快晴だねー、さつきまでの大霖が嘘みたいっ！」

シルクははしゃぎながら両手を振り回す。

「シルクが急にはしゃぎ出したって方が嘘みたいだよ……ん？」

ふと、カイは空に何かが見えるのに気付いた。

「……なあ、あれ何だと思う?..」

「え? どれどれ?」

カイが指を指した方向には黒い”何か”が落ちていくのが見えた。その黒い”何か”は、黒い煙を上げながら落ちていく。

「落ちたね。こりゃ見に行くしかないでしょ」

シルクはそう言つと落ちた方向に向かつて走つていく。

「今度は俺が置いてけぼり? ……って、聞いて無いし……」

先に進んでいったシルクに文句を言いながらも、少し遅れてカイも走り出した。

邪魔な木々を退かしながら進む一人は、長い道のりを歩み、そして一つの広場のような場所にでた。

そこには”何か”が落ちており、周りの木は無残に倒れ、それがクッショーンの役割をしたのか、その”何か”は無事のようだった。

「鉄の塊だな」 「鉄の塊だね」

二人は同時に同じ言葉を発した。

「これが落ちたってことは飛んでたって事になるんだよね……？」

「そうなるね……あれ？」

シルクの目には氣になるものが映つた。
それは鉄の塊の中央辺り。

「中に誰かいるよ？ カイ、助けてあげたら？」

「他人事のように言つくなよつ」

呆れながらもカイは、割れたガラスのカバーを持ち上げようとした。

するとそのカバーは容易に開いた為、カイは中の人を慎重にひっぱりだした。

出てきたのは黒い短髪の青年だった。

その青年の服は身体に密着しているようで、身体のラインが綺麗に浮かび上がっている。

そしてそれを隠すかのように、ケースやポーチなどが所々に装着されていた。

それはまるで、闇にまぎれるために真っ黒だ。

だが、その服は少し破れており、腹部にケガをしたのか血で赤く染まっていた。

「……氣絶しているだけだけど、ケガしてるな。キリーおばさんに診てもらおう」

「さすがに、見捨てる訳にはいかないしねっ！」

そう言つとカイは青年を背負い村へ向かつた。

ケガをした青年を村まで運んだカイ達は、とりあえずキリーの家で休ませてもらう事にし、今は小さな部屋で青年の手当をしていった。

「そ、ケガには包帯巻いておいたから、あとは田が覚めるまで寝かせておけばいいよ」

言つてキリーは腰に手を当て、微笑しながら部屋を出て行った。

「ありがとーございましたー」

シルクは二二二二しながら礼を言つ。その頃、カイはある時計が気になつていた。ポケットに入れ時計があるのを確認し、力強く握る。この動作を何度も繰り返していた。

田を覚ます。

そこには、見慣れない天井があつた。何故、ベッドで寝ていたのかがわからない。だが、すぐに思い出す。

俺はあの施設から逃げている途中だった事を。

また、捕まつた……のか？

内心でそう呟き、ならまた逃げなくてはと答えを出して一気に起き上がる。

だが目に映つたのは施設とは程遠い、小さな部屋だった。起き上がった正面には小窓があり、部屋の隅には小さな棚が置かれている。

「あ、起きたね」

「お、起きた起きた」

声がしたほうを見ると、銀髪をかきながらホツとしている銀髪の少年とその隣に青髪の少女が、それぞれの椅子に座っていた。

「調子はどう？ ケガのほうまだ痛む？」

少女が優しく微笑みながら問い合わせてきた。

「え、あ、大丈夫、だ」

正直、状況が全く掴めないが、戸惑いながら答える。

「……なあ、ここはどうなんだ？」

「ここはアルグだよ」

「小さい村だけどねえ」

即答した少女の答えに、少年が付け足す。

「……だがその名に聞き覚えが無い。」

とりあえず、俺の住んでいた村の事だけでも聞いてみる、か。

「…………じゃあセイルはここからジーハーのいろいろかかるんだ？有名な村だから聞いたことはあるだろ？」

「セイル？ どいだ、それ？」

……正直、問い合わせた時から嫌な予感がしていた。
だがその予感を、全力で否定した。

だから問い合わせ続ける。

「いや、あるはずだ。だってセイルはジードの中でも、有数の都市だから」

「今まで、ジードなんて村も、地名も聞いたことねえぞ？」

俺の問い合わせが終わる前に少年が答えた。

その答えを聞いた時、まるで、カチリッといつ音を立てたかのように思考が止まる。

少年の言っている意味が理解できなかつた。

「…………あれ？ ジード？」

だが少女は、その名前に聞き覚えがあるようだつた。

「ジードってたしか、神話にでてくる世界の名前じゃなかつたつけ？ 前に先生が授業で教えてくれたし」

少女の答えに俺の頭の中は真っ白になつた。
ジードが…………神話の世界？

「…………ふざけるな…………」

怒りがこみ上げてくる。

いや、これは怒りなのだろうか……
もし怒りだとしても、それは全く意味の無い怒りだ。

「ふざけるな！俺の過」してきただあの日々が、今俺の中にある記憶が全て神話の世界！？じゃあここにいる俺はいつたいなんだ！どうしてその神話の世界の人間がここにいるんだ！！

怒りに似た、絶望。

だが、ふと我に返ると、怒鳴つてしまつた自分を悔やんだ。
一人を見ると驚いていた。無理も無い、な。

「…………すまん、取り乱した。…………急に怒鳴つて悪かつたな」

「あ、あはは、いいよいよ。それよりせつかく神話の一つとい
うか他世界の人と出会つたんだし自己紹介しない？」

「お前ノリノリだなあ…………他世界の人間だつて所は疑わないのか
？」

「いやいや、あそこまで必死に怒鳴つてている姿みたら、どう考えて
も演技に見えないんだよ。だから、私はこの人を信じる！決め
たよ？」

少女が言つと、少年は溜息をつき、仕方ないなあ……つと呟く。
自己紹介か、悪くないな。

「…………ユウ・ウラハスだ」

「俺はカイ・エディフィスだ、よろしくな」

「私はシルク・セシールだよ、よかつたらその世界のこと話してく
れる？」

俺は少し考え、施設の事は話しておこうと思つた。

「他世界人、か……」

ユウの話を聞きながら、カイはそう咳き、考えた。
異世界人が来たもこの時計が関係してゐるのか、そしてこれからも
この時計は何かを引き寄せるのか、と。
だが、その考えはすぐに現実のものとなってしまう。
突然、村の外から爆発音が聞こえた。

「な、なになに！？ 何が起きたの！？」

最初に騒ぎ出したのはシルクだった。

「なんで爆発が！？」

もちろんカイも騒ぎ、窓へと近付いた。

その時、突然部屋のドアが開き、キリーが大慌てで入ってきた。

「キリーおばさん！ 外で何があつたんですか？」

「皇國軍が突然、襲撃をしてきたんだよ！」

「……！？ なんでまた村を襲つてるんだよー 戦争はとつぐに終
わつてるにーー！」

カイはその言葉に怒りをこめて叫ぶ。
しばしの静寂の後、キリーが口を開いた。

「さつき村の近くの森に落ちた塊に乗っていた人を探しているらしい。近くに落ちたのならこの村で匿っているのではないかつと考えここに来たそうだよ」

キリーは苦虫を噛み潰したような顔で言った。

その探し人にすぐに気づいたコウは、ベッドから出て立ち上がる。

「…………それは俺だな。俺が出て行けば村は助かるんだな？」

部屋を出ようとするとコウをキリーは引き止めた。

「ちょっと待つんだよ、これを持っていきな」

そう言つとキリーは、壁に掛けてあつた剣をコウに渡した。

「ありがとう」

礼を言つた後、コウは部屋を出る。

「俺も着いてこぐれ」

「あ、私も」

まるでコウが呼んだかのよう、一人も外へ出て行つた。

そんな彼らの後ろ姿を見てキリーは、やれやれと肩を竦めた。

「まったく、若いつていいもんだねえ」

カイたちが外に出ると、コウは会話を始めていた。

「お前達の目的は俺だろ？　なら早く俺を捕まえて村への攻撃を止め！」

その一言に他のやつとは服が違う上着いじき男は、不適な笑みを浮かべながら口を開く。

「貴様があのわけのわからない物に乗っていたやつか？　こんな簡単に見つかるとは思わなかつたよ…………では時計を渡してもらおうか」

「時計？」

「ウはその言葉に疑問を持つ。

「俺は時計なんて持つてないぞ？」

「とぼけても無駄だ！　空より墜落する者、災いの時計を持つ。これが予言の言葉だ！…………あわた　んな！？」

男が驚き、目を見開く。

その視線の先には時計を持ったカイの姿があつた。

「これのことか？」

カイは時計の鎖の部分を持ち、振子のようになに揺らす。

その時計は薄つすらと光っていた。

「…………時計が輝きし時、災いが起る…………止めるには所持者を殺すのみ……」

男がそう呟いた後、胸ポケットから何かを取り出した。
その何かにユウは見覚えがあるのか、驚きの表情と共に叫ぶ。

「　な!?　それは銃！　カイ、避ける!—」

ユウが止めようとするが、敵の兵がそれを邪魔する。

「ぐつ！… 邪魔を　　」「
死ねええええ！—」

ユウの叫びもむなしく、男の叫び声と共に一発の銃声。
その音と共に、カイは地面に倒れこんだ。
地面が、少しづつ赤く染まっていく。

「え？　カイ……？　カイイイイイイ!—」

シルクがカイの元に駆け寄る。
だがそれを止めるかのようにシルクの一歩前の地面に銃弾が飛び、
土が弾ける。

「それ以上近づくな、もし近づけば貴様も関係者として殺すことになる」

「嫌だよ！　私はカイの友達であり幼馴染だもん。殺したければ殺せばいい」

シルクは叫びながら手を横に広げる。

「ならば……死ね」

言つて男は、シルクに銃を向けた。

「 ッ！」

シルクは目を強く閉じる。

何も無い、無の世界。

その世界は痛みさえも感じないほどの無だった。

その世界の中心、いや真っ只中で、カイは浮いていた。

「 ……俺は ……死んだのかな ……」

そう呟いた瞬間、視界に強い光が射した。

『これが我と契約を交わすのに必要な状況、そして条件は揃つた

その声は、カイが森の洞窟で聞いた声と同じだった。

『少年よ、生きたいか?』

問いかに、カイは苦笑を返す。

「そりや生きていいけど、どうせ俺には何も出来ずまた死んでしまう。それならこのままのほうがいい」

『力を与える、と言つたらお前は生きよひとするか?』

「…………ちか…………ら…………?」

『そうだ、力だ、絶対の力』

「力…………もし、もらえるのなら…………俺は生きたい」

『それでこそ我に選ばれし者、さあ我的手を取るがよい』

カイは、空間に突然出て来た手を取る。
その瞬間、光に包まれた。

俺は無力だ。

今、この手に武器を握つてゐるといつのに何も出来ないでいる。
そして目の前で一つの命を助けることができなかつた……
そしてまた一つ、命が奪われようとしている……

俺が、俺が何かやらなければ意味が無い!

そして身構えた瞬間、突然カイの体が光出した。
強すぎる光に俺は目を閉じた。

しばらくすると光は止み、目を開ける。

そしてその光景に自分の目を疑う。

そこには何事も無かつたかのように、傷一つないカイが立つてい

た。

だがその左手はわずかな光を放ち、無数の紋章が刻み込まれている。

そしてその表情は、口が半開きにし目を薄めており、まるで別人のようだった。

「…………カイ…………なのか…………？」

「なつ！？ 貴様！ 確かに死んだはず！？ 何故無傷なのだ！？」

撃つた男も状況が掴めていないらしく、パニックになつていて。だがその手に持つた銃は、再びカイに向けられた。

その瞬間、カイは素早く男の懷に入り、左腕を男に当てる。

その時、不意に悪寒が走つた。

悪寒という方法で知らされたいやな予感は、すぐに現実となつて起きる。

カイの左腕が強く光り出したかと思うと、男の様子が急に変わつた。

「な、なんだ！？ ッツ――！」

刹那、聞こえるのは、うがつ、とも、ぐがつ、とも聞こえる、この世の者とは思えないほどの断末魔のような叫び。

そして、それと同時に男の体はみるみるうちに年老いていった。肌は皺しわを刻み、腕の筋肉は細くなつていく。

そして、最後にはミイラのようになり、崩れ落ちていく。

……時間が止まつたかのようにも思えた。

誰も恐怖と驚きのあまり、声が出ない。

その後、カイはゆっくりと左腕を上げる。

すると突然、上空に巨大な時計の羅針盤が浮かび上がつた。

どこから見ても、真っ直ぐこちらを向いているかのような物だ。

この時計、俺は見たことがある。……

だが俺が見たのは針が止まり、所々見えなくなっている物だ。

俺の世界、ジードで……

第三話・人外の力

空に現れた羅針盤の針が、ゆっくりと動き出す。

そしてカイは、まるで役目を終えた人形のように、その場で倒れこんだ。

「！！ カイー！」

シルクが急いで駆け寄るが、俺はただ空を見上げていることしか出来なかつた……

残つた皇国軍は逃げ去つたが、倒れたカイはまだ目を覚ましていなかつた。

そして村には、怒鳴り声が響き渡る。

「無茶だ！ お前達のような子供をそつ簡単に旅に出させむわけにはいかん！」

村長と思われる老人はカイ達が村を出るのに反対していた。

村長は、皇国軍が襲撃をした事に対してはお咎め無しだったが、ユウガカイと共に村を出る話をするとき、大声で反対し出したのだ。

「そう言われても、皇国軍は明らかに俺やカイを狙っていた。もし、このままここに居座る事になると、また迷惑が掛かる」

「なんと言おうと駄目なものは　な、なんじや？」

村長が話を終える前に女性が一人、村長の肩を軽く叩き前に出る。

「……ならば私がついていい。それなら文句はあるまい？　私はいつ見えても剣士だ……なんなら試してみるか？」

その女性は、微笑を浮かべながら赤い瞳でユウを見た。
そして、長いピンク色の髪を右手でさらりと搔き揚げ、その手を腰の鞘に収められた剣の柄に添え、ユウを挑発する。

「いいだろ？　いくら女でも武器を持っている以上手加減はしない

それを見たユウも、微笑を浮かべて剣の柄に手を添える。

「面白い、それでこそ男だ。では……いくぞ！？」

開始の合図と共に女性が剣を抜いた。

その剣は、彼女の半分の身長ほどあると思えるくらいの長剣だ。
それを見たユウも、剣を抜いて走り出した。
つと、その時。

「ユウもシヴァも待つたあ！？」

大声を上げながら、シルクがキリーの家から飛び出して、一人の前に立ちはだかった。

そんな彼女に、シヴァ呼ばれた女性は左手を横に振る。

「そこをどけ、シルク。これは私とあの男との問題だ」「カイが田を覚ましそうなの！…………って言つたらやめてくれる？」

その言葉を聞いた瞬間、シヴァは何事も無かつたかのように長剣を鞘に收め、走つた際に少し乱れたミント色のスーツを調える。すると、その状況がわかつたのか、コウも剣を鞘に收めた。

「さ、行くよ」

言つてシルクは、手招きをしながら家に入つて行く。

「では村長、あの話はまたの機会に」

シヴァはそう言ひながら、ユウが入るのを待つてからドアを閉めた。

「…………んつッ」「あ、起きたよ」

カイは体を起こし、辺りを見回す。

その表情は、まだ状況がわからぬいような感じだ。

「あれ？ あいつらは？」

その問いにユウが答える。

「お前が殺した」

「あ、あれ？ 直球だな…………も少し、前フリとか入れようよ」

「ウの言葉を聞いたカイは、左腕を見る。

「…………いつたいなんなんだ、あれは？」

ユウの疑問が籠った問いに、カイは少し間を空けて答える。

「…………あいつに撃たれた後、声がしたんだ。契約がなんとかつて。それに答えたら急に気が遠くなつて…………」

何かを思い出すように左手で頭を掴んだ。

「そしてなぜか、あの力の事と契約の内容が頭の中に流れ込んでいたんだ」

「…………あの力？ 契約？」

入り口近くで腕を組んでいたシヴァは、その言葉に興味を持ったのか、話に入ってきた。

「ああ、この左手の力…………この力は、触れた物質の時間を自由に変える事が出来るんだ。過去の姿にも、未来の姿にも」

「ええ！？ カイが難しい言葉を使い始めた！！」

「時間を見る、か。…………だからあの男はミライのようになつたつてわけだな？」

シルクの言葉を無視し、ユウは問い合わせ続ける。

その間にカイは、さう、と答えて話を続けた。

「だけど、その力にはリスクがある。人体に使用する場合、使用者の体力を消費しそして、対象者を死なせる場合は、大量に消費する事になる。…………最後に、この契約を交わした際は使命に従つてのが絶対条件」

最後の一言に、シヴァは眉をピクンとさせ、組んでいた腕を解いた。

「で、その使命といつやは何なんだ？」

「…………空に映っている時計は俺にだけ見える光を出しているんだ。その光が示す方向のどこかに时空の柱ってのがあるらしい。その柱を、この力で蘇らせる」

話が難しかったのか、シルクは今にもショートしそうだった。そして、その説明に疑問を持ったのか、ユウが問う。

「…………その柱を蘇らせると、どうなるんだ？」

「それはわからない。でも、これが契約だからやるしかない」「フフフフ、その通りだな」

シヴァはカイの言葉に同感したのか、笑みを浮かべて頷く。

「面白やつじやん。もちろん私もいくよ～」

すると、手を高く上げてシルクも同意した。

「もちろん俺も同意だ」

「全員賛成つてことだね？ それじゃ準備が出来たら今夜出発だよ

シルクの言葉に、カイは首を傾げて問い合わせる。

「どうして、今日出発？」

その問いに、シルクは人差し指を立てて左右に振った。

「チツチツチツ、甘いよカイ。またあいつらが来たらどうするの？
これ以上この村に被害を出させるわけにはいかないでしょ？ なら、少しでも前に進んで、鉢合わせを狙うんだよつ」

「ああ、そうか」

カイは納得したのか、何度も頷いた。

「では準備ができ次第、ここに集合だ」

シヴァの合図に皆が行動を始める。

雲一つなく、綺麗な満月が空に見える夜。
村人が眠りについた頃、カイ達は行動を始めた。
しかし、村の出口には人影があつた。

「あれは……村長！？」

「この村の長である中老の男は、ずっと出口でカイ達が来るのを待つていたようだ。

「やはり行くのか」

「……………はい」

「ではこれを持って行くがいい。わしからの贈り物じや」

村長が差し出した袋をシヴァアが受け取った。
その袋はズシリとした重みがあつた為、彼女はおそれおそれの中を覗くと、沢山のお金が入っていた。

「村長、これは？」

「黙つて持つて行け。そのかわり生きて帰つてくるんじゃぞ？ 絶対じや」

そう言い残すと村長は村へ戻つて行つた。
そんな彼の後ろ姿を見ていたユウは、フツと鼻で笑つてシヴァアを見た。

「……………不器用だが、いい人だな」

「当たり前だ、あの人は私が今まで会つた人の中で一番いい人だ」

シヴァアは当然のように言いながら、手を腰に当てて誇らしそうにした。

「……………や、いいわ。グズグズしてると夜が明けるぞ」

カイの掛け声を合図に皆が歩き出す。

そんな彼らを見下ろすかのように、満月は真上で煌々と大地を照

らし続けていた。

第四話・森の魔術師

朝日が昇り、夜が明ける。

動物達が、人間達が目を覚まして活動を始める時間だ。その時間、カイ達は村から少し離れた所で野宿をしていた。

「んーっ！…………はあ、よく寝たあ」

シルクは起き上がり、大きく背伸びする。しばらくすると視界に人影が入っているのに気づく。

「あ、シヴァちゃんだ。おはよ～」

「シルク、いくらここが学校じゃないからってちやん付けはないだろ、ちやん付けは……」

シヴァは呆れながらも、いつもと変わらぬシルクに少し安心したようだった。

「で、ナマケモノの男子共はまだ寝ているのか？」

「俺は起きているぞ」

「ひやつ……」

突然、まだ寝ていると思っていたユウが喋り出しシルクは飛び跳ねた。

「起きておったか。まったく気配がしなかつたぞ」

それを聞いたユウはクククッと笑った。

「気配を消すのは俺の特技なんですね」「なんとも困った特技だな」

シヴァの苦笑いに合わせてシルクが笑う。その笑い声によつてなのか、カイが目を覚ました。

「…………あれ？ もう朝？」
「当たり前だ、馬鹿者」
「え？ な、何々？ なんで怒ってるの？」
「別に怒つてなどいない」

その会話を聞き、シルクとユウは大笑いした。
その後、一行は朝食を終えて目的地へ歩き続けていた。
すると、森の入り口が見えてくる。

「もしかしてこの森に入るのか？」

ユウの問いにシヴァは地図を見ながら答える。

「その通りだ。しかし、森を抜けた先には皇国軍の拠点があるから注意する事だな」

「了解」、そいじゃあレッテルゴー！」

シルクは掛け声と共に森の中へと走つて行つた。

「元氣がありすぎるのもどうかと…………」

三人同時にため息をつき、シルクの後を追つた。

「大分霧が濃くなってきたなあ。皆、気をつけたほうがいいんじゃ
ない？　つてあれ？」

「どうしたの　つてあれ？」

「気づくと後ろには誰もおらず、カイとシルクの一人だけがそこに
いた。

どうやら他の一人とはぐれてしまつたようだ。

「マジかよ…………まあその内合流出来るだろ」

「そだね、じゃ行こつか」

マイペース過ぎる一人は前に向き直し、道に沿つて歩き出す。
しばらく歩くと小さな家が見えてきた。
シルクは迷わず中に入り、カイは後を追うようにして入る。
そうして中に入ると中年の男が一人座つていた。

「おや、お寄さんかい？　もしかして迷つたのかな？」

「えと、その通りです。実は、仲間とはぐれてしまつて……」

カイは頭を搔きながら答えた。

「それなら少しの間ここで休んでいろといいよ。この森に家はここ
だけだから、お仲間さん達とも会えるだらう」

男は笑いながら優しく言つ。

そんな彼に、シルクは喜び混じりの驚きを見せた。

「いいんですか！？」

「もちろんで、それより何か飲まないかい？」

男がそう言つて指を指した方向には、コップが一つ置かれたテーブルがあつた。

まるで誰かが来るのを知つていたかのように。

一人はそのコップを何のためらいもなく受け取つた。

「ふむ、霧が濃くなつてきたな……ん？」

シヴァアが急に立ち止まつた。

どうしたんだ……つて、ん？

俺も異変に気づき立ち止まる。

あるはずの一いつの気配がない。逸れたのだろうか。

「なあ、あいつら一いつの間に逸れたんだ？」

「私も今気付いた所だ。やけに突然すぎるな

近くにいるのかと思い、辺りを見回すが、霧が濃いためよく見えない。

「とりあえず歩くしかないな」

そう言いながらシヴァアは歩き出した。

それにあわせて俺も歩き出す。

しばらく歩くと少しづつ何かが見えてきた。
どうやら家のようだ。

「…………どうする？」

一応確認してみる。

「もちろん入るさ。」の霧だと、無理に動くとかえって危険だ」

予想通りの返事だつた。

そして軽くノックをし、中に入った。

すると中には、中年の男が一人座つていた。

「おや、お客さんかい？ もしかして迷つたのかな？」

「ああ、それで仲間とはぐれてしまつたのです。ようしかつたらこので、しばらく休ませてもらつてもいいですか？」

「こいつは相手が他人だと、敬語になるのか？」

「もちろんさ、なんせ滅多に人が来ないもので退屈していたんだよ」

言つて男は笑つた。

「それより、何か飲まないかい？」

男が指で示した先には、俺達が来るのを知つていたかのようにテープルの上にコップが二つ置いてあつた。

明らかに怪しい。

「かたじけない、では頂こい」

「いっは行動が早いな……

まあ一口だけでも飲んでおこう。

思い、喉にそれを流した瞬間、シヴァが急に倒れ込んだ。それと同時に俺の視界が歪む。

「チョロいもんだな」

あの男の声。

その直後、部屋の空間が割れて他の一人の姿が現れた。もちろん倒れた状態で。

「ちく……しょう……」

意識が薄れしていく……

「さあ、野郎は売れねえから始末しつか」

男が魔術の詠唱を始める。

その時、倒れていて動かないはずの体がピクリと動いた。

「んふふふ、あはははははは……」

そして高々と笑い出す。

男はその姿を見て、驚きを隠せない。

いや、隠せるわけがない。

「な、何故だ！？ 確かにあれを飲んだはずだ！」

「ええ、たしかに飲んだわね。だから私が目を覚ましたのよ？」

そのありえない状況に男は戸惑うしかなかった。

「それにしても、やつと田を覚ます事が出来たと思ったのに、初見がアンタみたいな野郎だなんて最悪」

「わ、訳のわからない事ばかり言いやがって！…………だが、その威勢もいつまで持つかな？ 周りを見てみろ！」

言われた通りに周りをみると黒い光の玉が三方向に浮いていた。

「これが俺の最高の魔術だ！　”スフィア”！」

男が叫ぶと黒い光の玉は大きく広がり、その者に襲い掛かる。そして直撃。

「どうだ、思い知ったか！…………つ！？」

「これが貴方の限界？ くだらないわね。弱すぎる」

その者は傷一つついていなかつた。そして男に右手を向ける。

「特別サービスよ、本当の魔術という物を見せてアゲル」

やつ血つと詠唱を始めた。

「　「」」」」の世に住まつ黒き闇よ、その力で我を妨げし者を暗黒へと引
きずり込め」」

その詠唱と共に、その者が右手で指した空間に少しづつ穴が開く。

「な、何だ!? 体が……動かない! ま、待つてくれ俺が悪かつ
た! だから」

「言つたはずよ? サービスだつて」

男の顔が青ざめる。

「さあ、貴方が好きな暗闇で好きだけ楽しんできていね。」ティキ

” ”

開いた空間から無数の手が伸び、男を掴むと一気に引きずり込む。

「嫌だ! いやだあ……」

空間が閉じ、部屋に静寂が訪れる。

『…………の転移…………いそが…………ならない…………準備し…………起動…………る』

目が覚める。

あの施設での事を夢で見ていたようだ。
だがまだ完全には思い出せないでいる。
そして気を失う前の事を思い出し素早く起き上がる。
あの男は……いない。
近くで倒れているのはカイ達だった。
いつたいあの後、何があつたんだ……

同時刻。

森の出口付近の皇國軍拠点。

「ん？」

高台で見張りをしている兵士が何かを見つけた。
それは真っ直ぐこちらに向かってくる人影だった。
その人影は次第にはっきりと見える様になり、大きなロープで全
身を覆い隠しているのがわかつた。
そしてとうとう、拠点の入り口まで来た。

「おい貴様！ 堂々と入つて来て、何のようだ！」

「…………さよなら、だ」

その者はそう呟くとロープを勢いよく剥ぐ。

現れたその姿は大剣を背中に担いだ男だった。
その姿を見た一人の兵士が叫ぶ。

「か……”鴉”だあああ——！」

その瞬間、鴉と呼ばれた男は剣を手に取り素早く動き、素早い動きで兵士を次々と斬つていった。

男が通った場所は血の海と化し、そこら中に死体が転がっている。
そしてその男の表情は笑みで、殺しを楽しんでいるようだった……

第五話・囚われし少女

何かを飲まされて氣を失つてから数分が経つた後、先に目覚めたユウは、まだ氣を失っている他の三人を起こし、早めにこの森を出よう、と提案した。

その提案に三人は同意し、出口へ向かって歩き出す。

その途中、カイはふと思つた事をそのまま言葉にしてみた。

「それにしてもあのおっさん、どこに行つちまつたんだろうな？」

そんな疑問にシルクは笑いながら答える。

「急に怖くなつたんじゃない？」

「」「怖くなつたつてなんだよ……」

「くだらん話をしている場合ではないぞ。もつすぐ出口だ」

シヴァアが指で示した場所は、木々が開いて出口のようになっていた。

「もう一度言つうが、森の外には皇国軍の拠点、というより閑所のような所があるから注意しろ。場合によつては戦闘になるかもしれない」

その言葉に他の三人は静かに頷き、シヴァアとユウは腰に、カイは背中にある武器に手を添えてゆつくりと出口へと歩き出す。

しかし、森を抜けて田の前に広がつたのは予想外の光景だった。

そこにあるはずの拠点は、ほぼ壊滅状態となつており、至る所に死体が転がつていた。

「な……なんで……こんな……」

その光景を見たシルクは手で口を覆い、ただ驚くしかなかった。

「いへら皇國軍だからって……」さればひどい……」

「ひどい、か。だが忘れるな。私達もいざればこの光景を作る原因となつてしまふのだ。お前の力もな」

同情の言葉を口にしたカイに対しシヴァは少しキツメに言った。
今後の事に備えて。

だがカイはその言葉に納得がいかないのか、シヴァの方を向く。

「その遠回しな言い方、それじゃまるで人殺しに慣れろって言つて
るみたいじゃねーか！」
「慣れろとは言わない、心の準備をしておけといつているのだ」
「…………一人とも、少し黙つてくれないか」

二人の言い争いをユウが止める。

そして、何か聞こえるのか耳を澄ませる。

『…………す……けて……』

ユウの耳には、微かに声が聞こえた。

「何か聞こえなかつたか？」

「え？ いや、何も聞こえないぞ？」

どうやらその声はユウにしか聞こえていなかったようだった。

『…………た……け……まつへり…………から…………』

その声は、次第にはなつめうとコウの耳に聞こえてくる。

そして、

『たすけて、真っ暗なここから出しち…………』

「ツー！」

コウはその声のする方向を素早く向く。

「どうしたのだ？ 何かあるのか？」

シヴァはコウの行動に疑問を持ち、問う。

「…………」

その問いに答えるかのように、コウは急に走り出した。コウの突然の行動にカイ達は戸惑いつつも、急いで後を追つ。少し走ると、コウがガレキを退かしている姿が見えた。カイは一緒に作業を手伝い、全てのガレキを退かした場所には、地下に通じているような階段があった。

「ついてきてくれ」

一行はコウを先頭に、ゆっくりと下りて行くことにした。

少し行くと急に地面に足が着き、最下層に到着した合図となつた。幸い、たいまつに火がついており、地下は少し明るくなっている。そして田の前には、異常な量の鎖で頑丈に閉ざされた扉が見える。

「もしかして、これを開けなきゃいけないの？」

シルクは難しい顔をしながら鎖を眺める。するとカイは左腕を出して、扉に近づく。

「俺の力なら開けられるかもしね」

そう言った瞬間、カイの左腕が光り出し、あの禍々しい模様の腕が姿を現した。

カイはその手で頑丈な鎖を掴む。すると、少しずつ鎖が錆びていき、最後には音を立てて崩れ落ちた。

「ほんと、凄い力だよねえ」

シルクは二三回しながら言った。

「便利って言いたいんじゃないのか？」

そう呟いたユウに対しシルクはズビシッと人差し指を向ける。

「ひらそこ、思つてもいなによつた事を言わない！」「とりあえず中に入るぞ」

二人の会話を打ち切るかのように、シヴァアが扉を開ける。開いたその先には人が居る気配がする。だが、この部屋には明かりが無い為、姿が見えない。

「どうする？ 入るか？」

シヴァアの問いに皆少し迷うが、ユウは何も考えずにたいまつを一本持ち、奥へと進んだ。

たいまつ明かりによつて照らされた部屋の奥には、水色をした長髪の少女が座っていた。

身長からして、ハ、九歳ぐらいだろつか。

そしてその子の表情には、恐れなどがなく、まるでユウガ三四郎来るのを知つていたかのように冷静だった。

「ウはゆつくりとしゃがみ、少女の皿線に令わせる。

「俺に助けを求めたのはお前か？」

その間に少女は少しの間田を開じ、その後ゆつくつと皿を開ける。

「やつ、私がユウ、貴方に助けを求めた。貴方達なら私をここから出してくれると思つたから」

「問題はそこだ。お前はどうやって俺に助けを求めた？ 地下に閉じ込められていたのに。それに何故俺の名前を？」

「質問が多いよ……それに今は話せる事じやない。それにしても、やつぱりあいつらは待つてるだけなんだね。これから人間つていのは ッ……」

少女は言いながらカイ達の方を見て、驚く。

ユウはそれに気付き振り向くと、カイ達がこちらに向かって歩いてきていた。

そんな中、シルクは何故か怒つていた。

「もお、駄目じゃんユウ、勝手に行っちゃ！ しかもたいまつを持つていつちやうし！」

「別にいいじゃんか、代わりのたいまつはあったんだからさ」

それをカイが説得する。

それによりシルクは、まあいいけど、と言つて機嫌を直した。ユウは苦笑いしながら謝り、少女の方へと向き直す。だが少女の表情は、何かに驚いたままだった。

「どうした？　何に驚いている？」

その言葉で我に返ったのか、すぐに冷静な表情に戻った。

「ちわー！　私はシルク・セシールだよ、よろしくね」

彼女は気軽に声をかけ、その後全員の自己紹介を代わりにした。少し間を空けて、少女は全員を見渡して口を開いた。

「…………私はミーネレナント・ゴリウス・レヴュリーント
「…………ユリウス…………」

シヴァがそう咳く。

だが、その咳きは誰も聞いてなかつたようだ。

「な、長い名前だねえ…………」

シルクはそう言いながら、指で名前の文字数を数える。

「ならば縮めてミーナはどうだ？」

「ミーナ、か。それでいいか？」

シヴァが提案した名前でいいかをユウが少女に聞くと、「クリ」と小さく頷く。

「じゃあその名で決定だね。んじゃ改めて、よろしくねミーナ！」

そう言ってシルクはワインクをした。

「だがこの後どうする？ 近くに村か何かあればそこで引き取つてもらつて」

ユウが言い終える前に、ミーナは彼の服を引っ張つた。

「私も一緒に行く」

その一言にユウは、危険だからやめておけ、と言つたが、シヴァはそれを否定した。

「たしかに何もしらない赤の他人に預けるよりかは、この子を助けた私達と同行した方がいいのかもしれないな」

その言葉に説得力があつたのか、ユウは仕方なく了承した。

「さて、ここに居続けるつてのも何だから外に出よう

カイの提案で皆は外へと向かつた。

眩しい……

今まで暗い所にいたからだろ？。

だが、ミーナはもつと眩しそうだった。

そう思いつつシヴァの方を向くと、これから道のりを確かめるためか、地図を広げてくる。

「さて、この後の道のりだが、私達は今居る場所は森の出口だから……もう少し歩いてネリンへと向かつ」

俺は地図を覗き込むよつこじて見ると、大体半田ぐらこの道のりだった。

「善は急げ、だね！ それじゃレッシィゴー！」

シルクの掛け声で俺達はネリンへと向けて歩き出やうとした。だがミーナは座つたまま動こうとせず、ジッと俺を見ている。もしかして眩しさにやられたのか？
……それとも俺に話しがあるのか？

「すまんが先に行つてもらえないか？ ミーナが疲れているようだから少し休んだ後、俺が負ぶつて何とか追いつけるよつこじる」「うんわかったよ。ミーナちゃんをよろしくね」

さすがシルクだ。

簡単に了承してもらえて助かった。

「それじゃまた後でな」

カイの言葉に手を上げて答える。

「……さて、少し休むか」

俺とミーナははじまりの場に座り、休憩をとる。
その間、一言も会話がなく静寂が続いた。

「ねえ、そろそろ行こうつへ、おぶつて」

そう言つてミーナは俺に向かつて両手を伸ばしていく。
しかたない。俺はしゃがんで背を向ける。
そしてミーナは俺の背中に抱きつき、両手を首に回す。
その後、立ち上ると、
「軽つ！？」

思った以上に軽かつた。
予想外だ。

「むー、何か言つた？」

聞こえたくせにわざといらしい奴だ。

「お前つて意外と小さいんだな。そして軽い」
「何～？？」

突然前に圧迫感。

どうやらミーナが俺の首を絞めているようだ。

「く……くぬ……し……しぬ……しぬ……わるか……た……おれが……
わる……かつた……」

そう言つた瞬間、首が急に楽になり、俺は一気に空氣を吸つた。

「あ、危なかつた……」

「せっかくもう一人の貴方に出てくるチャンスを『えたのに……』

ミーナはそう呟く。

ん？ もう一人の俺？

「それはどういう意味だ？」

だが返事の代わりに聞こえたのは安らかな寝息の音だった。
見るとミーナは疲れたのか、眠ってしまっていた。

あんな暗闇に閉じ込められていたんだ、無理も無いか……

「おやすみ」

気付くと俺の口からは、自分でも予想外な言葉が出ていた。

その後、ミーナが起きないよつに早歩きで進み、なんとかカイ達に追いつく事が出来た。

第六話・不審な商人

しばらく歩くと、辺りは死体だらけの風景から、草原へと変わった。

先ほどまでいた皇國軍の拠点でミーナが同行する事になり、一行は目的地のネリンへと向かうがしばらくすると日が暮れた為、また野宿で一夜を過ごす事となつた。

そして翌日。

一行はネリンを目指して、再び歩き出す。

その道中でシルクは遠くに動く何かを見つけた。

「ねえ皆、あれって何かな？」

シルクが指を指す方向には、確かに動く人らしき影が見える。それを確認したカイとシルクは、好奇心を抑えられずに、その人が誰かを知るために走りだす。

そして見えたその姿は、ボロ切れのローブを着た、紫色の髪の男が何もない所に向かつて、釣り竿を必死に振つているようだつた。

「あれはどう考へても関わらない方がいい雰囲気だよなあ……

カイの言葉に全員が揃つて頷く。

「とりあえず気付かれないように行こう……」

シヴァの注意を聞き、ゆっくりと通り過ぎようとする。

丁度後ろを通りかかった時、男の動きが止まつた。

「客が来た気がするぜよ……」

そう言つて、男は後ろを振り向く。

それと同時に全員がその場に立ち待つた。

「おお！ やつぱり客が来てたつちや！」

「え？ いや、俺達はただの通りすがりの者ですよ。な？」

素早くカイが必死に言い訳をし、それに対して他の皆も頷く。

「はいはーい、隠さない隠さないー！ わっちに近寄る人は大抵が客だと相場はきまつているんぜよ～」

そう言つと男はいそいそと荷物をあさり、何かの準備を始める。

「はあーい、準備完了ださあ」

その一言と共に男の前に並べられたのは見た事のある物から、初めて見る物まで、数多くの物だった。

どういうこと？、とシルクが問うと、男は何かを思い出したかのようにな、手をポンッと叩く。

「そういうえばまだ何も言つてなかつたつちや……わっちはネプチューン、自由気ままな商人さ。それじゃ、改めて自分の商品を見てくれい」

ネプチューんと名乗った男は、並べてある物を紹介しだす。

商人ということは、並んでいる物は彼の商品のようだ。

その後、シヴァは代表となつて全員の名を紹介した。

そして、咳払いをし、

「すまんが私達はネリンへと向かつている途中なのだ。よつてお前

の商品を見ている暇はない」「

シヴァはすぐにでも立ち去りたいような声で言った。
その言葉にネプチューはピクリとまゆを動かす。

「あんたら、ネリンへ行くんかな？ 何たる偶然、わっちは行こうと思つてたんよー」

そう言つとネプチューは早々と荷物を片付け始める。

「嫌な予感がするぞ……」

コウの言へ、嫌な予感とやらは的中した。

ネプチューは自分も着いて行くと言い出したのだ。

シヴァは反対したが、シルクが、楽しくなるからいいじゃん、と言つ為、了承する事となつた。

この一行の中で、リーダーのような存在は、シヴァではなくシルクなのかもしれない、つとコウは内心で呟くのだった。

その後、ネプチューが加わった一行はネリンへと再び歩き出す。

太陽が傾いた頃、一行はようやく目的地であるネリンに到着した。
”ネリン”とは、アルグのあるミーン大陸の西側に位置する大き

な港町で、海をまたいだ先にあるカナン大陸へと行く事が出来る列車”アクアトレイン”のおかげで観光客が増え、発展した町である。

「では今話した通りの事を日が暮れる前に済ませてくれ。ちなみに集合は終わり次第ここに、だ。それでは解散」

シヴァの合図と共にカイ達は、一人一組でグループとなり、それが違う方向へと散って行つた。

その理由は、旅に必要な食料などをこの町であつめる、今夜泊まる宿を探す、明日の列車の時刻、及び切符の購入、を数時間で終わらせるためだ。

そしてカイとシルクは宿を探しに市街地へ、コウとミーナは食料などを購入するために市場へ、シヴァとネプチューンは切符入手するために駅へ、それぞれ向かった。

第六話・不審な商人（後書き）

ちなみに”わっち”というのは商人が使う一人称の事です。

第七話・日没までに

「すみませんが、もう部屋は空いていませんので、他を当たつてください」

宿屋の主人が申し訳なさそうに頭を下げた。

「そんなん、どうにかして空いてい」

「いえいえ、そんな頭を下げるほどではありませんよ。私達が遅かつただけなんで。それでは他を当たつてみます」

シルクは片手を左右に振り

文句を言おうとしたカイの服を掴んで宿屋を出た。
二人が断られたのはこれで三回目だった。

「まったく……あの人文句言つてどうするの。大体、遅くなつたのはカイが悪いんじゃない。一度は泊まつてみたいんだよ、つて言って高級ホテルに向かっちゃうし。それに予約制だつたらしいから、結局無駄足。そしてそれで時間を無駄にしたせいで、他の宿屋は空いてないって事になつちゃつたんだからね！」

彼女は怒りのこもつた表情と声をカイにぶつける。

珍しく彼女は不機嫌な為、カイはただ黙つているしかなかつた。
ちなみにこの町にある宿屋は、現地の人聞いた所、全部で四軒。
つまりは、次に行く宿屋が最後だつた。

しばらく一人は会話をせずに次の宿屋を探しに向けて歩き出していた。

「…………えと、ごめん」

「えー？ う、うん、別にいいよ」

突然のカイの謝罪にシルクは少し戸惑つが、一応許す事にする。そのまま、ずっと歩いていると、田の前に大きな建物が立ちふさがつた。

「ん？ 行き止まり？」

「そのようだね……」

シルクは少々苦笑い。

すると、その大きな建物から突然、わあっーっという大きな歓声のような声が聞こえてきた。

「ひやあー… 何々！？」

「ここは……”闘技場” って書いてあるぞ」

闘技場。

そこは戦う者と、その戦いを見て金を賭け楽しむ者が集まる場所。その闘技場が町の端にあつたのだ。

「なんか空気が悪いよお、早く次の宿に行こう？」

シルクはそう言しながらカイの手を引っ張つて、次の宿屋へと向かつた。

シルクに引っ張られている途中、カイは内心で呟く。

「こななら今の自分の実力を確かめる事が出来るかもしれない、と。

夕刻になつても、まだにぎわつてゐる市場。
そんな中、一つの店の前では激しい値切りあいが繰り広げられて
いた。

「もう少しだ！ もう少しでもいいから負けてくれ！」「いやあーですがにこれだけあって、もう少しつてのはなあ…………」

コウは、値切りについて店主と話している真つ最中だった。

「頼む、金の少ない旅人に対しての情けだと思つて、な？」

コウの止めた言葉に、店主は少し困った顔をした後、
「わかつたわかつた、アンタだけ特別だよ」

そう言って普通の値段よりも負けで売つてくれた。

「ありがとな！ なんで俺がこんな事…………」

店から少し離れた後、コウは愚痴を呟いた。
だが、まだやる事がある為、次の店に向かつて歩き出す。
コウとミーナは食材などを買い集めるために、町一番の大きな市
場へと来ていた。
そこには色々な店が並んでおり、密寄せのための活氣ある声が響
き渡つている。

そして、その声につられてやつてくるのか、所々の店で人だかりが出来ている。

二人はその人だかりの中を搔い潜つて、なんとか目的の物を買い集める事ができた。

その後、人だかりから少しあなれた所まで行き、しばらく休憩する事にした。

「久々に疲れた……」

そう言ってユウは壁に寄りかかって一息つく。

「お前も疲れたろ？ 座らなくとも つて、どうした？」

ユウはミーナに問いかけるが、彼女は人だかりの中の一点を見つめたまま動かなかつた。

その一点、つまりは視線の先、そこには肩車をしながら、楽しそうに笑う親子の姿があつた。

親子か、つと彼は呟く。

そのまましばらくその親子の楽しそうな様子を眺めていると、ミーナがぐるっと回つてユウの方を向く。

「ねえ、あれは何をやつているの？」

そう言いながら親子を指す。

「ん？ ああ、あれは肩車をしているんだ

「かたぐるま…………楽しそう…………」

ミーナはそう呟き、目を輝かせる。

まるでユウに肩車をして欲しいかのように

「コウは少し考えた後、意を決したかのよう立ち上がる。

「わかつたよ、肩車だな？」

そう言つてミーナを持ち上げて、肩の上に乗せた。

「うわあ……高い……」

ミーナは先ほど以上に日を輝かせながら辺りを見回す。

「よし、このまま集合場所に向かうか」

コウはミーナを肩に乗せたまま、集合場所へと歩き出した。重い荷物も持たなくてはいけない為、歩くのが大変だったのは言つまでも無い。

多くの観光客や商人が集まる場所である駅に、シヴァとネプチューンは明日の列車の時刻を確認するために来ていた。

「人が多いな…………おいネプチューん、はぐれないうつむつて何をやつてあるのだ、アイツは」

見るとネプチューんは、観光客の女性に話しかけて口説いていた。

簡単に言えばナンパをしてくるのだ。

「 つてなわけで、わったちと一緒に少しの時間だけでもいいのでお茶でもしやせんか?」

「『めんなさい、襤襷^{はき}切れを着ている人とはちょっと……』

ネプチューン、あっけなく撃沈。

がつくづと地面に崩れるが、すぐにシヴァに無理矢理立たされる。

「残念だったな。だが自業自得だと思え。これを基に、やるべき事をやると誓つ気持ちを持つのだな

「き、厳しいっぢや…………はあ」

ネプチューンは深いため息を着いた後、いつの間にか遠のいているシヴァの元へと向かつた。

丁度その時、シヴァは駅員を見つけ、話しかけるといひだつた。

「すまんが、明日の時刻表を見せてもらつてもいいか?」

そう頼むと、駅員はすぐに了承し、時刻の書かれた手帳を見せてくれた。

少しの間、手帳を見ていると、駅員が申し訳なさそうに問い合わせてくる。

「あの、もしかして初めての方でいらっしゃいますか?」

その間にシヴァが、ああそつだ、と答えると、駅員は少し困った表情をした。

「実は最近、色々なところで反皇國軍勢力によるテロなどが多く発し

ているため、海上列車”アクアトレイン”は、その対策のやめに切符の値段をあげたのです」

シヴァにとつて、いや、一人にとつて初耳の情報だつた。値段を上げたと言つ事は、内部からの占領という可能性を考えての事なんだろう。

「それで、値段は？」

「お一人様、十万ラノンになります」

二人とも睡然とする。

ちなみにラノンとは、この世界のお金の単位。
それが十萬も必要だと言つのだ。

あいにく所持金は村長に貰つた分から今日、皆に買い物用として渡した金額を引いて、五万ラノン。
つまり、一人も乗れないと言つ事だ。

「そうか、有力な情報をありがとう」

シヴァは礼を言つて、駅を後にした。

「……まずい事になつたぜよ、合計四十万ラノン必要とはねえ」

その言葉に、シヴァは疑問を持つ。

「計算を間違えてないか？ 合計は五十万ラノンだぞ？」
「んん～？ わっちは商人ぜよ？ 切符ぐらい、自分の分は持つと
るつちよ」

そう言いながらネプチューンは、ズボンのポケットから切符を取

り出してヒラヒラさせる。

すると突然強い風が吹き、切符がネプチューの手から簡単に離れて海の方へと飛んでいった。

「ああああ……！　待つぢやああ……！」

ネプチューは必死に追いかけるが、その頑張りも虚しく、切符は手の届かないところまで行ってしまった……

その後、また地面に崩れ落ちる。

その哀れさに、シヴァは無理矢理起こさないようにする。しばらぐすると、ネプチューは自分の意思で立ち上がり、シヴァの元へとゆっくりと近づき、立ち止まる。

「すんません、やつぱり五十万でお願いしやす……

「哀れだな」

シヴァは、先ほどの話をそのまま言葉にした。

「しかたない、皆と話し合って今後の事を決めるとするか

そう言って、一人は集合場所へと向かう事にした。

第八話・賭けられた戦い

日が暮れて、空はすっかり暗くなつた為、一行は集合した後、宿へと向かつた。

その後、全員が一つの部屋に集まり、明日の事について話し合つことにした。

「……という訳だ。あいにく私達には金がない。これがとんでもない足止めだ……」

隣の大陸に渡るための電車に乗るために金が足りない、これは今のカイ達にとっては致命傷だつた。

そんな中、カイは何かを思いついたかのように手をポンッと叩く。

「金がないのなら増やせばいいんだよー」

その発言に、全員が疑問を持つ。

「カイ、どうとう頭がイッちゃつた?」

「いやいや、そういうわけじゃないよ…………この町には闘技場があるんだよーだからそこで俺が出て勝てばいいんだよー」

カイの提案に、コウは軽くため息をつく。

「勝てばいいって、簡単に言つなよ。お前、実戦はした事はあるのか?」

「そこは心配いらない。カイは私が何度も特訓したからな。もちろん、実戦も踏まえてだ」

「ユウの問いに、シヴァは自信満々の表情で答える。

「そうか……それは意外と楽しみだな

」 そう言つてユウはカイの方を向き、ニコニコと笑つた。

「お前の実力を見るのが楽しみになつた。期待を背くよくなマネはするなよ？」

その言葉にカイは親指を上に立て、同じく笑みを浮かべた。

「当たり前だ！ つていつか、それより……」

言葉を途中で止め、何故かシルクと顔を見合させて、二人が同時に笑みを浮かべ声を揃える。

「ユウが初めて笑つた！！」

その瞬間、部屋中に笑い声が響き渡り、ユウは視線を逸らす。

「そう言えばそうだな、笑つた顔は初めて見た」

シヴァも気付き、腕を組んで微笑む。

「おや？ ユウ、照れてるつちょ？」

視線を背けたユウに、ネプチューングが必死に顔を見ようとする。

「う、うるさい、見るな！ つてミーナ！ 何でお今まで」

その騒動にいつの間にかミーナまで加わり、ユウが部屋中を逃げ回るという珍しい光景となつた。

そしてシルクまでもが、私もやるーっと言つて加わる事になり、とても騒がしい夜になってしまったのは言つまでもない。

翌日。

一行は闘技場へと向かい、エントリーを済ませた。
そして、後は順番が来るまで待合室で待機するだけとなる。
その途中、カイは緊張のせいなのか妙に落ち着かない雰囲気。
そんなカイの肩に、シヴァアが軽く手を置いた。

「いいか、相手を私だと思って、稽古の時のようにやるんだ。だからこそ雑念は捨てる。わかつたな？」

シヴァアが送った言葉は、少ないアドバイス。
だがカイにとって、その少しのアドバイスでも十分だった。

「ありがとうございます、先生！」

「お前、じついう時だけ先生と呼ぶのだな……まあいい、頑張れよ」

その言葉を言い終えた直後、スピーカーから出場要求が聞こえる。カイは闘技用の剣を手にして立ち上がり、開かれた扉へと向かう。通路のような所を抜けると、目の前には大きな円状のステージが広がっていた。

その周りを囲むようにして高い塀があり、その上には観客席がある。

観客達の中には、身を乗り出して歓声を上げている。

『さあて、次の挑戦者は！ カイイイエディフィイイス！！』

突然耳に響いたのは、スピーカーを通して大音量で聞こえる司会者の声。

その声は、カイに再び緊張を与えてしまった。

『対する戦士は！ 自慢の巨大な肉体で戦う、カルロオオスジエーヌ！…』

紹介と共に反対側の扉から、巨大な身体に合わせて作ったかのような大斧を片手に持つた、カルロスと呼ばれた大男が出てきた。

その姿を見たカイは、全身に鳥肌を立てていた。

やつべえ、ワクワクしてきた、と心の中で呟き、緊張を消し去ろうとする。

「頑張れー！ カイー！」

観客席からはシルクが、他の声に負けじと大声で叫ぶ。

その声を聞いたカイは片手をシルク達のいる方に上げる。

その時はもう、カイの中に緊張というものは残っていなかつた。

『さあ、両者が出てきたので、ここで勝敗決定のルールを説明させていただきます。つと言つてもルールは簡単。どちらかがリタイア、または倒れたまま一定時間起き上がりなかつた時点で試合終了です。それでは、スタートの合図をさせていただきます』

カイとカルロスは、スタートに備えて身構える。

『レディー……ゴーオオ!!』

スタートと同時にカイは一気に走り出す。
そのまま剣を横に振り、先制攻撃を狙おうとする。
だがその攻撃は、意図も簡単に防がれてしまった。

「甘いわあ！！」

カルロスは一喝と同時に、カイの攻撃を防いだ大斧で、剣ごとカイを振り払う。

カイはその衝撃を利用して、少し間合いをとる。
だが顔を上げた瞬間、カルロスの大斧が目の前に迫つた。
それをバックステップでなんとか避けるが、その大斧はカイに休む間を与える事なく降り注ぐ。

その全てをカイは紙一重で避けながら後退する。

「どうした？　逃げてばかりでは戦いにならんぞ！」

カルロスは挑発するが、それでもカイは避け続ける。

「あれは戦法の内か？」

「ほう、よくわかつたなユウ。あれは私が教えた戦法だ。相手が自分より大きい場合、その身長差を補うために冷静になり、慎重に動きのパターンを読む」

シヴァの教えた戦法に、ユウは疑問を持つ。

「だがそれは一対一の時にしか使えないんじゃないのか？」

「その通りだ。まあ、この戦闘以外で使う事は滅多にないだろうな」

ユウは、やはりな、と呟いてカイの方へと向き直す。

「　　だいぶ読めてきた……攻撃がパターン化すつつある」

カイが避け続けた為、カルロスは油断したようだ。
それにより攻撃がパターン化しだしており、反撃のチャンスが生まれる。

「右……左……左、上……右……上、今だ！」

次の瞬間、カイは容易に相手の懷に入つた。

「なに！？」

カウロスは突然の反撃に対応しようとするが、間に合わないまま、カイは脇腹に一撃を入れる。

「うーお！？ ……小賢しい！」

カルロスは横腹の痛みに耐え、反撃を『えよつとするが、その動きを読んでいたのか、カイはバックステップで回避した。

カルロスは避けられてしまつた為、大斧が空を斬る。

後ろに下がつた瞬間、足をバネのようにして一気に加速する。

そのまま、カルロスの横振りをジャンプで回避し、顔面を一蹴り。

よろめいたカルロスに対し、カイは着地と同時に足を連撃。

それによりカルロスは勢いよく地面に倒れこむ。

その後、カイは大きく飛び上がり、落下の速度を利用してカルロスの腹部を一撃。

突如、疾風の如く繰り出されたカイの攻撃に、カルロスは為す術もなく、身動き一つしなくなつた。

少し経つても動かない為、確認の為に審判が駆け寄る。

「…………氣絶しています！」

『………といふことは…………ウイイナアア！！カイ選手ううう！…！』

その判定と共に、観客達は大歓声をあげる。

『まさかの大逆転で、我が闘技場のランキング一位であるカルロスを負かしてしまつたあ！ これは驚きです！…』

その言葉を聞き、カイは驚いた。

「えええ！？ ラ、ランキング一位？ 聞いてねえよ…………」

そう呟きながら、疲れた身体を吐き出すようにして出口へと向かつた。

第九話・可憐なチャンピオン

試合が終わり、カイは皆のいる観客席へと向かっていた。するとカイの目に、手を振りながら向かってくるシルクの姿が見えた。

それを確認したカイは返事の代わりに片手をあげる。そしてシルクは、やつたね！、と言つてハイタッチをした。

「驚いたよ！　まさか一番目の人に勝っちゃうなんて…！」

「俺も驚いたよ、まさか相手がそんなにすごい奴だったなんて……シヴァからは何も　っと、噂をすれば本人が来た」

丁度カイの視線、シルクの後ろにシヴァの姿が見える。

「おい、どういう事だよ？　相手が一位のやつだなんて聞いてないぞ？」

「だが勝つたではないか。私はお前の強さを知っているからこそ、お前の対戦相手にアイツを選んだのだ」

「俺が……強い？」

カイの問いにシヴァはゆっくりと頷き、そうだ、と答えた。

その返答にカイは訳もなく、頭を搔く。

そんなカイの肩を、ユウが一叩きした。

「上手く話を丸め込まれたな」

「ええ！？　それってどういう事だよーー？」

同時に皆が笑う。

その時、カイは不意に後ろから肩を軽く叩かれた。

「「んにちは、カイ君……でよかつたかな？」

声を聞き、カイが振り向くと、そこには赤髪の女性が申し訳なさそうに立っていた。

彼女は身軽そうな服装を着ており、胸の辺りにはナイフが収められた革の鞘が、腰には剣が納められた鞘がある為、出場者だとわかる。

その姿を見たシヴァーは一度首を傾げて、何かを思い出した。

「……貴女はもしや、チャンピオンではないか？」

そんな問いに、赤髪の女性はにこやかな笑顔を作る。

「その通り。私がチャンピオンのレミィ・エルマンだよ」「ええ！？ キミがチャンピオン！？」

カイは大声を出して驚いた。

もちろん、他の皆も驚く。

「キミ、じゃないよ！ 私はこれでも成人！」

その答えを聞いたカイは、今以上に驚いた。

そんなカイの脇腹を、隣にいたシルクが思い切り殴る。

「失礼でしょ！ 謝りなさい」

「イツッ……えと、すみませんでした」

脇腹を押さえながら謝るカイに、レミィは同情するような表情を

した。

「まあいいんだけどね。つと、それより、さつきのカイ君の戦いを見ていて思つたんだけど、面白い動きをしてたからつい見とれちゃつてね。よかつたら私と一戦やつてみない？」

「え！？ よ、喜んでお受けいたします！！」

「カイが敬語を使つた！？ 天変地異の前触れ……」

レミィからの誘いに、心から喜んだカイに、シルクは少し呆れた表情をしてシヴァ達の方を向き、両手を肩の高さまで上げてお手上げだと知らせた。

それを見たシヴァは腕を組んで笑い、コウとネプチューン、ミーナは苦笑いをする。

「あ、それと、カイ君は自分の得意とする武器使つてね？」

その言葉を聞いたシヴァは、ほう、と呟いて前に出た。

「何故その質問をした？」

「私の目は誤魔化せないよ？ カイ君の動きが明らかに普通の剣士とは違つていた。普通の剣ではない動きを……どう？ あつてるでしょ？」

シヴァは少し考え込み、そして笑いながら答える。

「はつはつはつ、たすがはチャンピオンと言つたところか。カイ、お前じや敵わないかもしれないが全力でやる事だな」「目が笑つていないと」

シヴァはコウの鋭い突つ込みを無視してカイの背中を数回叩き、

気合を入れさせる。

カイは、わかつてゐよ、と言つてシ'ヴアから武器を受け取り、レミイと共にエントリーへと向かった。

ちなみにカイの有する武器とは、上下に対となつた刃がついている剣、いわゆる諸刃の剣となるものだ。

その剣をカイはチラツと見て、喜びの笑みを浮かべた。

そして、やつと訓練してきた自分の武器が使える、と内心で呟いた。

また歓声が聞こえる。

だがその歓声は、先ほどの試合よりも大きく、活気があつた。

そもそもそれは、今行われる試合は、突然現れて一位の選手を打ち破つた者と、現・チャンピオンとの戦いだからだ。

『さあて、観客の皆さんも驚いたと思います！ 今回のマッチはなああんと

現・チャンピオンのレミイ・エルマン・ヴァアサス！！ カイエディフィイス！！』

テンションの高い司会者による紹介を聞いた瞬間、観客達はより一層ヒートアップする。

その声を聞いた瞬間、頭が痛みだした。

「な、なんだ……？」

その痛みは少しずつ強くなっていく。
とりあえず外に出た方がいいのかもしれない……

「シガア、少し気分がわるいから外の空氣を吸いつてくれる」「
「そうか、あまり無茶はしない方がいいからな。 そうした方がいい
「すまない」

俺はそつ吐き、出口へ向かおうとする。
すると、ミーナが俺の服を掴んで引き止めた。

「どこに行くの？」

「気分が悪いから外の空氣を吸つてくれるだけだ。心配するな、すぐ
に戻る」

そう言つてミーナの頭を撫で、再び出口へと向かつた。

「やつと対面、ね

リーナの呟れば、誰も聞き取る事はなかった……

第十話・蘇る記憶

一階の観客席から外へ出ると、そこにはバルコニーがあった。

俺はバルコニーの柵にもたれかかり、吹き付ける風にあたる事にした。

そしてゆっくりと深呼吸する。

だが、痛みは治まるどころか、激しくなる一方だ。

「ぐつ……」

突然襲いかかってきた、今までに無い痛み。

それと同時に、頭の中でもきほどの歓声に似た叫び声が聞こえる。だがその声は昨日今日聞いた声ではなく、もつと前に、この世界に来た時よりも前に聞いたような気がする。

そしてその叫び声とは別に、低音の太い声が聞こえる……いや、思い出している。

『やつと

』やつと見つけたぞ』

この声は俺ではない。

この声を聞いた場所は……

『彼女の器となれる物を！』

俺が逃げてきた施設だ。

『これで全てを取り戻せる、いや始められるのだ!』

そして俺は、ここへ来る前の、あの施設での事を全て思い出した

……

鮮明に思い出された記憶。

それはまるで、頭の中で再生されるような感覚。

俺宛てに来た一つの依頼。

それは、指定された施設に侵入し、内部で行われている事を探る

というもの。

その時の俺にはいつも通り、簡単な仕事だと思つていた。

だがその予想は軽々と外れてしまう。

内部に侵入し、しばらく進むと突然、警報音が鳴り響いた。

それと同時に数え切れないほどの戦闘員のような奴らが現れ、俺はすぐに捕まってしまった。

その後、目が覚めると、実験室のような場所で何かの上に両手両足を縛りつけられていた。

「……はい、全てが順調なのでそろそろ”彼女”の準備を」

「ああ、頼む。慎重にな……」

近くでは一人分の男の会話が聞こえる。

“彼女”とは何の事だろうか？

だが、意識がもうろうとしている為、声がかされる。

すると突然、身体中に激痛が走った。

その痛みで意識がハツキリとし、同時に俺の叫び声が響き渡る。

その時、俺の中に何かが入ってくるような感覚があつた。

暖かく、だが悲しいような感情と共に。

その後、意識が遠くなつていった……

『やつと黙じ出したよしづ』

突然聞こえた声。

辺りを見渡すが、誰も居ない。

「誰かいるのか？」

『見えるわけないじゃない』

また聞こえる。

どうやらその声は頭の中に、直接話しかけてくるようだ。
テレパシーか？

『そんなわけないじゃない。私は貴方の中にはいるのよ。精神の中にはね』

「……は？」

意味が解らない……

もしそれが本当だとしても、信じられない。
だが言い切れる事でもない。

現に俺が声に出していない考えに対し、普通に会話をしている
からだ。

『その通りよ、信じる事が出来た？』

「いや、まだだ……そもそもお前はいつ、どうやって俺の中に入つ
た？」

『さっき思い出したとか言つておいてそれは解らないのね……何
かが入つてくる感覚がしたでしょ？ その時に入れられたのよ』

『驚いた……そんな事が出来るとは』

『そんな事の前に、私と話している時は声に出さない方がいいんじ
やないの？』

そう言われて、やつと気付いた。

第二者から見ると、俺は独り言を言つているようにしか見えない
からな……

とりあえず、お前の名前を教えてくれないか？

『いいわよ。私はティファ・ローズ。一応、昔は名の知れた大魔導
師だったのよ……ジードでね』

『何！？』

最後の一言に驚いた。

ジードは俺の住んでいた世界の名。
って事はお前も俺と同じジードの人間か？

『そういう事になるわね。でも、ジードで私の肉体が存在していたのは三十年ぐらい前だけ』

どういう意味だ？

『そのままの意味よ。私は肉体を失った後、精神体を捕らえられた。そしてその三十年後に貴方の精神内に同化、というより取り付けられた』

何故、俺なんだ？

『それは、貴方と私の魔力形式がほとんど同じだからよ』

魔力形式といえば、魔術を使う為に使われる魔力が溜められる部分の種類の事だ。だがそれは人によって異なる形式をしている。DNAとほぼ同じようなものだ。でも、それはありえないんじゃないのか？

『その通りよ。魔力の形式が同じ、と言つ事は双子でなければありえない』

だが、あいにく俺に双子はない。それにティファが三十年前に死んだと言つのなら、尚更ありえないだろう。

歳の差がありすぎる。なら何故、魔力形式が同じなんだろうか？わからない事ばかりだ。

それよりも先に、知つておきたい事がある。

『何を?』

俺とお前、入れ替わる事は出来てしまうのか?
もし出来るのなら、先日の森での一件に納得がいく。

『……出来るわ。でも、その為には両者の魔力を一時的に開放、簡単に言えば私と貴方が、互いに入れ替わる事を許可する必要がある。だけど、片方が気絶している時も出来るわ。もちろん、入れ替わるのは精神だけね、身体はそのままよ』

それはありがたいのかどうか、わからないな……
じゃあ最後に、お前は生前、何をやっていたんだ?

『注文が多いわね……それはね、せ
「ユウ、カイの試合が終わったよ』

ティファアが言おうとした瞬間、背後から声が聞こえた。
その声に驚きながらも振り向くと、入口にミーナが立っていた。

「わかった、すぐに行く」

すまんが、また後で話そう。

『わかったわ』

ティファアは軽く答える。

その返事を聞いた後、俺はミーナが伸ばす手を仕方なく掴み、闇技場内へと向かつた。

「そついえばミーナ、さつき始めてカイの名を口に出したな

「え？ うん、少しは慣れたって事かな。でも、まだあの人達とは普通に会話は出来ないよ……」

そう言いながら、ミーナは俯く。
何か言つてあげたほうがいいな。

「気にするな、これから慣れればいいんだから」

その一言に、ミーナは小さく頷いた。

「まだ、ダメよ？ そこまで教えたら……まだ彼は知つてはいけないのだから」「え？ ……そう、そういう訳ね。この世界にもいたのね、預言者が『

そしてティファは最後に、会えて嬉しいわ、と言つた。
聞こえるはずがないとわかついても……

第十一話・試合後の安息

カイの試合が終了したのを聞いたコウは、ミーナと共に皆のいる観客席へと向かった。

到着すると、そこにはチャンピオンのレミィの姿もあった。カイはコウが来た事に気付き、片手を上げ、「ういっ」と言つた後、その手を頭にのせる。

「『めん、負けちまつた。もう少しだったんだけどなあ「つ』という事は、所持金はどうなるんだシヴァ？」

「先ほどの試合が十一倍で六十万ラノン。そしてこの試合で負けた為、半分の三十万ラノンしか手元に残らないというわけだ」

三十万ラノン。

その所持金の少なさはもちろん皆知っている。

カナン大陸へ渡る手段であるアクアトレインに全員が乗るために金額、五十万ラノンに全く届かないと言つわけだ。

「また足止め、だな」

「……えと、何が足止めなの？」

カイ達の会話が気になり、レミィは聞いてみる事にした。

その問いに代表としてシヴァが答える。

「私達は隣のカナン大陸へ行きたいのだが、あいにくアクアトレインに乗る事ができないのだ」

「え？ アクアトレインに乗りたいの？ 別にいいよ？ カイ君には楽しい試合をさせてもらつたしね」

その言葉に皆は声を揃えて、はい？、と呟いた。

それは当然の反応だ。

その為、次の言葉にも同じ、いやそれ以上の反応をするだらう。

「言い忘れていたけど、私はここ、ネリンのアクアトレインのバビロニア皇国軍によるテロ対策用護衛部隊、レミィ・ヘルマン隊長よ

」

闘技場を出た後、レミィは、

「出発は明日になるから、宿でゆっくり休んでね」と言い残し、手続きの為、駅に行つた。

その後、皆は言われた通り宿に向い

シルク、コウ、ミーナ、ネプチューンの四人は、一つの部屋に集まっていた。

その宿は前日とは別の場所であり、ベッドが一つと小さなテーブルが一つという寂しい部屋だった。

その場所でシルクとネプチューンは、今日の出来事を話題にして話している最中だ。

「 それにしても驚いたよ。まさかレミィさんが皇国軍の隊長だったなんて」

シルクは驚いた表情と共に、複雑な表情もしている。

「軍人さんには色んな人がいるって事ぜよ」

ネプチューンの言葉にシルクは、そんなもんなんだね、と言いながらベッドにダイブし、大きくバウンドする。

「ふあー！ 久しぶりのベットだあ！ 今日はもう動きたくない。つてな訳で、おやすみー」

彼女は相当疲れていたのか、一つあるベッドの中心で両手両足を広げ、すぐに眠りについた。

それを見たユウは困った表情をする。

「そのベッドは一人分なんだが……まあいいか。別に俺が使うわけじゃない…… そういえばカイとシヴァはどこに行つたんだ？」

「あのお二人さんなら外で稽古中ぜよ。いくら互角に近かったと言えど負けた事は事実だからな、つて言つてたつちや」

そう言ってネプチューンはその場に倒れこむようにして、眠りにつく事にした。

「何だ、皆寝たのか……」

気付くとミーナもシルクの隣で眠っていた。つまり、この部屋の中で起きているのは俺だけだ。

「暇だな」

『貴方が暇なんだつたら、身体を貸してもらつてもいいかしら？

お風呂に入りたいの』

何だ？ 頭の中に直接声が……
って、ティファアか。

『失礼ね。私以外に誰が、貴方の脳内に直接話しかけられるっての
よ』

それもそうだな。

それで、なんで風呂に入りたいんだ？

肉体はないから入る必要がないだろ？

『バカね、これだから男は……私はレディーよ？ 入る必要なく
ても入りたいの！ それに私は温泉好きなんだから』

わかつたわかつた、好きにしろ。

そのかわり、だ。

勝手な事はするなよ？

『……ふう～ん、そんな事気にしているんだ？ 大丈夫、何もしな
いわよ。ベイブちゃん』

ベイブ？

なんだ？ それ。どういう意味だ？

「細かい事は気にしないの。わあ、早くあの風呂の風呂～」

しかたない、聞かなかつた事にしておくよ。
どうせ考えても無駄だからな。

『いい心がけね、そういう人は好きよ』

心にもないような事を言つな。
それより、早く入れ替われ。

『はいはい、それじゃあ魔力を少しでもいいから開放してみて』

わかつた。

俺は力を解放するような感じで心を無にした。
だんだんと、何も感じなくなつてくる。
そして少しづつ、意識が遠のいていく……

少しづつだが、遠のいていた意識が戻ってきた。まだ慣れていないからなのか、頭がボーッとする。だがしばらくすると、俺は異常に気付いた。自分の身体が自分の意思で動かない……

『どういう事だ?』

「どうやら無事に入れ替われたようね。つまり魔力の開放をしてくれて助かったわ、ありがとう」

入れ替わると、『どう事なのか……』

『つて、お前はなんで声に出して喋っているんだ?』
「いいじゃない、別に。小声なんだし」

そういう問題じゃないと思つが……

「とつあえず、お風呂に向かうわよ~」
『…………わかった、もうこい、好きにしり』

それにしても不思議な感覚だ。

自分の意思とは関係なく、身体が勝手に動いているんだから

『つて、ちょっと待て! そつちは女湯だ!!』

「えー! 私に男湯に入れつて言つの?..」

『当たり前だ。俺の身体を使つているんだからな』

俺が女湯にいた、なんて事にはなってほしくない。

「わかつたわよ、男湯にはいればいいんじょ？」「

ティファはブツブツ言いながら、隣の男湯へと入った。その後、脱衣所で無駄に急いで服を脱げりとした。だが、中々うまく脱げず、苦戦しているようだ。

「何この服！ 脱ぎにくいわね！」

『しかたないだろ。ジードでやつてた仕事では、こういう動きやすい服が一番いいんだよ。慣れればすぐに脱げる』

慣れたくないわよ、こんな服、と文句を言つていたが、コツを掴んだのか、すんなり脱いでいた。

そして服を脱ぎ捨てて、駆け足で浴場へと向かった。

浴場へと繋がる扉を開け放つと、そこに広がった光景は、綺麗に整理された桶やイスの山と輝いて見える蛇口、そして屋根がない為、露天風呂となつており、空を眺める事が出来る仕様となっていた。だが、一部の露天風呂の上には雨避けの為か、小さめの屋根が儲けられている。

「へえ～、客室はボロいけど、浴室は綺麗なのね！」

それは失礼だろう。

……まあ、確かにそうなんだがな。

ティファは先ほどと同じスピードで露天風呂へと向かい、飛び込むようにして入った。

「ふああ～、暖かくて気持ちいい～！ そして久しぶりのお風呂お

』
『あ、暖かい……入れ替わつても感覚は伝わるって事か？』

「当たり前じやない、五感は全て共有よ。一心同体つてわけね。だ

から、大怪我とかはしないでよね？』

『努力する』

……それにしても、先ほどから下の方の視野にちらつく何かが気になる。

その違和感が何かを確かめるために下を見ると、俺にはない、いやこの世の全男性にないものがついていた。

『な、なな、なんで俺の身体にこんなものがついているんだ！？』

そう言いながら、慌てて視線を上に向ける。

「こんなものとは失礼ね……それより、どうしたの？ そんなに慌てちゃって。もしかして、女性の胸をみたのは初めてだつたの？」

『そういう意味じゃないが、突然見えるとそりや慌てるだろ！ それよりも、なんで俺の身体が女になっているんだよ！』

脱衣所では確かに男の、俺の身体だったのに……

「ふふふ、びっくりしたでしょ？ これが、大魔導師たる、私の力よ。……まあ、私が使う魔術は失われた禁術なんだけどね」

なんだけどね、って軽がると言つていゝものなのかな？

『その禁術で、身体を変えたと？』

『そういう事）。…………でも、そう簡単には信じないでしょ？』

『当たり前だ。第一、魔術つてのは魔力を消費して火・水・氷・樹・雷・風・地・光・闇の内、一つを創造して攻撃、または身体の一時的補助をするものの事だ。存在している身体を別の姿に変えるなんて事、出来るわけがないだろ？』

少なくとも、俺の知っている魔術はそうだ。

「その摂理は一般的な魔術の、でしょ？ 私の使っている魔術は禁術と呼ばれるくらいよ？ そんなもの、誰もが知っているわけないじゃない。ちなみに……」

言葉を途中で止め、ティファは自分の胸を掴んだ。
……たしかに掴まれている、という感覚はある。

「今、私が掴んでいる、『レ』は確かに存在している。偽物ではなく、本物。

さて、ここで問題。この世に存在する命あるもの達の身体は元をたどると、何によって構成されているのかわかるかしら？」

『……数多の細胞とそれを支えている、つまりは細胞のエネルギー源となっている魔力によって、だつたか？』

「正解。ちなみに、その魔力が普通の人よりも多い人は、魔術師としての素質があるのよ」

それぐらいは知っている。

「それじゃもし、その細胞を支えている魔力が生命体そのものの存在、身体の形状を保つていてるのしたら？」

『世界中の学者や哲学馬鹿が驚くだろうな。だがその前に、信じないと思つが』

ティファはその返答を聞き、ふふふ、と笑った。

「その通りでしょうね。でも、そうじゃないと今のこの状況はどうやっても説明できないでしょ？ この魔術は、存在の形狀を保つて

いる魔力を一瞬分解して、記憶している魔力の形状に変換するの。それによって、身体が変わるのよ」

ティファアは一度目を閉じ、ややあつてまた開ける。

「……でも、この魔術によつて身体が変わる方法を知つたある人物は、これを禁術として、他の禁術と共に封じる事にした」「その理由は、自然の摂理を簡単に覆すような事は、その人物にとって許しがたい事だつたから、か？」

「よくわかつたわね。……でも、その人物はミスを犯した。魔術に対する興味が、人一倍強かつた孫である、私に話してしまったから。その話を聞いた私は、好奇心でその封印を解き、禁術を手に入れた。その分、代償は大きかつたけどね……」

そう言つてティファアは、胸の中心、心臓のある辺りを軽く撫でる。俺は、その部分を見て驚いた。

そこには大きな傷跡が残つていたからだ。

この傷の事について聞こうとしたが、止めた。

俺が見たティファアの表情には、曇りが見えていたからだ。

それと同時に、悲しい感情が俺の中に流れ込んでくる。

もしかしたら、禁術を手に入れた代償は、胸の傷の他にもあるのだろうか……

しばらくの間、俺とティファアは黙り込んだ……

第十一話・魔術と禁術（後書き）

魔力とか魔術とか、何言つてるかわかんない
という方がいるかもしませんが
ようは魔法です。w

そう解釈していただけだと助かります

ちなみに、魔術構成の説明などは、題材にしている物は一つもない
のであしからず（？）

第十二話・罪により得たモノ

露天風呂の湯気によって出来た雲がポチャーンといつ音を立てて、水面に落ちる。

その音と共に、ティファはゆっくりと口を開く。

それは、静寂の終わりだ。

「 全てを失った。弟も、家族も、一族も、故郷も、全て……私が未熟だったから、好奇心で禁術に手を出し、膨大すぎる魔力を制御しきれず、暴走したの」

その声は、わずかに震えている。

無理をして言わなくてもいい、そんな言葉が脳内で生まれたが、口に出す事は出来なかつた。

それはまるで、好奇心が俺の言葉を出そうという考えを邪魔しているようだ。

そして、ティファは話を続ける。

「 その暴走によつて一体の魔神を蘇らせてしまつた。その魔神が私から全てを奪つた。……それが許せなかつた。魔神に対してではなく、弱い自分に対しても」

傷跡のついた胸を撫で下ろす。

「 だからこそ、私は強くあるために禁術を使って魔神を封印した。

……この胸の傷は、その時に出来たものよ」

『 そうだったのか……それで、その魔神とうやらはもう現れないのか？』

「 現れないわ。魔神は私の中に取り込んだの。そのおかげで、私の

魔力は無限に近い量となつた

数多の犠牲と引き換えに手に入れる事になつた力、か……

『…………よく悲しみを乗り越えられたな。何故だ?』

その問いに、ティファはクスッと笑つた。

「それはヒ・ミ・ツ、よ」

『なんだよ、それ…………ここまで話したんだから、いいだろ?』

「また今度、機会があつたら」

刹那、入口の開く音がした。

見るとそこには、タオルを片手に持つた全裸のカイが立っていた。

『まざいな…………』 「まざいわね…………」

あいつ、カイにとつては、男湯のつもりで入つた風呂場に女性が入つていた、という事になる。

人生の日常でこれほどまでに驚く出来事はまざないだらう、たぶん。

「えと、あの、その…………」

カイは戸惑いながらも、少しずつ後ろへと下がつていいく。

そして最後に、すみませんでした!、と叫び、風呂場を飛び出していった。

「逃げちゃつたわね…………そんなに私の身体がよかつたのかしら?」「自惚うぬぼれるなよ…………そんな事より、早く入れ替わるぞ! カイや他

の客が来る前に、だ』

「ええ～、まだ身体を洗つてな

』

『また今度、風呂に入る機会をやるからー。』

ティファは少し間を開けて、しぶしぶだが了承してくれた。

「それじゃ、また魔力を開放してみて」

俺は言われるままに、魔力を少し開放する。すると、また意識が遠のいていく感覺がする。そのまま、眠ったような感覺に落ちていく……

カイはありえない状況に直面してしまった為、勢いよく扉を閉める。

彼はとてもなく混乱していた。

だからこそ、声に出して自分に言い聞かせていた。

ここは男湯のはずだここは男湯のはずだここは男湯のはずだここは男湯のはずだ、と。

だが、そう言い聞かせている内に、一つの疑問が生まれる。

それと同時に、脱衣所を見渡す。

そして、見つけた。

カイの見ている先、そこには脱ぎ捨てられたユウの服があつた。

「…………おかしいな？　ここにはコウの服があるのに、たしか風呂場にはこなかつた……」

それを思い出した瞬間、カイは急いで風呂場へと引き返す。だが、先ほど女性がいた場所には……コウがいた。

「あ、あれ？ ユウ、いつから居たんだ？」

その問いかけに、ユウは困った表情をした。

「いつからつて……最初からいたぞ？」
お前が入つてくるなり、叫んで出て行つた時も

「……つてことは……ユウが女性に見えたつて事か？……疲れて
いるのかな、俺」

彼は、コウに聞こえないよつとひつと呟く。

湯船を出た。

「え?
もう行くのか?」

「ああ、これ以上いたらのぼせそうだからな」

ユウは短めの返事をして、カイの横を通り去る。

すれ違つた時、カイの左腕を何気なく見た。

その左腕は、力を使つていないので関わらず、紋章のようなも

のが薄っすらと浮かんでいた。

「…………どうした？ 悲しそうな顔をして？」

コウが呟いた言葉が、カイの耳に届いていた。
そして、コウの方へと振り向くが、彼はもつ風呂場を出でていた為、
カイは首を傾げる。

「…………空耳かな」

そう言つて、貸切状態の湯船に飛び込んだ。

第十四話・別れと出発

夏の朝、小鳥のさえずりが街中に響く。

そんな中、寝ていたシルクは暑苦しさで目を覚ました。まだ眠気のある目をこすりながら立ち上がり、窓にかかったカーテンを思い切り開ける。

すると朝日の光が差し込み、シルクの顔を照らした。

「うお！？ 眩しつ！」

その眩しさに耐えながら窓を開けると、潮の匂いが混じった、涼しい風が入り込んでくる。

彼女の上半身はTシャツ一枚だった為、冷たい風が露出している肌に直接当たり、とても気持ちがいい。

そのまま、んー！、と唸りながら両手を上げて、力いっぱい背伸びをする。

その両手を上げたまま、深呼吸を一回。

一回目はさきほどよりも大きく吸い込み、そのまま反転、カイ達が寝ている方へと向く。

そして、両手を筒状にして口元に構える。

「起きろおお！… 朝だよおお！…」

彼女の大声は部屋中に響き渡り、眠っていた者は皆、勢いよく起き上がった。

「……え？ もう朝ですか？」

カイは少し寝ぼけながら問い合わせると、シルクは大きく頷く。

「嫌な目覚めだな……」

「コウは田を薄めたまま、彼女に対して文句を言った。

「はいそこー 文句言わない！……それともコウ、寝坊して置いて行かれたいの？」

「俺は寝坊な…………何でもない」

今の彼女の言葉には、さすがのコウも歯向かえない……といふか、言葉を返すのが面倒臭いようだった。

その後、カイが部屋を見渡すと、ある異変に気付く。

「あれ？ シヴァアは何処に行つた？」

つと、丁度その時、扉が思い切り開いた。

そして、そこにはパンの入ったカゴを持ったシヴァアの姿があった。

「お前ら、喜べ！ 朝食を持ってきてやつたぞ！ 投げるから上手く受け取れよ」

そう言つて、パンを一つずつ投げる。

その全てがそれの手元につまく渡つた。

「商人の田の前で食べ物を粗末にする教師つてのもどうかと思つちや……」

「ふん、なら食つな。自分で買つてくるんだな

シヴァアはそう言つながら自分の分のパンを手に取り、持つていたカゴを床に置く。

ネプチューンは、それはそれで困るぜよ、と言つてパンを食べ始めた。

「……シルクとシヴァは似た者同士だな……」

「ウは誰にも聞こえぬように、小さく呟いた。

太陽が真上に昇り、夏の強い日差しが街中に降り注ぐ。時刻は丁度、十二時。

この時間は、一行がレミィと駅で会つ約束をした時間だ。しばらくするとカイが、遠くから走つて来るレミィの姿を見つけた。

「やつと本人が来た！」

レミィは一行の前で止まると、手を合わせて謝罪の意を示す。

「待たせてごめんねー！ 手続きは無事に終わったよ。後は、このカードを駅員に見せるだけで乗れるから」

そう言つてレミィは、全員にプロンズのカードを配つた。

そのカードは手のひらサイズの為、用意にポケットに入る。

「わざわざ手続きをしてもいい、感謝する。皆の代表として礼を言わせてもらひや」

シヴィアは軽く頭を下げ、感謝の意を表した。
対するユーリイは、気にしなくていいよお、と言つて広げた手を左
右に振る。

「 それじゃ、最後まで見送りうつかな。わざ、ホームまで行こう」
そう言つてユーリイは先頭を歩きだし、他のみんなはその後ろをつ
いていく形で、ホームへと向かった。

ホーム内。

そこには、長くて巨大な列車が入口を開けて停まっていた。

「で、でつけな……」

カイは口を開けて、列車”アクアトレイン”を見上げている。

「中はもつとす”によー、乗客一グルーパ”とに一部屋用意されて
いて、他にも娯楽施設、食堂、小型商店など設備が整つてこるの
‘す’すぎだる……」

ユーリイの説明を聞か、コウは吐息を一つ。

丁度その時、出発の合図である汽笛がなる。

「ほりほり、早く乗らないと置いていかれちゃうよ」

そう言いながら、レミィは一步下がり、手を振った。

一行は、それぞれ感謝と別れの言葉を言って列車に乗り込む。最後尾、カイも言い終えて乗り込もうとするが、レミィが呼び止めた。

「カイ君、また勝負してよね？」

その問いに、カイは親指をグッと出す。

「もちろんだ！ その時は、勝つてやるぜー！」
「望むところだよ！」

最後にカイは、それじゃ、と言ひて車内に入り込む。

それと同時に扉が閉まり、列車が動き出した。

その後、カイは振り向く事なく客室へと向かつた。

ホーム内に列車が走る音が響く。

レミィは列車が見えなくなるまで手を振り、その後、本部へと帰らうとした。

すると田の前に突然、白衣を着た白髪の男と、その両サイドに並んだ、ボディーガードと思われるガツチリとした体型の男一人が、通る道をさえぎるようにして現れた。

白衣の男の顔は酷くやせ細っており、目元には隈くまが出来ている。

「あつれえやー、遅かつたねえ」

白衣の男はボディーガードの一人に、君たちのせいだよ、と言いつながら脇腹を突いた。

それに対し、ボディーガードは無表情。

その後、白衣の男はレミィの方に向き直し、不気味な笑みを浮かべる。

「まあいいや、さて質問だよ？ レミィ・エルマン。……コウ・ウラバスとこう名を知ってるかい？」

レミィはその言葉を聞いた瞬間、一歩後ろに下がり、身構える。

「おんやあ？ ボクにそういう行動をするという事は、どうやら知つているようだね？ ……うん、それじゃ関係者として拘束できる、ねえ」

いかにも不気味な言動。

そして、言い終えると同時に指をパチンッと鳴らした。すると、ボディーガードの一人がレミィに近づく。

「待つてよ！ 私はこの町のバビロニア皇国軍隊ちょ」

「そんな事、関係ないね。ウラバスを知っているやつは皆、拘束し

て情報を聞き出す。相手がどんなお偉いさんでも関係ないんだ。こ
こはボクの世界じゃないし」

レミィの言葉をさえぎって言つた白衣の男の言葉は、彼女には全く理解できなかつた。

「自分の世界じゃないでござりにつ」

瞬間、ボディーガードの一人が、体型に似合わないような素早くして真横に着く。

その動きにレミィは対応できず、首筋を手刀で打たれて氣絶してしまつた。

そして、ゆっくりと倒れるレミィを、もう一人のボディーガードが担ぐ。

「はい、よくできました～。ああ、帰ろうね～」

白衣の男の上機嫌で不気味な声がホーム内に響く。

第十五話・初めての海上

我、見たのは未来。

黒き翼を持つ者により、世界は滅びゆく。

我、見たのは過去。

歯車が回りし時は、突然の出会いである。

そして、我等が見るは現在

大陸と大陸の間、海上すれすれに架かっている橋。
その上を走る列車”アクアトレイン”は、ゆっくりとカナン大陸へと向かっていた。

そんな中、ある密室の窓に貼り付くようにして、カイは外の景色を見ていた。

「すげえぜ！　海だ海つ！！　すげえぜ！　広いぜ！」

赤い半袖シャツと青いジーパン姿のカイは、まるで子供のようではしゃいでいる為、隣りに座っている全身白で胸のあたりに黄色の

ラインが入っているフリルの付いた服を着たシルクは、溜息をつきながら彼の首筋を掴んで、思いつきり引つ張る。

「はいはい、すげえぜ！ つてのを一回も言わなくていいから、とりあえず騒ぐのをやめようね、カイ！」

「おわっ、な、何するんだよシルク！ 海を見たのは初めてなんだから、少しひらはしゃいでもいいだろっ！」

カイは、えりを掴んでいる手を離さずとするが、シルクのもつ片方の手が、それを邪魔する。

「あまり暴れると、首をしめて落としちゃうよ～」

シルクは笑顔でそう言つが、カイはその笑顔と言葉の違いに恐怖を感じ近くに座っている、身体にピッタリとフィットした黒色の服を着ているコウに助けを求める眼差しを送つた。

だが彼は、自業自得だ、というような目でカイを見て、微笑する。

「……ねえ、コウ。カイを助けなくともいいの？」

コウの膝の上に頭を置き、横になつて、小さな水色のドレスに似た服と共に、水色の長髪を垂れ下げたミーナは、透き通つたような青い瞳で、彼を見上げる。

「自業自得だからな、気にするな」

そう言いながらコウは、ミーナの長い髪を撫でる。

すると彼女は、撫でられたからか、満足そうな笑みを浮かべた。

「……コウはずいぶんどミーナに懐かれているな。羨ましいよ」

そう言つたのは、ユウの向かい側に座つてゐる、ミント色のスティックのような服を着たシヴァだ。

彼女はピンク色の長髪を、組んだ腕に絡ませている。

「よつは受け入れ方だ。なんなら手を広げて読んでみたらどうだ？」
シヴァ。今のコイツは、だいぶ皆に慣れていると思うしな
「そ、そ、そ、う、か、……？ そんな動物のように上手くこゝのだらうか…
…。まあ、それなら、さあ、ミーナ。私の膝の上においでっ」

シヴァは組んでいた腕を広げ、笑顔でミーナを誘うポーズをとる。
それを見たミーナは、ユウとシヴァの顔を交互に見て、再度ユウの顔を見て、首を傾げた。

彼はそれに答えるように頷くと、ミーナの表情はまた笑顔になり、シヴァの膝の上に移つた。

「か、可愛い………… もお！ 髪を撫でるとやわらかい…………
なんと！ 寝息を立てて眠つてゐるぞ！ か、可愛い過ぎる…………」
「お前………… 可愛いものを見ると、性格が変わるものか？」

少なくとも、ユウの内心では、シヴァの見方が変わつたよつだ。

「こつれは激写だつちやー！ 写真に納めるぜよー。」

ユウの隣りにいた、ボロ切れのローブを羽織つているネプチューは笑いながら、自分の荷物に手を突つ込み、小型のフィルムカメラを取り出した。

それをシヴァに向け、左上についている、シャッターを切るためにスイッチに指を添えて構える。

「はい、笑つて笑つて……って、あああー、わったちのカメラが
真つ一つにいい！ 何をするんじゃー？」

「何をする…………だと？ 私の天使をお前よつたやつの濁声で、夢
の世界から無理矢理引きずり出すよつな行為は許さんぞ…………？ 一
度田は警告、二度田は制裁だ」

やう言つてシヴァアは、カメラを真つ一つにした細剣を、ネプチュー
ーンの首筋に添える。

「こちなどこちで死にたくないだろ？ ネプチューン」

シヴァアの冷酷な赤い瞳を見たといふ本氣だという事を悟つたネプ
チューンは

、添えられた細剣で首筋を斬らなによつて、ゆつくりと頷いた。
それを見た彼女は満足そうな表情をして、細剣を鞘に納める。
その後、ネプチューンは急いで自分の首筋を触り、首が繋がつて
いる事を確認して安堵した。

「ウはそれを見て、苦笑。

すると突然、シヴァアは真剣な声で言つた。

「さて、ミーナも寝たところだ。この列車が目的地に着くまで、ま
だ時間はある。……コウ、この世界について、そして皇國軍につ
いて教えてやるつか？」

「この世界について……か。興味深い話だな。お前がよければ聞か
せてもらいたい」

そういうシヴァアは、いいだろ？ と呟いて、窓側にいる一人の方を向く。

「お前らも　つて、こつまでじやれあつているつもりだ？　……

お前らも聞く必要があるだろ？　皇国軍について、だ」

「え？　…………　そういえば、シヴァちゃん、授業で皇国軍の事、全く教えてくれなかつたもんね。　ほら、カイ。起きなさいって」

シルクは、おそらく落ちていると思われるカイの頬を連續ビンタした。

すると、うん、とうなりながら、カイが目を覚ました。

「……あれ？　お花畠は？」

「よし、揃つたな」

シヴァはカイのボケを無視し、ミーナの髪を撫でながら、今までにない真剣な表情になる。

「まずは一十年前、世界を巻き込んだ報復戦争と呼ばれた惨劇についてだ」

第十六話・戦争という名の惨劇

アクアトレインが線路の上を走っている時に奏でられる、リズム感のある音が鮮明に聞こえるほど静まり返った客室で、シヴァは荷物から取り出した地図を開いた。

その後、これを見てくれ、と言つて右上にある長い大陸に人差し指を添える。

「ここは私達がいたミーン大陸。そしてここから南西、遠く離れたところにアッカドという大陸がある。そこには大昔から、一つの国があるのだ。それこそ、私達が皇國軍とよんでいる者達の故郷、バビロンを首都としたバビロニア皇国だ。対して南東にあるのが二十年前までバビロニアと対立関係にあつたテクノス王国のあるカルディエールという大陸だ」

ちなみに、と付け足してカルディエールを指で囲む。

「テクノスの兵士は、今やここで“反皇國軍勢力”レジスタンスとして活動をしている。……テクノスは領地や兵力こそ多いものの、バビロニアの技術力には劣つていた為、二つの国は、条約によつて中立状態となつていた。だがそれは、表向きであつて実際は、いつ戦争が始まらぬかわからない、言わば冷戦状態となつていた。そんなある日、第百十三代目皇帝ギルガメシュ・ラヌ・ジ・バビロニアの娘であるシン・リグ・ジ・バビロニア姫が、テクノスとの友好を持つために執事であるシャマシュと数名の召使い、親衛隊を引き連れてカルディエール大陸のテクノスへと向かつた」

シヴァが一度、言葉を止めた時にユウが問いかけた。

「……そのシン姫つてのは、父親であるギルガメシュに命令されて行つたのか？」

「いや、シン姫は平和を望んでいて、自らの意思でテクノス王国に向かつたつちや」

問い合わせたのは、意外にもネプチューンだつた。

それを聞いたユウは、わかつた、続けてくれ、と言つた為にシヴァは頷き、話を再開する。

「その後、何事も無くテクノスの国王アーガイル・ジィ・グランド・ポールとの交渉を終え、友好条約の締結を済ませたシン姫は、アーガイル国王が用意した別宅で、一日ほど休む事となつた。理由は、本当に友好関係を持つ事を望んでいるか確かめるためだ。そして一日後の最終日、惨劇が起きた。別宅への、突然の襲撃だ。シン姫の親衛隊は襲撃によつて真っ先に殺され、残つた者達も一人残さず殺され、全滅した」

最後の一言に、ネプチューンを除く、全員が目を見開いて驚いた。

「ぜ、全滅つて……やつたのは誰なの！？」

カイの問いに、シヴァは視線を彼に向け、告げる。

テクノスだ、と。

「ツ！？ 友好条約とやらを結んだばかりだつてのに、なんで自分から違反するような事をするんだよ！？」

「その意図は誰も知らんのだ。ともあれ、それがテクノスの仕業だとわかつたギルガメシュは憤怒し、一気に世界を巻き込む戦争を起こした。言わば、開戦だな。対するテクノスは、開戦を待つっていた

かのように、蓄えていた武力と兵力をすべて投入した。だが、バビロニアの技術力と軍事力は圧倒的なものだつたのだ。その為、わずか八ヶ月で、テクノスの敗北で終戦した。噂によると、早期終戦のきっかけの一つは、テクノスの軍で五本の指に入るほどの強さをもつた戦士の一人が多数の兵士と共に、バビロニア側に寝返ったからなのだそうだ。……ここまでで、何か質問は？」

呼びかけに、カイが、はい、と言つて手を上げた。

「その寝返った戦士は、今はどうしているんだ？」

「うむ、カイは授業モードだな。関心、関心」

シヴァはそう言いながら、数回頷いた後、問い合わせに答える。

「…………その者は戦死した。どいで、どのよつになどの詳細は誰も知らないそうだ」

そう言い終えたのと同時、今度はシルクが手を上げた。

「結局、アーガイル国王は何がしたかったんですか？」

「いい質問だ。終戦後にわかつた事なんだがな。実は、アーガイル国王は開戦前に死んでいたのだよ」

その言葉に、再度全員が驚いた。

「ま、待て……それが本当なら、誰が軍を動かしていたんだ！？」

ユウの問いに、シヴァは首を左右に振つた。

「今となつては、誰もわからんのだ。テクノスの王族や軍の最高権力者など、国に関わった者達もまた、開戦前に死んでいたらしいからな」

「報復戦争は謎だらけなんだっぢや……」

ネプチューンの付け加えた言葉に、シヴァは、その通りだ、と同意して再度話を続ける。

「開戦が二十年前。終戦が十九年前だ。それからと言つても、この世界はバビロニアが大半を領地として管理している」

「バビロニアは、アルグの時みたいに村を襲撃しているのか？」

ユウが聞いた事は、カイが拾つた時計を探していった皇国軍のよつな奴が、他にもいるのかという事だ。

だがその問いに、シヴァは難しい表情を作つた。

「……ギルガメシュは、娘と同じであまり戦いを好まない人らしいからな。

だが、いつの間にかギルガメシュは、そして世界は変わつてしまつたのかもしねりないな……」

深刻そうに言つた言葉に、シルクは悲しそうな表情で言ひつ。

「……やつぱり、娘さんが殺されてしまったからなのかな……

可哀想だよね、シン姫つて。平和を愛していたから、戦争が起きないように条約を結びに行つたのに、その相手の国に殺されて、そのせいで戦いを好まなかつたお父さんが変わつてしまつて……」

その声は少し震えており、悲しみが込められていた。

それを悟つたシヴァは、この子は本当に優しい子だなと、内心そ

う思つた。

すると、急にネプチューーンが立ち上がつた。

「すまん、ちょっと席を外すぜよ……」

そう言い残し、ネプチューーンは密室を出て行つた。

そして、この密室に残つたのは静寂だけだつた……

第十六話・戦争といつ名の惨劇（後書き）

バビロニア皇國

並びにギルガメシュなどの名前ですが
これはバビロニア神話を元に考えました
少し知つておけば、以外な何かがわかるかも、
です

それでは次回もよろしくです

第十七話・陽気な少女

アクアトレインの最後部車両には屋根のないエリアがあり、列車の速度が遅い為、景色を眺めながら潮風にあたる事ができるという絶好のリラックス場所になつていてる。

俺は今、その場所で柵にもたれかかり、潮風に当たりながら俺の精神内にいるティファと会話していた。

『どこの世界でも、一度は戦争をしているのね。びっくりしたわ』
ジードは相手が人間じゃなかつたらしいがな。

『そうなのよねえ……エニグマは人間と違つて、プラントを潰さない限り、永遠にでてくるんだもの』

エニグマってのは、この世界ではモンスターと呼ばれている生物の事だ。

そのエニグマには数多くの種類があり、全てが異型の為、謎めいた者という意味でエニグマと名付けられた。

そして、そのエニグマと人類の生存を賭けた一大戦争は、文字通りエニグマ戦争と呼ばれた。

……って、お前は戦争経験者だったのか！？

『まあねえ～、これでも大魔術師なんだから』

それは関係ないだろ……。

『……面白い事を教えてあげましょうか？』

面白い事？

俺はオウム返しに問い合わせた。

『そ、たつた数十年の間に閉ざされた、ジードの歴史』

どういう事だ？

歴史って言つても、昔から人間とH-1-ゲマは戦つていて、その戦いに終止符を打つために戦争をしたんだろ？

『……やっぱり、戦前の歴史は後世に伝えられていないようね。それじゃ、話を』
「どーんっー！」
「うおっ　ぐっー？」

突然、背後から聞き覚えのある声と共に、力強く押されたような感覚。

それと同時に、腹部が柵に強打され、俺はその場につまずくまつた。ティファも痛そうにうなつてている為、痛みの共用は本当なんだな、と思ひ。

それはともかく、後ろを振り向くと、そこには両手を前に出したボーズのまま止まっているミーナの姿があった。

「あれ？……大丈夫？」
「だ、大丈夫じゃねえよ……。そんな驚かし方、誰から聞いたんだ？」

痛む腹部をさすりながら立ち上がり、聞いてみる。

「え？ シルクだよ？ コウのところに行くのなら、いつやつて驚かすといいんだよって言つて、教えてくれたの」

あ、あいつは余計な事が好きなんだな……。

「それで、何の用だ?」

「つづん、コウと一緒にいたかつただけだよ」

その言葉に俺は、そうか、と呟いて海の方を向く。

『私に対しての口止めつてわけね……』

どうした?

『なんでもないわよ。ただ、眠いから寝るわ』

ティファはそのままついで、眠りについた。

それと同時に、俺の腕をミーナが引っ張る。

「ねえねえ、喉が渴いたから飲み物買つてよ」「は?」

俺は、一人で買つてこい、と言おうと思つたが、そのまま言葉を飲み込み、代わりに微笑を作る。

「……わかったよ、行くか

さう言つて歩き出した為、ミーナは俺の後ろを追いついて小走りでついてきた。

そして、後部車両の扉を抜けたその時、ミーナが、きやつとこう声と共に転んだような音がした。

振り向くと、漆黒のローブを着込んだ男にぶつかって、案の定、

転んでいた。

「おいおい すまんな、ミーナが迷惑かけてしまって」

そう言つと、男は一度こちらを見て赤色の目で睨み付けてから、俺に背を向けて歩き出した。

「……感じの悪い奴だな…… ミーナ、掴まれ

「ありがと」

ミーナは苦笑しながら、俺が差し出した手に掴まって立ち上がる。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ。それより、早く行け」

「お、おい、そんなに引っ張るなつて！ ゆっくりだ、ゆっくり！」

結局、引っ張られたまま行く羽目となつた。

「あ、アイスクリームもある！ これでもいいかな？」

ミーナはカウンターに置いてある、ショーケースの中に入つたアイスクリームの見本を指で示している。

「わかった、わかった。一つだけなら何でもいい」

「本当っ…？ それじゃあ……トリプルでイチゴ、チョコレート、メロンね」

俺は、了解と言つて、言われたとおりの物をカウンターの向こうにいる店員に注文した。

その後、ややあつてチョコレートが差し出してきたのは、ローンの上に丸く模かたどられた三色のアイスが積み重ねられている物だ。

それを受け取った後、田を輝かせているミーナに手渡し、同時に店員に金を払つておく。

そして辺りを見渡すと、少し離れた窓際にプラスチックで出来たイスとテーブルがあつた為、彼女とそこに座る事にした。

後ろから、『じゅつくりどうぞー』といつ店員の無駄に元気な声を聞きながら、イスに座る。

そして、俺の向かいに座つたミーナを見ると、まだ田を輝かせたまま、美味しそうにアイスを食べていた。

つとその時、背後かた妙な視線を感じる。

それと同時に、悪寒がした。

すかさず後ろを向くと、そこには、

「そんなんところで何をやつてるんだ？ シヴァ。 それじゃまるで変質者だぞ」

小型のフラッシュ付フィルムカメラを持つたシヴァの姿があつた。

「見てわかるんのか？ ミーナを撮つているのだ」

「…………」

人とは、きつかけによつては、ここまで変わつてしまつもんなんだな……。

「……一応聞いておくが、何でだ？」

「理由は簡単だ。私とお前の子だ、育成記録はつけておかないとな。
それよりもほら、ミーナを見てみる。あの可愛らしい食べ方を、
仕草を！」

「人聞きの悪い事言うんじゃねえっ！ 鳥肌が立つ……」

そう言いながらミーナの方を見ると、小さい口から舌を出して一番上のイチゴ味のアイスをじっくりと舐め続け、途中ですばやく下の一つ、チョコレート味とメロン味を舐め、また一番上を……という流れを繰り返していた。

「な？ な？ 可愛いだろ？」

「……あ、え～っと…………とりあえず、その薄気味悪い笑顔でフランクショを連射するのはやめる。俺の目が色んな意味でおかしくなる」「うむ……しかたない、ここまでにしておくか」

「ああ、おとなしくそういうして つて、言つたそばからまたフランクショするな！」

「はつはつはつ、これで最後だ。……ちょっと残念だが」

シヴアは言つた通りに残念そうな表情をしながら、カメラをスマッシュのポケットに閉つた。

「……それで、本題は何だ？」

「む？ その言葉は、何を根拠にだしておるのだ？」

シヴアは口元に笑みを浮かべ、されどもとぼけた表情でいる。

「俺は仕事上、相手の表情を読む事が要求されるから、お前の笑いでバレバレだ。わざとだろ？」

「あつさりバレてしまつたか……。と、本題に入る前に一つ聞くが、お前の仕事とやらはなんなのだ？」

その質問に答えるか答えぬべきか迷つたが、結局、正直に答える事にした。

「……潜入、情報収集をオプションとした雇われ屋だ」

そう言つと、再度ジヴァは微笑した。

「ふむ、だから初めて会つた時、素早い動きが出来たのか……一度、本気でやりあつてみたいものだな」

「断る。俺とお前がやりあつたら、町を一つ消しそうだ」

俺は微笑を返す。

するとシヴァは、腹の底から笑い出した。

「はつはつはつ、冗談がつまないなあ。さて、お前が戦闘向きだとこう事がわかつたからな。……率直に言つが、その剣はお前に合つた剣ではないだろ?」

そう言つて俺の腰につけてある鞘さやに納められた剣を指で示し、まあ私は一度も見ていないがな、と付け加えて口元に笑みを作った。俺は軽く頷くとシヴァは、よし、と言つて頷く。

「ならば私について来い。いい場所を教えてやる」

シヴァはそう言つながら、最後の一 口を食べ終えたミーナの口元をハンカチで拭いて彼女の手をとつて歩き出した。

その後を、俺は頭を搔きながらついて行く。

第十八話・武器商店

所々に飾られたシャンパンリアが少々揺れにより、一層綺麗な光を醸し出している車内の通路を、俺はシヴァの後ろについて歩いている。

先ほどまで一緒にいたミーナには、密室こことかイ達に預けておいた。

あいつらなりすぐに寝へだまつゝと思つてみると、急にシヴァが立ち止まつた。

「……着いたぞ、ここだ」

気付くとそこには、今まで通つて来た連結部分の扉とは少し違い”ここから先第二車両につき、関係者以外立ち入り禁止”という文字が大きく書かれていた。

「……お前、ここに書いてある文字が読めないのか？」

「早とちりするな、よく見ていろ」

そう言つたシヴァは、乗車券であるブロンズのカードをスースのポケットから取り出し、扉の右側にある機械に通した。するとその機械は、ピーンといつ音を立て、同時に扉が左にスライドした。

「はー? ……何で開いたんだ?」

「知りたければ自分のカードを見るんだな」

俺は言われた通りにカードを取り出す。

表には”アクアトレイン乗車用カード”という文字が彫られていて

るが、裏を見ると”第一車両通行許可・武器商店使用許可”と彫ら
れていた。

「……盲点だった……まさか裏にこんなものが……」
「何をぶつぶつ言っているのだ？ 早く入るぞ」

そういう言い残してシヴァは中に入つて行つた為、俺も急いで中に入
る。

入つた通路は、今まで通つて来た通路と違ひ殺風景で、大人二人
が隣り合わせでやつと通れるくらいだ。

カードには”武器商店使用許可”と書いてあつたが、通路には武
器どころかガラクタ一つすら置いてなく、ただただ真っ直ぐな通路
を進んで行くだけだつた。

そして、そろそろ第一車両の扉に到着しそうになつた為、何もな
いじやねえかと言おうとしたその時、突然シヴァは左に曲がつた。
不思議に思い、シヴァが曲がった場所まで行くと、そこには一階
に繋がる小さな階段があつた。

その階段を、俺は迷わずに入る。

その後、上りきつた先で見た光景は、第二車両全域を敷き詰める
ようにして置かれた、大量の武器だつた。

田の前に広がる光景にコウは少し驚きながらも、内心は喜んでい
た。

だが口元に出来そうな笑みを我慢して辺りを見渡すと、狭そな
な

カウンターにいる店主と思われる、白髪を無造作に伸ばした初老の男の姿と、その男と会話をしているシヴアの姿を見つけた。

「つまりは、試しに持つてみたり装着してみてもよいという事だな？」

「ええ、でないとお客様の信用を得られないのですよ。よつて、代金は後払いとなっていますが……万引きは駄目ですよ?」

「もちろん、それはわかっている。なあ、ユウ」

突然話を振られたユウは戸惑いながらも、ああっと答えた。

「それもそうですね。ヒヒヒッ」

一人の言葉を聞いた店主は不気味な声で笑った。

ユウはその笑い声を不快に思いながらも、カウンター前まで歩み寄る。

その行動に店主は、やはり笑みをこぼす。

彼はその笑みを無視し、問いかけた。

「……一つ聞く。ここは買い取りもやっているのか?」

「よくぞ聞いてくれました、そしてその通りでござります。さすがに、この店にある分だけでは商品の種類が足りませんからね。こちらでは武器はもちろんの事、あらゆる部品やジャンク、宝石、賢石などを買い取りさせていただいております。ヒヒヒッ

「どうか、それじゃこいつを買い取ってくれるか?」

ユウはそう言つて、腰の鞘に納められていた剣を抜き出してカウンターに置く。

その剣は刃渡りこそ標準の物だが、刀身はありえないくらいに鋭く、純金のように輝いており、たくさんの宝石がちりばめられていて

た。

それを見た店主は、驚いて目を見開く。

「……これはす」「ですな！　百万ラノンはくだらないですぞ……！
ですが、金額が金額ですので……」

「わかつている。その金額分、ここで購入すればいいんだろう？」

それを聞いた店主は安心したのか、吐息を一つ。

「良いお察し、ありがとうございます。こちらとしては、一二十万ラノンまでなら買い取り金額としてお渡しする事ができます」

「そうか……それじゃ」

ユウは言葉を途中で止め、あらかじめ部屋から持つて来ていた力バンをカウンターに置く。

そして中に手を入れ、黒い塊を取り出した。

「トッ」という重みのある音と共に置かれたそれを見て、店主は問う。

「それは……なんですか？」
「知りたいか？」

その言葉に、店主は数回頷く。

「これは拳銃”ガバメント”という物だ。先日、俺達のいた村を襲撃したやつらが持つていてな。まだ世に出回っていず、俺がたまたま知っていた物で、魔力によって構成されや弾丸を高速で打ち出す武器なんだ」

そう言つた後、再度袋に手を入れる。

次に取り出したのは長細くて黒い塊と、それよりも少しばかり大きい、四つほどのボタンがついた長方形の箱だ。

「コウはまず、長細くて黒い塊を持ち上げて説明を始める。

「これは弾倉^{マガジン}と呼ばれる、銃弾を入れておく物だ。これをガバメントに入れる事によって、銃弾を撃てる」

そして、と言つて次に持ち上げたのは長方形の箱。

「これは”チャージャー”と言つて、これに弾倉を差し込む事で、銃弾を補充できる。だが、銃弾を構成するための魔力は装着者の魔力を使う為、連續使用は魔術師の素質があるやつだけだ」

「コウは説明を終えた後、三つを店主の目にまとめて置く。

「これらを入れるためのホルスターを作つてほしい。ベルトに装着できるようなやつを」

「ちょっと待つて下さい」

また別の物の説明を始めたコウを店主は一度止め、カウンターの下から、紙とペンを取り出した。

「お手数ですが、こちらに設計図を描いていただけませんか?」

問い合わせにコウは頷き、ペンを取つて描き始める。

その途中、彼の絵を見たシヴァは右手を顎に添えて呟く。

「なかなか上手いな。それに比べてカイの描く絵ときたら……」

「コウを見習つて欲しいものだ、と言ひながらため息をつく。

「……………できたぞ」

シヴァアが呟いている間に、ユウは設計図を描き終え、店主に渡す。それを見た店主は興味深い表情をし、思わず笑みをこぼした。

「……………これはこれは、確かにこいつの形だと綺麗に納まりますな……ふむ、久々に腕がなりますよ。ヒヒヒッ」

「それとだな、ここで売っている物の値はどれくらいだ？」

「ええっとですね……………この武器の多くは五年前、私の友人と共に極秘で発見した新素材”エターナル”によつて永遠の命を与えております。よつて、銅や鉄で出来た物よりも軽くて使いやすく、折れる以外で武器が死ぬ事はありません。鑄びる事なんてもつてのほかです。その為、信頼を得られるような物にするためにお金を使いますので、売値はナイフ一本でも大体一万、短剣サイズで二、三万、長剣サイズで五万、大剣サイズで六万ラノンほどです」

そして店主は最後に、もちろん他店では取り扱っていない素材ですと付け加えた。

それを聞いたユウは満足そうな表情で頷く。

「なら、これのホルスターを五十万で最高の物に仕上げてくれ」

「五十万……………ですか？……………わかりました、任せて下さい。きっと貴方様が満足できるような物に仕上げて差し上げますよ。ヒヒ

ヒッ

「ああ、頼んだ」

ユウはそう言い残して、武器を見に行こうとした後ろに向こうとすると、不意に店主が彼を呼び止めた。

「それとですね、この武器の話は当然、他言は
「無用だ。というよりダメだ。…………」んな武器は、世の中に出て
つてはいけない。せめて、この世界には…………」

最後の一言に、店主は首を傾げながらも、わかりましたと頷いて、
ガバメントの寸法を取り始めた。

その反応に対してもう一度は安堵の吐息をし、再度後ろに向き、奥へ
と向かおうとする。

すると、先ほどまでカウンター近くの棚を見ていたシヴァが彼の
横に並んだ。

「…………あの剣は、どこで手に入れたのだ？」

その問いに、ユウはしばらく間を空けて答えた。

「…………アルグの村で、キリ一つて人に渡された。金に困った時に
これを売つて足しにしな、って言つてな」

その答えに、シヴァは納得したのか、私の考えが外れてよかつた
と呴き、先ほど見ていた棚に戻つて行つた。

その後ユウは、彼女の方を振り向く事なく、近くに重ねてあつた
力ゴを一つ手に取り、奥へと進んで行つた。
薄暗い闇の中に。

第十九話：ソレは命を簡単に・・・

銃は卑怯だと、アイツは言った。

俺がいたジーデといつ世界の、俺が住んでいた村で、毎日のよつに。

俺の世界では、銃が使われるよつになる前まで、一般的に兵士は剣、弓などの近距離・中距離武器を使っていた。

剣や弓などは、訓練などの苦労を重ねて肉体と精神を鍛え上げ、その努力した分だけ力が發揮され、強さの源となる。剣を振るうため、弓の弦を引くための筋力も求められる。

だが、銃はどうか。

引き金一つ引くだけで、簡単に命を奪つてしまつ。指一本で一つの命が消える。

だが、俺はその銃をこれから使つていいとしている。もしアイツがそれを知つたら、何て言つてくれるだろうな……

『まず殴られるわね。その後、永久に牢屋行き～』

突然、ティファが明るい声で話しかけてきた。

感覚はないが、右の肩に手を添えて。

……つてかお前、言い方と内容が怖いくらいに違つた。

『過去の思い出に浸つてゐるやつには、丁度いいのよ。それで、どんな武器を買つつもりなの?』

それを今探してゐるんだ……ん?

不意に、一つの武器が目に留まる。その武器を手に取り、刃を撫である。

サイズは手の平よりも少し大きくて、刃が弧を描くよつに曲がって

おり、フックのような形をしている。

そして、持ち手の部分の下には、分離したホルダーが付いており、ベルトに装着できるようになっている。

そして、そのホルダーを引くと持ち手の部分から、エターナルをしていると思われるチョーンが出て来た。

試しに刃を商品の棚に引っかけて、ホルダーを持ったまま後ろに下がり、長さを確かめてみる事にした。

するとチョーンは四、五メートルほど伸び、止まった。

『結構伸びるわね』

ティファの言葉に俺は、ああと答える。

これは俺があつちの世界で使っていた武器とほとんど同じタイプだ。

『へえ～、いんのをねえ……』

俺の仕事には潜入もあつたからな。

そういう時は結構役立つた。

その言葉に対してもティファは、あらうと素つ氣無く返事をする。

俺はコイツが会話を終わらせたと知り、武器探しを再開する。

「…………こぐらなんでもあつすぞだろ…………」

一車両分のスペースを丸ごと使った商品の棚の中間辺りでフック型の武器を見つけた後、結構歩いたと思ったが、まだ行き止まりが見えないでいた。

その途中、俺はエターナル仕様のナイフを十本と、太ももあたりに巻く事が出来るナイフが各四本まで収納可能なケースを二つ、ナイフを一本だけ仕込ませる事が出来る靴を一足、長剣を一本、カゴに入れていた。

そして今、皿に留まつた緑色の髪留めを一つ手に取る。

『……その髪留めは何に使うの？』

ん？ これはミーナへのプレゼントだ。

『……この物は、持つても損はしないからな。』

『まあ、それもそうなんだけど……この店には縁のなさそつな物なのに、商品として置いてあるのね』

同感だ……ん？

『どうしたの？ もうきと同じパターン使って』

ほつとけ。

それよりも、俺の視界に入ったのは小さな輝きを持った白色の賢石だった。

俺はそれを一つ、手に取る。

手の平に納まつたそれは、指に包まれてもなお、光が染み出している。

『その石って、ジードにあつた、思い出の意味を持つた記憶石に似てるわね？』

「ああ、いひちではどんな意味を持っているんだらうな……といふえず、同じ意味である気がする」

そう咳きながら、同じ賢石を六個手に取り、合計七個をカゴに入れる。

『あれ？ 七個つて事は……私の分も入っているの！？』

当たり前だ。

お前も……仲間の一人だからな。

『んもう、カツコつけちゃってへかつわいいんだからあ～』

うるせえな、顔を指で突くな。

感覚はなくとも何か嫌だ。

……とりあえず、そろそろ店主のところに戻るぞ。

そう心の中で咳き、カゴを持って来た道を引き返す事にした。行き止まりはまだ見えていなかつた。

奥から戻つて来たユウを待つていた店主は、彼が持つているカゴを見て微笑した。
それと同時に、カウンター下から電卓を取り出して会計準備をする。

「コレだけ頼む…………こぐらになりそつだ？」

「ほうほつ、私田にとつては嬉しい量ですね……それでは会計を始めます」

そう言ことつ、指はすでに電卓を叩き始めていた。

「…………ほつ、これはこれは。お田が高いですな、賢石”イシユタル”を”ご購入とは…………」

店主は嬉しそうな笑みを浮かべながら、コウを見る。
それを見たコウは苦笑。

「あ、ああ…………意味があれだからな、えと…………」

「意味は愛。そしてその名は愛の女神から取つたらしいです。所持者に限りない愛を”えると言われています」

「…………少し違つたな…………いや、別物じやないだろ、少し似てる」

「…………？」

店主は、コウの返しが誰かと会話をしているよつて聞こえ、不思議そうな顔で首を傾げるが、すぐに笑みに変えてヒヒヒヒと笑つた。

「数からして、お仲間さん達へのプレゼントですね?」

「え? ああ、旅の安全を祈つてな」

「そうですか…………では、少々お安づかせて頂きます。ヒヒヒヒ」

再度不気味な笑い声を出した店主は、コウは苦笑しながらも、ありがとう、っと告げる。

そして、会計が長引くと思い、近くにいるシヴァの元へと向かつた。

すると彼女は、ユウが来るのを待っていたかのように問いかながら振り向く。

「なあ、ユウ。カイが持っている力の事、どう思つ?……正直に答えてくれ

カイの力とは、異形をした左手で触れたものの時間を変える事ができる、時を超える力であり、この旅が始まりたきっかけだ。その問いにユウは、少し考えてから口を開く。

「…………時を司る、神の力…………ともいえるな。正直に、と言われても返答に困る。だが、あれほどの力だ。この旅の支障をきたす事態は必ず起るな。あいつを殺そうとする者、あいつの力を奪おうとする者、全てだ。…………まあ、時を司るほどの力だ。その内、時空をも司る事ができるかもしれない。その為にも、あいつを守つてやる。自分の世界に帰る為、それにあいつ自身少々気に入っているしな」

最後の言葉は微笑で、シヴァの顔を見て言った。

それに対してシヴァは、ありがとう、っと言つて目を伏せる。

そんな彼女に、今度はユウが質問した。

「お前はどう思つて居るんだ?」

問い合わせに、シヴァは苦笑。

「あいつは私の教え子だ。信じてやれなくてどうする?…………あいつとシルクには親がないのだ。だから昔は私が世話をしていたから、自分の子供のよつて思える

「そつ…………なのかな。…………そうだな。なら、戦える俺達が少しでも

守つてやらないとな」

「はははは、カイは別にいいぞ？　あいつは私が鍛えたのだから、
そう簡単には死ない。それよりも守るべきやつらは、シルクとミ
ーナだ」

その言葉にユウは、それもそつだなと言い、同時に一人は微笑し
た。

つとその時、店主は会計を終えて電卓をユウに向けて置く。

「…………ではこちら、先ほどの『依頼された商品を含めまして、合
計八十万六千ラノンとなりましたので、買い取り金、百万ラノンか
らこれを引きまして……私がお出しする金額は十九万四千ラノン
となりますが、よろしかったですか？」

「ああ、それで充分だ。…………それと、ガバメントのホルスターは
完成したか？」

「ええ、もちろんですとも。設計図と、ほとんど瓜二つですよ。ヒ
ヒヒッ」

店主は不気味な笑い声を出しながら、奥の部屋から箱を持つて來
た。

彼はそれをカウンターの上に置き、箱を開ける。

すると中には、縦に長い形で、大きい穴とやや小さい穴の一いつが
あり、大きな穴には拳銃”ガバメント”が、やや小さな穴にはチャ
ージャーが入る仕様となっていた。

そして大きな穴の方には、ガバメントが落ちないようにストップ
ーがついている。

ユウはそれを手に取つて裏を見ると、そこにはベルトに通すため
の隙間が出来ていた。

彼はそれを見て頷き、さっそくベルトに装着し始める。

「 素材は、これまたエターナルを使用している為、軽くて頑丈
といつ、最高の作品となつております。必ずや、良き装備品の一
となるでしょ?」

「ウは店主の説明を聞きながら、装着したホルスターを後ろに回
し、ストッパーを外してガバメントを入れる。
その後、小さい方の穴にチャージャーを装着してマガジンをセッ
トする。

彼はそれが気に入ったのか、小わけ頷いて店主の方を向く。

「ありがとう、いい出来だ」

「気に入つて頂いて何よりですよ。ヒヒヒッ」

その後店主は表情を変えて、それとですねと言つて話を続ける。

「あの弧を描いた武器”三日月”を選んだのは何故ですか?」

「三日月、といふのか。……ああいつ形の武器を昔、よく使つて
いたからだ。俺にとって、使い慣れた武器なんだよ」

「そつだつたのですか……では最後に 貴方のお名前を教えて
頂けませんか?」

その言葉にユウは少し考へた後、答える。

「…………ユウ・ウラハスだ」

「ありがとうございます。では……私はブルザット・ローエンで
す。それでは、まだどこかで出合える事のを楽しみにしております
よ」

そう言いながらブルザットは、ユウが購入した商品の入ったケースをカウンターの上に置く。

それはユウは手に取り、会えたならなと言い残してシヴァと共に階段を降りて行った。

そして、残ったブルザットは口元に笑みを作った。

「会えますよ……この私と、そして二日月と出会ってしまった以上ね。ヒヒヒッ」

他に誰一人といない薄暗い中、不気味な笑い声が響き渡る。

第一十話：一対一のトランプ対決

「さて、コウがミーナちゃんを私達に預けていつたんだけど……何をしようか？」

窓際で外を見ているミーナを見ながら、シルクは困ったような表情を作っていた。

その時、カイは何か思いついたのか右手を平たくしてポンッと叩く。

「そうだ、ネプチューの荷物に面白そうな物がある気が……」

カイはそう言いながら、ネプチューの荷物を探り始めた。するとややあって、彼は何かを見つけたのか表情が変わった。

「……おお！　いい物見つけたぜ！　トランプだ、トランプ！　コレで遊ぼうぜ」

そう言つてカイが取り出した物は、翼を抱き寄せるように縮めた天使が描かれた箱だ。

彼は早速、箱を開けて中の物を取り出す。

中から出てきた物は、色々な幻獣や神々と、隅に数字と模様が描かれたカードで、一番下にあつたジョーカーには白と黒の背景が中心を境に対照的になつていて、その間に人間が描かれている物だった。

まるで人の心を写しているようだ。

「…………なんかタロットカードみたいだね」

「言われて見れば…………まあ、数字があるからトランプだろ、たぶ

「ん

カイは苦笑しながら、カードをシャツフルし始める。そして彼は、その手を休めずにシルクに問う。

「…………で、何をするんだ？」

問い合わせに、シルクは顎に手を当てて考える。

その後、そうだ！、と言つて窓際に立つミーナを指でさした。

「ミーナちゃん！ ズバリ、トランプで何かしたい事ある？

その問い合わせにミーナは、首を傾げつつも答える。

「ん~…………ババ抜き！」

「よし、決まりだな って、ああ……」

「ちょ、ちょっと、何思いつきりトランプをばら撒いているんだよ

お！」

「ごめん、手が滑つて……と、とりあえず、自分の近くに落ちたカードを手当たり次第拾つて。そのまま始めよつ

「む、無理矢理だね……まあ、別にいいけど。いい具合に数字が被つているからね~、ふふふ……」

シルクは余裕そうに笑いながら同じ数字のカードを捨てているのに対し、彼女の隣りにいるミーナは、手持ちのカードと睨めっこしながら慎重にカードを捨てていた。

「…………よし、終わった。お前らは終わったか？」

「うん、私達も終わったよ って、何でカイのカードはそんなにも多いんだよお！？」

「は、ははは……扇子みたいだろ…………？」

思わず苦笑いしているカイのカードは十枚ほどで、カイが言った通り、扇状になるほどだった。

「ま、まあ、じゃんけんでもして順番を決めよつよ。それじゃいくよ、最初は」

「ぐー…………つて、お前らなんでパー出してんだよー。」

「やつたね、シルク！」

「あはは、その通りだね！」

シルクとミーナは、そう言いながら右手を上げてハイタッチし、室内に快音を響かせる。

「あ、あれ？ これって卑怯なんじゃ
「それじゃあ順番は、私がミーナのを、ミーナがカイのを、そして
カイが私のを取るつていうのでいいね？」

そう言ってシルクは、ミーナの手元で小さな扇状に展開されたカードから一枚引く。

「やつた、揃つたあ」

シルクはその揃つたカードを捨てた。

それに続いてミーナも、カイのカードを一枚引いた。

「あ、私も揃つた」

シルクに続き、ミーナまでもがカードを捨てる。
そして、次はカイがシルクのカードを引く番だ。

すると彼女の扇状のカードから、一枚のカードが頭を出した。もちろん、カイの方からは裏面しか見えない為、それが何かわからない。

だが彼は、反射的にそのカードを引く。

その瞬間、シルクは口元に笑みを作った。

それもそのはず、彼が引いたカードはジョーカーだつたからだ。彼はそのジョーカーを見て苦笑し、すぐに後ろを向いてシャッフルし始める。

ミーナはその行動に、引いたカードが何なのかを悟ったのかシルクに近寄り、小声で話し始めた。

「…………カイって単純だね」

「その通りだよ、昔からああなんだ。扱いやすくて仕方がないくらい」

言いながらシルクは、クスクスクと笑う。

そしてその後、何かを思いついたかのよう、「ア」と言つてミーナの耳に手を添えて小声で何かを提案し始めた。

「…………つていうのでいい?」

その問いにミーナが小さく頷くと、シルクは再度口元に笑みを作る。

と、丁度その時、カイはシャッフルを終えたのか、彼女達の方に向き直した。

「よし、これで　つて、何お前ら一ヤ一ヤしてんんだ?」

「別に何でもないよお？　ねえ～？」

「うん、何でもないよ」

「な、何かお前ら怖いぞ…………まあいいか。そえじゃ、再開だ！」

カイは苦笑しながらも、再開の合図を出し、シルクはミーナのカードを引いた。

するとその時、ミーナはふと入口の方を向いた。

彼女は小さな物音を聞いたのだ。

だが、そこには何もなく、聞こえたのは彼女だけだった。

その事に首を傾げつつも、彼女はカイのカードに手を伸ばす。

数分後、列車の汽笛と共にカイ達のいる密室内で歓喜の声が響いた。

「あつがりいー、いつちばーん！」

言いながらシルクは、最後のカードを捨てた。

残つたのは、一枚のカードを持ったミーナと、一枚のカードを持つたカイだけだ。

そして、次はミーナがカイのカードを引く番だ。

つまりは、彼女がジョーカー以外を引く事によって、カイの負けは決定する。

そのため彼は、念入りに一枚をシャッフルしていた。

その後、微笑を浮かべながらミーナにカードを向ける。

すると彼女は、迷わず力から向かって右側のカードを掴んだ。

その瞬間、カイの表情は見る見る内に変わり、焦りの表情になつた。

「ほ、本当にそれでい　　」

「うん、これでいいよ」

「…………ミ、ミーナ、見逃してくれない？」

「え？…………別にいいよ？」

「ほ、本当か！？　ありがとう… キミは俺のてん

「えいつ！　あがりー」

「ノオオオオオオオツッ！！」

「…………作戦通りい　　」

シルクの作戦（？）にまんまとはめられてしまつた事に気付かず、カイは頭を抱えながら部屋の中を転げまわつた。

そんな彼を、シルクは哀れみの目で見ながらほくそ笑んでいた。そして、そのカイを実際に騙したミーナは、腹を抱えて笑つていた。

その後シルクは、立ち上がりてカイに向かつて人差し指を向ける。

「さて、敗者であるカイは、私とミーナちゃんに何か買つて来てねー

ー

「ええ！？　聞いてねえぞそんな　　」

「あ、私はアイスクリームね」

「おい、ちょ　　」

「私もアイスクリーム！　トリプルで、イチゴとチョコレートとメロン！」

カイに喋る隙をとれる間もなくシルクとミーナが注文をした為、彼は睡然としつつ、ため息をついて立ち上がつた。
その表情には、諦めが見える。

「…………わかったよ、行つてくる…………」

「さつすがカイ！ それじゃ、行つてらつしゃーい！」

それを聞いたカイは、再度ため息をつきながら部屋の入口へと向かう。

入口のドアはスライド式で、向かつて右側のスイッチを押す事によつて開く仕組みになつてゐる。

ちなみにに入る場合は、通路側から向かつて左側についている装置に乗車券を添える事によつて開く。

これは、もちろん他の者の侵入するのを防ぐための物である。その為、部屋ごとに乗車券が異なつてゐるのだ。

だが、そのシステムを知らず、部屋に入れないと嘆く人が多いらしい。

カイもその一人だつた。そのカイは通路に出た後、左右を交互に見て首を傾げる。

「…………どつちに行けばいいんだ？」

頭上にクエスチョンマークが付くくらいに考えていると不意に、左に人が立つてゐる事に気付く。

その人は黒いローブを着込んでおり、顔を見るからには男のようだ。

そして、不機嫌そうに紅い目でカイを睨んでゐるようだつた。それもそのはず、カイは通路のど真ん中に立つていたからだ。彼はその事に気付かず、男に問い合わせる。

「あ、あのー、ショップはどうやらに行けばあるかわかりますか？」

問いに、男はしばらく無言のままでいたが、右手を垂直に上げて、カイから見て左の通路を人差し指でさした。

「…………あつちだ

その声には少し怒りが込められていたが、同時に仕方なさも感じ取れた。

「あ、ありがとうございます」

カイはその声に怒りを感じたのか、少し困惑したながら禮を言つて、早足で男がさした方向へと向かつた。

その時、男は去つていいくカイを見ながら舌打ちをし、カイが向かつた場所方とは逆の方向に歩き始めた。

第一十一話・新たな大陸を目前に

太陽は沈み、世界は暗闇に包まれながらも、月の放つわずかな光が世界を薄く照らしている。

その月を鏡のように映し出した海上を走る光の列、アクアトレインは一度目の汽笛を鳴らした。

この汽笛は、ミーン大陸とカナン大陸の間を三分の一まで走ったという合図だ。

その音を聞きながら、自分達の客室がある第六車両への歩みを続けていたユウとシヴァアは現在、第四車両の中間あたりにいた。

「……なあ、ユウ」

途中、シヴァアがユウを呼んだ。
すると彼は、ペースを弱めて彼女の横に並ぶ。

「すまない、一つ聞きたいのだが……あの拳銃とかいう武器、あれはお前の世界の武器か？」

「…………ああ、そうだ」

「そう、か……」思つたのだが、あの武器は便利と言つていい物なのだろうつか

シヴァアは腕を組み、話を続ける。

「戦いに関しては強いだろう。あれを使えば、簡単に相手を殺す事が出来る。……だが、私は正直、あんな武器は許せないのだ。私達戦士は、訓練と経験で強くなれる。だが、銃は何だ？あんな物、引き金さえ引く事が出来れば、誰だって撃てるではないか……！」

「わかっている。だから俺は、いくら殺しの仕事であっても銃だけ

は使わなかつた

「コウは、だが……と呴きながら腰のホルスターに手を添える。

「正直、コレを使わなければ、この旅を生きて終わらす事が出来ない気がするんだ。……次の大陸から、何かとんでもない事が起きた気がするからな……」

それを聞いたシヴァはため息を一つし、組んでいた腕を崩して方を竦めた。

「何暗い話をしているんだろうな、私は。ここで話を変えようか。//ーナ異常なまでの可愛さについてなんだが」

「変わりすぎだつ。それに、もう少しで会えるんだから我慢しろよ

そう言つてコウは、いつの間にか第六車両の入口に到着していた事に驚きながらもスライド式のドアを手動で開けて、客室へと向かつた。

「ん~ツ冷たくて美味しい~、やっぱ夏はこれだね~」

シルクは、カイが買つてきてくれたアイ스크リームを舐めながら歓声を上げていた。

そんな彼女を見て、カイは苦笑する。

「いくら夏だとしても、車内はエンリルの賢石が設置されているおかげで寒いくらいなんだぜ？なのに、よくそんな冷たい物を食えるな」

それを聞いたシルクは、アイスクリームを持つていない左手の人差し指を立てて左右に振った。

「チツチツチツ、甘いよカイ君。夏だからという実感を心の中で持ちながら

冷たくてあまいアイスクリームを食べる。これほどまでに嬉しい事はないんだよ？この世の女の子は、みんなそう思つていいって。ねー、ミーナちゃん？」

問われたミーナは、アイスクリームを食べるのに必死なのか、声に出さずに、ただ頷いていた。

「そんなもんか？ それはシルク達だけだと思うんだけど……イタタタタタッ！…………何で！？」

「そーんなデリカシーのない人には、私の指で十六連打だあ！ まいったか、このやろびつ！」

そう言つてシルクは、勝ち誇つたような笑みを浮かべながら、再度アイスクリームを食べ始める。

そんな二人を見て、カイは額をさすりながら苦笑していた。するとその時、入口のドアが、何の前触れもなく開いた。

「なんだ？ また食ってるのか、ミーナ」

「ははは、よいではないか。可愛ければ全て良し、だ」

そんな会話をしながら入つて来たのは、ユウとシヴァだった。

「あ、シヴァちゃん、とユウユウだ！ おかえりー」

「ユ、ユウユウって……」

「ユウユウ～」

「ミーナまで……」

その光景に皆が笑う中、ユウは苦笑し、同時にため息をついた。
そんな中、シヴァは一つの疑問を持った。

「…………せういえば、ネプチューンはどこに行つたのだ？」

その問いに、皆もネプチューンがいない事に気付く。

「どこに行つたんだ？ あいつ」

「こいつ時は、名前を呼んでみればいいんだよ」

言つてシルクは、両手を筒状にして口元に添えた。

「ネプチューンっー！」

「呼んだっちゃ？」

「ひやああああつー！」

シルクが名前を呼んだ瞬間、突然入口近くの天井が開いてネプチューンが顔を出した。

それに驚いた彼女は、反射的にカイにしがみつく。

「呼んだ本人が一番驚くなよ……」

「だ、だつて、突然天井が開いたんだもんっ！」

「……少なくとも、驚いているのはお前だけじゃないぞ」

コウの言葉に、皆が彼の方を向くと、涙目を浮かべながら、彼の脚にしがみついているミーナの姿があった。

「あ、あれ？ わたちのせい？」

ネプチューンの問いに、誰も答える事なく、シヴァはミーナの近くに歩み寄つてしまがみ込み、両手を広げた。

「さあミーナ、私の胸に飛び込んで來い！ そんな硬い脚に掴まつているよつ、私のこの恵まれた胸に！」

シヴァの行動に、ミーナは少し戸惑いながらも、結局飛び込んだ。

シヴァは、飛び込んで来たミーナを両手で抱き寄せ、頭を撫でる。

「か、可愛い……」

「……アホだな……」「……アホだつちや……」

同じコメントをしたコウとネプチューンは、互いに顔を見合せ、同時にため息をした。

それを見たシルクとカイは、思わず口元を引きつらせて苦笑。

とその時、カイは何かを思い出したかのようにネプチューンを呼んだ。

「…………なあ、そういえばお前、何で天井に入つてたんだ？」

「おおー、よくぞ聞いてくれたぜよー。急に眠くなつてきた時に、丁度全ての客室に二階が付いている事を思い出したんつちよ。だから、ここで寝ていたわけぜよ」

その言葉に、カイとシルクは疑問を持った。

「…………あれ？ いつの間に入つて来たの？」

「それは、おたくらがトランプで遊んでいた時ぜよ。すごい集中力だつたつちゃ」

そう、笑いながら言うネプチューンとは違い、その言葉を聞いていたシヴァは、怒りのこもった表情でカイを睨んだ。

「…………カイ、お前は私の基礎訓練を受けて合格したのにも拘らず、こんな男の気配を察知する事も出来なかつたのか？」

「……」「こんなつて…………」「…………」

シヴァはネプチューンの呟きを無視し、話を続ける。

「どうやら、再教育が必要のようだな…………カナン大陸に着いたら、完璧になるまで特訓だ！」

「そ、そんなあ～」

カイはそう嘆きながら、崩れるように倒れた。

そんな彼を見て、その場にいた全員が大笑いした。
その時、アクアトレイン内に汽笛の音が響き渡る。
これは、カナン大陸に到着する合図だ。

その合図を聞いた皆は、降りる準備を始めた。

「…………そういうえば、カナン大陸ってどんなところなんだ？」

カイの問いに、ネプチューンが進んで答える。

「カナン大陸は技術と商業に発展した町や都市が多いっちゃ。特に、このアクアトレインが向かっているカナン大陸の首都であるノアは、世界の賢石生産率を半分以上占めていて、産業が非常に盛んなんだめ、わっちら商人にとつて始まりの町なんだぜよ」

「へえ……面白そうな町だな！」

そう言つてカイは、荷物を持ち始める。

「呑気なやつだな、カイは」

「それがカイの良い所じゃんっ！ 私達も呑氣に行こうよつ」

そうシルクに言われながらも、ユウはため息一つして仕方ないような表情で立ち上がる。

そして一行は、アクアトレインがノアに到着するのを待つのであつた。

第一十一話・不吉の存在

カイ達一行がアクアトレインを降りて駅から出た時には、すでに辺りは暗くなつており、月が真上に、そして時刻は深夜の一時を回つていた。

だが、駅の近くのやや大きな建物は、未だに煌々と明かりを灯していた。

そして一行は、その建物に向かつて歩き出す。

その建物とは、アクアトレイン利用者が無料で宿泊する事ができる　とは言つても、乗車券の料金に含まれているのだが　観光客向けのホテルだ。

看板には”リラックスリゾート”と書かれており、入口近くにはヤシの木が一本だけ立てられていた。

シルクはその建物を見て、両手を挙げて感激していた。

その彼女の片手には、白色の賢石が握られている。

これは、アクアトレインの武器商店に行つた際、コウが全員に旅の安全を願つて購入した、愛の意味を持つ賢石”イシュタル”だ。コウはこれを、アクアトレインを降りた時に全員に配つていたのだ。

ちなみに、同時に購入した金色の髪留めは、渡す相手であるミーナの髪についており、光を僅かに反射させている。

その賢石”イシュタル”を、ネブチューンは上に投げて遊びながら笑みを浮かべていた。

「それにしても、わっちらは運がよかつたぜよ」

「うん、確かに！　これはカイの手柄だもんね！…………って、どうしたの？カイ」

シルクが問いかけた先にいるカイは、暗闇の空を見上げたまま動

かなかつた。

彼の視線の先には、誰もが見える半透明の巨大な羅針盤が見えて
いる。

その後やあつてから、彼はゆっくりと口を開いた。

「…………近い…………光が、近いよ…………！」

その言葉に、シヴァーとシルク、ユウは驚いた。

「光つて、もしかして羅針盤の光か！？」

ユウの問いに、カイは頷き、

「ネプチューーン、この町の近くに昔からある遺跡か何かない？」

「遺跡？ 確かにあつたぜ…………でもその前に、あの羅針盤とカイと
の関係と、その光とやらを教えてほしいっちょ」

その頼みをシヴァーが、わかつたと答える。

「どうせなら、この旅の理由も教える。そのため、そろそろ宿に
入ろう」

呼びかけに、その場にいた全員が同意し、一行は宿に入る事にし
た。

一行が入った宿”リラックスリゾート”は名前通りではなく、内部は至ってシンプルであり、廊下の電灯は時々消えており、客室内も一段ベッドが四個ほどしきつめられていて、小さい窓が入口と対象的な位置に一つだけあるという、まるで寮のような場所だった。唯一便利なのは、風を起こして室内の温度を調節できる賢石”エンリル”が設置されており、全ての室内が、夏の暑さに負けないほどの涼しさを保っている事だ。

だが、三〇五号室のエンリルにはヒビが入っていて、風の調節が弱いらしく。

その客室を引き当ててしまつた運の悪い者が、カイ達だった。

「うわあ～部屋が生温い～～一段ベッドのせいで跳ねられない～」

シルクは窓側にある一段ベッドの下段で、文句を言いながら転げまわっていた。

そんなシルクに、カイは苦笑しながら近づく。

「おいおい、少しばらしくしてよ…………って、ああほら、スカートがはだけるって」

「だつて暑いんだもおんつ！」

「え？ それじゃあエンリル使えばいいじゃないか」

そう言つてカイは、自分のポケットから何かを取り出す。

「ほり、今後の事を考えてアクアトレインから一個取つてきたんだ
「わあ！ わつすがカイ！ 賴りになるー！」

言つてシルクは喜びながら、再度転げまわった。

そんな二人の会話を聞いていたコウは、心の中で、盗つて来たの

間違いだろ…………つと咳きながら、入口側にあるベッドの下段でミーナに膝枕をしてあげているシヴァアの隣に座った。

そして、小声で、

「…………あいつらって、バカップルなのか？」

「な、何だ、バカップルとは…………！？…………馬鹿なカッフルという意味か？」

聞き慣れない言葉を聞いたシヴァアは少し戸惑いながらも、見事に正解を当てた。

「昔からあんな感じだ。確かに周りからは馬鹿なカッフルだと認識されているが、当の本人達は、幼馴染みだからと言い切っているんだ。…………全く、お互い自分の気持ちに素直になればいいものを…………」

それを聞いたユウは、それは教師としてのセリフでいいのか？という言葉を喉の奥で止めて代わりに、そうだなど答えた。

「…………あのあ～、羅針盤の話はまだかのあ？」

不意に、シヴァアの前に立つて問うてきたのはネプチューンだった。彼は頭を搔きながら、申し訳なさそうな表情で再度問う。

「そろそろ話してくれてもいいっちょ？」

「うむ、そうだな。それでは話すとしよう」

そしてシヴァアは、未だに騒いでいるカイとシルクを尻目に、ユウと共に今までの事を話し始めた。

アルグでの事、カイの左腕の事、ユウが別世界の人間である事、ミーナと出会った時の事、全てを……

同時刻。

力ナン大陸首都、ノアの郊外にある森。

暗闇に飲み込まれた森には、今や夜の住民達が活動している。コウモリ、狼、そしてモンスター。この暗闇こそ、彼らが自由に行動できるのだ。

そして彼らが睨んでいる先には、暗闇の中で唯一光る明かりがあった。

光は大きく、まるでその場所だけ昼のように感じられてしまつほどだ。

その光の中心には一人分の人影がある。

その人影は、漆黒のローブを羽織つており、鋭い目つきと真っ黒な短髪からして、どうやら男のようだ。

身長は一八〇センチを軽く超えており、背中にはその身長と同じ位の大剣が背負っていた。

彼は光を放つている賢石を片手に持ちながら、森の中を進んでいく。

その途中、突然彼の横に、輝く光が現れた。

その光は一瞬で収縮し、小さな人の形へと変わっていく。

そして光がなくなつた時、現れたのは、背中に四枚の半透明な羽が生えた、臍だしルックが似合つフェアリーの少女だった。

彼女は二コ二コしながら銀色の長髪を靡かせて、その場で一回転

する。

それと同時に、フリルが多数ついた服から光の粒子が散らばった。その粒子を見た男は、彼女をその紅色の皿で睨みつける。

「…………ライト、その粉はもつやめると言つただろ」

「ええ～いいじゃない、妖精ライト・ウイツチちゃんの、こんな登場の仕方は魅力的でしょ？」

ライト・ウイツチは、男の鋭い目を瞬にせずにはじつと舞いながら彼の周りを飛び回る。

「そんなに堅苦しい態度なんかひとつてるとその内運が無くなつて死んじやうよ～、レイヴン」

レイヴン。不吉の鳥であるオオガラスの名を持つ男は、フンッと鼻で笑つた。

「運など、俺には生まれた時から無刃藏のよひにある。だから、死ぬわけがないだろ」

その言葉にライトは、臭いセリフだねと言おうとしたが、レイヴンの顔が言い切つたといつ表情になつていた為、彼女は何も言わなによつにした。

「…………何か来てるぞ…………」

突然の言葉にライトは、え?、と詰つて驚くが、言葉の意味に気が付き、辺りを見渡す。

だが、どこを見ても何も見えない。

「何がいるの？」

そう問いかかるライトを尻目に、レイヴンは一点を睨みつけた。そして、口元に笑みが生まれる。

「…………ヘアだ」

言つた瞬間、レイヴンが睨みつけていた場所から、一人分の人影と賢石の光が反射して輝く刃が飛び出してきた。

だが、レイヴンはその動きを読んでいたのか、背負っていた大剣の柄を握り、前へと振り下ろして刃を防ぐ。

するとその人影は後ろに飛ばされた……が、宙返りで体勢を立て直し、上手く着地した。

それと同時に彼は、その人影の近くに手元の賢石を投げる。

投げられた賢石は、光を失わずに人影を照らし出す。

照らし出されたのは、白い半袖のコートを羽織つており、同じく白い短パンを穿いている女性だった。

だが普通の人間とは違い、頭に一本の長いウサギの耳が生えていた。

そして、両手の甲には四本ずつ、計八本の長い鉤爪かぎづめのような刃が装着されている。

その刃を彼女は一度見、その刃をレイヴンに向けて身構えて問う。

「…………どうしてわかつたの？」

「なんだ、ヘアじゃなくてラビットか。通りで人間の匂いが混じつてたんだな」

「レイヴン、人の問い合わせちゃんと答えてあげなよ……」

ライトは呆れ顔でため息を一つ。

「わ、私が飼われているつて！？ 馬鹿にしているの！」

「貴様こそ獣人ごときが人間に逆らおうっていうのか？ お前ら獣人は報復戦争の時、人間に扱き使われていたそうだしな」

その言葉を聞いた獣人族の女性は、苦虫を噛み潰したような表情になる。

「それは過去の話よ……！ 今の私達は、自分達で集落を作り、自分達だけの力で生きている、誇り高き獣人族。だからこそ、人間と協力するつもりはないのよ」

「過去…………か。ぐだらんぬ、いくらお前らが過去の話だと書いても、歴史には、記録には、そして記憶には、お前達の辱めは残るんだよ。しかもその上、ラビットじやなくヘアだつてか？」

レイヴンは手に持つていた大剣を地面に突き刺し、

「それじゃあ、何で俺を狙つた？」

「…………時機に、こここの遺跡を目指して遣つて来る者がいるの。その者の力は世界を、運命を変えられるほどの物だという言い伝えがある。だから私はその力を奪つて、獣人族の歴史と運命を変えてんな関係が？」

「くだらねえし、長いんだよ。もつと短めに言え。獣人族のためにその力を持つ者が必要だと何かってな…………それで、俺にど

レイヴンの言葉に怒りを覚えつつも、獣人族の女性は彼に人差し指を向ける。

「貴方には、不吉の色が見える。だからこそ、貴方をこの先に行かせるわけにはいかないのよ！」

その言葉を聞いたレイヴンは突然、声を高々と上げて笑い出した。

「ははははっ、不吉の色か、光榮だな！　　俺の名は不吉の意味を持つ、レイヴン。丁度いい、再調整したての大剣”クレイモア”の相手をしてもらひつぞ！」

言つてレイヴンは、地面に突き刺していたクレイモアを抜き、獸人族の女性に向ける。

すると彼女は左足を前に、右足を後ろに下げ、両手の甲に装着されている鉤爪を胸の辺りに持つていき、再度身構える。

「戦士の心得はあるようね。　　私の名はクレア・マルギス。獸人族の未来のために、貴方には死んでもらつわ…」

「何だよ心得つて…………まあいいが。とりあえず、お前は半殺しされた後

カジノで一生バーナーとして働かせてやる。それがお前の未来つてやつだ」

「レイヴンつて、戦いになると急にお喋りさんになるね」

苦笑するライトを無視し、レイヴンは走り出す。

それと同時にクレアも走り出し、その後、金属音が暗闇の森中に響き渡つた。

第一二三話・力を狙う者達

月が傾き始め、月明かりが斜めに射し込み始めた深夜三時頃。

ホテル”リラックス・リゾート”の裏手にある空き地には、芝生の上に置かれた一つの小さな光を灯した賢石と、その光が微妙に反射して二人分の人影があった。

一人はその場で正座をしており、もう一人は素早い動きで足音を立てず、長髪を靡かせながら走り回っていた。

つとその時、突然長髪の人影が正座をしている人影に向かつて突進し出した。

すると、正座をしていた人影はすんでのことろで素早く立ち上がり、バックステップでかわし、同時に金属音が響く。

片方は長い槍のような物を、もう片方は長剣のような物をそれぞれ持つており、それが何度もぶつかり合つて、金属音が鳴り続ける。

「ふむ、これくらいだらうな」

長髪の人影はそう言いながらバックステップで離れ、光のある方へと向かう。

そして、光の源である賢石に手を触れる。

すると光はみるみるうちに広がり、二人分の人影を照らし出した。その後、賢石を再び地面に置いた女性、シヴァアは、長剣を鞘に納めた後、ピンク色の長髪を束ねてポケットから取り出したゴムでポニーテールを作った。

そんな彼女を見たもう一人の人影、長い槍のような武器、諸刃の剣を三本分に分けた後、銀髪をかきながら不思議そうな表情をしている少年、カイは首を傾げて問う。

「…………あれ？ シヴァってポニー テールだったっけ？」

そう言いながら脚をさすっているカイに、シヴァは微笑しながら答える。

「ああ、シルクに勧められてな。『ういうのも悪くないな、と思つたのだが……変か？』

「…………ちょっと違和感があるけど……似合つてるぜ！』

そう言つてカイは、笑顔と共に親指をグッと立てる。
それを見たシヴァは、再度微笑した。

「そつか、ならこれからはこれにしてみ ッ！？」

瞬間、シヴァは何かの気配を感じ取ったのか表情が警戒に変わり、
背後へと振り向く。

カイもその異変に気付き、彼女が見ている方向に身構える。
彼女はカイの行動に頷きながらも、足元にある賢石に手を触れ、
光をより強くした。

すると、シヴァとカイの視線の先には、フリルが付いた白と黒だけの侍女服を着た侍女すくが立っていた。

彼女はスカートの裾を両手でそつと持ち上げ、軽く会釈して口を開く。

「…………こんばんは、神の力を持つ者」

その一言に、二人は目を見開く。

「貴様、カイの力を知つていいのか！？」

「用があるのは神の力を持つ者だけです。貴女には黙つて頂きたい」

侍女の言葉にシヴァーは舌打ちをした。

一方カイは、身構えるのをやめて冷静な表情になり侍女に問いかける。

「…………それで、俺に何の用なんだよ？」

「今日は」挨拶に来ました。この先、旅を続けるのならば、我がマスターが貴方を殺すと言つておられましたので」

「え！？…………でも、俺は旅を止めない。これは契約…………じゃなくて、約束だからだ」

短いが、決意が感じられるその言葉。それを聞いた侍女は、目を伏せて小さく頷く。

「…………了解しました。マスターにはそつと伝えておきます。…………それでは、またいつかお会いしましょう」

侍女はそう言つと、再度両手でスカートの裾をそつと持ち上げ軽く会釈。

それと同時に、彼女の周りに黄色の光が現れて渦を巻き、そして突然、フラッシュが起きた。

その光に、カイとシヴァーは反射的に目を閉じる。

その後、目を開けた時にはもう侍女の姿は無くなっていた。

「な、なんだつたのだ？…………今は…………」

「お、俺、狙われているのかあ…………」

賢石が放つ強い光に照らされたままの一人は、今起きた事を整理

するために
ただ、立ち廻くしているだけだった。

暗闇に満ちた森の中で、突如火花が散る。

それは、金属音と共に現れて何度も続いた。

その火花を起こしているのは、大剣”クレイモア”を振るうレイヴンと、両手の甲に装着された長い鉤爪のような刃を振るうクレアだ。

クレアは、押してくるレイヴンのクレイモアを弾きながら、後方へと下がつて避け続けていた。

そんな彼女を見たレイヴンは、口元に笑みを作る。

「どうした！ お前の覚悟つてやつはそんなもんか？ もしそうなら、よく獣人族のためだとほざけるなあ！」

言つてクレイモアを横に振る。

それをクレアは左足を前へ、右足を後ろに出し、身体を素早く落としてしゃがみ込む。

瞬間、彼女の頭上に生えているウサギの耳をクレイモアが掠つた。

「うるさい！ 私は、獣人族のためなら命だって懸けられる！」

クレアは、クレイモアを振り切つて隙が出来たレイヴンに向かって鉤爪を構えて飛び込む。

だが彼は、クレイモアを振った時の遠心力を利用して一回転し、右脚を浮かせてクレアの脇腹に回し蹴りを一撃入れる。

「命を懸けられるだあ！？ 勝手に一人で死んでろ！ 巻き込まれる俺は迷惑だ！」

空中にいる間に蹴りを入れられたクレアは、レイヴンが蹴った方向に、大きく飛ばされた。

そして木に激突し、同時にバキッという妙な音が彼女の耳元に届いた。

彼女は一瞬、骨が折れたのかと思ったが、それに匹敵する痛みがなかつたため、木の枝が折れたのだと判断し、レイヴンのいる方向を睨みつける。

その後、飛び上がって木の上に乗り、木から木へと飛び移つて、一気にレイヴンに向かつて飛び出す。

クレアの眼中にあるレイヴンは、彼女に背を向けていた。

彼女はそれを好機とし、両手の甲の鉤爪を構える。

対するレイヴンは、クレアの気配を察知し、振り向く前に地面を蹴つて前方へと飛ぶ。

「しつこい！ そんなにも力つてやつが欲しいのか！？」

クレアは不意を打つたつもりが、避けられた事に驚きながらも、着地と同時に両足をバネのようにして、レイヴンを追撃する。

「たつた一度、たつた一度会つて力を奪つた事さえできれば、私達の運命を思うがままに出来るから！－！」

その言葉を聞いた瞬間、レイヴンの表情が変わった。

怒りから笑みへと。

瞬間、レイヴンは身体を翻し、クレイモアを胸の辺りで構える。すると、飛び込んできたクレアの鉤爪と交わった。

それと同時にレイヴンは、クレイモアを力一杯振つて彼女の鉤爪を弾き、再度彼女を吹き飛ばす。

その時の表情は、満面の笑み。

「気が変わった、その力とやらを持ったやつを一目見たくなつた！」

レイヴンの笑みは、口元を頬の辺りまで吊り上げるほどだつた。そして彼の目は、不気味に紅く光つていた……

レイヴンとクレアが火花を散らしながら戦つている中、少し離れた場所、光を灯した賢石の近くでライト・ウイッチは羽を羽ばたかせながら膝を上げ、顎を手のひらに乗せて暇そうにしていた。

「まったくレイヴンったら、もつちよつとレディーに優しくしなきやいけないのにさつきから暴言ばっかり…………それにしてもすごいなあ、暗闇の中でお互いの居場所がわかるなんて」

そういうながらライトは、火花が散つてゐる場所をジッと見てい
た。

「……レイヴン、目が紅く光ってるよ……」「ハ」「ハ」「ハ」と
言つてライトは、一シシッと笑つていたが、突然笑いのを止めて、
耳を澄まし始めた。

「…………レイヴンが呼んでる…………」

ライトはそう呟くと、突然彼女の身体が光り出し、一瞬の閃光と
共に姿を消した。

その後、その場に残つたのは煌々と光り続ける賢石だけだった。

レイヴンはクレイモアを振りながら、笑顔で攻め続けていた。

対するクレアは防御が精一杯で、とても反撃できる状況ではなか
つた。

その時、彼女の中に生まれた感情は、焦り。

だがその焦りは、集中力を鈍らせる事となつてしまつた。

レイヴンは振り下ろしたクレイモアを軸にし、飛び蹴りを繰り出
す。

それに対してもクレアは判断を鈍らせ、バランスの悪い体勢のまま、
その蹴りを防ぐ事に全力を注いでしまつた。

結果、勢いが強い蹴りを防ぎきれず、鉤爪が弾かれる。

そのせいで両腕は右に、そして胴体を大きく晒す事となつた。

レイヴンは、それを狙つていたのか、飛び蹴りの勢いを利用して、

クレイモアを振り下ろす。

常人では出来ないような動きに、彼女は対応しきれず、彼女の右腕にクレイモアが振り下ろされた。

「あああっ！　くつ！」

痛みで上がった悲鳴を途中で無理矢理堪え、体勢を整えて上手く両足を地面につける。

それと同時に右腕を見て、まだ繋がっている事を確認。だが、まだいける！　というクレアの考えとは裏腹に、右腕の傷口からは、予想以上の血が噴き出した。

「　ッ！？　肉を半分も持つていかれたの！？」

そういういつつも、身体を前へと出そうとする……が、気付くと右脚の太股をも斬られており、バランスを大きく崩した。

レイヴンはその隙を逃さずに飛び掛り、右手で彼女の頭を掴んで地面に身体ごと叩きつける。

そして右手を離し、瞬時にクレイモアを振り上げる。

「チェックメイトだ」

レイヴンのその表情には、まるで殺しを楽しむような笑みが、それを見たクレアの表情は、死を目前とした恐怖があった。

そして、クレイモアは振り下ろされる…………

第一十四話・見えていた彼女

殺られるつ！

クレアはそう思つて目を閉じたが、しばらく経つても痛みなど感じなかつた。

彼女は疑問に思い、目を開ける。

すると、クレイモアの刃が目の前で止まつていた。

“死んでいない”

その事に彼女は安堵するが、すぐにその感情に対し後悔する。

同時、鋭い目でレイヴンを睨みつける。

そして、奥歯をかみ締めながら、怒りのこもつた声をぶつけた。

「…………どうして…………どうして殺さなかつた！　私は覚悟が出来ていたのに！　なのに何故つ！！！」

それを聞いたレイヴンは、フンッと鼻で笑い、微笑した。

「覚悟だと？　目を開けた時、ホツとしていた奴がよく言つ」
「　ツ――！」

その言葉に、クレアは頬を赤らめながら、苦虫を噛み潰したような表情をした。

それを見ていた、いつの間にかレイヴンの顔の横を飛んでいたライトは、クスクスッと笑つた。

「　さて、突然だがお前に利用価値が出来た。もちろん拒否権はない。…………ライト、始めてくれ」

レイヴンがそう言つと、ライトは渋々とクレアの目前まで飛んで

いつた。

そして、クレアの目をジックと見る。

「……少しの間、私の玩具になつてもらうつよ……」

言つた瞬間、ライトの背に生えている四枚の羽が光を放つた。それを見ていたクレアは、目が少しづつ虚ろになつていき、最後には氣絶したかのように、その場で倒れ込んだ。

「…………これでよかつたんだよね？」

「当たり前だ。どうせ、もう終わつていた命を俺が貰つたんだ。つまり、こいつをどうしようが俺の勝手という事だ」

「それでこの子を使って、力とかいうのを持つている人の実力を見るつて事なんだね。…………襲わないの？　　イタツ！」

笑いながら問いかけたライトの額に、レイヴンは呆れた表情でデーピングをかました。

「阿呆、こんな餓鬼相手にそんな馬鹿げた事なんかやるかつての」「やうかな？　ホラ、育つとこ育つて　イヤアアツ！！　もう、もつ言わないから、私の羽からその手を放して～！」

レイヴンの指から離れようと、大声を上げながらもがくライトを見て彼は吐息を一つして、手を放した。

すると彼女は、レイヴンから少し離れたところまで行き、身体を翻して頬を膨らませながらレイヴンにビシッと人差し指を向ける。

「もうつ！　妖精の羽は纖細で敏感なんだよ～！　気安く触らないでよね！」

「わかった、わかった。纖細なんだな。敏感なんだな。　そんな

事より、早く戻るぞ。お前の視界をリンクするには、時間と魔力が必要なんだから」

「むむっ！ 軽く流されている気が……まあいいけど。ところで何が魔力だつてえ？ レイヴンは魔力なんて、常人並みしか持つて無いじゃん？」

ライトは、先ほどまでの表情とは打って変わって笑顔で、うつしつしつと笑い出した。

そんな彼女に向かつてレイヴンは、舌打ちをしてから、ノアに繋がる道を歩き出した。

だが、ライトは懲りずに彼の周りを笑いながら飛び回る。その後、この森の中に再度ライトの大聲が響き渡った。

真っ暗な暗闇。何も無い世界。

俺はその世界で、まるで水の中にいるかのように浮いていた。やる事がない。

唯一あるのは、考える事、昔を思い出す事。俺の、仕事の理由。

人という存在は、大半が卑怯なやつらで占められている。

そして、後に残っているのは、そんな卑怯なやつらに支配・奴隸・玩具という名の鎖に縛られているやつら。

だが一握りのやつらは、何にも縛られる事がなく平和に暮らしているのだ。

この三つが、人という存在だ。

少なくとも俺のいた世界、ジードではそうだった。

だから俺は、この基礎を壊すために殺し屋になった。

そしてその職業に就いたのと同時に、卑怯なやつらの本心を知った。

自分より下の者達の命は、まるで蟻を殺すかのように、簡単に切り捨てていたのにも関わらず、俺が武器を向けた瞬間、必死に命乞いをしてくる。

”助けてくれ”

”死にたくない”

”やめる、俺は悪くない”

”俺なんか殺しても何の意味もないぞ”

”金ならいくらでもやる、だから家族だけは”

その言葉の数々、俺にとつては全てが耳障りだった。

…全てが？

時々ある、迷い。

それを振りほどくかのように、俺は殺してきた。

卑怯なやつらを。世界の、人という存在を表す基礎を無くす為に。

……でもそれは、コウジツーシカスイナイ。

ダッテキミハ、ソノヒキヨウナヤツラノカゾクヤ、カンケイシャ

ヲモコロシタジャナイカ。

ツミナキモノヲコロシテ、セカイノヒーローキドリカイ？

デモ、ソレハチガウヨネ？ コロシタイダケダヨネ？

サア、アノトキノヨウニボクヲツカツテコロシシテミセテ。
キミノタイセツナヒトタチヲ、ソノテテ……

俺は目が覚めたのと同時に、勢いよく飛び起きた。

「 がつ！！」

「 うひゃあ！」

だがその瞬間、額を何かに思いつきり強打してしまった。

額をさすりながら状況確認をすると、俺が額をぶつけたのは、俺の寝ていた一段ベッドの下段の上、シルクが寝ているはずの上段のようだ。

「イツツツ……朝、なのか……？」

そう言いながら俺は、まだ痛む額をさすつてると、突然、視野に影が映つた。

俺は驚きつつ、その影を見る。

「 ……何だ、シルクか……」

上の段から逆さになつて顔を出しているシルクは、その状態のまま、頬を膨らます。

「 何だ、シルクか……じゃないよ！ 私が起きていたからよかつたものの、もし寝ていたら安眠妨害だよ！？」

「えと……すまん、怒らせるみたいな事じつまで

やう言つて俺は軽く頭を下げる。シルクは急に表情を変えて、へりへりと笑つた。

「別に怒つたわけじゃないよー? でも、謝罪の気持ちがあるのはいい事だよ。

つて事で、今から朝食斂つてつ

シルクはそう言いながら、上の段から降りてきた。
彼女は寝起きで薄いTシャツ一枚と短パン姿の為、田のやり場に困つてしまつた。

その為、少し視線を逸らしながらもベッドから降りる。

「それじゃ、行くぞ
「オッケー!」

まだ他の姫が寝ている中、俺とシルクはそっと部屋を後にした。

壁が微妙に剥がれ始めている廊下を歩いていく途中、壁にかかつていた時計に目をやると、時刻は午前七時を指していた。

……早いな、本当。

そう思つてゐる最中に、気付くと俺の横を、シルクが軽快なステップで走り抜け、俺の前で止まつた。

その表情は、口元をニヤニヤときさせて笑つていた。

何なんだ? 一体。

とつあえず、一いや一やはしてこむ理由を聞いたとした時、向こうが先に口を開いた。

「…………ねえ ユウ、わしが私の胸元をエッチな目で見てたでしょ？」

「…………はあ！？」

『何ですって！？』

何言い出すんだ、コイツは！？

…………つといひどりより、何でお前が叫んでいるんだ？ ティファ。

『叫ばずにはいられないわよ！ 貴方と私は一心同体、つまりは貴方が変態扱いされるという事は、私も変態扱いされているというのと同じなのよ！ そんな状況を、私が見逃すわけないじやないつ』

へ、変態つて……

まあ、訳のわからん説明をありがとう。

「だつて、コウつたら私の胸元チラチラ見ていたんだもん。その後は、ずっと視線を逸らしているし」

『そんなんわけ無いでしょ！？ 確かに貴女の胸は少しほは育つていてるかもしけないけど、ユウが見とれるほどの存在ではないわよつ』

…………俺は何て言えばいいんだ……って、ん？

「フフフッ、わからないよ？ もしかしたらユウは思春期かもしれないし」

『それはないわね、何だつてユウはもう十九だか……あれ？』

何かおかしいぞ？

俺は、さつきから一度も喋っていなければ……！？

「ん？ どうしたの？ 鳩が豆鉄砲食らつたような顔して
…………もしかして貴女、私の声が聞こえるの…………？」

ティファが恐る恐る問うと、シルクは田を『』のようににして笑いながら答えた。

「あははっ、今やいかに何言つてゐるの？ 今の今まで、いやんと会話してたじやん」

『え.....?』

「あははつ、声が揃つたつ」

シルクはそう言いながら笑い続いているが、俺は驚いて啞然としていた……

だろう。

そんな状態の俺達に、いや、正確に言えばティファにシルクは微笑しながら問い合わせてきた。

「ねえ、両手の紋章からして、もしかして魔術師だつたりする？」

言いながらシルクは、確かに、俺の視界で残像のようにかすかであるが見えるティファの手がある場所を指でさしていった。

その問いにティファは、戸惑いながらも答える。

『え、ええ、せうよ
「よかつたあ…………あの、私を弟子にして下せー。」

第一十五話・大魔術師の魔術授業

田の前に立つていてるシルクを見ながら、俺の脳内では彼女が放った言葉が理解できず、今起きてる状況も処理できずにいた。

そんな俺の代わりに、ティファアが問う。

『……えと、私の弟子になりたいってのは、本気で言っているの?』

その問いに対しシルクは、満面の笑みで頷く。
それと同時に、ティファアは大きくため息をついた。

『はあ〜、一体どうなつているのよ……貴女、いつから私が見えて声が聞こえるようになつていたの?』

「え〜つと…………カイが闘技場に出場した日の夕方、宿屋でだつたかな。ベッドの上で大の字になつてうとうとしていたら、聞いた事のない声が聞こえたの。それで、薄目を開けてその声の方を見たら、ユウのすぐ横に、金髪の美人が浮いていたのが見えたんだよ」

……正直驚いた。

まさかこいつにティファアが見えていたなんて……

そういうえば、その頃はまだティファアが目覚めて間もなかつたはずだ。

俺は、ティファアの姿が見えなかつた。

最近になつて、残像としてやつと存在が確認できて　　っ!?

ティファアのいる場所を見て驚いた。

声に出さないのがやつとだが、驚いているのは表情に出た。

そのためか、シルクは俺の顔を上目遣いで不思議そうに見ていた。

俺が驚いた理由。それは、ティファアの姿がハツキリと見えていたのだ。

金髪の髪は腰の辺りまで伸びており、その髪が似合つぽどのスレンダーな体系。

そして、その体系に合わされたような肩の出た真っ黒な服装。組んだ両腕には、先ほどシルクが言つていた紋章が描き込まれており、されど左腕の紋章は、右腕よりもく、細かく描き込まれている。

俺がその紋章を見ているとティファは視線に気付いたのか、俺の方を向いた。

『どうしたの？ ュウ。もしかして、私が見える？』

問い合わせる。

俺はお前が見える……

そう、ティファにしか聞こえない言葉で言つ。

言いながら俺は、ティファの顔を見た。

その目は、右が飲み込まれるような黒色で左が透き通った白色だった。いわゆる、オッドアイだ。

「……何で、急に見えるよくなつたんだ……？」

とりあえず、今声に出せる言葉はこれくらいだ……

そう言つとティファは、顎に手を当てて考え事をし始めた。

『わからないわねえ…………まあ、この事はまた今度考えましょ。それよりも』

すぐに何かを思いついたのか、顎から手を離して俺の方を向く。

『ねえ、ユウ。ちょっと知りたい事があるから、彼女に触れてもら

えるかしら?』

言われて俺は、仕方なくシルクの腕を掴んだ。するとティファは突然、驚いたような表情をする。

『うそおつ! すごい量の魔力を蓄えているじゃない! こちらから私の弟子にスカウトしたいぐらいだわ!!』

何か言い出したよ、コイツ……嫌な予感がする。

「やつたー! それじゃ、早速何か教えてよ、しじょー!」

俺の心配を他所に、大喜びするシルク。

『し、師匠……いい響き……「つゝとりするわ……』

両手を合わせて目を輝かせるティファ。こんなアホが俺の中に……

『ん? どうしたのよ? 浮かない顔して』

『何でもない、気にするな』

『そう? まあいいわ それじゃ早速、外に出て魔術を一つ教えるわね。』

今回は、旅に必要不可欠な治療術よ

『治療術って、掠り傷とか火傷とかを治す”ヒール”?』

それを聞いたティファは、微笑を浮かべながら人差し指を左右に振る。

『チツチツチツ、掠り傷なんて生温いわよ。私が伝授するのは、深い切り傷はもちろん、骨折や切断などの重傷をも治す事が出来る魔術”トル”よ』

「……え？ す、すごいじゃん！ それ！」

禁術じゃないのか？ それ、という言葉を喉の手前で止め、代わりの言葉を出す。

「……で、今回も入れ替わるのか？」

『当たり前じゃない。そうじやないと、シルクに魔術を教えられないでしょ？』

「……入れ替わる……？」

『まあ、その疑問は後にして、早く外に出ましょ』

その言葉を合図に、俺達は出口のあるロビーへと向かった。

無用心に鍵が開いていた扉を開けて外に出ると、夏の朝にしては珍しく、肌寒い空気が身体を伝つて走り抜けていった。

「……何か出そうな空気だねえ～」

『確かに出そうね……でも、その時は私が成仏させてあげるから大丈夫よ』

『何が大丈夫よ、だ！ 姿を変える、姿を！』

そう言いながら自分の身体……というよりティファの身体を指でさす。

精神はちゃんと入れ替わっているんだが、その他は俺、コウのままでいう中途半端な状態になっていた。

「ええ～、面倒なのよお～」

『だからって、俺の姿でクネクネするな！ 早く変えろ……』

「あはははっ！ ュウが一人いて、片方がクネクネしてるとおー！ あはははははははっ……！」

シルクは俺……もとい、ティファを指でさしながら、腹を抱えて大笑いしていた。

こんな屈辱、初めてだ……

『とりあえず、変えろ！ 今すぐ！』

「わかったわかった、わかったわよ。そう焦らないで

充分焦るぞ……

そう思つた瞬間、少しの間身体が光に包まれ、光が消えると俺の身体はティファの姿になった。

ティファは、金色の長髪を手で搔き揚げ、フフンッと笑つた。

不気味だぞ……

一方、ティファの姿が変わる瞬間をみていたシルクは、驚くのと同時に歎声を上げた。

「すつぐーーーい！ 姿が変わったーーー！ 私より大きい……」

シルクは自分の胸に手を当てながら、ティファの胸を細目でジッヒと見始める。

いつまでも……ジッヒ……

…………長いつ！

『いいから早く始めりつー 時間が無くなるぞ』

「それもそうね。それじゃシルク、始めましょうか…………つて、いつまで見てるのよ」

ティファの声が聞こえて、シルクは我に返ったのか、ほえ？、といいながら顔を上げた。

そして、すぐに頬を赤らめる。

「え！？ いや、あの、別にヤマシイ事を考えていたわけじゃないよ？ ただ、私よりも大きくていいなあって思つて つて、何言つてんだろ、私！！」

……まだ旅を始めたばかりだが、コイツがここまで取り乱したところは初めて見た……

などと思いながら、溜息をついておく。

すると、一度ティファも溜息をついていた。

「よくないわよ、こんな物。邪魔だし、肩凝るしつと、こんな話をしている場合じゃないわね。それじゃ、まずはトゥルから教えるわね」

「はい、しょーー よろしくお願ひしますー！」

その返事に关心したのか、ティファは数回頷いて微笑した。

「いい返事ねえー、…………それじゃまず、魔術と契約よ。それと同時に、ちょっと高度なショートカットも教えるわね」

「け、契約？ ショートカット？？」

どうやらシルクには聞きなれない単語だったようで、彼女は首を傾げていた。

『…………って、俺も聞いた事ないぞ?』

「貴方に魔術はむ・え・ん・よ。 契約っていうのは、簡単に言えば詠唱と魔力の流れを覚える事。それと魔力干渉具、通称”魔具”を捉える事ね。そしてショートカットは、一度詠唱すればしばらくの間、詠唱無しで魔術を発動出来るのよ」

そう言った瞬間、ティファの表情が曇り始めた。

「…………もしかして貴方達、詠唱と魔力に干渉するって意味もわかつてないの……?」

「し、知らない……」 『知らんな』

俺とシルクの返答を聞いた途端ティファは、やつぱりねという表情で大きくため息をついた。

「はあ～…………っていう事は、私が教えなくちゃいけないわけね…………」

言つてティファは、吐息を一つしてから、仕方なさそうな表情をシルクに向ける。

「…………まあ、簡単に言つとね、詠唱っていうのは体内の属性魔力と大気中の自然魔力を混ぜ合わせて、特定の術を生み出すための合言葉ね。そして、その魔力同士の混ぜ合わせを補助するのが魔力干渉具。通称”魔具”ね。一般的には杖や指輪、ペンダントを使っている人が多いわね。…………確か、マフラーを使っている人もいたわ。まあ、とりあえずここまでわかった?』

テンポの速い説明に少々混乱気味だが、頷いておく。

俺と同じ間隔で頷いていたシルクはこの意味がわかつているんだろうか？

とりあえず、ティファアの説明の続きを聞く事にした。

「……そして、ショートカットは一度詠唱した時に残留した魔力を、一時的に魔具が記憶するの。これによつて、軽い合図や意志で同じ魔術を使えるようになるのよ。ちなみに、属性魔力っていうのは、人それぞれの生命を支えている魔力の種類を指しているの。ユウは雷、私はほぼ全て、シルクは闇ね。……これで全部よ、理解できた？」

ティファアは口元に少し笑みを作り、首を傾げて問い合わせてきた。

『……なあ、お前の、ジードの魔術はこいつでも適応してるので？』

「あ、この世界の魔力でもジードの魔術は使えるのかって事ね？」

シルクに分かりやすいように言い直したのか。

「それが面白い事に、魔力が全く同じなのよねえ。だから、あつちの魔術も使い放題よ」

ティファアはそう言いながら、誇らしげな表情をし、空中に円を描くようにして人差し指を揺らした。

そして、その指をビシッとシルクに向ける。

「それじゃ、シルク。さつそく事を始めるわよ？　まず最初は、貴女の魔具を決めないとね。……何がいい？」

問いかに、シルクは少し考えた後、あつ！、と声を上げた。

その後に自分の左腕に付いている腕輪をティファに向ける。

その腕輪は赤色に輝いており、表面には波状の線が一本、交互に彫られており、開いた隙間には見た事のない文字が彫られていた。

何だ？「コレは？」

それを見たティファは、俺と同じ事を思っていたのか、首を傾げて問う。

「……………何？「コレ」

「この腕輪は昔、カイが私の誕生日プレゼントとしてくれたの。これなら、大事に付けているから魔具としては最適かと思つて」「いいわねえ」、ロマンチックだわ

「氣色悪い事を言つなって……」

「それじゃ、その腕輪を外して両手でしっかりと握り締めてね」

シルクはティファの指示通りに腕輪を両手で握る。するとティファは、右手の人差し指と中指を使って指を鳴らし、腕輪を握っているシルクの手の周りに円を描くように人差し指を動かし、彼女の手に自分の手を重ねた。

「生命と理を司りし魔の根源、我が触れし魔の器に汝の源を分け与え、創造せし力を与えたまえ。さすれば汝に眠りし魔の源を、無限の創造へと変える事を約束せん。故に、その効力を解き放て……」

” ”

ティファが詠唱を終えた瞬間、シルクの腕輪が紫色に輝き出し、俺はその眩しさに一瞬、目を閉じた。

そして目を開けた時、いつの間にか腕輪は彼女の左腕に戻っていました。

た。

「いつ、付け直したんだ?
……ん?」

「さて、これで魔具は準備完了ね。次は本題である魔術を
言いたいところだけど、それはまた次回ね。どうやら、お客様さんが
来たみたいだし」

「え？ どう つ！？」

声を出そうとしたシルクの口を、ティファは人差し指で止め、辺りを見渡す。

そこには、黒いローブを羽織った者、まるでアサシンのような者達が五人ほど、どこからともなく降りてきた。

それを見た俺は、微笑を浮かべる。

『……………いけそうか？』

『当たり前じゃない。私を誰だと思つてこりのよ

ティファはそう言いながら笑みを作り、右手の指を鳴らした。
それと同時に、アサシン達は勢いをつけて走り出す。

第一十六話・魔女の気まぐれ

それは一瞬の出来事だった。

ティファに襲い掛かつたアサシン達は、空を切る音とともに吹き飛ばされていた。

そしてティファは、その金色に輝く髪を靡かせて微笑する。

「あら？ これで終わり？ …… つて言つ訳じやなさそづね」

ティファが微笑を真顔に変えた瞬間、彼女の背後に新たな動きが出来る。

先ほど吹き飛ばされた者の内、一人が双剣を構えてティファを狙っていたのだ。

だが彼女は避ける事はせず、代わりに右の指を鳴らす。パチンッと響いた音と共に、彼女は素早く何かを呟いた。

「氷河の刃よ、混沌の中に眠る憤怒を鋭き槍に変え、全てを貫け
”いくわよ？” サウザンドランス”

それは、詠唱だ。

その詠唱を終えた刹那、ティファの頭上より少し上の空間に青色に輝く輪が現れ、中心から氷で出来た無数の槍が双剣を構えていた者を襲つた。

降り注いだ槍は、アサシンが羽織っているローブを貫き、されど殺す気はないのか、腕と脚だけを狙つていた。

だが、いくら死なない場所を狙つても痛みはある。

そのため痛みに耐えられず、その者は悲鳴を上げた。

それを見たティファは、口元を吊り上げて笑つ。

「あら？ ！ それくらいで悲鳴を上げるなんて、情けないわね。フフ
フツ」

悪魔のように笑うティファを見た他の者達は、思わず一歩下がった。

彼らが今感じた事は、恐怖だ。

それを知ったティファは、彼らを見渡して再度笑う。

「あなた達、コレくらいで恐怖するなんて、見掛け倒しもいじごろね？」

簡単、かつシンプルな挑発だ。

だがアサシン達は、その挑発に怒りを感じ、恐怖を吹き飛ばして一斉に襲いかかる。

「た～んじゅ～んつ！」

ティファが言つた通り、彼らは単純な挑発にかかり正面から走つて来た。

その光景を見て、彼女はバックステップで間合いを保ち、指を鳴らして詠唱し始める。

「”この大地に眠る死者の魂達、汝らの無念の怒り、今日覚めて、眠りを妨げる者に溜りし怒りをぶちまけよ” ”ケルトウ”」

詠唱を終えるとティファは立ち止まり、地面を指でさす。そして、指を上げて彼らをさし、再び指を鳴らした。すると突然、地面から黒い塊が飛び出し、彼女を守るよつこにして浮かび出した。

一人のアサシンは突然すぎる出来事になすすべもなく、塊に飲み

込まれる。

それを見た他の者達は、急いで止まり、吹き飛ばしたはずの恐怖を再度蘇らせる事となつた。

黒い塊、というよりかは、苦しい表情をした無数の顔が寄せ集まつているものだつた。

その塊は、ティファアの指に令わせて動き、現在は一点で蠢いている。

「な……なんだよ、コレ……」

黒い塊を見た者達は皆、そのおぞましい塊から少しでも離れようと、一步ずつ後退し始める。

同じくシルクも、思わず一步後ずさつた。

一方ティファアは不適な笑みを浮かべて指を動かし、一人のアサシンをさす。

瞬間、一点で蠢いていた黒い塊は、獲物を見つけた獸のように、そのアサシンを狙つて飛び出す。

対する狙われたアサシンは、その動きに気付き避けようとするが、時すでに遅く、飲み込まれる事となつた。

残つたのは一人。

だが、その一人はとつぐに戦意を喪失したのか、その場に座り込んでいた。

「フフフッ、まだ終わってないわよ……？」

再度、不適な笑み。

そして、その場にいる全員の背筋が凍るような表情。

両目の色が違うオッドアイによつて、その目を見た者の恐怖を上り一層、増幅させた。

「や……や……やめ……て……」

残つてこるアサシンの一人が、か弱く震えた声で訴える。
どうやら、女性のようだ。

対するティファは、その言葉を聞いた瞬間、笑みを強めた。
口元を頬のあたりまで吊り上げて。

「だあめつ！」

「ちよつと待つんやああーー！」

ティファが、アサシンの女性に指をさそつとしたその時、大声と共に縁に染まつた着物姿の男が、アサシン達を守るようにして現れた。

「……？ 何よ、貴方」

突然現れた男に驚き、ティファは指を止めて問いかける。
その瞬間、シルクがティファを思い切り殴った。

頬に強い衝撃。

それと同時に、頬がとてつもなく痛い。
だが、今は痛がつてゐる場合じやない。

「 つたあい！ 何で殴れなんて言ったのよー！」

『お前を止めるには、殴つてもらうしかねえと思つたからだー。』

「ワイの名はナギ・コーウェンや。よくもワイの部下に酷い事してくれたんなあー！」

口論になつた俺とティファアを見て、シルクは思わず苦笑。

「だからって、レーティーの顔を殴らせるなんて、貴方どうかしてゐよー！」

『どうかしてるのはお前だ！ まだ実戦も知らないシルクの前で、オーバーキル過剰殺人しやがつて！』

「ワイらの目的は神の力なんや！ アンタらはその邪魔をしにきたんかいな！？」

何か、外野がうるせえ……

「これから仕事を考へると、実戦と鮮血を見て慣れておいた方がいいでしょに！ 何でそれがわからないのー？」

『お前、鮮血とか言つてるが、ほとんどのヤツを、あのわけのわからん塊に食わせるつもりだつただろー。』

「つて、アンタらー！ ワイを無視するなやー！」

「うるさいー タマネギーー！」 『うるせーー タマネギーー。』

俺とティファア、揃つて一喝。

もちろん、タマネギには、俺の声が聞こえていない為、ティファアの一喝で唖然としている。

それもそのはず、一生懸命喋つているのに無視されて、尚且つ訳のわからんあだ名をつけられたんだからな……

そして唯一、俺の声も聞こえているシルクは、腹を抱えて笑っていた。

「あはははっ！ 似た者同士だつ！ あははははっー！」

その言葉に俺は、何故か返す言葉が見つからなかつた。

その時、話を変えようとしたのか、ティファアは俺達だけに聞こえるように呟いた。

「……そう言えば、タマネギは何をしに来たのかしら？」

俺はその言葉に、ナギだつと言つておき、少し離れた場所で^{うすくま}1蹲つて生き残つた二人の部下に慰められているナギを見る。すると突然、ティファアが肩を落として溜息をついた。

「……わかつたわ。シルク、ごめんなさいね、いきなり酷い物を見せて。

次はもうと優しくオーバーキルするわ」

『いや、優しく過剰殺人つてどんなんだよつ』

当たりはしないが、ティファアに向かつてビシッと右手で突つ込む。そんな俺達を、シルクはニコニコしながら見ていた。

「一人つて、夫婦漫才してるみたいだねつ
「ど「ど」がよつ！」 『ど「ど」がだよつ！』

一人揃つて突つ込み。

どうやら、シルクの言つている夫婦漫才は、近いうちに結成するかもしだれない……
夫婦ではないが。

『……あ、そういうえばナギはどうした?』

「え? あつ! いなくなっているーーー。」

シルクが言つた通り、ナギ達がいるはずの場所には何も残つていなかつた。

結局、アイツらの目的はわからず仕舞い。

唯一わかつたのは、ティファアが殺し好きという事だ……

『……そうだ、ティファア。あの塊に飲まれたヤツらはどうなるんだ?』

「え? ケルトゥを通じて私の餌になるのよ? 私だって、魔力が無限にあるわけじゃないからね」

やつぱりそうなるのか……

「まあ、どうしてもと云つのなら、ギリギリまで魔力を残して、どこかに捨てておくわ」

それはそれで酷いだろ。

「それじゃ、用が済んだんだし、シルクと朝食でも行つてきなさい。貴方のおじいで」

ティファアはさつさと入れ替わつて眠りたいと言いたげな表情をしていた為、俺はため息をついた後、わかつたよ、と言いながら入れ替わる準備に入つた。

そんな時、不意にシルクが微笑を浮かべながら問いかけてきた。

「……ねえ、師匠? 次はいつになるの?」

「え？…………そうね…………明日の朝ってのはどう？」「

『おいおい、その流れだと、明日もシルクに朝食をおいひでやらなきゃいけないのか？』

「うん、いいよ！ それじゃ早速、朝ご飯、朝ご飯～」

聞いやいやいねえよ、コイツら……

そして俺は再度、不快ため息をついてからティファと入れ替わった。

『それじゃあ、お休み～』

暢気なヤツだな、コイツは。

「さあ、早く行こ～！ ノウ」

対してシルクは、朝食がタダで吃えるからか、やけに嬉しそうな表情で、俺の手を引っ張る。

「…………男って、女に振り回される人生なのか…………」

「ん？ 何か言つた？」

俺の独り言が聞こえたのか、シルクは首を傾げて聞いて来た為、何でもないと言つておき、彼女に引かれたまま食堂へと向かった。

第一十七話・夏の朝

太陽が傾き程度で昇り、窓から斜めに光が差し込んでいる。

その光は、ベッドから落ちて窓際まで転がっていたカイの顔を照らし続けていた。

しばらくして、彼は眩しさと夏の暑さでゆっくりと目を開ける。

「…………んあ？…………あさ……な…………」

彼はまだ完全に目が覚めていないからか、寝ぼけたような声を出しながら起き上がり、視線を時計に向けた。
時刻は午前七時二十分。

「…………ああ…………はやおき…………」

そう呟き、大きく背伸びする。

そして、寝癖でボサボサになつた銀髪を手で直しながら服を脱ぎ、旅の為に新しく購入した服を出し、着始めた。

その服とは、ネリンで密かに手に入れていた、革で出来たオレンジ色の表面に、黄緑と白のラインがそれぞれ入つている半袖とセットで購入した灰色のジーパンだ。

そしてこのジーパンには、後ろの腰に位置する部分に、カイの武器である諸刃の剣を携帯用のために三分割してもその全てを差し込む事が出来る隙間が、仕様としてつけられていた。

ちなみに店主の話によると、コレは双剣士向けに作られた物だそ

うだ。

彼は早速その隙間に、分解した諸刃の剣を差し込んで満面の笑みを作った。

つと、その時、部屋を見渡したカイは、何か足りない事に気付く。

「…………あれ？ シルクとユウ、それにネプチューングがいない…………」

そう呟いたカイの視線が向く方向にある一段ベッドの内、三つはシーツが少々乱れている為、人が寝ていた形跡はあるがもぬけの殻だった。

一つは、彼の寝ていたベッドの上段。

そして残り二つは、彼の反対側にあるベッドの上下両段だ。

それを見たカイは、しばらくボーッとしていたが、突然目を見開いた。

「早っ！ あいつら起きるの早っ……」

「つるさこぞ……！」

刹那、カイの頭に枕が直撃した。

投げた主は、カイのベッドと同じ列、入口側の上段で寝ていたシヴァだつた。

彼女はまだ眠そうな目を擦りながら、不機嫌な表情をカイに向ける。

「貴様、今は何時だと思っている？ 七時半だ。私は起きていてもかまわん時間だが、私の姫はまだ寝ている時間なのだ。…………言いたい事はわかるな？ わかつたなら、さっさと寝るか出て行け！」

「…………す、すみません……」

寝起きだからなのか、またはカイが五月蠅かつたからなのかはわからないが、とにかく不機嫌なシヴァに、カイは一言謝つてから早足で部屋を出た。

廊下に出ると、意外と室内よりも涼しく、彼はそれを心地よく感じながら、目的もないまま歩き出した。

そして、ロビーに差し掛かった時、カイはフロントの近く、待合用のイスに座っている、明らかに服装のおかしい人物を見つけた。その人物は、黒いボロ切れのローブを着ており、湯気が立つてゐるコーヒーカップを口につけて何度も傾げながら、どことなく上の空になっていた。

カイは、その姿を遠目ながらも一目見て直感する。
あれはネプチューンだ、と。

彼はそう思いながら、その人物に近付くと、案の定それはネプチューンだった。

するとネプチューンは、カイが見ているのに気付いたのか、カップを口から離して左手を軽く振った。

それを見たカイは、苦笑しながら手を振り返す。

そして彼は、ネプチューンの隣に空いている席に座った。

「おはようだつちや、カイ。よくこんな時間に起きられたもんぜよ。
昨日は寝るのが遅かつたんのに」
「いやあ、何か暑くて目が覚めちやつてね。ネプチューンこそ早い
じやん。どうしてだ？」

カイが問うと、ネプチューンは俯いて手に持つたカップに目を落とした。

「……ちょっと悪夢を見て、それで目が覚めたんぜよ。その悪夢があまりにもわっちゃんしなかったから、コーヒーでも飲もうと思つて、今ここにこるんっぢや」

「…………んにしても、昨日、いや今田つか。どうやらしろ、シヴァから聞いた話は今でも信じがたいぜよ…………」

ネプチューンが言つたのは昨夜、シヴァ達が彼に教えた力が持つ力の事だ。

触れた物質の時間を変える。確かにそんな人外な力を、簡単に信じられる者などそうそういないだろう。

ネプチューンも、その内の一人だ。

だが実は、彼は昨夜にその力を目の当たりにしていた。それでもやはり、彼は信じる事は出来ていなかつた。

「…………ま、そんな事でいつまでも考え込んでいても無駄っぢや。どうせ、信じようが信じまいが、またとんでもないもんを見せられる気がするんぜよ」

言つてネプチューンは、んぐくつと笑つた。

「んぐくつて……もうちょっとマシな笑い方はないのか？」

「三十路のおっさんであるわっちゃんには、この笑い方が定着してるんぜよ」

「定着つて……つて、ええ！？ ネプチューンつて三十路！？ ただのおっさんじゃんか！！」

ロビー 全体に響く大声。

その声に驚き、ロビーにいた他のお客様やフロントの受付係は、一斉にカイ達の方を向いた。

だが、すぐに興味を無くしたのか、個別の行動に戻る。そんな中、ネプチューは顔を引きつらせて苦笑しながら、ため息をついた。

「…………いぐらおっさんでも、そんなに大声で叫ぶ必要はないっちよ…………わつちはこれでも商人ぜよ？ 年と共に積み重ねてきたキヤリアと情報収集能力は常人以上だっちゃ！」

ネプチューは、そう言いながら誇らしげな表情をする。それを見たカイは微笑。

「す」「いおっさんだなあ…………」 あ、それじゃこの機会に、その情報収集能力を見込んで…… 神話のジードについて教えて欲しいんだけど」「

「神話のジード？」 ああ、それは古代神話”ニーグマ”の舞台である世界の名前ぜよ。けど、どうして急にそれを聞くんつちや？ 確か、あんさんらの故郷があるニーン大陸の学校では、その話を授業として教えるのを義務化されているはずぜよ」

問いかにカイは、苦笑しながら頭をかく。

「いや、その授業の時はよく寝ていて、全く覚えてないんだ…… だけど、ユウの元居た世界らしいから聞いてみようと思つて」「ユウの居た世界………… そういうえば、確かにそんな事言つてた気がするぜよ。………… そつかあ………… ニーグマの…………」

ニーグマ、とつづかが気になるのか、ネプチューは小声でその

名を呴いていた。

対してカイは、その咳きが聞こえてなかつたらしく、普通に話を進めようとした。

「それでさ、どんな話なんだ？ そのH—グマつて神話は？」

「うつはーーー！」

「いだあつつーーーー！」

瞬間、カイの言葉が途切れ、代わりに威勢のいい声が響いた。

「めつずらじいじゃん、カイ！ 早起きなんて！ 何々？ 天変地異でも起きちやうっ！」

その、元気が余りに余つたよつた声を出しているのはシルクだった。

彼女は、カイの背中に飛び掛った後、彼の背中に抱きついたまま、彼の頬に自分の頬をスリスリと擦りつけている。

そして、シルクが来た方向からは、銀色のホイルに包まれた大皿を平手で持ちながら歩いてくるコウの姿があった。

「ちょ、シルク！ やめ つて、あ、コウじゃん。もしかしてシリクと居たのか？」

「ああ、朝食をお」らされた」

微笑しながらも舌打ちしたコウに、カイは微笑を返す。
その後すぐに、カイはコウが持っている物に気付く。

「あれ？ その皿には何が入っているんだ？」
「ん？ これか？」

ユウは銀色のホイルを少しだめぐる。

すると同時に、ガーリックの香ばしい匂いが上がり、中身は平たく伸びたパンの上にチキンやトマトソース、そしてたっぷりのチーズなどいろいろこんなトッピングをして焼かれたピザだった。

「俺達はもう食べたからな。お前とネプチュー、そしてまだ部屋で寝ているかもしれない一人への朝食だ」

「ま……まじかよ……こんなうまいそうな物をもらつていいいのか……？」

カイの問いにユウは、もちろんだと答えてホイルを被せ直した。

「それじゃ、冷めない内に持つてこいよー。」

シルクの言葉を合図に、カイ達は真っ直ぐに客室へと向かった。

第一十八話・森の襲撃者

外は夏の日差しで暑くなっている中、とある客室では煌々と光を放ちながら冷気を出している賢^{セイ}“エンリル”によつて、快適な温度を保つていた。

その客室にある一段ベッドの上段でミント色のスーツ姿に着替え、ピンク色の長髪を「△ムでボニー^{△ム}テールにしたシヴァはまだ、白く可愛らしいパジャマ姿であるミーナの後ろに座り、彼女の水色の長髪^{△ム}を櫛で梳かしていた。

「……………昨夜は夜更かしし過ぎたなあ…………おかげでまだ眠い……………

それにしても可愛いなあ、ミーナは…………髪は綺麗で、パジャマ姿も、ああ、抱きしめたい」

「そういうシヴァも、ポニー^{△ム}テールにすると可愛いよー」

「そうか？ それは嬉しいな…………だが、やはつミーナが一番だ。私の娘にして、いや、姫として私が執事となろう。…………」

今現在、この部屋にはシヴァへの突っ込み役であるユウが居ないためシヴァはこつになく暴走していた。

「…………よし、整つたぞ。次は着替えだ。ほらミーナ、私がパジャマを脱がせてやるつ」

「いいよシヴァ、自分でやるー」

ミーナはそつ^{△ム}つて、一人でパジャマを脱ぎ始めた。

「ああ……姫は一人で着替えが出来るほどまでに成長したのか…………嬉しい限りだ」

シヴァアが嬉しそうな表情で頷いていたその時、突然入り口のドアが開いた。

「何だ、二人とも起きていたのか」

そう言いながら入つて来たのはユウ達だった。

「あ、ユウユウだつ！」

ミーナは大声でそう言った後、上半身が裸のまま、上段ベッドの上段から飛び出す構えをした。

ユウは、彼女の構えを見て驚きながらも、避けると彼女が落ちる為、持つていた大皿をカイに向ける。

「カイ！ これもつてろ！！ がつ！…」

間一髪でユウは、大皿をカイに渡す事が出来たがその瞬間、ミーナがユウに飛び掛り、彼は無様な体勢で倒れ込んだ。

「おつはよう！ ユウユウ～」
「おい、こら、その手を放せ！ そしてビケッ！ おい、ミーナ！
！ …… は？」

突然、大声で叫んでいたユウの動きが止まった。

それもそのはず、彼の視線の先には怒りの表情を露にしたシヴァアの姿があつたからだ。^{あらわ}

彼女は、背後にオーラが見えるかのような殺氣を放ち、ユウに長剣を突きつける。

「…………貴様、私の姫の裸体を無断で見た上にその身体に気安く触れるとは……いい度胸だ。あの世で後悔するんだな……」

「ま、待て！ ミーナの裸を見たのは、カイ達も同じだろ！」

「コイツらはギリギリで見えていない」

「だ、第一、ミーナは俺に一番懷いているだろ？ もし俺を殺したら、お前が姫とか呼んでるコイツを悲しませる事になるんだぞ？」

ユウが言つた最後の一言にシヴィアは、ほうと呴つて長剣を腰の鞘に収めた。

「それもそつだな。それに、ミーナは私とお前の大事な娘だからな。悲しませるわけにはいかん」

「……お前、よくもまあそんな真顔で、平然と第三者が聞いたら絶対勘違いする事を言えるんだよ……」

「娘に対する愛以外の全てが冗談だ」

本当にビビりまでが冗談なのかわからないシヴィアの返答に、ユウは苦笑するしかなかつた。

「…………ねえ、カイ。そのお皿には何が入つているの？」

上半身裸のまま、ユウの胸元に抱きついていたミーナは、カイの持つている大皿に興味を持ったのか、指をさして問いかける。

その問いにカイは微笑を作つて、大皿に被せられたホイルをめくる。

「これは、さつきユウが買つてくれたピザだぜ」

「…………ピザー？ やつたあ！？」

「…………？」

喜びの余り、笑顔で両手を大きく上げたミーナを見てカイは素早く後ろを向く。

それを見たユウは内心、カイ、ハプニングで女の胸を見てしまつというのがパターン化してるな……と、溜息混じりで呟いた。

そして彼は、ミーナの両脇に手を添えて持ち上げ、自分の上から退けた。

「とりあえず、お前は服を着る。シヴァ、手伝つてやつてくれ」

「ああ！ ユウユウまで私を着替えられない子供扱いするうう！」

言いながらミーナは頬を膨らませるが、ユウはそれを無視して、先ほどまで彼女が居た一段ベッドの上段に乗せる。

「もちろん、やらせてもらおう。それにしてもユウ。もしかしてお前は、朝っぱらから私達にピザという、カロリーの高い物を食べさせんつもりか？」

言いながらシヴァは、一段ベッドの上段に上り、ミーナの着替えを手伝い始める。

「いや、こここのピザはガーリックなどを使つてゐるもの、生地などの素材には食物なんとかを多く使つていて低カロリーだそうだ」「だから、この店で一番低カロリーでおいしいピザを買つてきただよ」

ユウの言葉に付け足して、シルクが微笑を浮かべながら言った。それを聞いたネプチューは、いつの間にか口に入れようとしていたピザを止めて、大皿に戻した。

「…………わ、わっち、野菜は苦手だっちゃ……」

そんなネプチューを見てカイは、はははっと笑いながら、手に持っていたピザを食べ終え、大皿をシヴァの居る場所まで運ぶ。すると彼女は、運ばれてきたピザを一切れ手に取り、ありがとうと言つて、一口食べた。

その瞬間、彼女は眉をピクリと動かした。

「……これは美味しいな」

そう言つとシヴァは、手に持つていた一切れをあつといつ間に食べ終えた。

そして、もう一切れを手に取り、今度はミーナに与える。

「さて、準備は整つたな。今後の予定だが、とりあえずはネプチューの言つていた、この町の近郊にある遺跡とやらを田指す事にする。それでいいか？」

その問いに全員が賛成し、シヴァは頷いてベッドから降りる。

「それじゃ、善は急げだな。 つて、どうした？ ユウ。上の空になつて」

カイが声を掛けるまでピクリとも動かず、ぼーっとしていたユウは彼の声で我に返り、眉にしわを寄せて皿を細めた。

「……いや、何でもない……何でも……」

しかめた眉を緩め、苦笑。

そして吐息を一つし、ミーナがピザを食べ終えたのを確認してから、シヴァを見て頷く。

対するシヴァーは顔を返し、会話を続ける。

「よし、行くぞ」

ノアの郊外にある森。

そこは、朝日が昇っているにもかかわらず、光がほとんど差し込む事なく、薄暗くなっている。

空気は湿つており、見た事のないような小さな虫が飛び交っている。

その理由は何十年、何百年もの間に成長を続けていた木々があるからだろ？

その証拠にほとんどの樹木が、雷でさえ倒す事も出来ないと思えるほど太く、まるでその森に入り込んだ者を威嚇しているかのように、斜めに伸びている。

その樹木に近寄り、上を見上げているカイとシルクは、その大きさに思わず声を揃えて、すう～いと歓声を上げていた。

そんな彼らを見てシヴァーは、腕を組みながらため息をつく。

「全く、暢気なものだな。警戒心の欠片もないではないか」

だが、その言葉とは違つて表情は微笑んでいた。

そんな彼らとは打つて変わって、コウは無表情に、されど目を細めて、三人とは少し後ろを歩いている。

するとネプチューンは彼の表情に気付いたのか、近寄つて肩を軽く叩いた。

「どうしたつちや？ サツキから目え細めて無表情になつて
「…………いや…………ちょっとな………… ッ！？」

ネプチューンが問うた後、突然ユウは目を見開き、カイのいる方向へと全力で走り出した。

刹那、カイの近くで火花が散り、同時に金属音が響いた。

「 おわっ！！」

その音の正体は、ユウが抜刀した長剣と、カイに奇襲をかけようとした者の鉤爪だった。

二人は少しの間、鍔迫り合いをしていたが、ユウは長剣を横に倒し、相手の体勢を崩して回し蹴りで吹き飛ばす。

飛ばされた相手は、地面を滑るようにして転がっていき、樹木に当たり勢いが止まった。

その者は茶色の長髪の間から生えたウサギの耳が少し斬れており、頭からは出血していて顔を血が伝っていたが、全く気にかけていないような表情で立ち上がるとしている。

全く気にかけていない、というよりかは、焦点が合わずどこを見ているのかわからない目と、つり上がった口元から察するに、正気ではないと思われる。

そして、羽織っている白いコートはボロボロで、微妙に肌蹴ついる胸元が膨らんでいる事から、相手は女性のようだ。

よく見ると、右腕と右脚に傷口があり、酷く出血している。

だが、頭の出血と同じく、全く気にかけていない様子だ。

そんな彼女を見たユウ以外の者達は、ただただ驚いていた。

「あの人……す」」、ケガしてるよ……なんで、立とうとする事が出来るの？」

シルクの問いに、シヴァは腕を組みながら答える。

「獣人族だから……という理由かもしれないが、さすがにあれは出血し過ぎだ」

「ど、どうするんだ？ アイツ。あの様子だと、突破するのに結構時間がかかるぞ？」

と、その時だ。

ユウが、口元に笑みを作りながら、カイ達の前に出た。

その行動にシヴァが、どうした？、と問うと、ユウは彼女の方を振り返る。

その表情は、田を細めて口元を微妙につり上げて笑みを作つていた。

そして、手に持つていた長剣を鞘に収める。

「……こいつは俺にやらせる。鈍った身体を動かすいい機会だ」

太もも辺りに巻き付けてある革で出来たカバーからナイフを抜き、両手に一本ずつ持つ。

「お、おい、さすがにそれは……」

「カイ、俺はあっちの世界じゃあ殺し屋だつたんだ。俺は、戦いが生きがいでもある。だが、こっちの世界に来てから一度も身体を動かしていない。だからだ、身体を鈍らせないためにも、こじは俺にやらせろ」

右手に持つたナイフの持ち方を変え、刃が後ろに向くようにして

構える。

「…………わかった。皆、行くぞ。たぶん、もつ少しで目的地だ」

「シヴァー！」

カイは、シヴァーの決定が気に入らず、彼女の方を向いて怒鳴った。だが、シヴァーはそんな彼を冷静な表情で見る。

「カイ、私は無駄話をするつもりはない。こいつしている間に、あの獣人が完全に意識を取り戻せば、私達は足止めを食らい、負傷者が増えてしまうだろう」

シヴァーが指をさす方向には、頭の出血で意識が定まっていないのが、フラフラとしている獣人の姿がある。

「」の森では、先ほどのお前のように奇襲を受けると、ミーナ達を守りきれない。だからこそ、ここはユウに足止めしてもうづべきなのだ

その言葉にカイは、苦虫を噛み潰したような表情になるが、それと同時にシヴァーはミーナを背負い、全員が走り出す。

そして、シヴァーがユウの横をすれ違う時、咳き程度で会話が交わされた。

「シヴァー、ミーナを頼んだ」

「まかせておけ」

シヴァーの返答を聞いて安心したのか、ユウは彼女達の後ろ姿を見送り、再び獣人の方を向く。

対する獣人はもう立ち直っており、ユウの後ろを走つて行くカイ

達を追おうと身体を前に倒しながら走り出した。

そんな彼女を見たユウは、手に持ったナイフを構えて、再度口元に笑みを作る。

「…………そういえば、お前は俺の踊りを見ていなかつたな…………なつ、バカにするなよ？　さ……舞踏会の始まりだ……」

言つてユウは地面を思い切り蹴り、走り出す。

獣人をユウに任せて、目的地である遺跡を目指し、木々が開けている道をひたすら走つているカイ達は急に森から抜けたかのような感覚に、思わず立ち止まつた。

その場所は、まるで森とは別の場所であるかのように樹木は無く

空が開けており、地面は草原のように草が生い茂つてゐる。

そしてその奥、カイ達が出てきた道から一直線の先には、大きな岩で出来た絶壁と、その下に洞窟が出来ていた。

「…………あれ…………？　こいつて…………」

唚然としているシルクは、この洞窟に見覚えがあつた。

それは、同じく唚然としているカイも同じだつた。

「…………こいは…………左腕の力を手に入れる原因になつた懐中時計を手

に入れた場所と似ている……」

言いながらカイは驚きながらも、自分の左腕を見つめて、再び歩き出す。

ぱっかりと空いているその洞窟は、カイ達を招いているかのようだった。

第二十九話・ウサギの舞踏会

勢いをつけて走り出した俺は、身体を低くし、ナイフを前に構えて一気に間を詰める。

すると獣人は、手の甲に装着されている鉤爪を、俺から見て左側から勢いよく薙^なぐ。

余りにもシンプルな攻撃。

だがその一撃は、全力で走っている俺に対しても効果的な一撃。その為俺は、両手のナイフを左側に構えながら低く飛び上がる。身体を出来るだけ丸め、衝撃を受け流すように。

するとナイフは鉤爪を防ぎ、それと同時に脚を思い切り伸ばして、相手の顔面へと蹴りを入れる。

「 がつ！」

全力で走った時に蹴りは、勢いが強い為、相手は堪える事が出来ずには吹き飛んだ。

『……貴方、レディーにも容赦しないのね』

「戦いに性別は関係あるか？」 答えはノーだ。相手が女だから、子供だからと言つて躊躇^{ためら}うと自分が死ぬ。……それに

俺は獣人の方に目をやる。

相手は少しふらつきながらも再度立ち上がり、俺を目で捕捉した。先ほど蹴った顔面、と言うよりかは鼻からは、夥^{おびただ}しい量の血が出ているが、それを気にせずに飛び上がり、今度は樹木を伝つてこちらに向かつてきた。

「…………あれはまるで、傀儡人形だ」

言ひて、俺は走り出す。

その途中、腰に装着されている、弧を描いたフック状の武器”三日月”を掴んで引っ張る。

すると、三日月の下部に付いているエターナル仕様のチョーンが出た為、それの中間あたりを掴み、勢いよく回して遠心力をつけて三メートルほど先、上に向けて投げる。

すると三日月は真っ直ぐ飛んで行き、樹木の太い枝に刃が食い込んだ。

それを軸にして高く飛び上がり、近くの樹木を蹴って、チョーンを掴みながら一気に間を詰める。

丁度その時、獣人が鉤爪を構えて攻撃態勢に入る。

それを好機とし、身体を一回転させてチョーンを思い切り引っ張り、三日月を枝から外して相手に振り投げる。

だが、その一撃を相手はありえない動き、身体をひねって軌道を変え、樹木の枝に飛び移り、軽々と三日月を避けた。

そして、飛び移った枝から飛び出し、素早く接近してきた。

俺は今、空中にいる。

あと少しで詰まる間合いの中、軌道を変えるためにチョーンを引いても、三日月は間に合わず、結局のところ避ける動作が取れない。その為、チョーンを放して両手のナイフを前方に身構えて防御に入る。

刹那、金属音が響き、高々と上がっていた自分の身体が背中から地面へと、急速に落下し始めた。

そしてその間にも、獣人は攻撃を止めず、両手の鉤爪で攻めてくる。

「がつ　しつこい！」

獣人による連撃をナイフで防ぎつつも少しずつ相手の腕に切傷を

『える。

それにより傷口から出した鮮血の零が、腕を振る事によつて飛び、小雨のように降りかかつてくる。

だが、相手は痛みを感じていなかつたが、鉤爪を振る力と速度を弱める事なくむしり、少しづつ強く、速くなつて攻めてくる。

『コウー もうすぐ地上よーー』

永遠かと思われた落下は、ティファアの言葉によつて、終わりがすぐそこまで来ているのがわかつた。

「わかつてゐるんだがコイツ、体勢を立て直せるほど隙を全く見せねえ！ 浅い傷をつけられる隙は腐るほどあるつて事は、自身を犠牲にして俺を地面に叩き付けるつもりだつ！」

やつ言つてゐる間にも、地面に到達するという感覚が迫つてくる。
……やはり、無傷で戦闘を終わらすなんて無理なんだな。

「…………ティファア、すまん」

『気にしないの、やつちやいなさい』

その一言を聞いた瞬間、俺は右手のナイフを獣人に向かつて投げ、素早く右手を後ろ腰に回す。

もちろん、相手は簡単にそれを弾き、がら空きになつた俺の右半身を斬りにかかつた。

『ぐつ……』『あやあつ……』

俺の右胸を抉ろうとした鉤爪は俺の服が盾となつたが、刃の先が皮膚まで届き、浅い切傷となつた。

それと同時に、後ろ腰に回していた右手で物を掴み、相手に向ける。

次の瞬間、森中に乾いた大きな音が一回響き渡った。

遺跡に入ったカイ達は、入り口から程遠くない位置で行き止まりに打つかつていた。

「 ね？ わっちの言つた通りだつたぜよ。ここには何も無い、無駄足だつたっちや 」

ネプチューンは苦笑しながら肩を竦め、身体の向きを変えて出口へと向かおうとした。
だが、そんな彼の襟襷えりまき切れロープを掴み、止める者が居た。

「 ……なんぜよ？ ミーナ 」

問いかれてミーナは答えようとせず、ただロープを掴み、水色の長い髪を揺らして首を左右に振つていた。

と、その時だ。

カイが左腕を出して力を、禍々しい腕を露にした瞬間、その腕が光り出し、同時に行き止まりであつたはずの場所が光を放ち出した。

「 ……きれーな光… …」

「カイ、大丈夫なのか？」

カイはシヴァの問いに答えず、左腕を高々と上げた。
その動きに合わせて、光は徐々にその場にいた全員を包み込んで
いった。

そこには無空間。

何も無い、何も感じない、何も聞こえない。
何かあるとすれば、先ほど光に包まれたカイ達の姿だけだ。
彼らは田を開けると、自分達のいる場所が変わっている事に驚いた。

「皆、ちゃんとこるか！？」

代表役であるシヴァが、全員の安否を大声で確認する。
どうやら、彼女達は互いが見えていないようだ。
すると、全員分の声が彼女の元に届いた。そこにいるという認識。
その瞬間、彼女の視界に突然全員が映り込んだ。

「んなつ！？」

「ええ！ 何で！？」

どうやら、シヴァ以外の者達の視界にも同じ事が起きたらしく、
自分の視界に突然現れた事に驚いていた。
だが、その驚きは、すぐに別の事で薄れしていく。

「あれ？ 何、あれ。ほら、カイの近く

シルクが指で示す方向、カイが居る場所には、数多くの小さな光が集結し始めていた。

その光は、徐々に人の形になつていき、最後には光が弾けて女性の形となっていた。

白銀に輝く長い髪を靡^{なび}かせ、まるで女神のような、純白の羽衣を着た姿で現れた彼女は、つぶらな瞳を瞬かせてカイを見る。

「カイ、よくここまで来てくれました。一つ目の柱、蘇りは貴方の手で」

カイが契約時に聞いた強い声とは違い、優しくて包容力のある声、口調で言つた後にそつと彼の左腕に触れる。

瞬間、再度彼の左腕は輝き出して今居る空間に色が、同時に多数のビジョンが映り出す。

「これは、時空に対する祝福の解放。ですが、この事に喜んでいる場合ではありません」

言つて羽衣の女性は、世界地図が映し出されているビジョンを指で示す。

「地図で言つと南東にある大陸”カルディエール”に存在していた時空の柱が、何者かに破壊・消滅させられました

「つ！？」

突然の言葉に、その場にいた全員が驚いた。
そんな中、カイは口を開く。

「ちょ、ちょっと待つてくれ。壊されたつて事は、どうなつちまうんだ！？」

「残り二つの解放と、一つ分に値する物による更生。それによって、契約通りに事は進みます。ですが……」

彼女の表情に、少しばかり曇りが見えた。

「一つの柱を失い、力が弱まつた事によつて、次の柱への導きが出来なくなつてしましました……。その為、私自ら次の柱の場所にたどり着くための言葉を伝えます」

一度目を瞑り、吐息を一つ。

「人は人であるがために、人である事を忘れる……この言葉を唱えた者に関係する場所の内、どれかに正解があります。これが、私がから言える最大限の言葉です」

「…………？」

「ほう……」「ほへえ～」

それを聞いたカイは、頭上にクエスチョンマークが出るほど首を傾げていたが、シヴァとネプチューンは気付いたのか、それぞれが一言呟いた。

その呟きに、羽衣の女性は頷いて微笑んだ。

すると、カイが何かを思い出したかのように、あつと声を上げた。

「そういえば、君の名前は何て言うんだ？」

「…………ナンナ、と言います」

その名を聞いた瞬間、ネプチューンの眉がピクリと動いた。

そして、顎に手を添えて考え込む。

「それでは、次の柱で会いましょう……」

ナンナはそう言つて一步下がる動作をし、次の瞬間、身体が光に包まれて小さな光に分散し、そして消えた。

その後、再度光が全員を包み込み、気付いた時には元いた遺跡の出口に戻っていた。

「人は人であるがために、人である事を忘れる……」

最初に口を開いたシヴァは、心当たりがあるかのように咳いて腕を組む。

心当たりがあるのはネプチューンも同じらしく、一ニヤニヤしながら彼女に近付いた。

「シヴァ、その言葉は知ってるつちょ？」

「当たり前だ。それくらいわからなければ教師と名乗つていらない」

「え？ え？ 何？ 何なの？？」

シヴァが言つている事が全くわからず、シルクは首を何度も傾げて問い合わせ、カイに至つては考える事を止めて、ただただ立ち尽くしていた。

「うむ、そういえばまだ教えてなかつたな。……その言葉はな、ある科学者が唱えた言葉だ」

「正確に言えば、イカれた科学者ぜよ」

「イカれた……？」

シルクの問いに、シヴァは顎に手を当てる苦笑する。

「確かにイカレた科学者だな……そいつの名はキース・ヨルムンガンド。戦時中、テクノス王国・国王アーガイル直属の極秘研究組織代表で、戦闘に特化した強化人間の生成をしていたのだ」

「もちろん、国王直々の指示だつたらしいんやぜよ。実験には、数多くの罪無き民間人が犠牲なつたつちょ」

「そんな……関係の無い人達まで……」

シルクは思わず両手で口を覆い、目を見開く。

「その過程で、キースはそう言つたんぜよ。人は人であるがために、人である事を忘れる。それは、実験をしている自分自身に、実験によつて変わつっていく被験者に、アーガイル国王本人に言つた言葉とも言わわれているんぜよ」

「……あつ！ つて事はその人が関係しているテクノス王国がある場所に、次の柱があるつて事だね？」

そう言つシルクにシヴァは、ふむつと言つて口を開く。

「そのテクノス王国があるカルディエール大陸の柱は先ほど、ナンナとか言う女性が消滅したと言つていただろ？ だから、だ。……これは憶測なんだがな？ キースは終戦と同時に失踪し、今でも行方不明なんだ。そして、最後に目撃されたのが、私達のいるカナン大陸から北西に位置する”シュメール大陸”だそうだ」

「…………つて事は、シュメールに行けば柱があるつてわけだね！？ すつごーい！ あつたまいいね、シヴァちゃん！」

「いや、私は一応教師なんだが……」

シヴァは思わず苦笑し、組んでいた腕を離す。

と、その時、森にパンツという乾いた、大きな音が響き渡つた。

その音に全員が驚き、音のした方を向く。

「確かに、あつちはコウが居た場所だよな？」

立ち去っていたカイは、いつの間にか元に戻つており、頭を搔きながら問う。

「どうやら、急いだ方がよさそうだな」

表情は冷静に、だが声はあせり氣味になつて、シヅマの言葉を含図に全員が、音のした方へと走り出した。

第三十話・決着と決別

森に響き渡つた音。

それは今、俺が右手に握つてゐる拳銃”ガバメント”の発砲音だ。地面上に到達しそうになつた時、右胸を犠牲にして腰のホルスターからガバメントを抜き取り、相手の両肩にそれぞれ撃ち込んだ。

それにより、相手の動きが鈍つた為、素早く蹴り飛ばし、何とか着地体勢に入ることが出来た。

「 チツ！」

「ひいつのを危機一髪と言つのだろつか。

全身を地面に叩き付けられるという状況から、無傷で着地出来た事にホツとしつつガバメントをホルスターに收め、吹き飛ばした獣人を見る。

「……両肩に魔力の塊をぶち込めば、さすがに立てねえだろ……」

『……いいえ、立ち上がるわよ……』

一瞬、自分の目を疑いたくなる。

ティファの言うとおり、獣人は立ち上がつた。

肩を撃ち抜いた事によつて使えないはずの腕を使って……

『ね？ 立ち上がつたでしょ？』

「おいおい……どうなつてんだ、アイツは……」

『あんなになつても動ける…………そして、この異様な感じ……やつと思ひ出したわ、彼女は魔術に掛かっている。それも、とびつきり性質の悪い魔術にね』

体勢を地面スレスレまで低くしながら走つて来る相手に向かつて、俺は無意識にホルスターからガバメントを抜き、引き金を引く。

『瞳の中に、魔導式の小さな文字が刻み込まれていたの。もちろん、両目ね』

チャージャーによつて火と樹属性の魔力が集められ、構成された雷管が引き金を引いた際に弾かれる撃鉄（ハツマ）によって叩かれ、化学反応によつて小さな爆発音を起こし、同じく魔力で構成された薬莢（ヤツキヨウ）から魔力を固めた銃弾が銃口から飛び出す。

同時に相手の腹部から、ビスツという生々しい音が聞こえ、出血する。

「それがあるとどうなるんだ！？」

火薬の爆発による反動で遊低（スライド）が前後し、空になつた薬莢が、引き金の少し上にある穴、俳莢口から飛び出した。

『さつき貴方が言つた通り、魔術を掛けた術者の傀儡人形になつているのよ。脳を完全に支配されている状態ね。だから、どれだけ傷を与えても立つていられるつてわけ。それに、一度掛けられると絶対に元に戻れないの。本人の意思に関係なく、脳を無理矢理支配するから解除した瞬間、脳は壊れて掛けられた本人は死ぬ。……でも、ちょっと引っかかる事があるの』

銃弾が直撃した獣人は、鮮血を銃創から吹き出しているが、その速度は落とさず、真っ直ぐに向かつて来る。

『その魔術は、私のみが習得しているはずの禁術なのよ』

『なんでお前のみつて断言出来るんだ？』

相手にどんどん間合いを詰められる中、俺は全力で後退しながら、何度も引き金を引き、弾倉を空にする氣で何発も撃ち込む。

『もし、その術者がジードの人間だとしたら、だけどね。禁術は、祖父が見つけた人間と魔力の概念を元にして考え出されたいわゆるオリジナル魔術なのよ。しかも、それが完成したのと同時に私が習得し、そして全てが吹き飛んだ。だから、禁術の内容は私と祖父だけで、祖父は死んだから最終的に私しか知らない事になる』

「って事は、こっちの世界でも似た様な事をした人間がいるか、またはジードの人間つてわけか』

『大雑把おおざっぱだけど、そうなるわね』

だが、どんなに撃ち込んで一向に速度を落とす気配が無く、むしろ速度が上がっている感じだ。

「……それほどの奴なら、世界間の移動法がわかるかもな……」

俺は口元に笑みを作り、ガバメントを再度ホルスターに戻す。そして、三日月を左手で掴み、左足を後ろに出して地面に滑らせ、後退する速度を落とし、前へと出る。

獣人はそれを好機と見たのか、更に速度を上げた。

同時に、俺は地面に右足から滑り込んで相手の真下へ。

そして、その右足を軸にして身体を思い切りひねらせて、左足を相手の顔面に蹴り込む。

すると相手は、自分が全力で走った際の速度と、それを止める俺の一撃ひとうげきが途轍とじつもないダメージとなり、真上に浮き上がる。

「ふうっ……！」

すかさず左手で掴んでいた三日月を飛ばし、獣人の首に巻き付け、歯を食いしばって素早く起き上がり、同時にチヨーンを引っ張り地面に叩きつける。

その後、腰の鞘から長剣を抜いて、相手の左脚に深く突き刺し、右脚には俺の左足を、左腕には太ももに巻き付けてあるケースから抜いたナイフを突き刺し、右腕には右手に同じくケースから抜いたナイフを持って突き刺し、そして首を左手で掴んで、完全に身動きをとれないようにし、自分の顔を相手の顔に近付ける。

「……確かに文字が見えるな……」

黒い瞳の中に、ピンク色の見た事ない文字が円になつて敷き詰められている。

それを見て、俺は満面の笑みを作る。

「コイツを操ってるヤツ、よく聞け！ 必ずお前を見つけて、持てる情報を一滴残らず搾り出してやる……！」

気付けば、笑いながら怒鳴っている俺がいた。

と、その時、後ろの茂みがざわめいて人の気配を感じ取れた。

そして、振り向くとそこには、走つて出てきたカイ達の姿があつた。

カイとその後ろをついてきた者達は、茂みを飛び出した瞬間の光景に驚きながらもカイとシヴァは武器に手を添える。するとユウは、何か思い出したのか、カイに向かつて大声を出す。

「カイ！ お前の力でコイツの時間を戻してくれ……」

「え？ あ、ああ、わかった！」

カイは最初、戸惑つたが、すぐに走り出し、ユウが押さえ付けている獣人に左手を当てる。

瞬間、閃光と共にカイの左腕が光り出し、紋章が刻み込まれた禍々しい形の腕が姿を現した。

それと同時に、獣人の傷口が見る見るうちに塞がり始めた。

それを見たユウが、急いで左脚に突き刺していた長剣と、両腕に突き刺していたナイフを抜くと、刺さっていた箇所の傷口も塞がり、ユウとの戦闘で出来た傷は一つ残らず無くなった。

そして、ほとんど無表情だった顔は、少しずつ変わつていった。だが、代わりに右腕と右脚の太ももに大きな傷口が出来始める。傷の大きさからして、ユウがつけたものではない。それを見たユウは、カイの背を叩いた。

「もういい、手を離せ」

「いや、まだ傷口が塞がってない！」

「いいんだ。この傷口が塞がるという事は、この傷をつけた奴をまだ知らない頃まで戻る事になる。そうなると必要な情報が入らない」

ユウの言葉にカイは少し考え込むが、ユウは引きそつになかった為、仕方なく左手を離した。

その行動にユウは、ありがとうと咳き、獣人の頬を軽く叩く。すると彼女はゆっくりと目を開けた。

「……んつ、ぐつ、ゲホッゲホッ！　な……アイツらは……ツ！？　な、何だ、お前ら！　一体何が起きて！」

目を覚ました獣人は、今の状況が全くわかつておらず、突然視界に入ったカイ達に驚き、警戒心を最大にしていた。
そんな彼女を見て、シヴァは組んでいた腕を下ろした。

「……まさか、カイの力で時間を変えるといつのは、存在その物の時間も変えてしまうのか」

「やつぱりな。そんな気はしていたが、どうやらこの力は生易しいもんじやないようだ」

ユウは苦笑しながら呟く。

すると、その会話を聞いていた獣人が、目を見開いてカイを見た。

「時間や力と聞いたけど……もしかして君が神の力の持ち主なの！？」

「神の……力？」

獣人はユウの疑問を無視し、話を続ける。

「その神の力、どうか私達一族のために使ってほしいの！　私達、獣人族の穢れた歴史を変えるため　『ゴフッ、ゲホッゲホッ！！』

咳が先ほどよりもひどく、そして口からは血が出ていた。

その事に気付いたシヴァが獣人の腹部を見ると、右の横腹が微妙に血で赤く滲み出していた。

同じくその事に気付いたカイは、悲しそうな表情で口を開く。

「……俺の力は、歴史を変えるという事は出来ないんだ。これは、ある人の約束を果たすための力。世界を救うための力なんだ」

「なら！ 私達も救つてよ！！ どうしてできないの！？」

「そう都合良く誰でも助けられるわけじゃないんだ。コイツの力はな、人の運命を無理矢理捻じ曲げる悪魔の力もある。そんな力を、神の力などと呼べるわけがないだろ？ ……それに、だ。過去の穢れとやらを消したいのならそれを忘れられるほどのすごい事をすればよかつたんだよ。穢れ？ ああ、あつたな、そんなの。だけど、今はこれだけの事をしてるから別にいいじゃん、何て言われるようにな。そこまで頭が回るヤツが居なかつた。ただそれだけだ」

カイの言葉に尚も食い付こうとした獣人に言つたユウの言葉を聞いて、彼女は絶望したようなされど納得したような表情になり、小さく溜息をついた。

「…………そうね、そんな便利な力なんてあるわけが…………よくよく考えたら、誇り高き獣人族が神にすがるなんて、どうかしてたわ」

彼女は、はははっと乾いた声で笑つた。
そして一度目を伏せ、カイを見る。

「…………ねえ、それじゃあ私の時間とやらを変える前、私に何があつたのか教えてもらえる？」

「それは、俺が説明する。 と、その前に、お前の名を聞かせてくれないか？」

「人に名を聞く前に、自分から名乗るのが礼儀よ？」

彼女の問いにシヴァは、フツと鼻で笑つた。
それを聞いたユウは苦笑し、答える。

「……それもそうだな。俺はユウで、こつちはカイ。後ろにいるのは順に、シヴァ、ミーナ、シルク、ネプチューンだ」

ユウはそれぞれを指で示しながら教える。

「ありがとう。それじゃ、私はクレアよ。……で、聞かせてもらつてもいい?」

弱々しい笑顔と共に問うクレアに、ユウは一度頷いて話を始める。
「……お前は、誰かに傀儡系の魔術を掛けられて、完全に脳を支配されていた。そして、突然襲撃してきたんだよ。おかげでこのザマだ」

言つてユウは、右胸の傷を見せる。

「それで、何とか取り押さえる事が出来た後、カイの力でお前を魔術に掛けられる前の時間に戻した。それで、今のお前だ」

「……そうだったの……」

クレアは、乾いた声を出して苦笑した。

「はははっ、無様よね。獣人族ともあろう私が、レイヴンとかいう男に負けて操られた上にまた負けた拳句、この傷……」

「レイヴン? そいつがお前を?」

「そう、大剣を背中に担いで、それを隠すかのように、漆黒のロープを羽織っている男よ……確かに、四枚羽が生えた小さな妖精もいたわ……」

「レイヴン…… 大剣…… 漆黒のロープ…… 妖精……」

後ろの方でネプチューンは、記憶から掘り起こす為に、聞いた単語を復唱するが、すぐに首を左右に振った。

「……そんなやつの情報は、今までにはないっしゃ。ま、後でノアで聞き込みでもしてみるんけどね」

言つてネプチューンは微笑を浮かべる。
と、その時だ。

突然クレアが、咳をしながら吐血をした。

口を押された彼女の手には、大量の血が付いている。

それを見た彼女は苦笑しながら、ユウの方へと視線を向けた。

「……ねえ、どうせ死ぬのなら、貴方達の誰かが私を殺してよ」

口元から血を流しながら言つたクレアを、カイは驚いた目で見た。
「な、何言つてるんだよ！？ セつかく助かつた命だぞ？ そんな簡単に捨てるなよ！」

「……貴方にはわからないでしょうね……私は一族の命運を背負つて、そして希望を糧にしてここまで来たの。その希望が絶望になつて、ここまでボロボロになつたら、私は一族に見せる顔がないの」

それに、と呟き、

「失敗した今ではどの道、死しか残つていないので。同族に殺されるくらいなら、貴方達のよつな、敵つて存在に殺された方が、私としても報われる形となるのよ……」
「それでもまだ……！」

拳を握り締めたカイを、ユウは左手で制して立ち上がり、腰のホルスターからガバメントを抜き取る。

そして、それをクレアの額に突き付けた。

「ありがとう……」

クレアがそう呟いた時、シヴァはミーナの手を手で覆つた。

「ま、待ってくれ、ユウー！」

ガバメントを逸らそつと伸ばしたカイの手は間に合わず、ユウは引き金を引き、同時にパンツという音が響いた。

カイがガバメントに触れたのは、その後だった。

それにより、ガバメントはユウの手元から落ちる。

一方、銃弾が当たつたと思われるクレアの額からは、血が流れ出した。

それを見たカイは目を見開き、奥歯を噛み締める。

「…………おい、ユウ…………」

刹那、カイはユウの胸倉を掴み、押し倒す。

「何で助けられる人を簡単に殺したんだよ！ あの傷なら、まだ助かつてたかもしれないだろ！？」

その言葉を聞いたユウの表情が変わる。

それはまるで、ブチンッという擬音が似合つほど怒りが露になつた表情。

「…………何で殺した、だと…………？ お前は、あいつの言葉を聞いていなかつたのか？ どうせ死ぬのならせめて、と言つヤツの願いを聞いてやろうとは思はないのか…………？」

その声は、なるべく冷静に怒りを押し殺していた。

対するカイは、勢いを弱めずに大声で叫ぶ。

「いくら願いといつても、それが命を無駄にするような事だつたら話は別だ！ 助けられる者は、生きられる命は俺が全力で助ける！ 助けなきや いけないもんだから…！」

言つた瞬間カイは、ユウに蹴られて吹き飛んだ。

それを見たシルクは、彼に近付こうとしたが、シヴァに手で制さ

一方、押し倒されていたユウは、両手を軸にして起き上がる。そして、カイを思い切り睨み付けた。

「……よくもそんなふざけた事を簡単に言えるな！　生きられる命は全力で助けるだと！？　相手の願いを無視し、ねじ伏せて、自分の決意を言い訳にそいつの望まない事をするのは、ただの自己満足でしかねえんだよ！！」

その怒声は、森中に響き渡り、木の枝に乗っていた鳥達は一斉に飛び立つ。

「お前はこれから先、色々なヤツに命を狙われる、そんな状況だ。
そんな中で、命だか何とか言つてると絶対に殺す事に対しても躊躇する…だからいや、そういう考えをやめないと言いたいんだよ…!
それでもまだ、同じ事を言つのか?」

問いに、カイはゆっくりと立ち上がり、決意の瞳でコウを見る。

「そうだ。俺は、同じ事を言つた」

その返事を聞いたユウはため息をついて、細目でカイと視線を合わせる。

「…………わかった。なら、俺はこれから別行動を取らせてもらひ

第三十一話・それぞれの思い

突然ユウが放った言葉に、その場にいたほとんどの者が驚いた。

「お、おいユウ、どうして急に…」

「お前のその中途半端な考えに付き合つていると、俺の殺し屋としての感覚に迷いが出てしまう気がするからだ。……それに、自分の世界を知る方法が、すぐ近くにあるからな」

言いながらユウは、少し離れた場所で樹木にもたれ掛かっているネプチューンを見た。

対するネプチューンは、視線を合わせてきた彼に苦笑していた。その後、ユウはカイに視線を戻す。

「…………次に会った時は、今以上に決意を固めている事を願つてお
く

言つてユウは、額に血の跡をつけてピクリともしないクレアを背負い、出口に向かつて歩き出した。

途中、シヴァとすれ違つた際、ボソリと一言呟く。

「…………また、ミーナをよろしく頼む……」

その言葉にシヴァは、フツと小ちく笑い、咳き返した。
まかせておけ、と。

それを聞いたユウは満足したのか、一度頷いた。

一方カイは、啞然としながらユウが去つていく後ろ姿を見ていた。手がピクリと動いているが、身体は全く動いておらず、まるで、止めようとしているが身体が動かない、そういう感じだ。

すると突然、ネプチューは向きを出口へと変え、右手を上げた。

「すまんが、わっちも行くわ。コウからの御指名せよ」

言つてネプチューは、小走りでコウの後を追つて行つた。
残つたカイ達は、二人を目で追つのをやめて、それぞれの方向に
目をやつた。

「…………何が…………間違つているんだよ…………」

カイは歯を噛み締めながらさう言つて俯き、その姿を見たシルク
は、彼に寄り添つて肩を抱き合わせた。

「大丈夫、大丈夫だよ。私はカイの理解者になつてあげるから…………」

そんな彼らを微笑ましくも悲しい表情で見ていたシヴァは、隣に
居るミーナに視線を落とす。

「…………いいのか？ ミーナはコウについて行かなくて

聞いにミーナは、首を左右に振つて答えた。

「うーうん、いい。また会えるつて知つてるから」

言つて満面の笑みをシヴァに向けた。

その笑顔を見たシヴァは、ミーナの頭に手を乗せて微笑んだ。
そして、カイとシルクに視線を向ける。

「…………カイ、シルク。とりあえず、宿に戻ろつ。このままここに居
ても埒が明かない」

シヴァの提案に、二人は頷き、ノアへと続く道を歩み始めた。

闇が世界を覆いつくし、満月がその闇をわずかに照らす。

世界を覆うモノは自分だと言っているかのように。

まるで、永遠に続く人間同士の争いを思わせる。

その人間同士の争いで発せられる音の一部、金属音が静寂を決め込む空間に、何度も響き渡っていた。

それは、リラックス・リゾートの裏手の、月明かりが一面を照らし出している場所から発せられていた。

僅かに緑色が見える芝生の上を走っているのは、一人分の人影だ。決まつたタイミングがなく、人影が近付く度に金属音が響く。

一人は、諸刃の剣を振るうカイ。

そしてもう一人は、長剣を慣れた動きで舞うように扱うシヴァだ。月明かりで僅かに見える表情は、一瞬の隙もないほど真剣だった。それは、両者同じである。

二人は互いの攻撃を紙一重で避け、または防ぐなどして一步も譲らずに攻防していた。

「どうした？ 諸刃の特長を活かしきれてないぞ？」

されど、やはりシヴァの方があの優勢なのだろうか、カイにアドバイスを言い続けるだけの余裕はあるようだ。

「 ほら、右手の握りが甘い！ これだと、バランスを崩して武器を落とす事になるぞ」

言つてシヴァは、諸刃の右側を長剣で弾く。すると彼女の言った通り、カイはバランスを崩して弾かれた方向に傾き、大きな隙を作ってしまった。

それと同時に、彼女は瞬時にしゃがみ込み、今カイの軸となつている右脚に蹴り込む。

「 崩れた時の反応も遅れているぞ！ 」 ついつ時は足を浮かせ、身体を出来るだけ低くしながら両手を地面に着かせ、前転宙返りだ

カイはその言葉を無視し、崩れた身体を肩から地面に着かせ、勢いをつけて前転し、立ち上がる。

だが、立ち上がった瞬間、シヴァは腰に添えてあつた鞘を抜き取り、彼の横腹に叩き込んだ。

「 ぐがあつっ！！」

「 それ見たことか！ 只の前転では、移動距離が短い上に、相手の動きが全く見えず、致命的な一撃を貰う事になるのだ！！ その分、宙返りは移動距離が長く

着地の際、瞬時に次の行動に移る事が出来るのだぞ！」

手に持つた鞘を腰に添え直し、近くに落ちている両刃の剣を拾い上げ、横腹を押さえて倒れているカイの目前の地面に突き立てる。

「 さあ、これでお前は一度ならず二度も死んだぞ！ 基礎を使わな

いという事は、じついう結果に繋がるのだ！ そんなにもお前は戦闘で死にたいのか！？」

「わかつてゐる！ わかつてゐるよ……俺だつて、必死に……」

カイは声を荒げて叫びながら、地面に突き立つてゐる武器を手に取る。

そんな彼を見てシヴァは、考え事を必死にか？ と呆れた口調で言い、溜息をついた。

その後、長剣を鞘に収めて腕を組む。

「休憩だ。…………少し話をしよう。その場に座れ」

疲れで息を荒くしてゐるカイは、しばらく構えを解かなかつたが、息が整うにつれて冷静さを取り戻したのか武器を三つ折りにしてから、言われた通りに座る。

「…………お前が考へてゐるのは、ユウの事だな？」

問いかに、カイは少し間を置いて答えた。

「ああ、何でユウは別行動をとるなんて言つたんだろつかつて……それに、ユウが言つた事も気になつて考えてた」「そつか、やはりそれだつたか。 なに、心配する事ではない。 アイツはアイツなりに必死なのだ」

言葉とは裏腹に、表情が少しだが曇る。

「アイツはジードと呼ばれる異世界の人間だ。 だが、そのジードとやらは、この世界で神話となつてゐる」

組んでいた腕を解き、人差し指を立てて話を続ける。

「アイツは、この世界では存在しない、たった一人の架空の存在となっているのだ。お前も、今までの思い出や記憶が、架空の物なのがもしそないとなると

自分の存在理由がわからなくなるだろ？だから、アイツは自分の存在理由を必死に探そうとしているのだ。その為に、お前の決意がない考へで自分自身が変わってしまう事を、元の世界の自分が無くなる事を恐れ、別行動をとるという結果に出たのだ」

言い終えて肩を竦め、私の想像だがなつと言葉を付け足した。
それを聞いたカイは俯き、呟く。

「……俺の考へが……原因……」

「別に、お前の考へが間違つているとは言つてないぞ？決意が中途半端なだけだ。だからアイツは、お前が決意を固めるまで、そして同時に自分の心を整理するために別行動を選んだのだろうな」

「……何でわかるんだ？」

問いかにシヴァは、フツと鼻で笑つた。

「ユウについては想像だが、お前に關しては何年も教師をやつているから、自然とわかつてしまうものなのだ。ちなみに、お前は偽善者だな。中途半端な偽善者だ」

「ぎ、偽善者って……」

最後の言葉にカイは苦笑し、シヴァは笑みを作つた。

そして、シヴァは組んでいた腕を解き、長剣の柄に手を添えた。

「……さて、休憩は終わりだな。もう一本やっておくか？」

鞘から長剣を抜きながら問い掛けたシヴァにカイは立ち上がりて頷いた。

もちろん！ という威勢のいい声で答えて。そして、彼は三つ折りにした諸刃の剣を組み立てて構える。

「それでは……いくぞっ！…」

シヴァの合図と共に、一人は勢いをつけて走り出す。この後、しばらく金属音が響き続けた。

カイ達が泊まっているリラックス・リゾートから少し離れた場所にあるホテルの一室。

明かりが煌々と灯つているその部屋の壁際に置かれた、シングルベッドの外側に寄りかかって座つているユウは天井に視線を向け、考え事をしていた。

故に、この部屋には音はなく、静寂が部屋を包むこんでいる。

だが、その静寂を打ち破るかのように、入口のドアが、ガチャリという音を立てて開いた。

このホテルの部屋はリラックス・リゾートと同じく、寝室と入口が同じ一室となっている為、誰が入ってきたのかは首を動かすだけ

でわかる。

その為にコウは、ドアが開くのと同時にその方向へ向いた。するとそこには、ミーナがいつもどが違う、無表情で立っていた。ただ一つ、無表情ではないと言えるのならば、目を細めて、全てを見透かすような瞳をしているところだけだろう。

だがコウは、そんな彼女を見ても驚かず、逆に笑みを漏らした。そして、ゆっくりと口を開く。

「…………久しぶりにそつちのお前を見たな。最初にみたのは初めて会った時だ」

コウの言葉を聞きながら、ミーナはゆっくりと歩いて彼の元に近付く。

「そつちがお前の本当の姿か？…………それと、お前は俺に、俺達に何か重大な事を隠しているだろ？」

その問いに答えるかのように、ミーナはコウの隣で立ち止まり、答える。

「本当の、といつ質問は半分正解で半分不正解。両方とも私、本当の私。…………それにしても、隠しているとはどういう意味？」

「その質問は、わかつて言つてるだろ？まあいいが…………。最初に会つた時と、アイツらと居る時の性格が違うってところもあるが、俺の中にはヤツから重要な話を聞く時は、必ず邪魔をしてきた」

それに、と言いながら手を細めてミーナを睨む。

「今日の襲撃があつた時、お前は全く驚いてなかつた。まるで、襲

撃がある事を知っていたかのよつに、だ。……で、お前は何者だ？
ジードの人間か？」

「コウがそう問い合わせた瞬間、ミーナはクスクスッと笑い出し、ベッドに上つて座つた。

そこは一度、コウの真後ろだ。

「誰なのかとこう質問には、まだミーネレナント・コリウス・レヴァエリート、ミーナとしか名乗れないわ。もちろん、私はこの世界の人間よ」

「そつか……結局、ジードに関しては直接調べる必要があるんだな。……それじゃもう一つ」

言つてコウは、後ろに居るミーナの方を身体」と向く。

「カイの力の事、お前は何か知つてているのか？」

問ひ「ミーナは、コウと皿を合わせながら答える。

「…………知らない、と言えば嘘になる。私は全てをこの皿で見ているから。でも、それを今教える事は出来ないの……。でも、知つているからこそ、私はカイ達についていく。傍で、変わつていくあの腕を……だから、私はコウについて行けない」

言つてミーナは四つん這いになつて、そつかつと呟いたコウに近付く。

そして、彼の頬に手を添え、ゆっくりと顔を近付ける。

だが彼は、ミーナの顔を手で止め、苦笑しながら頬に添えられた手を退けた。

それが何を意味しているのか知つてゐるミーナは、微笑しながら

少し離れる。

「止めるのはわかつっていたわ。ユウは、ジードに大切な人が居るものね。一生を誓い合つた人が」

「何でもお見通しなのか。…………なら、俺が戻つてこよつとしているのもわかつているんだろ?」

「ええ、わかつているわ。戻つてこよつと、じゃなくて戻つてくるのをね。」

ただ……」

ユウに背を向けてベッドから降りたミーナは、ぐるりと半回転して彼の方を向く。

「カイは不思議な子よ…………何度も、カイが言つた言葉で、行動で、見通せない事が起きる。だから、神と名乗る者は彼を選んだのね……」

……

そう言い残して、ミーナは出口へと向かつた。

するとユウは、ミーナの小さな後ろ姿に視線を向け、聞こえるようには眩いた。

「…………次に会うまで、死ぬなよ…………」

ミーナはドアを開けて廊下に出て閉める際、ユウに満面の笑みを向けた。

それを見たユウは微笑し、ベッドに上つて眠る体勢をとつた。

「…………朝は任せたぞ、ティファ…………」

眩き、ユウは仮眠をとるために目を瞑つた。

そして再び、部屋の中に静寂が訪れる。
夏の夜の涼しさが、部屋にゆっくりと入り込んでいった。

第三十一話・託された禁術

ユウとネプチューの二人が別行動をとると書いて別れてから一
夜明けた。

現在の時刻は午前四時。小鳥達でさえ、まだ鳴き始めていない時
間だ。

それは、人間も同じだが、この時間にたつた一人、シルクだけは
目を覚まして部屋を出ていた。

彼女はまだ眠い目を擦りながら廊下を歩き、真っ直ぐにロビーへ
と向かっていた。

そして、外に通じるドアを開くと、やつぱり居た、と声に出し
て言った。

彼女の視線の先には、大きく口を開けて欠伸あくびを出しているティフ
アの姿があった。

「やつぱりいたって……貴女を呼んだのは私よ？ ホント、聞こえ
るのが貴女だけでよかつたわ」

「呼んでくれてすつごく嬉しいよ！ これでやつと、皆の役に立てる
からねっ」

元気よく言つたシルクを見て、ティファは微笑んだ。
そして、身体じ身體を翻して顔だけをシルクに向ける。

「さ、始めるわよ」

シルクは、その動作で靡なびいた金色に輝く長髪に見とれながらも、
大きく頷き、前回と同じ場所に向かうティファの後を追つた。

今日の早朝は意外と涼しく、薄手のランニングTシャツで来てしまったシルクは小刻みに身体を震わせながらも、ティファの説明を食い入るように聞いていた。

「 つていう事の為に、昨日は魔具を作つたつていうところまではちゃんと覚えているわよね？ …… それで今回は、実際に魔具を通して魔術を使つてもらうわ」

人差し指を一本立ててウインクし、にこやかな笑みを浮かべているティファにシルクは、はい！ っと大きな声で返事をした。

「いい返事ね。でもその前に、魔術を使う際は注意点があるの。それは、魔術の詠唱時と発動時は集中力を乱さない事。何故かというと、魔術の構成は術者の創造によつて生まれるので。特に、トウルなどの治療術は、乱れると治療する相手を傷つける事になる。そこは、気をつけてね」

「 …… もしかして、相手が死ぬって事もある？」

「もちろんあるわ。でも、貴女は大丈夫だと思つ。私に似ていて、どこか似ていないような感じがするから…… さて、そろそろ始めようかしら？」

何かを懐かしむような表情を一瞬だけ見せたティファはされどすくに笑顔となり、誤魔化しのように入差し指を宙に円を描くようにして回した。

だがシルクは、始めようと言われても何をすればいいのかわからず、首を傾げる。

「…………まずはどうやるの？」

「とりあえずは、魔具に魔力を送るようにイメージするの。身体の奥底にある何かを流し込むような、そんな感じ」

その説明で、何となく分かつたのか、早速シルクは目を瞑つてイメージを始めた。

ゆっくりと、身体の奥に溜まっているものを、体内を伝つて腕輪に流し込むように……

「大分流し込んだと思ったら、次は詠唱よ。私の言う事をしつかりと聞いて、間違えないようにね。…………世界を覆う生命の源は流れを変え、我思う者に注ぎ込み、死せる部位に生ける創造を与えるね。そう言った後に、トウルと言えばいいの」

言いながらティファは、腰に付けてある小さめの鞘から短剣を抜き、刃の部分を自分の手首に押し付けた。

「んっ！…………これで、術の対象は出来たわね。さあ、言った通りに詠唱してみて？」

「え！？ で、でも！」

驚くシルクの視線の先、ティファの手首からは、鮮血が流れ始めた。

だが彼女は、それを止めようとせず、ただただ微笑みながらシリクを見ていた。

「…………早くしないと私、死んじゃうわよ？」

「あ、うんっ！…………えと、世界を覆う生命…………あれ？えーっと、えーっと…………！」

「どうやらシルクは、ティファの命が自分の成功に掛かっていると、いつアレッシャーによつて、明らかに焦つていた。

だが、ティファの目と視線が合うと、自然と冷静になり、彼女の手首に手を近付けて再度詠唱を始めた。

「……世界を覆う生命の源は流れを変え、我思つ者に注ぎ込み、死せる部位に生ける創造を」とえよ。」

言い続けている途中、シルクの腕につけられている腕輪が青白く輝き出し、それを覆つようにして、星の形をした青い魔方陣が浮かび上がる。

「”トウル”……」

その声と共に、青い魔方陣がティファの手首にある傷口を包み、そして流れ出していた鮮血が止まり、傷口が完全に消えた。それは、成功したという事だ。

「……うん、完璧ね。これで安心できるわ

「よかつたあ……」って、え？ 安心？

「そ、安心よ、安心。別に深く考える必要はないけど……まあ、ユウの代わりに言つておくわ。その魔術で皆をよろしくね」

言つてウインクをし、シルクの額を人差し指で軽く突いた。

「……それと、私からのお告げ。あの子、カイの心得みたいなものは少し変える必要があるわ、必ず。その時は、私の代わりに自分の思った事を言つておいてね。……あの力は、止められる時に止めないといけないから……」

「え？ それってどういう イタツ

ティファの最後の言葉が気になり、問おうとしたシルクの額に、
彼女は「コッピンを一発当てて微笑んだ。

「人に聞くんじゃなく、自分で考えないとダメよ？……それじゃ
あ、また会いましょう」

そう言い残し、ティファは身体を翻して、リラックス・リゾート
とは別の方向に歩き出した。

対するシルクは一瞬、呼び止めようとしたが、ティファが最後に
言つた言葉と、見せた表情が微笑みだった為、シルクは彼女の後ろ
姿に微笑みを返した。

町の南東にある出口近くに位置している、旅人や商人が馬車を停
めるために利用する馬小屋に入ったティファは身体を光で包み、姿
と精神をユウと交換した。

そして、小屋の奥にある柱へと歩み寄る。

その柱には、右手だけ紐で縛り付けられた獣人族のクレアが彼を
睨みつけながら座り込んでおり、その近くには、大皿に盛られたピ
ザが置いてあつた。

それを見たユウは、苦笑しながら口を開く。

「……なんだ、食つてないのか？ せつかく助かつた命だ。無駄に

するな」

言いながらピザを一切れ手に取り、口に入れると、

「……何を企んでいるの？」

口に入れた部分を噛み切つて残った部分を話した時、とろけたチーズが少し伸びて糸を引いた。

ユウはそれを目で追いながら、クレアの問いに答える。

「企み、とも言えるかもな。実は、お前に頼みがある」「私に頼み？」

クレアはオウム返しに問い合わせ、より強くユウを睨む。

「ああ、頼みだ。……俺は、お前がいう神の力を持つカイ達とは別行動をとり、ネプチューンってやつと一緒にで、南東にあるカルディエールに向かう。だが、一人だけじゃあ心許無い。そのために、お前には俺の傭兵として同行してほしい」

その提案を聞いたクレアは、苦虫を噛み潰したような表情になつた。

「……私は死ぬべきはずだったのよ。だけど、まだ生きている。残つたのは、ズタズタにされたプライドだけよ……！それに、獣人族の任務には失敗が許されていない。どの道、私は獣人族として故郷に帰る事が出来ないの。……居場所がないのに……生きている意味なんてないでしょ……？」

目を伏せて俯いたクレアとは対照的に、ユウは微笑する。

それがどうしたと言わんばかりの表情で。

「その撃についてはネプチューから聞いた。それに、失敗した上に生きていろとバレたら、暗部が殺しに来るともな。……だから、だ。頭に触れてみろ」

「え？ 頭がどうし つ！？」

クレアが問いかと同時に手で頭に触れた瞬間、彼女は啞然とした。森で会った時と同様、本来なら長いウサギの耳があるはずなのだが、その耳は無く、代わりに短く白い猫耳が生えていた。

「な……なんで……耳が……」

猫耳を何度も触りながらクレアは、ハトが豆鉄砲を食らったような表情でユウを見た。

「ああ、何でも、魔術による一時的魔力分離によつて細胞を粒子化し、構成を書き換えたとか何とか言つてた。まあ、俺にはよくわからんが……ネプチューが言つには、獣人族には色んな耳があるらしいからな。一番目立つようなウサギの耳よりも、短めで目立ちにくく、隠す事が出来る猫の耳がいいと思つたらしい。後は服装と髪型、そして名前だな」

「ちょ、ちょっとまつて！ どうしてそこまでしてくれるの！？」

私は貴方を殺そうと」

「殺そうとしたのはお前自身じゃねえだろ？ それに、俺はお前を雇うつて言つてるんだ。それによつて得る物、そして報酬として与えられる物はお前の居場所だ」

最後の言葉に、クレアは再度、啞然とした。

この人は、私が欲している物を与えようとしているのか？ と自

問自答をしながら。

「…………やっぱり俺、カイの考えに少し甘えてるなあ…………」

「ユウは誰にも聞こえないように囁き、クレアの手を縛っている紐を解いた。

「あ、ありがと……」

「この時、クレアは縛られていた部分を摩りながら考えていた。
…………この男に、協力するしか道はないのかかもしれない、と。
そう決断し、その場で右膝を立てるようにしてしゃがみ込み、右腕を前に、左腕を後ろに回して、頭を下げた。

「私、獣人族の戦士クレア・マルギスは、貴方を主君とし、この命尽きるまで貴方の武器となり、片腕となります」

それは、獣人族独特の忠誠を表す誓いの儀だ。

それを知つてか知らずか、ユウは小さく頷いておき、その場に座り込む。

するとクレアは、何か思い出したのか、体勢を崩して座つてから彼に問い合わせた。

「そりいえば、私は何で生きていたの？ 頭に衝撃を感じた瞬間、意識が飛んで……気がついたらここにいて、生きていた」

「ああ、あれは空砲だ。撃つ直前にマガジンを抜いて、魔力供給を遮断したから石で殴られたような衝撃しか出ない。だが、頭に直撃だつたから、脳震盪を起こして意識が飛んだってわけだ」

その説明を聞いても、クレアは銃を知らない為、頭上にクエスチ

ヨンマークが浮かび上がるほど理解出来ていなかつたが、とりあえずわかつた事にし、数回頷く。

するとその時、小屋の入口が古い木材の擦れ合ひギイツという音を立て、開いた。

二人はその音に反応して入口の方を向くと、そこには両腕に荷物を抱えて二人の元に歩いて来る、ネプチューンの姿があつた。

「お？ クレアは目が覚めたってんか？ おはよーさん」

言いながらネプチューンは、右腕に抱えていた荷物、プラスチックで出来た四角いケースをクレアの前に置く。

「……何？ コレ？」

「疑問詞打つ前に開けて見るっぢや」

クレアはネプチューンに言われた通りにケースを開けて見ると中には、色取り取りのワンピースのような洋服及びスカートが数着と、武器が一式揃つていた。

その服を見たクレアとコウは思わず溜息をついて苦笑。対するネプチューンは満面の笑みだ。

「…………」「コレを私に着ろつて言つの…………？」

「当たり前ぜよ。どうせ変わらのなら、見た目からも変わる必要があるつちや。武器も同様んにね。それくらいしないと、暗部からは逃れる事は出来んよ？」

ネプチューンは自信満々の笑みで答えた為、クレアは満々と服を取り出し、着替えを始めようとする。

それと同時に、コウとネプチューンが揃つて小屋の外に出た。

その行動に安心したクレアは、服を脱ぎ始める。

朝の冷たい空気が肌に触れ、身体を少し震わせながら、早々とネ
プチューングが用意した服を着る。

第三十二話・それぞれの大陸へ

夏にしては珍しく涼しい朝の為、廊下に設置されている賢石”エノリル”は昨日まで見せていた光を灯しておらず、冷氣も出していないかった。

だが、そんな事には全く気付かずに嬉しそうな笑みで廊下を歩いているシルクは、真っ直ぐに自分の密室へと向かつていた。そして中に入ると、いつの間にかカイは田を覚ましており、着替えも済ませていた。

その事に驚いたシルクは、思わず入口の上の壁に掛けたある時計を見る。

「…………まだ四時半だよ？」

「わかつてゐる。何か、早めに田が覚めたんだ」

カイは頭を搔きながら、それよりつと言つて話を続ける。

「朝早くからどこの行つてたんだよ？」

問いかに、シルクは笑顔を作つて答えた。

「ししょーのところだよつ。それで、やつと田の役に立てるよつになつたんだ！」

「し、ししょー？？…………ってか、田の役につけだつていう意味なんだ？」

「治療の魔術を教えてもらつたんだよ。どんなケガでも治せるやつ」
「いやつをねつ！」

嬉しそうに言つシルクを見てカイは、それはよかつたなと呟つて

微笑した。

その返答に彼女は、両手を腰に当てて胸を突き出す。

「そりそり、よかつたんだよ！ これからは私にも頼つてね。それで、カイの決心はついたの？」

カイは、急に話をえたシルクに戸惑いつつも、一瞬曇らせた表情を無理に微笑へと変えた。

「……ああ、まとまつたよ。俺は、森で言つていた考えを、助けなきやいけない命は助けるつてのを出来るだけ貫き通したい。そして、次にユウに会つた時は、納得してもらえるようにしなくちゃな！」

「うーん……つまりは、偽善を貫き通すんだね。」

「シ、シルクもシヴァーと同じ事言つんだな……」

言つてカイはがっくりと肩を落として俯いた。

それを見たシルクは内心、咳く。

……この考えをしょーに頼まれた通り、いつか修正しなきゃいけないんだね、と。

そしてシルクは吐息を一つし、漏れた笑い声をそのまま、あははと出した。

それにつられて、カイも同じように笑い出し、二人の笑い声が部屋中に響き渡つたその時、一人の頭に枕が一つずつ直撃した。

それと同時に、シヴァーの喝が響く。

「……一日連続で、姫の安眠を妨害するとは…………しかも今度はシルクまでもが妨害するか！ 貴様ら、一度死なないとわからないようだな！」

言つてシヴァーは音を立てずにベッドの上段から降り、手に持つた鞘

から長剣を抜こうとした。

「わああー！すみませんー！すみませんー！」

一人が声を揃えて頭を抱え込む。

するとシヴィアは、二人の頭上に拳を落とした。

その後、ベッドの下段に座る。

「……まあ、時間が時間だ。今日は早めに元気を出さねば」

シヴィアはそう言いながらベッドの上段に上り、ミーナを起こし始める。

その間、カイとシルクは何故拳で済んだのかわからず唖然としていた。

そんな一人を見たシヴィアは、呆れた表情で言葉を掛ける。

「お前ら、早く出るぞと言つていいのだから、準備をしろ。遅いと置いて行くぞ？」

その言葉に一人は、慌てて準備を始めた。

そんな中、シルクは服を脱ぎながらシヴィアに向う。

「……そういうえば、これからどうやって行くの？」

その問いに、ミーナのパジャマを脱がしていたシヴィアは、ふむつと言つて答える。

「ここからひたすら北西を指すからな……とりあえずは馬車の確保だ。幸い金はあるのでな、こんな朝早くに頼んでも少し多めに出せばア承してくれるだろう」

シヴァアは水色の小さなドレスをミーナに着せると彼女は、わふーっと言って両手を斜め上に挙げて、軽快にベッドの上段から降りた。そんな彼女を見てシルクは微笑みながら、フリルの付いた白い服を着る。

「そういえば、列車代と初日の宿泊代はタダになつたんだったね。それじゃあしばらくは、お金に困らなくつて済むんだ！」

「その通りだ。それよりカイ、どうしてベッドの上で蹲つているのだ？」

言つたシヴァアの視線の先、向かいのベッドの上で、カイは顔を隠すようにして蹲つていた。

だが、彼女の問い掛けに顔を上げると、ビロかホツとしているような表情で答える。

「いや、皆が着替え始めたから見ないよつて部屋を出よつと思つたんだけど、話を聞いておかないといけないから、とりあえずこいつした」

「あははは～、別に見てもいいんじゃない？？」

窓際に座つて二口二口しながら言つたミーナにカイは苦笑しながら、ベッドから降りて立ち上がる。

「さすがにそれは……なあ、シルク」

「いいんじゃない？？」

「シルク……ミーナに会わせてくれるのは嬉しいが、お前がそんな事に賛成するとは……先生、悲しいぞ……」

言ひながらシヴァアは、ガックリと肩を落とした。

それを見たシルクは慌てたフリをして、[冗談だよつと]と書いて笑つて見せる。

するとシヴァは目を見開いて喜び、長剣が収められている鞄を片手に、ベッドの上段から降りた。

その表情は、満面の笑みだ。

「まあ、私も冗談だ。さて、準備も整つた事だからな、そろそろ行くか」

手に持つた鞄を腰に挿し、ミーナに手を差し出す。すると彼女はその手を繋ぎ、シヴァの横に並んだ。

「さあ、急がないと朝一で馬車が手に入らないよつー。」

シルクは部屋の時計を指で示しながら口伝える。時刻は、午前五時を過ぎたところ。

それを見たカイは、なら急ぐしかないぜ！ と言つて、シルクと共に走つて部屋を出て行つた。

その一人を見て、シヴァはため息をつきながらも、ミーナと共に部屋を後にした。

小屋の外に出たコウとネプチューは、明るくなり始めた空を見上げながら、小屋の壁に寄りかかっていた。

「……ネプチュー、昨日の夜はどこに行つてたんだ？」

突然の問いに、それどネプチューは普通に答える。

「旧友のところだつちや。軽く情報集めと、一杯飲んできただぜよ」といながら、んぐくっと笑つたネプチューは、懐から、刻んだ葉を紙で丸められている煙草を取り出して、ついでにこれもやんねつと言いながら口に銜え、次に取り出したマッチで田を点ける。そして、もう一本をコウに向けた。

するとコウは、それを手で制す。

「俺は吸わない。肺を壊して死ぬなんて無様なマネはしたくないからな」「それは残念だつちや……」

言つてネプチューは煙草を吸つと、先端が赤く焼けて灰だけが残つた。

そして、煙草を口から離し、白い煙を吐く。

その煙は空へと舞い上がり、風によつて搔き消された。

「……わっちは、聞きたい事があるんぜよ。 どうしてわっちはを選んだん?」

「……お前がカイに、俺の世界を元にした神話を教えようとしてた時、自分がもつてゐる情報の多さを自慢げにしてたろ? あの時、離れたところで聞いていたんだが、それに気付いたシルクが、お前らの会話を止めてしまったからな。だから機会を窺つていたんだが……」

…丁度いい時にあれだ

「あんさんも人が悪いっちゃねえ。わっち、盗み聞きされた事にショーックッ！」

顔をクワッと強張らせて叫んだネプチューンにユウは苦笑し、上を見上げる。

そしてネプチューンは再度、んくくつと笑つて煙草を銜え、少し吸う。

と、その時だ。

小屋の扉がゆっくりと開き、中からクレアが出てきた。

その姿は、紅のワンピースを着、同じ紅に黒のショックと白いラインが入った、膝あたりまでの長さがあるスカートを穿いており、長かつた茶色い髪は短く、不器用に切られている。

「凄い変わりようぜよ。サイズは合つてたかんな？」

「ええ、合つていたわ。 それよりも、何で鉤爪じゃなくてこんな物なの？」

言いながらクレアは、スカートを捲り上げて太股辺りに装着されている革のケースから小さく、刃が少し曲がったダガーナイフを抜いた。

それを見たユウは、微笑して答える。

「お前ほどの身体能力を持つたヤツに、鉤爪なんて振る動作が大きい武器はミスマッチだ。いくら洗脳されていても、動きは全て対象の身体能力の限界までしか出せないそうだ。なのに鉤爪で隙がないくらいの振りが出来るなのなら小振りのダガーナイフにすると無敵だろ？」

「ま、まあ、確かにそうだけど……」

まだ、若干躊躇いの見えるクレアに対し、コウは吐息をした後、一つの提案を出す。

「……なら、そこににある薪で試してみろよ？」

そう言いながらコウが指でさし示す方向には、薪が山積みになつて置かれていた。

冬の季節、暖炉に使うのだろうその薪を、コウは一本だけ手に取り、構える。

「これを上に投げるから、お前は武器の流れに身を任せてこれを切り刻め。

いいか？ いくぞ……」

言つてコウは、高々と薪を上に投げた。

そしてそれが落ちてきた時、クレアは身構えて腕を素早く動かす。目に見えない速さでスナップを利かせつつ、ダガーを振るう。

そして、腕を止めた時には、果たして薪は粉々と言つていいほどに切り刻まれていた。

同時に、コウの手から拍手の音が生まれる。
刻まれた薪が落ちていく光景を見て一番驚いていたのは、クレア本人だった。

彼女は、信じられないという表情で自分の手を見、次にコウを見る。

すると彼は頷き、口を開いた。

「……決まりだな。 よし、行くか

それを合図にコウはバッグを担ぎ、ネプチューンを見る。
するとネプチューンは、左手の親指をグッと立てて、銜えていた

煙草を右手で掴み、地面に落として踏み潰した。

「……そいじゃあ、まずは港に向かうつむや。そこから、南東にあるカルティエール大陸の王立図書館に向かうんぜよ。ま、最優先は船の確保だんな」

「とりあえず、長旅つて事が分かつた」

言つて頷き、ユウはクレアの方を向く。
すると彼女は、とっくにダガーナイフを收めており、準備万端の状態だった。

「それじゃあ、改めて、私はクレア・マルギス。今、この時から、私は貴方の傭兵として貴方達同行させてもわづわ。よろしく、ネプチューン。そして私の主君、ユウ……」

「ユウ・ウラハスだ。……にしても、名前は変えないんだな」

問いかクレアは、ええっと言つて頷く。

「さすがに名前は変えたくないの……『めんなさい』
「気にする事ないっちゃ。何とかなるつてん……さて、船を確
保しに、港へと急ぐぜよーー！」

言つてネプチューンは歩き出し、ユウとクレアは微笑しながらその後について行つた。

運命は、決まっていると言われている。

確かに、決まっているがしかし、変える事は出来ると信じられている。

今、それぞれの目的の為にそれぞれの道を行く彼らは、そう信じているかも知れない。

その頃から、歯車は軋み始めていた……

第三十三話・それぞれの大陸へ（後書き）

今回も、一覧になつていただきありがとうございました！
ども、Inuimoです

今回で、第一章を終えた形となります
もう一つの作品よりも区切りが短い事になつてしましましたが
なんとか両方とも同じ話数で保っています
で、バトルシーンがあまりないという事になつていますが
次章からは増えてしまう気がします
それでは、次話からは第一章となりますので
これからもよろしくお願ひします
それでは、長々と失礼しました

第三十四話・笑う科学者

廻るよ廻るよ、運命の歯車
それはいつ止まる?

足搔くよ足搔くよ、運命の者達

彼らは何処へ行く?

迫るよ迫るよ、絶望への足音

その音はいつ来る?

全ての答えは、終わりが集結する時に

町外れの郊外。

そのとある場所にある地下施設。

そこは空気が悪く、鼠ねずみが通路の天井にあるパイプの上を走り回り、天井には逆さになつた蝙蝠こうもりが、壁の所々は蜘蛛の巣が掛かっている。

その施設の最深部とも言える場所。

金属で出来た機械などが敷き詰められた研究所の天井に設置されている蛍光灯は、四人の人影を照らしていた。

その内の三人は、中央にある巨大なガラス張りの水槽に背を向けるようにして並行となつて立つており、真ん中に白衣を羽織った白髪の男と、両隣に一人ずつ体格のいい大男が立つている形だ。

そしてもう一人は、その三人に向かい合うようにして立つている小太りの男だ。

その小太りの男は、茶色のスーツを乱しながら、怒りの篭つた形相で白髪の男を怒鳴つてゐる。

「だから、お前は何故やれと言つた事をやらずに、勝手な事をやつてゐるんだ！」

その言葉を聞いた白髪の男は小首を傾げ、目元に隈くまの出来た不健康そうな表情で笑みを作つた。

「何を言つてるんですかあ？ 僕は頼まれた事をちゃんとやつてますよ？ 最強の兵士育成、それを今は彼女で行つてあるんですよ」

言いながら平手で示した先、男の後方にある水槽の中には、黄土色の液に沈められ、全裸の身体に何箇所ものチューブを差し込まれた女性の姿があつた。

彼女は赤髪を液で揺らしながら、無表情で眠つてゐる。

「あれが、あれが最強の兵士育成だと！？ 笑わせるな！ 前回もそう言つて任せた結果、逃げられてしまつたではないか！！」

小太りの男は、拳を作つた片手を斜め下に力一杯振つた。

「キース、これ以上お前にに対する研究費投資は無駄だとわかつた！ 即刻、ここから立ち去れ！！」

言った男の額には、怒りで血管が浮き出ていた。

対するキースといつ名の白髪の男は、不機嫌そうな表情をし、眉を寄せた。

「あつれえ？　まるで全部の権利が自分にあるみたいな言い方じやない？……昔、全員殺すはずだつたテクノスのお偉いさんの中で唯一命乞いをしてきたキミを生かす代わりに、僕の研究に投資するつて約束だつたよねえ、ドライゼンさん？」

ドライゼンと呼ばれた小太りの男は、奥歯を噛み締めて再度怒鳴つた。

「だが、その全てはワシの金だ！　ワシの言葉で全てが動く！！無能のお前に、権利があると思うな！？」

「無能？　くふふつ、僕が無能だつて？　ゼロ・ツー、僕は何だい？」

キースが問うた先、彼から見て右側にいる大男ゼロ・ツーは低く響く声で、はいと答えた。

「我が親であり主人の貴方様の名は、天才科学者キース・ヨルムンガンド。この世界のテクノス王国で国王直属の極秘研究組織の代表となり、後に国王直下の將軍級および元老院議員である者数名を開戦の数日前に暗殺。そして報復戦争を開戦させ、ドライゼンと共にシユメール大陸の首都・キエンギの地下で研究を再開。そして今に至ります」

ゼロ・ツーは言い終えると一礼した。

そんな彼を、キースは満面の笑みで見て拍手を送る。

「よく出来ましたあ～。でも、一つ付け足しね？ 無能のドライゼン、と」

「了解。記憶回路の人物欄、ドライゼン・セグライトの情報を上書きしておきます」

キースは笑顔のまま、優秀だなあつと言つて、横にいるゼロ・ジーを肘で突いた。

だが、ドライゼンの方に顔を向けた時は無表情だ。

「…………さて、ドライゼンさん？ キミのお金は自分で動かしているつているのを知れてよかつたよお。つまりは、もつと裏で動いている人は誰もいないって事。つまりはキミをどうにかすれば、僕は好きだけ研究が出来るつて事」

不気味な音程で喋るキースを見てドライゼンは、それがどうしたつと言おうとしているが、言葉が詰まって声が出ない。

その間にも、キースは言葉を続けている。

「つまりは僕が成功した方法を使えばいいって事。つまりはキミを操り人形にしちゃえればいいって事。くふふつ、ゼロ・ツー、ゼロ・スリー？」

言つてキースが右手を頭の辺りまで上げ、指をパチンッと鳴らした。

その後は一瞬だ。

キースの両隣にいた大男は、いつの間にかドライゼンの腕を片方ずつ掴んでいた。

その状態にドライゼンは驚き、必死に逃れようとするとビクともしない。

「な、何の真似だ！？」

「何のマネ？ それはカンタン。キミには特殊な細工をして、僕の言いなりになる操り人形になつてもらうんだよお？ ……それじゃあゼロ・ツー、ゼロ・スリー、ソレを術式室に連れて行ってあげてね～」

放つた命令に、一人は声を揃えて、されどゼロ・スリーはゼロ・ツーよりも少し高い声で、了解つと言いながら、騒ぎ続けているドライゼンの腹部を殴つて氣絶させ、研究所を出て行つた。

すると、その二人と擦れ違つよう、一人の男が入つてくる。

その男を見たキースは、満面の笑みになつた。

「これはこれはあ、クライアント依頼主さんじやないですかあ」

「相変わらずだな、ヨルムンガンド」

そう言つた男は、オールバックで固めて整えられた茶髪を片手で搔き揚げ、真つ黒なスーツについたホコリを掃いながら、キースの元へと歩み寄つた。

するとキースは、スーツの男の腰に添えられている鞄を指でさす。

「キミも相変わらず、持つて来ないでつて言つている武器を持つて來てるねえ……僕、こう見えて刃物が嫌いなんだあ」

「いつもメスを扱つてるヤツが何を言つている？ メスに比べれば、私の刀など弱い物だ」

「あはー、痛いとこ突かれちゃつたなあ～」

言いながら、恥ずかしそうに頭を搔くキースを無視し、スーツの男は彼の後ろにある水槽を見上げた。

その中に入つている赤髪の女性を見て、

「…………何をするつもりだ？」

問いかに、キースはニヤリと笑い、答えた。

「最強の兵士育成だよお？ 前の被験体には逃げられちやつたからねえ～」

でもうと言いながら、キースも水槽を見上げる。

「新しい被験体を手に入れたから、前回のデータを使って再開発しているんだ～」

「最強の兵士育成、か。その兵士は、普通の兵士とはぢり違つんだ？」

問われたキースは、水槽からスーツの男へと視線を移し、小首を傾げて人差し指を立てた。

「それじゃあ逆に問うけど、兵士にとつて必要なのはなんだい？」

「…………強さ、判断力、忠誠心、冷静さ、勇猛さだ」

「要らないのは？」

「弱さ、恐怖心、反乱思考、無能だ」

「…………」
言つとキースは満面の笑みでスーシの男に拍手を送つた。

「全問せいかい！…………でも、もつ一つ足りないよ～？」

キースは口の端を吊つ上げて、皿を細めた。

「それはね 感情だ、人に対する感情。感情無き兵士は、それこそより命令を聞き、非道に、鬼畜になれる。…………僕はね、人であ

りたいから人を忘れているんだよ

研究室内には、くふふつといつ不気味な笑い声が響き渡る。

四つの大陸に囲まれるようにして位置しているカナン大陸。
そこは、世界の商業の中心と言われ、ほとんどの町で産業が発達
している。

だがそれでも、産業によつて消費されていく資源の量よりも、増
加する資源の方が多いというのが、この島の特徴もある。
実際、この大陸には町が三つしかなく、大陸を占めているのはほ
とんどが草原や森などの自然なのだ。

その理由は昔、資源を一方的に消費したがために大地が枯れ果て、
緑が一つ残らず消えてしまつたため、産業グループの間で作られた
“伐つた木は一倍で増やせ”によつて、木や花の苗などを植えた
りして自然を広げ、それを餌とする動物が増え、自然の摂理が戻つ
てきたからだ。

その為、今のカナン大陸には広大な草原と数多くの動物がいると
いうわけだ。

そんな草原を適度な幅で刈り、土を軽く掘り返してから均して作
られた、町と町との間を繋ぐ街道を、馬一匹と馬車一台が通つてい
た。

「臣の馬の体格は大きく、背の鞍の両脇には、馬車に取り付けられている木材が鐙^{あぶみ}の代わりに繋がれており、それによつて馬車が引かれている。

その臣が噛んでいる轡^{くわ}に付けられた手綱を、馬車の先頭に座っている中年の男が掴んでいた。

そして、彼の真後ろにある小窓からは、ピンク色の長髪をポニーテールにした、ミント色のスース姿の女性が顔を出していた。

「それで、夏休みを利用して世界中の町を見せる授業を？」

「はい、生徒達がどうしてもこの目で見て回りたいと煩いので、いい機会だと思いまして。……それにしても、いい馬をお持ちですね？」

褒め言葉、とも言えるその言葉に、中年の男は前を向きながら笑みを作つた。

「ありがとよ。ここ何十年の仕事をやってて、マイシングを褒められたのは久しぶりじゃ」

中年の男はそのままの笑みで、とにかくと前置きをして振り向いた。

「お前さん達のミーン大陸では、バビロニア皇國はその如きも伏せている教育方針らしいが……何故、わざわざそのバビロニア側の大陸にも向かうんじゃ？」

「……やはり知つていましたか。ですが、私にとつてバビロニアは、この世界にある一つの国です。拒絶や差別心など、私にはありますよ」

スース姿の女性が頷きながら言つと、中年の男は感心したように

再度笑つた。

「それは嬉しいの、わしはバビロニア生まれじやからな！ 気に入つた！ わしはネルガル・グランシジヤ。馬車を使いたい時は呼んでくれ、割引してやる」

「それはありがとうございます！ ちなみに私はシヴァ。……では、私の教え子も紹介させていただきます」

言つてシヴァと名乗つた女性は、同じ馬車に乗る者達の方、馬車の内部へと向く。

そこには、長椅子が向かい合つており、シヴァの方を向くようになつている椅子には、会話をしながら手遊びをしている一人が座っている。

楽しそうに笑つている、水色の長髪で髪と同じ色のドレスを着た小さな少女と、迷いながら苦笑している、白くフリルの付いた服を着ている青髪の少女だ。

シヴァはそんな二人を、水色の長髪の少女から順に指で示した。

「あちらがミーナ、そして隣がシルク。そしてあれが

「一人を示した指は次に窓の外を見ている、あれと呼ばれた銀髪の少年を示した。

「カイです。今回の旅も、彼の強い要望があつてこそなのです」

カイは一瞬、名前を呼ばれてキヨトンとした表情で振り向くが、すぐに窓の外へと視線を戻した。

その表情は、窓の外の光景に感動しているような感じだ。

「…………つまりは、彼のおかげでわしらは出会えたわけじやな。感

謝せねばなあ」

言い終えたのと同時に、正面に向き直したネルガルは、おつといふ声を出して再度シヴァに視線を戻す。

「そろそろ到着じゃ。…………よつゝん、二つの大陸に船が出る港町”アッシリア”へ。バビロニアとの交流が深いアッシリアは、お前さん達を歓迎するぞ」

言いながらネルガルが指で示す方向には、建造物の影がいくつも見えた。

その光景を、いつの間にか正面の小窓からシヴァを退けて顔を出していたカイは、歓声を上げていた。
それに続き、シルクとミーナもわずかな隙間から顔を出す。
上げるのは、カイと同じ歓声だ。

「お前ら、少しは落ち着いたらどうなのだ……」

後ろで呟いたシヴァはしかし、微笑を浮かべて吐息をついた。

海の波が風を纏ながら、港へと叩き付けられる音が響く。それに合わせるように、港に停められているいくつかの船は揺れ、されど一点の位置に留まっていた。

その船を見渡すようにしている短めの茶髪の女性は、頭に生えた獣人の証である白い猫耳を微動させながら、潮混じりの風で煽られている紅をベースにした黒のチェックと白いラインの入った、丈の長いスカートを手で押させていた。

その、時々に捲れて露出する彼女の太股には、革で出来たベルトの付いたケースが巻かれており、膨らみのある部分の上部には武器の柄が見える。

だが、彼女はそれを気にせず、ただ船を見渡していた。

するとその女性の後ろ、造船ドックから一人の青年が扉を開けて出て来た。

「……どうやら、船は賢石がないと動かないらしい。だから今、ネプチューンが知り合いの所まで取りに行つた」

言いながら青年は、風で靡く黒髪を気にしながら、獣人の女性の隣に並んだ。

そんな彼を見た獣人の女性は、思わず苦笑する。

「風が冷たいけど、ユウは寒くないの？」

彼女の視線の先、ユウと呼ばれた青年が着ている服装は、身体にフィットした黒色のタイツのようで、その上にいくつもの装備が施されていた。

その中には、獣人の女性が太股に巻いているケースと同じ物が同

じ位置に巻かれており、四本のナイフが差し込まれてる。ズボンのベルトにもケースが二つ装着されており、ナイフが一本ずつ差し込まれている。

腰の横には長剣が收められてる鞘と、反対側には銃とチャージャーが入ったホルスターが装着され、それぞれが黒光りしていた。そしてそれらを隠すように、薄く赤いロングコートを羽織つていた。

「まあ、薄いように見えても、防寒性は高いから大丈夫だ」「新しい服に着替えようと思つた事は？ それじゃあまるで変態だし……」

「へ、変態つて……今のところは思つてない。コレが一番動きやすいからな」

「コウがそう言つと獣人の女性は、ふうんっと言つて返し、海の方へと視線を向けた。
と、その時だ。

造船ドックの扉が先ほどと違つて勢いよく開き、檻襷はなわ切れた口一
ブを羽織つた男が出て來た。

「ユウ～、クレア～、お待たせっちゃー」

二人の名を呼びながら両手を大きく振つているその男は、右手に持つてゐる青白い石をクレアと呼んだ獣人の女性に投げた。

それを受け取つたクレアは、軽く男を睨み付ける。

「ちょっと、投げないでよネブチューン！ ……それで、コレが船を動かす賢石？」

「そうぜよ。賢石”エア”つづーその賢石は、水を司る物っちゃん。水を噴出、吸収する事が出来るから、噴水や船の動力などに使わ

れてるんぜよ」「

答えながらネプチューンと呼ばれた男は、一人の下へと歩み寄つた。

「にしても、賢石つてやつは便利だな。俺の世界には無かつたぞ、そんな物」

「コウの世界つてのは、ここに来る間に話してくれたジードつて所よね？ 似たような物はあつたの？」

クレアの問いにコウは、少し間を置いて答えた。

「…………記憶石だ。触れた者に、込められた記憶を見せたり、いい物では込められた者を実体化する事が出来る」

「それは今、持っているの？」

「ノーノメントだ」

コウはそうキッパリと言つて、クレアの方を向いて片手を出す。それに気づいた彼女はその手に、持っていた賢石を置いた。

「…………それじゃ、行くか。ネプチューンの友達とやらが気を変えない内に」

「あ、わっちを信用してないんね！？」

驚いた表情で言つネプチューンを無視し、コウは歩き出した。

その後ろを、クレアが苦笑しながらついていく。

それからしばらくの間、ネプチューンの声だけが港に響き渡つていた。

港町”アッシリア”

ここは、北西に位置するシュメール大陸と、南西に位置するバビロニア皇国の首都・バビロンがあるアッカド大陸、その一つに船を出しているさほど大きくはない町だ。

この町では、現在午前七時を回つており、漁港の市場ではもう動きが始まっていた。

その為町中には、目覚まし時計のように活気のある声が響き渡っている。

そんな声が遠く聞こえる町に入口には、去つて行く馬車の後ろ姿に大きく手を振るカイとシルクがいた。

また、その横には、馬車内で遊び疲れたのかシヴァに背負われて眠っているミーナの姿があつた。

そして、馬車の姿が見えなくなり、手を振るのに疲れた一人は一息つき、揃つてシヴァの方を向いた。

「さて、アッシリアについたけど、どこに行くんだ?」

「もちろん船だ。先に食事と行きたい所だが、ネルガルさんの話によると、八時に大型の客船が出航するらしい。乗船券はギリギリまで買えるそうだから、焦らずに船まで向かい、その後に食事でもする」としよう

「…………って事は、美味しい物が食べられるんだね!? やつたー!

!—!

言いながらはしゃぐシルクは、シヴァの背に抱まって寝ていたミーナが起きた事に気づくと、優しく抱き下ろして彼女の手を引いて歩き出した。

と、その時だ。

シヴァだけが、ある殺氣を感じ取った。

背筋がぞくりとする感覚。

その殺氣は小さな一点に絞られ、されど強大だった。

その為シヴァは、とつさに長剣を抜き、瞬時にその位置へと身構えた。

刹那、大きな金属音が響くのと同時に、彼女の両隣の地面が一箇所ずつ砕けた。

「　くつー！」

シヴァは手に伝わってくる振動を力で押さえながら内心、「コレがエターナルの強度か、頼もしいと咳き、急いで振り返ってシルクに資金の入った財布を投げ渡した。

「シルクはミーナと共にシュメール大陸・キエンギ行きの乗船券を買って来い！ そして、船の前で待つていろー！」 カイ、狙いはたぶんお前だ！ 時期にあの夜に来た侍女も現れるかもしぬから、裏路地に入つて被害を最小限にしろー！」

一息つき、殺気がした方向に身構え直す。

「私は仕掛けて来たヤツを仕留める。……八時に船で会おう

その言葉にカイとシルクは黙つて頷き、カイは裏路地へ、シルクとミーナはパニックになつてゐる市民の間を搔い潜つて乗船券を買つて港に走つた。

「……さすが私の生徒だ……」

啖きシヴァは口元に笑みを作り、全力で走り出した。同時、一度目の金属音が響く。

使用しない木箱や、それぞれの家の洗濯物などが多少の狭さがある裏路地に多くあり、その中をカイは走り続けていた。

時には木箱を蹴ってしまい転びそうになるが、何とか体勢を保つて走る。

向かうべき場所は港。

彼はそれを知っていた為、途中の分かれ道では町の中心を目指すようにしていた。

その間、彼は一つの音を気にしていた。

背後、先ほどから追つて来ている足音が一人分だ。

そのため彼は、後ろ腰の辺りに装着されている、三つに分解された諸刃の剣を組み立てて足を止めた。

そして身体を背後に翻し、身構える。

すると視線の先、カイが倒した木箱の上に、一人の侍女が立つていた。

その侍女は、主に白を強調した黒混じりの侍女服を着ており、乱れた白い短髪を直す事無く、スカートの裾を軽く持つて会釈した。

「お久しぶりです、カイ・エディフィス。貴方は一度田の出会いとなります。……マスターの忠告に反した為、これより交戦体勢に移行させて頂きます」

一息つき、侍女は両手で拳を作つて身構える。

「この場合、私は自己の紹介をすべきと判断します。……私の名称はヘル。マスターのパートナーであり、召使いとなつています」

「あ、ああ、よろしく」

「マスターの言動パターンによるところの場合、血の雨を降らせてやる”といづべきとも、判断します。それでは」

瞬間、ヘルと名乗った侍女は、木箱を蹴つて走り出した。
その動きに対応する為、カイは両刃の剣を斜めに構えて前へと走る。

すると同時に、一つの金属音が響く。

「殺させて頂きます」

「意味わかんないって!!」

叫んだカイは、柄で堪えているヘルの拳を左へ流し、刃を相手の首に叩き込もうとした。

だが、それを一瞬で察知したヘルは、拳を振り切つて姿勢を低くし、刃を回避した。

そして、振り切つた拳は平手となつて地面に着き、次に軸となり彼女の身体を浮かせた。

同時、彼女は浮いた脚をカイの腹部に打ち込む。

「ふつー?」

それによりカイは、息を全て吐き出しながら、ヘルが蹴った方向に従つて吹き飛んだ。

普通の蹴りではありえないほどの距離を、だ。

そのまま、積み上げられた木箱へと豪快な音を立てて突っ込んだ。

「目標、軽傷。動作……確認」

「……いつてえ！！ 何なんだよ、お前は！？」

そう叫びながら、崩れ碎けた木箱の中から出て来たカイは、諸刃の剣を放さないようしつかりと握る。

対するヘルは、カイの武器を見、次に自分の拳を見た。

「……目標の武装と自分の武装の比較により、不平等と判断。マスター護衛用シークレット回路を使用し、武装の追加と対等化を行います」

ヘルはそう呟いた後、両手を広げて掌てのひらを仰け反らせる。すると彼女の手首の位置からは一本ずつ、細めの鋭い刃が飛び出した。

それを見たカイは驚きながらも苦笑。

「な、何でもありつていいたいのかよ……だけど」

言つて、カイは諸刃の剣を分解した。

そして、中心部分だけを腰に収め、残つた刃の柄を左右の手に一本ずつ持つ。

その構えは双剣だ。

「諸刃の方は対多人数戦用だ。そしてこつちは、対個人戦用！」

構えた右の刃を前に、左を後ろに下げるで身構える。続けて、真下にある木箱に足を添え、蹴った。

勢いをつけるために蹴った木箱は後ろに、木箱で加速したカイは一気に前に出て、ヘルとの距離を縮める。

そして、右の刃を水平に振った。

それは容易に流されるが、二撃目は左の刃では無く左脚だ。思い切り振った左脚は、ヘルの右肘に直撃し、左側がわずかに空いた。

そこを狙つてカイは、左脚を振り切つて、同時に左の刃を振りうとした。

だが、その時だ。

ヘルの胴体が右腕と共に素早く反れ、予想外の角度まで曲がつた。そして、カイの顔面に蹴りが入つた。

胴体を反らした際に浮いた右脚が、だ。

「 肉を蹴らせて……」

だが、カイは蹴りを無視しつつそう叫んで左の刃を落とし、そのままヘルの右腕を掴む。

「 骨をたあーつ……」

カイの左腕は、禍々しい姿を露^{あひわ}にして光っていた。

第三十六話・狙撃手

アッシリヤの町に数多くある建造物の一箇所。その屋上には一人分の人影があつた。

その人影は全身を不規則な色彩の迷彩服で包んでおり、匍匐体勢ほふくたいせいで、長い杖のような狙撃銃スナイパーライフルの上部に装着されているスコープを覗き込み、ある一台の屋台を見ていた。

『マスター、定時報告です。現在、逃走中の目標を視認。距離が詰まり次第、交戦に入れます』

「わかった、早めに殺せよ？ 仕事は長引くほど状況が悪化する。そう、悪化するんだ」

『ヤー、マイマスター』

その返事と共に、ブツという音を立てたのは、フードを被つているその者の左耳の位置する場所に膨らみを作っている無線機だ。そして、声からして男だろうその者の首には、”フェンリル・ヴァナルガンド”と名前の彫られたドッグタグが掛かっており、風で揺れて金属音を立てていた。

「…………動きがねえ…………」

咳きながらフェンリルは、内心焦っていた。

まさか狙撃の銃弾を剣で斬る、または弾くなんてな、と。

彼が見ている先、一台の屋台の裏には標的が一人いる……はずだ。銃弾を長剣で斬るか弾くかをした者が。

その者は一度、屋台の裏に隠れて以来數十分、髪の毛一本でさえもフェンリルの視界に入っていない。

その事に疑問を抱きつつ、彼は引き金に掛かつた指を放さないよ

うにしていた。

その時だ。フェンリルの耳に掛かっている無線機が、プツと音を立てて、次に声が来た。

『マスター。目標が停止し、武装を展開。交戦を開始します』

言われ、フェンリルは無言で頷いた。

すると、その頷きがわかつたかのように無線機がまた、プツという音を立てた。

報告を聞いたフェンリルは、声の主の居場所へと目を向ける為に顔を上げた。

わかるはずもないが、だ。

だがその時、視野に妙な動きがあった。それは素早い動きだ。わずかに靡いていた、ピンク色の長髪が見えて、

「 ッ！？」

その方向をフェンリルは、反射的に見た。

彼の居る屋上から左に十メートルほど離れた建造物の外側に取り付けられている螺旋階段を。

その螺旋階段には、一つの動きがあった。

ピンク色の髪が靡くほど素早く走つて階段を上つてゐる、ミント色のスーツ姿の女性である。

それは、銃弾を真つ二つにした後、先ほどまでフェンリルが見ていた屋台の裏に隠れているはずの者だ。

その本人が全く違う場所に、その上フェンリルに近付いていたのだ。

「何でアイツが！？ …… クソ！？」

フェンリルは焦りながらも、その方向に狙撃銃を構え、上部のス

「一歩を覗き込んで引き金に人差し指を添える。

狙うはまず胴体。

そこでふりつき、速度が緩んだ所をヘッドショット。

「ふうー……」

息を少し抜き、同時に息を止めて集中する。そして、引き金を絞った。

すると、ダアンツともパンツとも聞こえる銃声が響いた。だが、次の瞬間。

狙つた女性は、手を添えていた長剣を抜き、またしても銃弾を斬つたのだ。

同時、スコープ越しに彼女と田が合った。

「 ッ！ー！」

とてつもない殺氣。

それは離れていても、スコープ越しでも感じるほどだ。

「…………殺し屋の俺が、殺氣で悪寒が走るとはなあ…………」

ヤバイ。

その言葉がフェンリルの頭の中で、警報のように連呼されていた。そして彼は、その言葉に従うよろしくして立ち上がり、狙撃銃に付いているスリングを肩に担ぎ、長髪の女性が居る方向とは逆に向かつて走り出す。

その方向には高い展望台があり、壁は他の建造物と同じレンガで出来ている。

それを見ながら彼は、迷彩服のポケットから一つのスイッチを取り出した。

「退路はこの時の為に！ そり、この為になーー！」

言つてスイッチを押した瞬間、レンガの壁が爆発し、穴が空いた。フーンリルは爆風で迷彩服のフードが捲れ、白い短髪が露になつたのを気にせずに、空いた穴へと飛び込んだ。

シヴァは走っていた。

彼女は先ほどの攻撃の後に、カイ達を逃がして屋台の裏に隠れた。そして少し間を空けた後、疾風とも言える速度で屋台から飛び出し、街中の路地をひたすら走っていた。

活気ある商売をしている人やそれを見ている人達の中を駆け抜け、時には大通りに出ながら、だ。

それは、次の攻撃を待つているからだ。

相手が屋上ほどの高さがある位置に居るのはわかっているが、特定は出来ていない。

その状況下で一番有効なのは、動き回る事。

「…………久しいな、この感覚は…………」

咳き、思わず苦笑。

その感覚とは、殺氣を剥き出しにした事だ。

それに対してもシヴァは、これではいけないなつと思つた。

だが、それによつて相手の戦意を低下させられるのなら悪くは無いとも思った。

そして辺りを見渡すと、視線の先には階段があつた。

外側に取り付けられている、屋上へと上がる為の螺旋階段だ。

それを見たシヴァアは、一瞬で判断し、階段を上つた。

素早く、されど人の目で視認出来る速度で駆け上がる。

「…………遠距離で金属、または鉛…………銃とはそういう物を出す武器なのか…………」

咳いたシヴァアは、ある物を思い出していた。

それは、ユウが持つていた銃の事だ。

前に一度、アクアトレイン内でシヴァアは、金属で出来た弾丸を見た事があつた。

その為、今回の攻撃は同じ”銃”だと推測していた。
と、その時だ。

最初と同じ小さな一点の殺氣を、シヴァアは感じ取つていた。

瞬間、彼女は長剣を抜いて、その方向に構える。

すると、彼女の長剣に何かがあたり、階段に二つの金属音が鳴つた。

「…………そこか…………」

咳いて視線を向けた先、十メートルほど離れた屋上に人影があつた。

伏せながら、太陽光の反射をチラつかせているその人影は、慌て立ち上がり、奥へと走つて行つた。

一方シヴァアは、追うようにして加速した。
逃がすものかと咳きながら。

澄み切った青空の下、同じ青色を反射させている海上を、とある船が走っていた。

小さいとも大きいとも言えない白一色の船は、賢石“ニア”によつて海上を軽快に走り、水飛沫みずしぶきを上げていた。

その一つの船上には窓の付いた個室があり、操縦室となつてゐる。そしてその部屋の床には、下へと続く階段があり、底部の空間が一つの部屋になつてゐる作りだ。

その一室にある固定ベッドの上には紫髪の男、ネプチューンが両手を頭の後ろに回して仰向けになり、天井を見つめていた。ただ無言のままで、だ。

だが次の瞬間、彼は勢いよく起き上がり、近くの壁にハンガーで掛けている襟襷切れのローブを羽織つて操縦室に出る階段を上り始めた。

その上つた先には、二人の男女が居た。

羅針盤を気にしながら舵を取る青年コウと、彼を見ながら固定されている長椅子に座つてゐる女性クレアだ。

するとネプチューンはその二人を見て吐息をし、笑みを作つた。

「　いい雰囲気じゃないん!?　わっちはお邪魔だつたかんな?」

陽気な口調で問うと、コウは苦笑を漏らし、そして答えた。

「お前の、いつでもお氣楽でいる性格に羨ましいと思えてきた。」

……「Jの状況下で、よく言えたもんだな」

「Jの状況下？ 一体何があつたんよ？」

「貴方、それは本氣で言つてるの？」

呆れながら言つたクレアは、操縦室の入口の方に顔だけ向けて、指をさした。

それを見たネプチューンは、小首を傾げつつも、入口へと向かう。そして、閉ざされているドアの上部にある丸い小窓を覗き込むと、おおつと声を上げた。

彼の視線の先、船の後方には、五隻ほどの縦に長い小型船が一定の距離で付いて来ていた。

操縦室がむき出しになつてゐる為、人数は容易に確認でき、一隻につき四人ほど乗つてゐる。

そしてそれぞれが、半袖で頭にハチマキを巻いている筋肉質な男だ。

「んぐく、まるで海賊だんなあ」

「その通りで海賊だろ。さつきすれ違つた時には、ボウガンで矢を放つてきやがつた」

「…………あつれー？ エアをくれた奴だっしゃ」

ネプチューンの放つた言葉に、コウは反応するよつにして彼の方を向いた。

「…………お前、盗つて来たのか？」

「人聞きが悪いっちゃ！ わつちはちゃんと、親友であるわつちに譲つてくれつて言つたんぜよ」

ただつと言つて顎に手を当てる。

「借金が重なつて金がとか何とか言つてたんから、少しあげたっちや。で、いいのかと聞かれたから、まだまだあるから大丈夫って言つたんよ？ それだけぜよ」

「…………いくら渡したんだ？」
「ん~、二万ラノンくらいぜよ」

返答に、クレアがため息をついて肩をすくめた。

「借金が重なつている人に二万も渡して、その上まだあるって言われたら、彼らにとつては文字通り、鴨が葱背負つて来るつてわけね」「上手いっちゃん！」

歓声を上げたネプチューンを見て、クレアは再度ため息。
一方ユウは、そつかつと言つて額き、舵から手を放した。

「ネプチューン、操縦を頼む。俺はクレアと一緒に手に分かれて後ろの船に乗り込み、潰してくる」

言いながらユウは、近くのテーブルに置いてあつた長剣の收めら
れている鞘を腰に添え、ネプチューンのいるドアへと向かつた。
それを見たクレアは、仕方ないわねつと呟きながら立ち上がり、
ユウに並んだ。

そして、ドアを開け放つ。

ユウ達の視界に入つた船上の男達は、突然現れた一人に驚きつつ
も、それぞれが武器を取り出して構えた。

「……カトラスが二にボウガンが一で一組。それが五組……行け
そうか？」

ユウが問うた先、隣にいるクレアは頷きながら、太股に装着されているケースからダガーを一本取り出しており、準備は出来ている。彼女は、頭に生えている猫耳を微動させながら、向かつて一番右の船を指で示す。

「私はあれからやるわ。ユウは左から、ね……主に実力を見せられるいい機会ね……」
「やる気満々だな。……よし、行くか」

その言葉を合図に、クレアは向かつて右の、ユウは向かつて左の船に向かつて飛び出した。

腰を後ろに、両足を前に出してくの字の体勢で素早く乗り移る。その速さには、船を操縦してゐる者には対応しきれず、容易に二人をそれぞれの船に乗せてしまった。

だが、彼らはすぐに撃退するために武器を構える。

その動きを見たユウは、着地した甲板で立ち上がりて口元に笑みを作つた。

そして、その笑みを絶やさないまま、身を低くして走り出した。そんな彼に対して二人の海賊はボウガンを一斉に放つ。

一瞬で目下に迫つた矢を、ユウは身を翻して回避。

同時に、太股に装着されているケースからナイフを一本抜き、左側のボウガンを持つた一人に向かつて放つた。

そのナイフは真つ直ぐに飛び、ボウガンを持つ手と胸に刺さり、声を上げて体勢を崩す。

すると他の者達がその声に驚き、振り向いた。

ユウはその隙をついて、詰りつつある距離を左前にステップして

縮め、右足を力を入れて右側、ボウガンを持ったもう一人の方へと飛び上がった。

そして空中で身を回し、顔面に左足の回し蹴りを叩き込む。

蹴られた者は頭から倒れ、音を立てて海へと落ちた。

ユウはその方向に視線を向けず、着地した足元を見る。

……二人目。

そう内心で呟き、短く息を吐く。

「コ、コノヤロウ！！」

刹那、ユウの前方、左右に立っていた一人が、彼に刃が逆反りになつている剣、カトラスを振り下ろした。

それに気付いたユウは、しゃがんだ体勢のまま前に飛び出し、次に両腕を船上につけて力を入れて飛び上がった。

大きく飛んだユウは、空中で素早く身を回して後方の一人の方を向き、太股のケースに入っているナイフに手を添えながら着地。

そして同時に、着地で曲がった脚を一気に伸ばして加速し、ナイフを抜き出して振り落としたカトラスを構え直そうとしている二人の間を駆け抜けた。

すると、その二人は目を見開いて固まり、次の瞬間、首の動脈が裂けて鮮血が勢いよく噴き出した。

その後、金属音を立てて落ちたカトラスと共に、一人は重音を立てて倒れた。

「……三人目」

思わずそう呟いたユウは、苦笑を漏らしながら船の舵に触れた。

それを左に回し、左側にいる船に激突させ、男に刺したナイフを素早く抜いて次の船に乗り移った。

刹那、金属音が響き渡る。

第三十六話・狙撃手（後書き）

カトラスについて

まあ、海賊が使うような剣です
刀身が微妙に曲線を描いているような物で、海賊系漫画や映画など
でしばしば見られると思います

第三十七話・異世界からの殺し屋

木箱が散乱している裏路地で、一つの声が響き渡った。

「掴んだあつ！…！」

その声の主はカイだ。

彼は禍々しい姿を露にした光り輝く左手で、身体を傾けているヘルの右腕を掴んでいた。

「田標の左腕での異様な発光を確認。危険と判断し、右腕をページします」

ヘルがそう言った時だ。

カイが掴んでいた右腕の一の腕辺りから、空気の放出音が出たのと同時に隙間が出来、そして外れた。

「ツ！？」

驚いたカイはしかし、掴んだままの右腕を離さない。

と、その時、外れた右腕は錆びて腐食していき、崩れた。

それを見ながらバックステップで後退しているヘルの外れた腕の根元、二の腕の断面には、皮膚の内側に数え切れない程のワイヤーや回線、そして中心には金属で出来た骨が見えた。

そしてその断面からは血ではなく、微かに色の付いた液体が微量に流れ出していた。

だがそれでも、彼女は無表情のままだった。
まるで機械のように、だ。

「破損状況確認……ページポイント以外、破損なし。」

右腕損

失状態での戦闘をシミュレートし、対応開始」

言つてヘルは、身体の右側を後方に退け、左腕の刃を前に構えた。その表情は変わらずの無表情。

だが、口元はいつの間にか笑みになつていた。

「先ほどの発言、肉を蹴らせて骨を断つ、ですが、肉を蹴らせてではなく切らせてです。こういった間違いがあつた場合、笑つて差し上げるのが最善と判断します」

「う、うるさいな！ 僕流のアレンジだよ、アレンジ！」

「間違えてんじゃねーよ、馬鹿野郎」

「その棒読みが余計に俺を傷つけるーー！」

叫ぶカイは、両手で頭を抱えて身体を後方に反らせた。

ヘルは、そんな彼のリアクションを無視し、追伸つと呟いた。

「先程、目標の左手による、ページした右腕の破損状況、及び錆びによる腐食の異常な速さからして、神の力、独自名称”フラグメント”の情報と一致。現時点では、左腕だけに宿つていると判断し、同時に記録します」

「……………フラグ……………メント……………？」

ヘルが言つた一つの名称。

それを聞いたカイは、落とした刃を拾い上げながら眉を寄せて復唱した。

だが、ヘルは何事もなかつたかのように無表情に戻り、瞬きを一度してから身体を低くし、走り出した。

その速度は速く、空いていた間はすぐに詰まつた。

そして、斜め下から刃をアッパー・カットのように振つた。

カイはそれを、急いで身体を反らして避け、一撃目の回し蹴りをバツクステップで避けて距離を離す。

だが、ヘルは追撃を止めない。

彼女は着地と同時に地面を蹴り、再度カイとの距離を縮める。

そして振り下ろされる斬撃を、カイは刃で防ぎ弾いた。

それでもなお、斬撃は続く。

もはやそれは、片手の刃と脚による連撃だ。

その連撃を、カイは紙一重で防ぎ続ける。

二人は走つて移動しながらも、攻防を続けた。

「目標、攻撃速度が微量に低下中。疲労によるものだと判断します」

言ったヘルの攻撃速度は一定で変わらず、逆にカイの攻撃速度は彼女が言つた通り、低下しつつあった。

「速度上昇によって、勝率上昇の可能性があると判断します」

そう告げると、ヘルは言葉の通り速度を一気に上げた。

だが、対するカイは不意に笑みを作った。

その笑みと共に、左手の刃を右手に持たせ、フラグメントと呼ばれた力を左腕に露にした。

左手は、真横に聳え立つ木の柱に添えられる。

その柱は他に三本、合計四本の柱で、上部にあるベランダを支えていた。

そしてベランダには、下から見える物として、プラスチックケー

スや金属の箱などが大量に置かれていた。

その真下に、カイはヘルを誘い込んでいたのだ。

「いよっしゃあー！」

叫んだのと同時、カイの左腕は光を増し、木の柱とベランダが一瞬で腐り、置かれていた物と共に崩れ落ちた。

「……!? センサーに想定外の異常を感知」

言いながらヘルは上を見、回避の為に速度を上げようとした……が、急に彼女は止まり、逆に後方へと戻された。

それに驚いた彼女は前を見る。

その視線の先には、伸ばした脚を縮めているカイの姿があった。それは、蹴りでヘルを押し戻したという事だ。

刹那、崩れ落ちた物が彼女を覆うようにして落ちた。

轟音を立てて崩れた物を見て、カイは安堵の吐息をついた。そして、ヘルが出て来ない事を確認し、刃を後ろ腰に収めた。

「……ふう……な、何だったんだよ……コイツ……」

咳き、カイは走り出した。

集合地点である港に向かつて。

時刻は、七時三十分を回っていた。

螺旋のような四角形状の階段を、フェンリルは狙撃銃を肩に担ぎながら上っていた。

その途中で彼は立ち止まり、壁際に置かれている、壁の色と同じ箱からのびてている紐を引いた。

するとその箱は、ピットという音を立てて、一点から赤い光を放ち出した。

それを見たフェンリルは、よしそと咳いて階段を上るのを再開する。

「…………これで、いつ通過したかわかるな…………」

咳き、速度を上げて最上階を田指した。
と、その時だ。

下の階からフェンリルを追っていると思われる足音と、次に炸裂音と壁を連続して碎く音が聞こえた。

それを聞いた彼は、かかったーっと内心で咳く。
だが、最上階へと向かう足は止めない。

屋上に上がる理由は別にもあつたからだ。

その目的があつたから走り続けたのは、幸いだつたのかもしけない。

次の瞬間、下の階から足音が再び聞こえ始めた。

その足音に彼は驚き、されど意識を上に向け、速度を上げる。

肩に担いでいるスリングを通して伝わる狙撃銃の重さに嫌気を感じながらも、段差の低い階段を一段飛ばしで駆け上がる。

そして見えた、屋上への入口である木の扉を蹴り開けた。

その先にある光景は、広いとも狭いとも言えず、屋根の付いていない展望台だ。

フーンリルはその展望室の端まで走り、下を見た。
そこから見れば、展望室が地上から大分離れており、まるで下が
奈落に通じているように見える。

「……落ちたら即死。そう、即死だな……」

微笑しながら咳き、部屋の中心あたりまで移動する。
足音は近い。

それは、一瞬だった。

階段を駆け上がるシヴァーの視界に入ったその箱は、ピーッという
音と共に小さな爆発が箱の中で起き、同時に数千とも言える鉛の小
玉が飛び出した。

その速度は、人の身体を穿つ威力があると彼女は判断し、疾風の
如く走り、回避した。

「……ぐだらぬ小細工を……」

咳き、シヴァーは先ほどまでと同じ速度まで落として再度、階段を
駆け上がった。

そして、最上階の展望室への入口を通過るとそこには、不規則な色
彩の迷彩服で身を包んでいる、白髪の男が展望室の中心に立ってい

た。

彼は肩に、スリングを通した杖のよつた物を担いでいる。その杖の下部には引き金がついており、それを見たシヴァアは、銃だなつと判断した。

その為彼女は、長剣の柄に手を添えて銃に警戒しつつ、一步近付き問い合わせた。

「…………お前は何者だ？ ジードの人間か？」

それは賭けだ。

シヴァアはこの世界、グラルスで銃を見たのはユウの持っていた銃が初めてだ。

そしてユウの世界、ジードでは当たり前のように銃が出回つていると聞いた。

もし、この銃を持った白髪の男がジードの人間だった場合、グラルスとジードを行き交う術を知っている事になる。

それは同時に、ユウがジードに帰る事の出来る術の有無を知る機会にもなるかもしれない。

そう考えたシヴァアは、白髪の男の返答を待つた。

すると白髪の男は笑みを作り、両手をズボンのポケットに突っ込んだ。

「…………まさか、ジードを知っているとはなあ…………確かに俺はジードの人間だ。そう、ジードの人間なんだが、誰からジードという名を聞いた？」

「教えるわけがないだろう つと言いたい所だが、こちらの問い合わせたのだ、私も問い合わせよう。…………ユウ・ウラハスという男からだ」

その名前を聞いた白髪の男は、微かに眉を微動させた。

「コウ・ウラハスか。やっぱりあれはコウ・ウラハスだったのか……」

「……なら、話は早いな。俺はコウ・ウラハスと同じ殺し屋。そう、殺し屋だ」

「……その殺し屋が、何故カイを狙う?」

「何故? 何故と問うのか?」

言つて白髪の男は、くくくと笑いながら、右手をポケットから出して人差し指を立てる。

「理由はたつた一つ、仕事だから。そう、仕事だから狙い、そして殺すんだ。 そのために、今は逃げないとなつ!—」

叫んだのと同時に、白髪の男は肩に担いでいた銃を片手で構え、シヴァに向けて撃つた。

その突然の射撃に対応する為、シヴァは手を添えていた長剣を抜刀する。

刹那、金属音が響いた。それは、銃弾を叩き切った音だ。
その後シヴァは、三歩分の間を一步で詰め、白髪の男に接近する。
そして、続く一発目の銃弾も金属音と共に叩き切り、残り五歩分の間まで迫る。

「逃がすかあつ!—!—!」

「逃げるさつ!—!—!」

渴を飛ばしたシヴァから離れるように、白髪の男はバックステップで端の段差まで飛び乗った。

それと同時に、彼はポケットから出した左手に持っている長方形の物をシヴァに向けて投げつけた。

それは、投げた方向へ忠実に飛び、そして炸裂した。

起きたのは、キー・ン・シとも聞こえる異音と閃光の拡散だ。

異音と閃光はシヴァーの聽覚と視覚を一時的に奪い、腕で顔を覆つ形となつた。

その隙を見た白髪の男は、狙撃銃を一発撃つて、屋上から飛び降りた。

一方シヴァーは、聽覚も視覚も無くとも殺氣で銃弾に気付き、長剣で銃弾を叩き切つた。

だが、シヴァーの視覚が戻る事には、屋上に白髪の男の姿は無かつた。

「……逃げた、か……」

眩いたシヴァーは、展望室の端の方まで歩み寄り、下を見る。

だがそこから見えるのは、こここの異変に気付いたのかこちらを見上げている僅かな者と、まったく気付いていない大勢の者しか見えなかつた。

それを確認したシヴァーは、舌打ちをして長剣を収めた。

そして、展望室に設置されている時計を一度見て、入口に向かつて走り出す。

それも疾風の如く、だ。

後に残つたのは、乱れた風だけだつた。

その時、時計の針は七時三十五分を示していた。

第三十八話：一発の凶弾

港の空を、無数の鳥が飛び交っていた。
それは海猫ウミネコだ。

その海猫達は、体が純白で灰黒色の翼を羽ばたかせながら、その猫に似た独特な鳴き声で合唱をしていた。
波に揺れる船上、海の上に架かっている桟橋、そして青い短髪の少女の肩の上で、だ。

「あ、シルクの肩に海猫が乗ってる！」

言つてシルクの肩を指でさして『いる少女ミーナは、楽しそうに笑つていた。

本来、その光景は珍しいつといふよりかはあり得ない事だが、その海猫は平然とシルクの肩で鳴き続けていた。

「たまにあるんだよねえ……海猫だけじゃなくて、いろんな動物が寄つて来るんだよ」

言いながら、肩の海猫に手を伸ばして、人差し指で頭を撫でた。

「……って、のんきにしている暇なんてないじゃん！ 今何時！？」

突然、大声を上げた為に逃げた海猫を無視し、シルクは問い合わせながら辺りを見渡した。

そんな彼女を見てミーナは笑いつつも、シルクの服を軽く引いて、一箇所を指で示した。

「シルクー、あつたよつ

「え？ 何 ああ、時計！ ……七時十五分かあ……八時までに
だから、急がないと！」

ミーナの手を取ったシルクはそう言いながら、港にある大きな客船へと向かつて早足で歩き出した。

そして、何の変哲も無い小さな小屋の前で、二人は立ち止まる。その小屋の上部には”券売所”と書かれた看板が付いており、その下部にはガラス張りの大きな出窓が付いていた。

出窓には小さめの穴と時刻表があり、ガラスの向こうにはカウンター越しに黒一色の制服を着た若い男が居た。

彼は券売所の前に立つ二人の少女を見てお客と判断し、自慢と思われる笑顔で二人に問い合わせた。

「二人とも、乗船券を買いに来たのかい？」

「そうだよ！ シュメール大陸・キエンギ行きの船の乗船券を買いに来たの」

返答に男は笑顔で頷き、カウンターの下からプラスチックでコートイングされた厚紙を取り出した。

見た所その紙は乗船券の購入案内らしく、上から順に特・五万ラン、良・一万ラン、普・五千ランと書かれている。

「この中から、部屋のタイプを選んでもらっていいかな？」

「ん……四人部屋だとどれになるんですか？」

「それだと、良が四人部屋として丁度いいと思うよ？」

男の返答に、シルクは笑顔を返した。

「それじゃ、その乗船券を四枚ください！」

「はい、それだと……四万ランになりますが、よろしかつたで

すか？」

問われ、シルクは持っていた財布から四万ラノンを取り出し、出窓の下部にある小さめの穴からガラスの向こう側に置いた。それを受け取った男は、代わりに四枚の紙を同じ方法でガラスの向こう側に置く。

その紙には”シュメール大陸・キエンギ行き・良”と書かれていた。

シルクはそれを手に取ると、満面の笑みをガラスの向こうにいる男に向けた。

「ありがとう！」

そう言つたシルクに続いてミーナも、ありがとうと笑つて満面の笑みを向けた。

そして二人は、船の方へと走つて行つた。

シュメール大陸・キエンギ行きと書かれた看板を頬りに。

シュメール・キエンギ行きの船の出航時間が二十分を切つた中、町中を駆け抜ける人影があつた

その人影はジヴァだ。彼女は人々を上手く避けながら走り、真っ直ぐに港を目指していた。

その途中、彼女は見慣れた後ろ姿を見つけた。

「 カイ！」

シヴァが名前を呼んだ者は、カイだった。

カイはシヴァの声に反応して後ろを振り向き、シヴァの姿を確認すると速度を少し落としてシヴァに並んだ。

「シヴァじゃんか！ 終わったの？」

「いや、逃してしまった。……お前はどうだったのだ？ 頬に切り傷があるという事は、戦闘があつたと察するが」

問われたカイは苦笑を漏らし、頬の切り傷に触れながら答えた。

「シヴァの読み通り、侍女さんだつたよ。……機械のね」

「機械……？」

「そう、機械」

言つてカイは左手で右の一の腕辺りを掴み、下に滑られた。

「ここがこんな風に外れたんだよ。斬られたとかそんなんじゃなくて、綺麗に外れたんだ。んで、腕の中にはたくさん線があった」「外れた、か……たぶんそいつも、ジードの者だろうな。機械人間など、この世界で見た事が無い。それに、私が相手をした者は自分をジードの者だと言つていたからな。……とは言つても、義手の可能性もあるのだが……」

シヴァは言い終えると吐息を一つし、前を向いた。
その視線の先に見えるのは港だ。

「…………さて、港に着いた事だから、話の続きを船内でする事にしよう」

そう言つてからシヴァは、一気に速度を上げた。

その速さにカイは驚きつつも、辺りを見渡して時計を探した。そして見つけた時計の針は、七時四十五分を示していた。

「…………って、ギリギリかよ！」

叫んだカイは、シヴァに追いつく為、速度を上げる。港はすぐそこまで近付いていた。

「本当に大丈夫ですか？ マスター」

心配そうに問い合わせた侍女、ヘルは、損失した右腕に応急処置を施してくれている白髪の男、フェンリルの顔を真っ直ぐ見ていた。その視線と問い合わせ掛けをフェンリルは少々鬱陶うつとうしそうにしながらも、スペアをテープで貼り付けていた。

二人は港の灯台の上におり、近くには狙撃銃が置かれて、柵の隙間から銃身を出して先端の一端で安定させてある。

その狙撃銃は、數十分前までフェンリルが持っていた物とは別の

物だ。

「…………俺の心配よりも自分の心配をしる。実際、俺は無傷だが、お前の身体には多少のへこみがあるしな」

言われ、ヘルは申し訳なさそうな表情をするが、すぐに不思議そ
うな表情になつた。

「ですが、私の役目は飽く迄^{まで}マスターの護衛です。よつて、自分の
身の安全よりも、マスターの安全を最優先にすべきだとプログラム
されています」

それに、と付け加えてへこみのある箇所を左の指で軽くなざる。

「フレームのへこみは一度パージして内部から圧力を掛けて戻し、
表皮細胞を貼り換えるべきだけだと判断します。…………私は破損
した際、代えのスペアパーツがありますが、マスターにはスペアパ
ーツなどありませんので、故に安全を最優先に」

「

「わかった。そう、わかったから、もうそれ以上言わなくていい」

フェンリルはそう言いながら、ヘルの口を右手で塞いだ。

その状況にヘルは数回瞬きをし、そして頷く。

それを見たフェンリルは微笑し、応急処置の続きを始めた。

「…………にしても、よくもまあ簡単にパージしてくれたな。船の中
で本格的に修理するぞ？」　で、何で俺の掌^{てのひら}を舐めるんだ？

「…………言つてフェンリルはヘルの口から右手を離すと、彼女は軽く会釈
をした。

「手で口を塞がれて発言が出来なかつた為、一番優しい方法で手を退かして欲しいという表現をさせていただきました。何かご不満でも？」

問いにフェンリルは、わかつたわかつたつと曖昧な返答をしながら、ヘルの右腕の応急処置を済ませた。

そして、手探しで取つた灰色の鞄に応急処置に使用した物を詰め込み、チャックを閉める。

それを邪魔にならないような位置に置き、彼は柵の隙間に挟んで置かれている狙撃銃の前で匍匐になり、狙撃体勢を取り始めた。

左手で銃の後部近くを持つてその人差し指を引き金に添え、右手は狙撃銃を支えるように銃床を掴み、上部のスコープを左目で覗き込む。

そこから見える光景は、港に停泊中の客船の後部が見え、それに向かつて鉄の桟橋が延びている形となつていて。

それと同時、隣に居るヘルは立ち上がり、フェンリルと同じ方向を見た。

「カイ・エディフィス、未だ現れず。されど、カイ・エディフィスの同行者一名が客船の甲板に確認出来ます。シユメール大陸・キエング行きに乗船するという情報は確実だと判断します」

「…………子供が一人、か。脅威レベルはゼロとしても大丈夫か？」

「ヤーっと、そう答えたいたのですが、青色の短髪の少女は未だに未知数。その上、シヴァという名の女性剣士には充分な注意が必要とします」

言い終えたヘルは瞬きを数回し、視線をフェンリルの狙撃銃へと向けた。

「それでは、今回私が配置した狙撃銃の説明をさせて頂きます。名

称はセミオートライフル”PSG-1”、全長一一〇八ミリメートル、重量ハ・一キログラム。弾丸のサイズは七・六二ミリメートルとなつており、目標出現予測地点から約一キロメートル離れた現在地からでも、魔力の保護により重力・温度による影響を受けず、良い命中率を保つ事が出来ます。その上、弾丸の装填数は着脱式箱形マガジンを採用している為に一十発、連射によつて性能をフルに出す事が出来ます」

「解説ありがとうございます、だ。で、タイミングよく目標が来たぞ」

フェンリルの視線の先、鉄の桟橋の入口付近には新たな人影が二人分あつた。

戦闘を走つているのはシヴァ、そして後方に引き離されて走つているのはカイだ。

フェンリルはそのカイにスコープ越しで狙いを定める。

「…………罪背負いし者に罰の凶弾を。そして、永遠の安らぎを……」

…

呴くフェンリルの左の人差し指は、ゆっくりと引き金を絞る。そして、大気を振るわせる銃声と同時に、銃弾が放たれた。

客船の甲板に立つっていたシルクとミーナは、その光景を見た。

彼女らの視線の先、シヴァよりも遅れて走つて来ていたカイの胸の辺りから、真っ赤な花が咲いたかのように鮮血が噴き出した。

そのすぐ後、彼女らの下に銃声が届いた。

その音に気付いたシヴァが振り向いた時、カイは事切れたかのように崩れ落ちていた。

「 ッ！？ カイ！！」

叫び、カイに近付こうとするシヴァは、鞘から剣を抜刀した。しかし、その行動は間に合わず、一撃目が来る。

それは運よくカイから外れ、金属音と共に桟橋に当たった。その音をシヴァは無視し、カイの背後に立つて剣を構える。怒りの籠つた形相を、どこにいるかわからない者に向けて、だ。そんな彼女の後ろ姿を見ながら、シルクは客船から降りてカイの下へと駆け寄つた。

「 カイ！！ しつかりして、カイ！！！」

「 シルク、ここは危ない！ 早くカイを船内に運べー！」

シルクは言われるがままにカイを背負い、客船へと歩みを始めた。そうしている間にも、カイの血は流れ続け、背負つたシルクの背に生暖かい液体を染み込ませる。

その温度を感じたシルクは、涙を必死に堪えながら、客船に乗り込む。

そして、続くシヴァも船へと急ぐ。

不思議と追撃は無く、その場所には吹き付ける強い風と、その風によつて波紋を作る血溜まりが残るだけだった。

第三十九話・死を凌駕する生

背負つてゐるカイの名前を呼びながら、シルク達は船内の廊下を走つていた。

その間、彼女らが通つた軌跡には、点々と血が零れ落ちている。それを、ミーナを背負つてゐるシヴァアが低い体勢で走りながら、小さめの白いハンカチで拭き取つていた。

だが、そのハンカチも既に赤く染まつており、血を引き摺つた跡が後方に残つていく。

それを見たシヴァアは、後でまた拭けばよい、と内心で決め、シルクについていく。

角を一つ曲がり少し行くと、シルクは足を止め、一つの客室のドアを開けた。

そこは、シングルベッドが四つ置かれた、明るい雰囲気の部屋だ。シルクはその内の一つのベッドにカイを寝かせ、上着を脱がす。彼の胸元、そこには今でも血を流し続けている穴のような傷が見えた。

「まずい……出血が致死量を超えているぞ……」

「大丈夫、私に任せて!!」

シヴァアを制したシルクは、瞳に溜まつた涙を腕で拭う。そして、右手をカイの傷口に近付け、目を瞑つた。

「…………」ついに、私が役に立たなきやいけないから…………

涙ぐんだ声で呟いたシルクは、ゆっくりと目を開けた。

そんな彼女をシヴァアは、腕を組みながら心配そうな表情で見つめる。

ただ、頼んだぞ、と内心で呟く。

「…………世界を覆つ生命の源は流れを変え、我思つ者に注ぎ込み、死せる部位に生ける創造を与えよ。」

一言一言を思い出すようにして声にし、詠唱を行つ。

「”トウル”！！」

刹那、シルクの右手が翳していた傷口を青い魔方陣が包み込み、見る見るうちに傷口が塞がつていった。

それだけでは無く、傷口の辺りに広がつていた血も消えていった。まるで、元から傷などなかつたかのように。

それを見たシヴァは驚き、されどすぐに冷静となつてシルクに問い合わせた。

「…………シルク、そのような魔術はいつ覚えた？」

問われたシルクは、眉一つ動かす事無く、手をカイの傷口に掲げ続けた。

そしてじばらぐして、口が開かれる。

「…………しょーに教えてもらつたんだよ。ノアで出会つたしょーにね」

「ノアで、か。…………もしかすると、早朝に部屋を抜けっていた頃か

「え！？ 気付いていたの！？」

驚きを見せたシルクに、シヴァは鼻で笑つた。

「当たり前だ。私を誰だと思っている?」

「私はわからなかつたよ?」

「いや、ミーナはぐつすり眠つてゐるべきだから、気付かなくともいいのだ」

言つてシヴァは、ミーナの頭を優しく撫でた。

そして、視線をカイに向ける。

彼の胸元にあつたはずの傷口は完全に無くなつており、彼は静かな寝息を立てて眠つていた。

「……まあ、その者や魔術がどんな物であろうと、カイが助かつた事に変わりはない。よくやつたな、シルク」

シルクに優しく微笑みかけたシヴァは、内心に疑問を生んでいた。
……何故、あれほど出血し致死量に達していたのにも関わらず、魔術で傷口を塞ぐだけで助かるのだろうか、と。

答えを出すのは簡単だ。

その魔術は強力であると考えればいい。

だが、逆に強力すぎるのだと、そうも思える。

短い詠唱で傷口を速く、その上何も無かつたかのように塞ぎ消したからだ。

そもそも魔術といつものば、その術が強力であればあるほど詠唱が長くなる物だ。

つまりは、シルクが覚えた魔術が通常とは違う魔術である可能性が出てくる……

「? ビツしたの? シヴァ。難しい顔しちゃって

突然声を掛けられ、顔を上げたシヴァは、自分が俯き眉を寄せていた事に気付いた。

その為彼女は、気にするな、と言つて再度ミーナの頭を撫でた。そして、長剣の鞘を外してベッドに立て掛け、そのベッドに座つた。

深い溜息と共に。

「……何にせよ、後はカイが日覚めるのを待つだけだ。それまでゆっくりと疲れを取る事にしよう」

「えへ、私はお腹空いたよおー！」

「あはは、ミーナはさつきからお腹が鳴つてたもんね」

「せういえば、食事にする約束だつたな。よし」

言つて立ち上がつたシヴァは、部屋の入口付近の壁に設置されている内線電話の受話器を取つた。

「すまない、ルームサービスとやらを頼みたいのだが　」

その言葉を聞いた瞬間、シルクとミーナは歓声を上げた。

飛び移つたのと同時に、俺のナイフが何かに防がれて鳴らした金属音が響く。

だが俺は、自分のナイフが防がれた事よりも、目の前の妙な殺気を持つた背の高い黒髪の男が居た事に驚いた。

その男は紅色の目を俺に向け、口元に笑みを作つていた。

「やつと見つけたぞ、優男！！」

叫び、男は俺のナイフを防いでいる大剣を力一杯拵った。同時に、男が羽織っているローブが大きく靡く。

「なつー！？」

俺は大剣を拵った勢いに飲まれ、船から落とされそうになる。だが、そう簡単に落ちるわけにはいかない。その為俺は、飛ばされた先、船の後部にあるポールのような物に足を当て止まる。

そして曲がった膝を思い切り伸ばし跳躍して、男の隣に居る海賊の男を回し蹴りで吹き飛ばす。

するとソイツは、断末魔を上げる事無く海へと落ちていった。刹那、

「ユウ！ そいつがレイヴンよーー！」

着地と同時に聞こえたのは、隣の船の甲板に立っているクレアの声だ。

その声を聞いた俺は、男の方を向く。

「へえ、お前レイヴンっていうのか…………」

「ほう、お前はユウっていう奴か…………」

一步も動かさずに武器を軽く構え、レイヴンとやらを睨むと目が合つた。

『……彼が、クレアを打ち負かした男ってわけね』

そのようだな……

一八〇センチを軽く超えた身長に、それを包み隠すように羽織つたローブは真っ黒だが、多少赤みが混じっている。

どうやら、血のようだ。

そして、その血が付く原因となつたのだろう右手に持つ大剣は、身長と同じ程の長さだ。

『刃の表面幅はざつと、一〇センチといった所かしらね』

「…………丁度いい幅だ…………」

笑みを作つて咳き、ナイフを左手に持ち帰る。

それと同時、右側から一人の男がカトラスを振り上げて大声を上げながら走ってきた。

船上では、走れば距離がすぐに縮まる為、俺は右手をその男に向けて掲げる。

そしてその手で頭を掴み、振り下ろされたカトラスを左手のナイフで防ぎつつ、右手で力一杯男を投げ飛ばす。

続けて、投げ飛ばした動作をそのまま生かして時計回りに回転し、振り回した左手のナイフを男の首に突き刺す。

その瞬間、男の首から鮮血が噴き出した。

それを汚らわしく思いながら、突き刺したナイフを勢いのまま離ぐ。

「がああつーーー！」

苦痛の断末魔が聞こえ、そして男はふらついて海に落ちた。

水を叩き付ける音が一瞬響き、すぐに消えた。

俺はそれに目を向ける事無く、レイヴンを見た。

その時見えた表情は、満面の笑みだ。

「……面白い動きだな。気に入つた、俺に斬られろ」

言い終えた瞬間だ。

レイヴンは大剣を構えて、間合いを詰めに甲板を蹴った。

そして、大剣を薙ぐ。

それを上手く目で追い、俺はナイフを仕舞つて飛び上がり、宙で一転しながらレイヴンの後ろへと回る。

着地した場所は、レイヴンが薙いで振り切った大剣の表面だ。

『この男、大分鍛えているわね。ユウが乗つても大剣が傾かないわよ』

これほどだと、一撃でも食らつたら真っ二つだな。

口元に人差し指を添え、半目でレイヴンを見るティファに返答を返しながら、大剣の上で両手を軸にし後転。

右の靴の爪先に展開させた刃を、相手の頭上に振り落とす。

入つた。そう思える瞬間まで刃がレイヴンの頭に迫つた刹那、勢いが止まつた。

振り落とした右の足首は、レイヴンの左手に掴まれて勢いを失つていたのだ。

……マズイ!!

右足が食われる、その言葉が本能の如く脳内に響いた。

その為、俺は掴まれた足に力を入れ、同時に大剣に着いている両手を使って相手の頭上へと浮き上がる。

それは、唯一の支えが掴まれている右足だけになるという事だ。だが、そのまま勢いを殺さずに脚を曲げて背を仰け反らせ、逆になつて急降下しながら再度レイヴンを狙う。

すかさず抜いたナイフを両手に持つて、だ。

そして、研ぎ澄まされた刃はレイヴンのローブを、衣服を突き破り皮膚に到達し、刺さつた。

「　ぐつー！」

小さく、短くうなり声を上げたレイヴンは瞬間、右手を振り下ろして俺を甲板に叩き付けた。

同時、仰向けになつた俺の視界に、振り下ろされようとしている大剣が映る。

『来るわよーー!』

と、ティファアが叫ぶより速く、身体を翻して回避。すると大剣は紙一重でそれ、甲板を叩き潰して穴を開けた。

その時、レイヴンには隙が出来た。

少なくとも、俺の視界からはそう見える。

その為俺は、腰から太ももにかけてしっかりと固定されている鞘から長剣を抜刀した。

そして、構えを取つて走る。

と、その時だ。

一つの考えが、脳裏に浮かんだ。

……大剣を軽く振り回す者に、隙など簡単に出来る筈がない……

？

経験による、突然の判断。

それは、長剣を防御の構えに持つていく事。

するとそれは、正しい判断だったと思い知らされた。

先ほどまで甲板に空いた穴にはまつていた大剣は、いつの間にまにか目前まで振り上げられていた。

「　なにがつー！」

大剣は長剣に触れ、金属音と共に俺の構えを崩す。

そしてレイヴンは、俺の体勢が崩れている間に、大剣の軌道を変えた。

それはまるで、小枝を扱っているかのように軽々と、だ。

刹那、両の手首から先が、長剣と共に切断された。

第四十話・身近な疑念

波に打たれて揺れを見せる船上。

そこで、二つの物が舞つた。

一つは太陽の光を反射させながら宙を舞う長剣。

そしてもう一つは、ユウの量の手首から上の部分だ。

切断されたその手は、赤き血で軌跡を作りながら舞つている。それを目で追っているユウに、新たな斬撃が入った。

彼の前にいるレイヴンが振り下ろした大剣による斬撃が、だ。

「 ツ！？」

それは斜めにユウの正面を抉るように下り、次の瞬間には一直線に鮮血が噴き出した。

だが、それだけでは終わらない。

軌道を変えた大剣は、更にユウを斬る。

「ははははっ！ 僕に宣戦布告しておきながら、その程度か！？」

両の腕を切断し、横腹を抉り、右脚を切断する。

「所詮は口だけの男なのか！？ お前はあ！！」

充分に胴体を斬った後、最後の支えである左脚を切断して本体を甲板にひれ伏させた。

「…………ぐだらねえな」

見下すよつな目と血だらけの冷たい表情をユウに落とし、そして

振り上げた大剣を彼の首に落とす。

話にならないな、と言おうとしたレイヴンは、不意に一つの事に気付いた。

周りに、他の船がないのだ。

「…………減速している…………？」

眩いたレイヴンは反射的に船の後部にある動力源、賢石“エア”の装置がある方向を見る。するとその方向からば、黒い煙が立ち込めていた。

「…………」

それを見たレイヴンは、素早く船の前方を見た。その先には、もう追いつきそうにない程の位置に、一隻の船が確認出来た。

「…………満足したか？」

不意に、レイヴンに声を掛けたのは、彼の足元に転がっているコウの首だった。

その首に彼は、フンッ、と鼻で笑い答えた。

「本物のお前を斬るまで、満足できねえよ」

刹那、船は後部の動力源を中心として爆発した。

その轟音は、大気に震えを、海に大きな波紋を与えた。

爆発の後、赤い炎を上げながら燃える船を彼方に見るユウはふと咳く。

「…………強かつたな…………」

「感想言つてる暇があつたら、早くネプチューンの船に戻るわよ」

不意にユウに話しかけたのは、自分の武器についた血を拭つているクレアだ。

彼女はその武器、ダガーナイフを太股に装着されたケースに仕舞い、乱れた髪を搔き揚げた。

そして、船の先端に歩み寄つて行くユウを追つた彼女は、目を細めて彼に問い合わせた。

「…………で、何だったの？　あのもう一人の貴方は？」

対するユウは、寄せてくるネプチューンの船を見ながら、見ていたのか、と呟いた。

その表情には、面倒臭さが見える。

だが、クレアはそんな事を気にせず、共にネプチューンの船に乗り移つた彼に再度問う。

「何だったの？　って聞いているんだけど、もしかして答えられない事だった？」

「ん？ もしその質問が、なんぜか一人居たユウの事だつたら、わ
つちも聞きたいぜよ」

船の中から出て来たネプチューンは、ユウの行く手を遮るように立つた。

そして、後方にはクレアが立つ。

「お前もか……操縦は大丈夫なのか？」

「一直線型の自動操縦にしてあるから大丈夫だつちや」

早く聞きたい、と言わんばかりの表情をするネプチューンを見たユウは、呆れ交じりのため息をついて、観念したかのように肩を竦めた。

「…………わかつた、話す。 あれば、港で話した記憶メモリーストーン石つてやつだ」

「やっぱり持つていたのね。 で、それはまだあるの？」

「いや、今度こそもう無い。 魔力を最大まで注入していたから、使用負荷で砕けた。…………今回使つたのは結構高価な物で、一定時間の間、使用者の姿を魔力で構成して出現させる物だ。 ちなみにその出現する姿の再現率は、注入した魔力によつて異なる」

「便利ねえ………… つて、いつの間にに入れ替わつていたのよ！？」

驚き声で問うたクレアに、ユウは微笑を漏らしつつ答える。

「レイヴンが甲板に大剣を叩き込んで、全員の視線が俺から外れた時だ。 記憶石で俺の「コピー」を展開した後、隣の船の手摺りに三日月を引っ掛け飛び移つた。 その時は視覚妨害、簡単に言えば氷の魔術で光を反射し、見えないようにした」

「なんて都合のいい魔術………… やっぱり、主には適わないわね…………」

…「

深めの溜息をついたクレアを見てユウは、いや、と前置きをして言つ。

「お前も中々だつたぞ？ 三人を一瞬で制していただじやないか」

「……私の方を見る余裕があるんだから、やつぱりユウはすごいわよ」

「わつちとしてはお仲間として、強い一人が居るつて事に感謝感謝ぜよ～」

言つてネプチューンは、大口を開けて笑いながら船内に入つて行つた。

そんな彼の後ろ姿を見送る、残つた二人は軽く微笑した。

「彼、本当に感謝しているのかしら？」

「さあな。たぶん、しているんじゃないかな？」

ただ、と付け足して表情を苦笑に変える。

「その感謝がいつまで続くか、だがな」

部屋がある。

全体が茶色を主とした家具によつて明るい雰囲気に飾られ、四つのシングルベッドが部屋の隅に置かれている部屋だ。

その内、一つのベッドの上には一人分の人影があった。

一つは、タオルケットを腹部に掛けて、気持ちよさそうに眠っているミーナだ。

そしてもう一つは、眠つている彼女の隣に座つて髪を優しく梳かしてあげているシヴァだ。

その向かいのベッドでは、シルクが腹部を摩りながら満足そうな笑みを浮かべていた。

「おいしかったあー！ ルームサービスつてのは、こんなにも美味しいもんなんだね！」

「いや、ルームサービスつてのは料理を部屋に運ぶものだから、正確に言えば『この料理が、だな』」

苦笑を交えながら言つたシヴァは、隅のベッドで未だに眠つているカイを一度見、そしてシルクへと視線を戻す。

その表情は、真剣そのものだ。

それを見たシルクは、摩る手を止めて背を伸ばし、姿勢を正した。するとシヴァは、急にすまない、と呟く。

「…………この旅を始める前から疑問に思つていた事なのだが……空の羅針盤はいつからあつたのだ？」

「え？」

思わぬ角度からの質問。

一文字で返事をしたシルクは間を置いて質問の意味を知り、答え る。

「えと、村に襲撃があつた時だよ？ 旅に出る事を決めた前日」
「…………そう、か……意外と近いのだな…………」

一息つき、実はな、と前置きをして言へ。

「その翌日、羅針盤についての話を聞いた時、ああそういうばあつたな、という不思議な感覚があつたのだ。まるで今まで視野に何か見えるが焦点が合わない為に気にならない感じだな。だが、話題に触れた瞬間初めて、いつからあるのだ？ という疑問が生まれるのだ」

「えっと、つまりは……記憶の中では、昔からあつたかのような感じがするのに、こぞ聞かれるとわからないうてやつ？」

そうなるな、と頷いたシヴァは腕を組んで眉を寄せた。

「その事を含め、今回の襲撃も含め、カイの左腕を中心に色々不可解な事が多すぎるな……一番疑問なのは、本当にジードといふ名の他世界があるのか、なのだが」

「…………って、え？ シヴァはジードを信じないの？」

「シルクは信じているようだが、他人からしてみれば他世界があるという事をそう簡単に信じられるわけがないという事になる。まあ、私はユウが持っている銃の技術をこの世界で一度も見た事がない。その上、今日の襲撃を仕掛けて来た者も銃を持つており、自分をジードの人間だと言つていたからな…………」

もつとも、と付け加えたシヴァは、苦笑を漏らして目を瞑つた。

「ユウはどこか信用できる人間だからな。私は辛うじて信じられる

そう答えたシヴァにシルクは、それじゃあどうじと、と言おうとしたが、それよりも早く言葉が来た。

「だが、他の者が信じる為には、明らかに理由が足りず信憑性に欠けるのだ。その事は私達が旅を続けるにあたって問題無いと思うが、ユウの方はネプチューと一人だけのメンバーであり、私の予想ではネプチューは他世界の話を信じていらないだろ？…………カイの左腕の事も含めてな」

言い終えた瞬間、静寂が訪れた。

だが、近くのテーブルに置かれたコップの中にある氷が水によつて溶け、カラソッ、といつ音を立てた時、静寂を破る動きがあった。

「…………うーっ！…………あ、ああー、おはよう！…」「起きたのかミーナ。…………もしかして起こしたか？」

田覚めて直ぐに起き上がり、大きく背を伸ばしていたミーナは、首を左右に振った。

それを見たシルクは、腹部を両手で押さえて素直に笑い出した。

「あはははっ！ やつぱつミーナちゃんは可愛いねっ！ 抱きつきたいよおー！」

言いながら抱きつくシルクに、ミーナはほられて笑い出した。するとその時、シルクは何かを思いついたのか、あっ！ と声を上げてシヴァを見た。

「これから随で甲板に出でみない？ 風に当たると気持ちいいと思

うよー！」

「さんせーー！ シヴァ、早く行けー！」

シルクと共に立ち上がったミーナは、シヴァの手を取った。
そして、部屋の出口へと向いて行く。

「ま、まてまて、そう壊てるなっ」

言つてシヴァは苦笑しつつも、ミーナに引かれるままに部屋を
後にはした。

第四十一話・疑惑

「びっくりするほどコートピアツ……」

突如、叫んで起き上がったカイは、その状態のまましばらく固まつた。

それから十秒、三十秒、一分と経つて、ようやく動き出す。辺りを見渡した彼は、未だに眠気が残っているような、そんな表情をしていた。

そんな彼が見渡す室内には誰も居らず、シーツが少し乱れたベッドと数個の荷物だけが確認出来る。

そして天井に設置された、僅かに冷気を放つているエンリルの賢石をしばらく眺めた彼は、

「……シルク達、何処に行つたんだ……？」

問い合わせに答える音は無く、静寂が部屋を支配していた。

その空気に耐え切れなくなつたのか、カイはベッドから降りて立ち上がつた。

その時、彼は疑問を持つ。

そういえば胸元を何かで貫かれて血が出た気が、と。

だが、カイは触れる胸元には貫かれた痕など無かつた。

ただあるのは、服の胸元に開いた指一本の穴と、わずかに付いた血の跡だけだつた。

「……？ 誰かが治した？」

小首を傾げるカイには、心当たりなど無い。
それ以前に、穴となつたであろう傷を塞ぎ、治す事が出来るのかどうかもわからない。

その為カイは、眠つていて少し硬直していた身体を大きく背伸びして解し、腕を振つた。

そうやって、身体に異常が無い事を確認する。

「……暇だなあ……」

部屋にはたつた一人しか居ない為、孤独感に耐え切れなくなつたカイは、数回頷いて何かを自己解決して出口へと向かつた。

ドアが無数にあるように見える廊下。

その壁の上部には、鮮やかな宝石を使って飾られたライトがあり、中部には時たま、部屋番号が刻まれた銀のプレートや船内の構図埋め込まれていた。

密室を出たカイは、丁度目前にあつた船内の構図を見つけると、それに近付いた。

そして、それを見た彼は眉間に皺を寄せて口を開く。

「ひ、広いなあ……。絶対に迷つよ、コレ」

カイが苦笑しつつ見る構図には上部から見た船が二つ、上下に描かれており、下の構図には一定の間隔を線で区切られている。

それは船内のエリアを仕分けるものであり、船首から順に前方休

憩室、客室Aブロック・Bブロック、大型食堂、売店、客室Cブロック・Dブロック・Eブロック、艦橋および船員専用室（関係者以外立ち入り禁止）と書かれていた。

ちなみに上の構図には、甲板とだけ書かれている。

「現在地は……Bブロックか」

とりあえず甲板に出よう、と決めたカイは、大型食堂近くに書かれている階段を目指す事にした。

だが、向きを変えた彼の視界には、丁字の通路を横切る、見覚えのある侍女服姿の人物が映つた。

それは、

「確か……ヘル……！？」

アッシリヤにてカイに襲撃を仕掛けたヘルが同じ船に乗つており、その上視線の先にいる事に驚いた彼は、殺した声で叫んだ。だがすぐにその口を塞ぎ、身構えつつ彼女が気付いていない事に安堵し、忍び足で後を追い始めた。

そして、彼女が向かつた通路への角を曲がると、一度客室に入つていく姿を確認でき、その客室のドアまで近寄る。

なにやつてんだろ、と思い苦笑したカイは、ドアに耳を当てて聞いた。

他から見れば異様である事を知つてか知らずか、彼は耳を澄ます。すぐに聞こえてきたのは、男の声だ。

「 戻ったか、ヘル。悪いが今は取り込み中だ。用件は後回しにしてくれ」

その言葉に答えるよつにして聞こえる声は、ヘルと思われる女性の声。

「ヤー、マイマスター。では、腕の修理を何時でも実行可能にする為の準備をし、終了次第待機します」

「そうしてくれ。さて、今回の襲撃は失敗した事には謝る。だが、同行している女剣士が、銃弾を叩き切る化け物だとは聞いてないぞ？ ユウ・ウラハス」

ドアに耳を当てて聞いていたカイはその名前を聞いて、えつ？、と一言だけ発して固まった。

そんな彼に追い討ちを掛けるかのように聞こえた声は、「わりいな、あそこまで強い奴だとは思っていなかつたんだ。……その女剣士の事は依頼主に報告しておく」

先ほどとは少し違う、冷静な男の声だ。

その声を聞いたカイは、目を見開いて呟く。
「コウだ、と。

「ヘルを負かすほどの実力を持つてる奴等を相手にするんだ。報酬はいくらか、そういうらか上乗せしてもらひうぜ？」

「……俺のミスとは言え一般人が他世界を、ジードを知つてしまつたんだ。依頼主の邪魔者になつてしまつ前に仕留める必要がある。そう考へると、上乗せは許可されるだろ？」

それはありがたい、といふ言葉が聞こえた直後、急に会話が終わつた。

それと同時にカイは、背筋の凍る寒気を感じた。

殺氣の籠つた、鋭い視線。

それは、彼が耳を当てているドアの向こう側からだった。

「――」

判断は一瞬だった。

カイは素早くドアから離れると、全速力でその場を去った。どうしてコウが、と奥歯を強く噛んで咳きながら。

穏やかな波が打ち付ける先には桟橋がある。

木で作られているその桟橋には小船が何隻か見られ、陸には木造建ての平屋が数軒見られる小さな村が広がっていた。

そんな村の桟橋に、一隻の船が近付いていた。

減速して、桟橋に停めるかのように、だ。

そしてその船の甲板には、紅いワンピースと、更に黒のチェックと白のラインが混ざったスカートを身に纏った獣人の女性が立っていた。

クレアだ。

彼女は頭に生えている猫耳を隠すように、右手に持っていた黒い帽子を被り、上陸に備えていた。と、その時だ。

彼女の視線の先、桟橋の上に一つの動きがあった。

それは十人ほどの背が小さい男女の子供達であり、船が来るのを歓迎しているかのように大きく手を振っていた。

それを見たクレアは突然の来航でも歓迎してくれるのね、と思い、振り返すべきかしら?、とも思つ。

そして、偶然それに答えるように発せられた声は、彼女の背後から来た。

「ク～レア、手え振り返したらどうぜよ?」

「……貴方にしてはまともな答えね、ネブチューーン」

「あれ? わっち、出会つて間もないのに、クレアの脳内では人間としての価値が決まっちゃってんか!?」

妙な奇声を上げて頭を抱えだしたネブチューーンをクレアは無視し、桟橋の上の子供達に向かつて軽く手を振り返した。

すると、その子供達は更に大きく手を振つた為、クレアは思わず苦笑した。

「元気な子達ね。^{元氣}主も、あれくらい元気があればいいんだけど

「……わっち、思つんだんが、コウがあんな感じだったら正直引くぜよ……?」

眉を寄せ、怪訝な表情をするネブチューーンを見たクレアは、冗談よ冗談、と半目で言い返した。

丁度その時、船が微かな振動音と揺れと共に、桟橋近くに停止した。

それと同時に、桟橋より少し高い位置に浮く船を見上げながら近付いて来た子供達は、笑顔を甲板にいる二人に向けた。

「こんにちは! お姉さん達、何しに来たの?」

好奇心交じりの声で問い合わせた一人の少年に、クレアは笑顔を作った。

「私達はちょっと道に迷ったの。……えと、もしよかつたらここから王立図書館のあるテクノス王国までの方角を教えてもらえないかしら？」

問い合わせに子供達は、え？、とそれぞれ疑問の言葉を発し、顔を見合わせた。

そして、先ほどの少年が代表と言えるような形で一步前に出てクレアを見、小首を傾げながら答えた。

「王立図書館なら、ずっと前に地震で壊れちゃったよ？」

第四十一話・疑惑（後書き）

どもー、Inumooです

身勝手な更新休止報告から一ヶ月。
やっと、訂正作業が終了しました！

変更内容は、文の書き方と、シナリオの少々たる修正と、30話あたりに新規シナリオ追加、となつております

長い間の更新休止でしたが、これよりInumooは復活いたします
ので
これからもよろしくお願いします！

第四十一話・親切の裏側は

村の建造物の一つで来客用とも言える部屋に、ユウ達三人は居た。五畳ほどのその部屋には、長椅子と丸く小さなテーブルしか無く、床は地面である為に皆土足だ。

そんな室内を物珍しそうに見渡すユウは、足音に気付き、入口を見る。

「はーはー、お客様へん！　お茶をお持ちしたよーー！」

元気すぎる声と共に入口からは、十人程の子供達の群れが入ってきており、その内の一人が、湯飲み茶碗が三つ載ったお盆を持っていた。

そしてその子供は早足で三人の下に寄り、湯飲み茶碗を差し出す。その湯飲み茶碗からは、湯気が立っていた。

「あ、ありがとうございます。でも、今は夏よ？　さすがに熱いお茶は……」

「暑い時に熱い物を口にする。それは、意外といい事ですよ？」

湯飲み茶碗を見ながら苦笑しているクレアに言葉を放ったのは、子供達より遅れて入って来た男だ。

修道服を纏っているところを見ると神父なのであろうその男は、子供達に囲まれながらも二人に会釈をした。

「このような小さな村にお越し頂き、ありがとうございます。して、何故この村に？」

両手を腹部の前で合わせ、両指を絡ませながら問う神父に、お茶

を一口飲んだユウが答える。

「……俺達はテクノス王国にある王立図書館に向かっている途中でな、上陸出来る場所を探していてこの村を見つけたんだ。だが、子供達から聞いたところによると、王立図書館は数日前に地震で壊れたそうだな？」

「はい、ものすごく大きな地震でした。その時私達は丁度、馬車でテクノス王国近くを走っていたのです」

「すつじかつたんだぜ！？ガラガラガラーッて崩れたんだよー！」

緑髪の少年は両手を使って崩れるのを表現しながら、驚いた表情をしていた。

そんな彼の頭を神父は笑顔で撫でながら、されど視線はユウ達の方を向いて困った表情になる。

「元々、終戦以来テクノス王国は廃墟同然でしたからね。老朽化もあってか壊れやすかつたようです」

「ん？ って事は、今現在テクノス王国には誰も居ないという事か？」

「はい、そうなりますね。……とは言つても、無法者達の住処になつているかもしませんが」

ですが、と付け足し、神父は言葉を続ける。

「それでも行くとおっしゃるのなら、馬を二頭お貸し致しましょうか？」

「まじですかいなあ～！！

神父の提案に驚いたのか、ネプチューンは声を上げた。

一方ユウは、考え事をしているのか顎に手を当てる。

だが、何か思いついたのか顎から手を離して神父を見る。

「……その行動は良心からか？　それとも、誰かに頼まれた際に貰える報酬に対する欲求からか？」

「注意深いお方ですね。もちろん、前者ですよ？」

笑みと共に言つた神父を見て、コウは鼻で笑い立ち上がった。
それじゃ言葉に甘えよう、と言い残し、部屋を出て行く彼の後を追つよつこ、アリス、クレアも立ち上がりて出て行つた。

「あ、皆さん？　お客様達を馬小屋に案内して差し上げて下せー」

唐突に思いついたかのように言つた神父の言葉に、子供達は元気な大声で返事をし、無数の足音を立てながら一人を追つて行つた。
そして残つたネプチューンと神父の二人は、何故か睨み合つていた。

無言で、全く動きを見せずに、だ。

文字通りの静寂。

しばらくしてその静寂は、ネプチューンによつて破られる。

「……わっちからも質問だつちや。　キミ、本当に神父さんなんかい？」

問いに神父は、しばらくきょとんとした表情を見せた。

だがその表情もすぐに崩れ、口元に手を当てて笑い出した。

「面白い事を言こますね、ネプチューンさん。見ての通り、私は神父ですよ」

彼は自信満々言つと、ネプチューンは不適な笑みを作り、立ち上

がつた。

「それもそうんね。変な質問しちつてすまんぜよ。じゃ、馬借りに行くつちや」

そう言い残し、ネプチューーンは部屋を後にした。

そして、たつた一人残った神父は、テーブルの上に置かれた三つの湯飲み茶碗を見る。

それらの中身は全く減つておらず、神父は思わず苦笑を漏らした。

「……やはり、熱い物はお気に召しませんでしたか……」

呟く声は、部屋中に虚しく響いた。

真夏の太陽が容赦無く照らす浜辺。
穏やかな波が打ち寄せるその場所には黒い、鴉の羽根が無数に四散していた。

そしてその奥、大きな木々によつて日陰となつている場所には、長身の男が居た。

彼の側の大樹の根元には大剣が立て掛けられており、海で濡れたのであるつ漆黒のロープを木の枝に掛け、上着も脱いで同じく枝に掛けた。

そうして露になつた上半身には傷痕が無数に残つており、肩甲骨の辺りには真新しい傷痕が見える。

と、その時。肩甲骨の傷痕近くに突然、小さな光の粒子が渦巻き、弾けた。

そうして姿を現したのは、四枚の半透明な羽を背に生やした、小さな女の妖精^{フエアリー}だった。

「じゃーん！ 今回も違つた登場に挑戦してみた妖精界のアイドル、ライト・ウィッシュちゃんだよつー！」

両手を広げ、元気一杯に声を上げたライトは、羽を微動させて長身の男の周りを飛び回つた。

そんな彼女を紅い目で睨んだ彼は、口を開く。

「……あれは、何の真似だ？ ライト」

その声には、怒りの感情が感じ取れる。

それに逸早く気付いたライトは、飛び回るのを止めて男の眼前で浮遊する。

彼女の表情には、笑みが見えた。

「何の事？」

「惚けても無駄だぞ？ ……お前、船上でウラハスとの戦闘中、俺に魔術を使つたろ？ お前が得意とする誘惑の魔術を」

呆れ交じりの声で問われたライトは、少しの間を置いて溜息をつく。

「……何でもお見通しなんだねえ、レイヴンは。バレないとthoughtたのに

「俺を甘く見るなよ……それよりも、何故邪魔をした？」

「気付かなかつた？あの時、ユウ・ウラハスは二人居たんだよ？」

右手の指を一本立て、目を細めた笑みを見せるライトは、更に左手の指を一本立てる。

「一対一だよ？さすがにあの身のこなしをする人が一人も居たら、絶対敵わんといつて。だから、誘惑での場に居た全員の視界・視覚から一人のユウ・ウラハスを消したんだよ」

どう？大儀だつたでしょ、と言ひながら嬉しそうなライトを、どうでもいいような目で見ていたレイヴンは不意に、彼女の言葉を脳内で再生した。

ユウ・ウラハスは一人居たんだよ、と。

「……ちょっと待て。ウラハスが一人居た？俺が切り刻んだ奴は、お前の誘惑が見せた幻覚じゃなかつたのか？」

「違うよ？レイヴンが切り刻んだユウは実体のある分身みたいな奴だつたよ。クローンって言つた方がよかつたかな？」

ライトの言葉を、驚きの隠せない表情で聞いていたレイヴンは、奥歯を力一杯噛み締めた。

そして舌打ちをし、木の枝に掛けてある上着と漆黒のローブを着、羽織つた。

上着は多少濡れたままだが、彼は氣にする素振りを全く見せない。

「……とんだ屈辱だ。なあ、ライト？……」これは、倍にして返す必要があるよなあ……」

怒り交じりの低い声。

そんな声にライトは答える事無く、彼を導くかのように前へと飛んで行つた。

彼はそれを見、そして立て掛けであつた大剣を背負つて歩き出す。ただただ、ユウが向かっているという王立図書館を目指して。

広大な荒野を馬に跨つて駆け抜けている中、俺は一つの事を思い出していた。

レイヴンという名の男と殺り合つた時の事を、だ。

あの後、クレアとネプチューンには氷の魔術で逃れたと言つたが、実際はそんな便利な魔術など知らない。

『まあ、正確に言えば、そんな魔術は無いわ。それに貴方の体内魔力は雷の属だから、氷の魔術自体使えないしね』

ああ、その通りだ。

だが実際、あの時あの場にいた全員の視界から、俺が消えていたと思う。

あれは、突然の恐怖だった。

記憶石を使つてもう一人の俺を創造して数瞬後、俺に対する全ての視線と殺氣が消え失せたのだ。

それこそまるで、俺があの場から居なくなつたかのようだ。

『……あの感じは、クレアに掛かっていた魔術を広域化したようなものね。だけど、それほどの魔術を発動したと言うのに、術者の位置特定が出来なかつたの』

少なくともレイヴンでは無いと思つが、どちらにせよ面倒事が増えたつてわけか。

そのようね、といつティファの返答を聞いたのと同時、背後から声が来た。

「ユウ、王立図書館が見えて來たわよ」

そう言つたのは、同じ馬に跨つているクレアだ。

ちなみに何故、彼女が同じ馬に跨つているのかと言えば、三頭も馬を借りるのは申し訳無いから、とネプチューング俺とクレアが共に乗るよう提案したからだ。

その事に対しても俺は別にいいのだがティファは、私の座る場所が無くなるじゃない、と猛反対していた。

とは言つても、俺以外にティファの声が聞こえるわけが無い為、今の状態に至る。

「……ユウ？ 聞いているの？」

「ん？ あ、ああ、聞いてた。」

にしても、でかい建物だな、王

立図書館つてのは

言いながら見た正面、まだ数キロメートル先には、その距離でも巨大に見える建造物があつた。

クレアが言つにはそれが王立図書館であるらしく、その隣にこれまた大きく、そして広大な城壁に囲まれている城が、テクノス王国なんだそうだ。

「王立図書館は、テクノス王国よりも遅く建造されたんだつりや。そんために、王立図書館は城壁の外に建つてゐるんぜよ」

馬を隣に寄せて来たネプチューンは、正面を見つつ言つ。ふと彼の表情を見れば、わずかに苦笑していた。

「……何が壊れちゃつたよ？　だつちや。前に見た時と、何ら変わり無いぜよ……」

言い終えたのと同時、ネプチューンは速度を上げて前へと出た。
……確かに、ネプチューンの言つ通り、王立図書館は崩れています
どころか壊れてもいい。

だが、廃墟である、という雰囲気は醸し出されている。
そんな場所へと、馬の速度を一気に上げて向かう。
太陽は既に傾き始めており、夕刻が近付いていた。

第四十二話・敵わない味方

青く広大な海原を行く、巨大な客船。

その客船は水を搔き分け、時たま汽笛で大気を震わせながら、停まる事無く進み続けている。

そんな客船の甲板では、怒声と悲鳴が連續して響いていた。

「どうした!?　まだまだ速度は上がるぞ!　殺氣を感じて避けてみろ!—」

「無理無理無理無理無理だつて!!　シヴァの斬撃が早過ぎ　あぶね!

「これくらい避けられなければ、この先銃撃など避けられぬぞ!—?　わたつかな?　わかつたなら速度を上げるぞ!—?　はあ!—!」

その一つの声を上げているのは、長剣を素早く振り、斬撃を連続して放つシヴァと、彼女の斬撃を防いだり無理な回避運動を行つて避け続けているカイだ。

そんな二人を微笑ましそうに見ているのは、近くのベンチに座っているシルクとミーナだ。

「あははは、頑張れシヴァー!」

シルクの膝の上に座つて足をバタつかせているミーナは、両手を筒状にしてメガホン代わりにし、シヴァに声援を送っていた。

そんなミーナを見てシルクは笑いながら、逃げ回っているカイへと視線を移す。

「それにしてもよかつたあ、カイが無事で……」

咳くシルクの表情には、安堵の色があつた。

その表情を下から見上げたミーナは、満面の無邪氣な笑みになつた。

「よかつたね、シルク！」

「うん、そうだよ。よかつたよかつた！」

「あああああ！！！ 死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ！！！」

安堵し、声に出して笑う一人を他所に、カイは叫びながら斬撃を避け続けていた。

途中、何度も髪が切れて「田^たを舞うが、幸い衣服と身体には一撃も入つていなか無傷だ。

「余り無駄口を叩くな！ 集中し、心の目で斬撃の起動を読め！」

「おわあ！ こ、心の目で……」

咳き、深呼吸をし、目を瞑る。

刹那、長剣の刃が腹部辺りの衣服を横に切り裂いた。

「おわああああ！！！ 何にも読めねえ！！！ ストップストップ
！！！」

大声で一時停止を求めるカイに対し、シヴァは斬撃を止める事はない。

むしろ、わずかに速度を上げた。

と、その時だ。

カイは閃光の如く迫る斬撃の中に、一箇所だけ穴がある事に気付いた。

左脇腹。

空いている穴から一撃を入れれば、確実にその位置に当たり、シ

ヴァはよろめく。

文字通り、隙から更なる隙が出来るのだ。

そう思つたカイは迷う事無く、一度バックステップし間隔を一瞬だけ空け、右手に持つた諸刃の剣を振るう。

出来るだけ早く、そして有効的な一撃を入れる為に、防御に入ろうとする長剣を右足で蹴つて、だ。

そして、

「ぐつ！」

一撃は入った。

その際、右足で蹴つたはずの長剣が、右脚の脛脛ひざを斬るが、カイは気にしない。

入れた諸刃の剣を振り切り、右足を振り切つて身を翻して体勢を整え、長剣を落として軽く吹き飛んだシヴァを追撃する。

だがその瞬間、カイの勢いが止まつた。

それもそのはず、いつの間にか体勢を立て直し、平然と立つてゐるシヴァに、片手で胸元を押されているから当然だ。

両者の表情は、笑みと焦り。

「……えと、シヴァ？」

「よく見破れたな、私の隙を。己の田で相手を見、戦況を優位にするのはいい事だ。 合格つ！」

腹部に力を入れて放つた言葉と同時、左足を前に出して片手を突き出し、掌低じょうたいを胸元にかました瞬間に、カイは吹き飛んだ。

「 ぐいっ！？」

そして、一瞬ともいえる時間の後に、カイは壁に叩きつけられた。

「力、カイ！？」

「ん？ 強くしすぎたか？」

いつて笑いながら、シヴァは落ちた長剣を拾い上げ、鞘に収めた。一方、カイの下に駆け寄つたシルクは、脹脛の切り傷に手を添えて、回復魔術・トルを唱えていた。

すると切り傷は見る見る内に塞がり、そして無傷になる。

「……えあ？」「これ、シルクが役に立てるって言つてた力……？なんか、すごい」

「すごいでしょう？ つて、そんな事よりカイ、あんまり無茶したら駄目じゃない！」

切り傷のあつた右脚の脹脛を平手でペチペチ叩きながら、シルクは眉を顰めてカイを叱る。

そうする彼女にカイは、頭を搔きながら苦笑を返した。

そしてすぐに、腕を組みながら近付いて来るシヴァに視線を移す。

「さ、さすがシヴァだね……でも、どうやってあの状況で体勢を元に？」

問われたシヴァは、カイの前で立ち止まると、組んでいた腕をすぐには解いた。

そして、右の掌^{てのひら}を胸元^{むね}の位置で上に向け、五指を僅かに開く。

「言つてなかつたか？ 私は生まれつき特異体质でな。私の属性魔力である風の魔術を司れ、詠唱無しで発動出来るのだ」

笑みで答えるシヴァの掌には、風が終結し始めていた。

もちろん、人の目に視認出来るものでは無いが、風が吹き荒れる

音と余波でカイ達に届く微風そよかぜが、彼らに風の存在を知らせていた。

「――の風は言わばもう一人の私。自由自在に操る事が出来る。……」
「いぐら合格したとしても、やはり敗北は敗北だ。その為、敗者であるお前の頭を坊主にする事など容易いぞ?」

「じょ、[冗談キツ]いつて~。……マジ?」

初めは笑っていたカイの表情は、見る見る内に不安に染まつていった。

そんな彼を他所に、シヴァは風を潰すように手を握り締める。すると風は一瞬の音と共に四散し、消え失せた。

「冗談に決まっているだろ?。教え子を辱めるような真似はしないで」

「……嘘だあ。本気の顔してたくせに…… わああ! すみません[冗談です!]」

「ほう、と呟きながら再度、右の掌を開いたシヴァを見て、カイは全力で謝った。

だが、彼女は無言のまま、掌に風を生み出す。

「ほ、本当にすみません! だから止めてください!」

「カイ、觀念して坊主になっちゃえば?」

「坊主はいやだあああ! ! ! !」

しゃがみ込んで、坊主になる事を提案したミーナにこれまた全力で否定し、必死にシヴァから逃れようとする。

だが、先ほどの衝撃で腰が抜けて立ち上がれず、背後は壁であるが為に下がれない。

さらに左右にはシルクとミーナが居る為、結果逃げ場はどこにも

無いのだ。

「カイ、カイ、大丈夫！ 坊主になつても私は友達でいるから！！」「シルク・セシール！ その言葉を俺の目を見て言ってみろよー！」

4

するとシルクは、薄目でカイの頭を見、

「嫌だあああああああーーーーー！」

そういうつまむしの間に、シヴァは口元に笑みを作り、右手を振り上げた。

刹那、カイ達三人が、まるで風に舞い上げられ麦藁帽子のように、自然と立ち上がった。

そんな体験に、三人はぽかんと口を開けて、直立に固まっている。

「そんなに驚く事では無いと思ひや? 風で立ち上がつただけだ」

その言葉にカイは、髪を必要に触りながら、シヴァを凝視する。

「坊主は……無し？」

「何馬鹿な事を言つてゐるのだ？」
「そんな事より、だ。そろそろ戻
るぞ。私は疲れた」

言つてミーナを見ると、丁度大きな欠伸をしていた。

それを見たシヴァは笑みを作り、彼女に背を向けて負ふつた。
そしてシヴァは、密室へと歩き出した。

「……あつ、じゃあ私達も行こうよ、カイ！」

元気すがりの声で言つたシルクは、スキップしながらシヴァの後を追つた。

そんな後ろ姿を見ながら、カイはふとある事を思い出す。殺し屋とコウの会話を、だ。

「……コウが別行動をとるって言つた、本当の理由つて……」

咳き、そして頭を左右に振つて疑念を吹き飛ばす。そして、大分離れてしまったシルク達の後を追い始めた。

汽笛が、船内に響き渡る。

その轟音を煩く思いながらも、フェンリルは作業を続ける。

ここは、数多くの客室の中の一つ。

その客室内には、バチバチという火花の散る音と、それによつて起きるフラッシュが何度も光っていた。

その源である工具を持っているフェンリルは、金属のプレートで火花から顔を守りつつ、ヘルの外れた右腕の二の腕の間にある接合部分を修理していた。

「……痛くないか?」

「痛覚プログラムは現在停止中ですので、問題ありません」

首だけをフェンリルに向けて答えるヘルの声は、何故かコウの声だ。

それに対しても、フェンリルは溜息をつく。

「お前な。声戻せよ、声」

「失礼いたしました。発声プログラムの変更要請を実行いたします。

……完了いたしました」

「いや、完了じゃないからな。それは俺の声だからな。戻せよ、な

？」

怒りを堪えつつ言つフェンリルに、ヘルは一言謝罪し、変更を行した。

そしてフェンリルは、少しづつワイヤーを繋げながら、作業を続ける。

途中途中、左側に置いている電子端末を操作しながら、慎重に全てのワイヤーを繋げている。

そして全てのワイヤーが繋がった時、不意にヘルが問い合わせた。

「あれで、よかつたのでしょうか？」
「……何の話だ？」

ヘルに視線を合わせずに、腕の皮膚細胞を張り替えているフェンリルに、彼女は言葉を続ける。

「カイ・エディフィスの話です。現在、彼にとつてコウ・ウラハスは疑うべき対象となつていてる確率が八十パーセントを占めてしまつてゐるはずです」

「意外と優しい奴だな、お前は」

「お褒め頂き、ありがとうございます」

言つて、頭だけで一礼したヘルにフェンリルは、だがな、と付け足した。

「これは飽くまで仕事。そう、仕事なんだ。対象に情を抱くのは、殺し屋として失格だ。……いいな？」

「ヤー、マイマスター！」

ヘルはそう言って再度、頭だけで一礼する。

それに対してもフェンリルは、上出来だ、と言つて完治した彼女の右腕を軽く叩いた。

その動作とほぼ同時、彼の左側に置かれている電子端末が、ピピピッという電子音を出して何かを報せた。

それを聴いたフェンリルは、左手で電子端末を操作して、ディスプレイにウィンドウを開く。

そこには、殺しの依頼を要求するメールが映し出されていた。

第四十四話・ジーードの歴史

薄暗い、日陰のような場所を列になつて進んでいる者達が居た。コウ達だ。彼らは、もうじき日が暮れるといつに明かり一つ持たず、王立図書館の中を歩いていた。

探ししているのは、神話聖書”ニニグマ”。コウの居た世界、ジードの手掛かりとなる資料だ。

それを探す為に、無数の本が入った本棚の群を抜けて行く。と、その時不意に、中間を歩いていたユウが、先頭を歩くネプチーンに声を掛けた。

「なあ、ネプチューン。さつきからずっと歩いているが、場所はわかつてんのか？」

「明かりの保管場所も含めて、全部順調ぜよ～」

ネプチューンは振り向く事無く、手を上げてひらひらさせながら答えた。

そんな彼をクレアは、内心で不信に思つていた。

それは、獣の勘だ。この先に、彼が導いて行く場所には、危険な臭いが漂つていると、そう感じとつていた。

ただそれを、彼女は敢えてユウに話さない。

確信の無い事で余計な心配事を主にさせたく無い、といつ氣遣いがあつたからだ。

「……おうー？ あつた、明かりがあつたぜよー！ ほれ」

同時、ネプチューンの右手に光が宿つた。

その源は、賢石”シャマシュ”だ。太陽のようで少し違つ、優しい光を放つそれを、ネプチューンはもう二つ手に取つてユウとクレ

アに投げ渡した。

そして二人が手に取つた瞬間、シャマシュは光を放ち出した。

「……綺麗ねえ……」

眩ぐクレアは、シャマシュを見てウットリしながら、ユウの隣りで立ち止まつた。

対するユウは、シャマシュを高く揚げてある物を見上げていた。視線の先には、模様が多数彫られた大きな門。

その門を、ネプチューンは警戒する事無く開ける。
そして、両腕を広げて笑みを作つた。

「よつじや、王立図書館・機密倉庫へー！」「はーはー一般人はもちらん、軍人さんでも滅多に入れなかつた所だよーー！」

その奥には、またしても無数の本が収納された本棚の群があつた。

「あつたあつた！ これじゃないのー？」

歓声を上げたのは、門から少し離れた所にある本棚の上部、梯子に上つているクレアだ。彼女は分厚い本を片手に持ち、軽快に梯子を降りていく。

そして、中央に位置する大テーブルに本を置いた。

重みのある鈍い音と大量の埃を巻き上げたその本の表紙には、薄つすらとだがエニグマと書かれている。

「ほらほら、ユウ！ ついでにネプチューンも集まつてーー。
「わっちはついでかんな……」

溜息をつくネプチューンと、無言無表情のユウが本棚の間から現れ、クレアの近くに集まつた。

「……これが……ジードの記録か……」

咳くユウの表情には、僅かな苦笑が生まれる。

だが、そんな事はお構い無しに、ネプチューンは本を開いた。

「…………これは、ヒニグマ戦争あるいは戦記を中心、開戦の理由とそれまでとそれからの暮らしをまとめられているようだっしゃ。えと……人間と、謎めいた異形の存在ヒニグマ。まずはこの二種族が争つまでの歴史ぜよ」

言つてネプチューンは数ページ捲り、止めた。

「んとんと……この世界、ジードには四季があり、大地は永遠に育まれていた」

「これは私達の世界と変わらないわね。でも、補足があるわ。
……この世界は、我々グラルスよりも、遙かに広大だと推測される
……だ、そうよ」

「広い意味は……これじゃないん？」

ネプチューンが指で示す位置。

そこには丸い惑星が描かれており、四方向にそれぞれの四季を示す絵が、そして惑星の北と南の大地に対をなすように、人間とヒニグマが描かれていた。

その二つの種族が向く方向は、左右逆だ。それは丁度、歩き出し

ても鉢合せしない形。

「人間とエニグマ。その一種族は、互いに四季が一周する毎に移住し、その先でまた四季が一周するまで過ごした。それが、戦前まで人間とエニグマが出会わなかつた理由だつた。　よく出来た世界つちやねえ～」

そう言つている間にも、ページはどんどん捲られていく。
そして、開戦直前のページが開かれた。

「開戦理由つちやね。　数百年という時の中で人間は、解明され始めていた魔力を、最大限に用いた機械の開発に成功したようだつた。それにより人間の暮らしは異常なまでに発達し、大陸を移動する速度も従来の数十倍にまで達した。そしてそれが、人間とエニグマの初接觸となつてしまつたのだ」

一ページ分を言い終え、ネプチューンは溜息をついた。

「……正直、似てるのか似ていなかさつぱりぜよ。唯一わかるのは、こっちの世界では希少な生きもんがこの……ジードつて所じや人間並みの数が居るつて事だけな」

「それに、魔力を使用した機械も発展してゐるしね。グラルスでは、ほとんど賢石に頼つてるもの」

苦笑しながら、クレアはページを捲つた。

そして今度は、彼女が読み始める。

「そうして幾重にもわたる接触の末、ついに人間が攻撃を仕掛けたのだ。それは、開戦である。　戦いに特化した、銃や車両などの兵器を投入する人間に対し、異常なまでの繁殖力と見た者を恐怖さ

せる姿で対抗したエニグマは優勢を保っていた。……左腕に光を宿す者が現れるまでは、だつて、え……？」

そこで、止まつた。

理由は一つ。最後に出てきた呼び名に、心当たりがあるからだ。だが、それはすぐに別人だと知らされる。

「ディン・ガードナー。眼帯をした長い銀髪の男。髪の色以外、カイには全く当てはまらないわ」

それは、ユウの声。口調がおかしいが、確かにユウの声だ。だが、やはり口調に違和感を感じたクレアは、振り向いて問おうとした。

今のは何？、と。

だが、それを遮る音が来た。

遙か上の天井にあるステンドグラスが、大きな破碎音と共に割れたのだ。

それに気付いた三人は、少し遅れつつも素早く散開する。

それから数瞬後、三人が居た大テーブルの周囲にガラスの雨が降り注いだ。

くそつ、何だいきなり……

そう内心で呟きつつ、素早く本棚と本棚の間を駆け抜ける。

『鳥でもぶつかったんじゃないの？　えー？』

…………どうやらガラスが割れた後、魔力を抑え切れずに放出している奴が十人ほど、この中に入ってきたな。殺氣は完全に消えているが。

『未熟ねえ……こには私がやりましょうか？』

いや、まだいい。万が一、遭遇して困まれた時に頼む。それより

一度言葉を止めて、向かって右の本棚を蹴りで思い切り倒す。
それによつて、固定されていない本棚がドミノ倒しになり、うわあ！、という声が一瞬聞こえたが、轟音によつて搖き消された。

それに目もくれず、走り続ける。

…………さつき、俺の身体を使って放つた言葉、デイン・ガードナーとは誰の事だ？

問つと、ティファは微笑した。

『まだ、ヒミツよ』

わかつていた。問い合わせた際に、ティファは微笑を返してきた場合、絶対に先延ばしにされるという事は。

だが、無駄だとわかっていても、

「聞きたくなるのが俺　だつ！－」

最後の言葉と共に、腰の鞘から左手で長剣を抜き、後方へと振るう。

瞬間、金属音が響く。その音源である武器、ロッドを持っていたのは、
「チツ、まさかガキまで共犯者だったとはな！」

そのガキは、上陸した際に入った村に居た、十人ほど居たガキの一人だ。

そいつに対しても笑みで言い放つておき、力でガキを吹き飛ばす。するとガキは、本棚に衝突したが、武器を落とさないとこらを見ると、大分訓練されているようだ。

「……厄介だ」

眩き、長剣を右手に持ち替えて、左手で後ろ腰のホルスターから拳銃”ガバメント”を引き抜く。

そしてガバメントの銃口を、吹き飛ばしたガキに向けて引き金を引く。

乾いた銃声が、響いた。それを数回、繰り返す。

そうして放った銃弾は全弾……当たらなかつた。

「チツ、魔術師か」

その全弾は、倒れたガキの数センチ前で、大気に目視出来る程の波紋を生みながら止まっていた。

『残念なお知らせよ。囮まれているわ』

その報告を聞き、辺りを見渡す。

……数は五人。全員が本棚の上で詠唱待機中、か。

「群れる魔術師は嫌いだ……」

言つたのと同時、俺を囮んでいるガキ共が、魔術を放つた。

「なんなのよ、もう！」

そう大声で叫んだクレアは、叫ぶべきではなかつたと後悔し、口を手で塞いだ。

そうして冷静にならうと本棚と本棚の間で止まつて深呼吸し、太股に巻いてあるベルトからダガーナイフを引き抜いて、両手にそれぞれ逆手にして持つ。

同時に構え、感覚を研ぎ澄ます。そうして標的を、獲物を獣の勘で……捉えた。

「はあ……」

勢いよく飛び出し、ダガーナイフを振るう。

その勢いで、被つっていた帽子が飛んで猫耳が露になるが、気にしない。

するとタイミングよく人影が横切つた。

だが、肝心の刃はロッドによつて防がれる。金属音と共に、だ。

そうしてクレアが見た相手は、先程まで居た村の子供だった。

その事に、クレアは眼を見開く。

「何で貴方が！？」

言つたのとほぼ同時、クレアは新たに気配を感じた。
背後、クレアが元居た本棚と本棚の間にもう一人、少年が居たのだ。

彼は丁度詠唱を終え、魔術を放とうとする。
その事に、しまった！、と言おうとしたクレアよりも先に、動きがあつた。

本棚がドミノ倒しになり、魔術を放つ寸前の少年に覆い被さつた。
うわあ！、という声は轟音で焼き消される。

それを見たクレアは、うわ……、と苦笑し、前へと向き直す。

現在、彼女のダガーナイフを防いでいるロッドは、もちろん金属製だ。

その為に、強烈な打撃に注意しなければならない。それを認知の上で、クレアは動いた。

ダガーナイフを強く前に押し、相手との空間を空ける。
同時に、素早くバックステップをし、更に距離を作つた。そうして載つたのは、本棚の上だ。

そこから、全速力で相手の前方へと走る。

疾走。その状態から繰り出されるのは、上段回し蹴り。

もちろんの事、相手はバックステップをしながらロッドで防ごうとするが、蹴りの速度が早過ぎる為に、軌道を僅かにずらしただけだ。

空を切る蹴りが、子供の頭上掠る。

そうして次に、姿勢を最大まで低くし、相手の横腹に蹴りを叩き込もうとした。

それは、最初の回し蹴りを防ぐ際にロッドを上げており、尚且つ蹴りがロッドに直撃し、その反動で素早い行動が出来なかつた隙を

突く一撃。

だがしかし、その一撃は、

「ふおう～んっ」

手応えを全く与えず、風に流されたかのように脚が振り切られる。子供は吹き飛んでいない。

「え！？ なんで！？」

クレアの驚いた声と共に、脚は虚しく振り切られた。同時に、ロッドの重い一撃が、彼女の腹部に直撃する。

第四十五話・作られし者達

ロッドがクレアの腹部に直撃し、メキッ、という嫌な音が鳴った。それは何処の骨から聞こえたのかはわからないが、そのロッドの一撃は威力が異常である事は確かだ。使い手が、子供だといふ事を忘れる程に。

「……痛いじゃないの よつー！」

最後の一言に力を込めて、クレアは掴んだロッドを下から蹴り上げた。

その際に起きる振動は、使い手である子供には耐え切れなかつたのかロッドが手から離れた。

それにより、最後まで掴んでいたクレアは痛みを堪えながら微笑を漏らし、ロッドを宙に投げた。

同時に彼女は素早く、目にも留まらぬ速さでダガーナイフを振るう。

するとロッドは、素材が金属である事を忘れさせるかの如く切り刻まれた。

ダガーナイフには、傷一つ無い。元々、エターナルで加工されたダガーナイフは強度が異常に高い。それにクレアの振るう速さが加われば、金属など容易い物なのだ。

「まさかとは思っていたけど、これ程まで切れ味がいいとはね~」

クレアは微笑しながら、ダガーナイフの刃を軽く撫でる。

そんな彼女に対して、ロッドを壊された子供は、あはは、と笑い出した。

「す、じいね、お姉ちゃん！ 僕の武器が無くなっちゃったよー。」

後が無いよ、うな台詞を、緊張感の全く無い声で言つていい子供は、宙に左右の手で半円を描いた。

その動きに、クレアは身構えて警戒する。

「……何をするつもりなの？」

「何をする？…………あはは！ 何をするんだ？！…………何だ？！ ねえ！！！」

明らかに異常と思われる口調の子供に、クレアは一步下がり苦笑する。

だがその子は、その動作を気にする事無く半円を描く事を続けた。それによつて少しずつ、何かが浮かび上がる。

それは、

「……魔方陣？ つー！ しまつたーー！」

言つて、阻止しようと走り出した時はもう、遅かった。
露になつたのは黒魔方陣。それはコピーされたかのように分離し、
クレアの頭上に散らばつた。

それを見た彼女は急停止し、飛び交う黒魔方陣を見渡す。
刹那、その黒魔方陣から突然黒槍が飛び出した。

その黒槍は、まっすぐにクレアを狙つていた。

「魔術！？ しかもやつか！そつな形してゐるじゃない！」

驚きつつも、バックステップで回避運動をとる。

すると黒槍は、クレアの元居た場所に突き刺さり、小さなクレーターを作つた。

だが、それだけでは終わらない。他の黒魔方陣からも、黒槍は飛

び出す。

その量は既に雨だ。

「な、何よこの量！　　あ、意外と簡単に……」

放った言葉と共に生まれるのは笑み。

それとほぼ同時に降り注ぎ始めた黒槍を、クレアは素早い動きで走り回り、避けた。

まるで猫か兔。野を駆け回る小動物のようだ。

「あ、あれあれ？　何で避けるんだよお～」

悔しそうに腕を振った子供は、更に黒魔方陣を増やした。だがそれも、クレアにとつては遅すぎた。

それは黒槍が遅いわけではなく、増やすのが遅かったのだ。既にクレアは、子供の懷に飛び込んでいた。

同時に子供を突き倒し、その上に馬乗りになる。

彼女は子供にダガーナイフを向けながら、声に出して笑う。

「ふふふつ、もう少し多く出しておけばよかつたのにね。だから、脅威に見えた黒い槍は、すぐに話にならなかつたわ」

言いながら、勢いをつけて振り下ろしたダガーナイフはしかし、「ひゅる～ん」

子供を逸れて、地面に突き刺さつた。

「あ、あれ……？」

「避けるのなら僕にも出来るんだよ？　お姉ちゃん」

今度は子供の方が笑顔になり、クレアの表情からは笑みが消える。同時、何かに気付いた彼女が顔を上げた時、丁度正面に黒魔法陣が一つ、降りて来た。

そして、黒槍は射出される。

「あぶ……！」

ない、と言い終える前に、クレアは身体を横に傾けて避ける。そんな彼女の右後方に、またしても黒魔法陣。

何の前触れも無く射出される黒槍を、彼女は脚を上げて避ける。そうして続く射出と回避の連鎖は、五回目でやっと止まった。終わつた、とホッとして吐息したクレアの支えはダガーナイフを下に敷いている左手のみ。

他の四肢は全て黒槍を避ける為に、さまざま方向を向いていた。その姿を見る子供は、とても楽しそうに笑っていた。

「あはははー！　すっごいよ、お姉ちゃん！！」

「そ、それはど、どうも……」

震える声で言つクレアの左手と腕は既に限界間近なのか、小刻みに震えていた。

それを堪えつつ、彼女は子供に問い合わせる。

「そ、そういう、ば貴方……なま、名前は？」

「僕？　僕の名前？　AC-07だよ」

AC-07。

明らかに人の名であるはずがない名を聞いて、クレアは驚いた。

それにより、支えとなつていた左手への集中が途切れ、姿勢が崩れる。

「ちょ！　冗談で　しょ……？」

崩れた身体は、しかし黒槍に触れても何とも無かつた。
その事に唖然としているクレアは気付く。

この黒槍は固体の物質である、と。

刹那、彼女は手に持ったダガーナイフを握り締め、音速ともいえるような速度で振るつた。

すると黒槍は切り刻まれ、まるで千切りのように次々と落ちてゆく。

それらの中央で、クレアは未だに仰向けになつているAC-07と名乗つた子供の首筋にダガーナイフを添えていた。
零距離。

それは、軌道を逸らすという厄介な事が出来ない距離。

それは、ダガーナイフでいつでも頸動脈を搔つ切る事が出来る距離。

その距離をもつてクレアは、再度子供に問い合わせる。

「……その名前。まるで機械のように入外の名のようだけど、人間なの？」

「あははは！　もちろん人間だよ、人間！　殺しの為に、特化された人間！　国王が、ここに人が入り込まないようにと配置した暗殺者！！」

「そう……貴方達は、既に滅んだテクノス王国の忘れ物なのね……」

悲しそうに呟くクレアの目には、感情が無かつた。

それは、今から殺すのであるAC-07に情が移らないようにするが為。

躊躇無く、殺す為。

その決意の基で、彼女はダガーナイフを横に引いた。

そして、パックリと空いた切り傷からは少し遅れて鮮血が噴き出す。

「……長い間、お疲れ様……」

死者への手向けの言葉を送ったクレアは子供から離れ、顔にかかった血を拭い取る。

その後、既に息をしていない子供の臉を、そつと瞑らせた。性別がわからないほど幼い顔立ちの子供の臉を。

瞬時に放たれた魔術は、五色の鮮やかさを見せる。

だがそれは、遠方から見た時のみだ。

炎、水、雷、樹、光属性の魔術は、それぞれの形をもつて中央に居た避ける隙の無いユウに向かつて叩き込まれる。

轟音。

それにより、ユウは再起不能になつてゐる……そう思われた。

巻き上がつた埃などが治まり始めた頃、中央に立っていたのは女性。

自称・大魔道師の彼女は、紋章が刻まれた肩肌が剥き出しになつた黒い服を身に纏つており、僅かにズレたソックスをミニスカート近くまで上げて、その手で金色の長髪を搔き上げた。

そして目を一度瞑り、口元の笑みと共に開けた。

開いた目は、白と黒のオッドアイ。

その一つの目は、本棚の上で何が起きたのか理解できていない子供達を見渡す。

「や～っと私の出番ね。ウズウズいてたのよ、魔術師と殺り合^やうのは……ま、貴方達なら、魔術で充分でしょうけど」

フフン、と笑う彼女 ティファは、余裕の表情でそう告げた。すると一つ、本棚の上で動きがあった。

一人の少女が、詠唱をしながら降りたのだ。
そんな彼女に、少年が静止の言葉を放つ。

「待てAC-04！ まだ相手がどんな奴か

「大丈夫だよ！ どうせ、まぐれで避けられたただの女装野郎！ 近距離で放てば確実に！…」

言いながら、余裕の笑みを浮かべる少女は上手く着地し、走りながら両の掌に魔法陣を展開させる。

そうして放たれたのは、樹木の根だ。

その、触れる物全てを巻き込むような根は、ティファに到達寸前まで行つた。

「”フォース・フィールド”」

ティファがそう言い、指を鳴らした瞬間、根は彼女の数センチ前で消滅した。

消滅、というよりかは、空間に飲み込まれたかのように消えていくのだ。

そして根が全て消え、魔法陣でさえ消え、走り続けていたAC-

04の掌は、ぴたりとガラスに手をついたかのように止まった。

「え……？」

その状況に、AC-04の思考は停止していた。
何が起きたかわからない。

ただその言葉が、脳内に響く。

そんな彼女にティファは、満面の笑みを見せた。

「女装野郎って私の事？ よく、ほざいてくれたわね」

表情とは裏腹に、怒りの籠った声。

それと同時に、AC-04の周囲からはパキパキ、という音が響く。

刹那、冷氣と共に現れたのは板状の氷だ。

それは一枚あり、内側には大量の氷柱。閉じれば丁度、AC-04を挟み食らう形。

そして、それは起きる。

ティファが、”マイデン・ファイア”と呴いて指を鳴らした瞬間に、だ。

その氷は、恐怖の中で後ろの仲間に振り向いて縋るような表情を見せた少女を、跡形も無く食らった。

すると氷は一瞬にして蒸発し、血を一滴も残さず何もかもが消える。

「……貴方達は、強いのかも知れないわ。でも、決定的な敗因があるの」

大魔道師は言う。視線の先、突然起きた事態に驚き、硬直している子供達を見据え、

「子供だからよ。だから脆く弱い精神は、すぐに隙を見せる。
ホラ、気付かなかつた」

言葉はそのまま、形となつて現れる。

子供達の背後、黒い空間の穴がポツカリと空いており、その中から無数の手が伸び出した。

標的であろう子供達を引きずり込まんとする、地獄からの招き手が。

第四十六話・追加任務

力タカタ、といつ無機質な音が、とある密室内に響いていた。

それ以外に音は無く、余計に音は耳に残る。

その音源、電子端末のキーボードを打つフェンリルは、ベッドの端に座りながら多少の苛立ちを見せていた。

故に、キーボードを打つ力は少しづつ強くなっていく。

そんな彼の傍らで、無表情のまま立ち尽くしているヘルは不意に、左手を彼の頭に載せて撫で始めた。

「よしよしいい子いい子」

飽くまで無表情で、その上棒読みの言葉に、キーボードを打つ手が止まった。

そして、今まで電子端末のディスプレイを見ていた視線が、ヘルに向けられる。

だが、彼女はその動作を止めようとする素振りさえも見せない。

「よしよしいい」

「待て、何の真似だ」

「……マスターが、何やら拗ねている様子でしたので、もしもの為にインストールしておいた育児補助プログラムを起動し、マニュアルに従つて行動させていただきました」

ヘルの返答を聞いたフェンリルは、深い溜息をつく。

そして未だに頭を撫で続けている手を退けて、あのなあ、と前置きした。

「拗ねてるんじゃない、苛立っているんだ。それに何だ、もしもの

為の育児補助プログラムつて。もしもなんてないから消せ。容量の無駄だ」

「……ヤー、マイマスター。不本意ですが、削除致します」

本当に残念そうな表情を作つて言つたヘルは、開閉の遅い瞬きを数回した。

「……本当に削除いたしますか？」

「そうだ、消せ。今すぐ消せ」

「それでは、削除しますか？ という問い合わせの項目を削除します。…

…さて、それでは育成補助プログ

「

「しつこいぞ！ そんなに削除は嫌なのか、お前はっ！」

ついに爆発した怒りを、再度の深い溜息で治め、視線を電子端末へと戻す。

だが、キーボードに添えられた指は動かない。

それを見て好機だと思ったヘルは、小首を傾げて問い合わせる。

「それで、何故苛立つていたのですか？」

「ああ、依頼の追加だ。添付してある画像の人物が同じこの船に乗つているらしく、ソイツを殺せとな。だが……」

フエンリルが指で示す先、電子端末のディスプレイには画像ファイルが多数展開されている。

その画像ファイルの一つひとつには一人ずつ人物が写つており、数は数百、数千は確実にあるだろう。

それらに、添付されていた画像ファイルを照らし合わせている作業が自動で行われており、それも終わりつつあった。

残り枚数は、五十。その数もすぐに減り、零となつて”NO FILE”と表示された。

同時に、ピーッという電子音が鳴り出す。

その音に混じえて、フェンリルは舌打ちした。

「……念の為にもう一度検索して、コレだ。居ないんだ、そう対象はこの船に居ないんだよ」

「どういう事でしょうか。可能性は多数ありますが、その全ては思考に含めましたか？」

問いに、当たり前だ、と言いながら電子端末を操作し、展開した画像ファイルの船内見取り図の客室Cブロックに指をさす。

「この、客室Cブロックがこの船の入口となっている。この場所に、カイ達が乗ったかを確かめる為に一つ前の便からカメラを設置していたんだ。人が移り込むと写真としてデータを残してくれる便利なヤツをな。それを確認した所、俺達が乗っているこの便以外の便にも対象は写り込んでいなかつた」

「ずっと中に乗っていた、または後の便に乗つたという可能性は、どうですか？」

「前者はありえない。この船に乗り込んだ人数は、船員がカウントしているからな。降りた客の人数が足りない場合、船員総出で船内を探し回る。過去に数回、実際にあつたらしいしな。……後者は無理だ。依頼主は必ず、と言つてる。今日中に乗船だとな。しかも、この船は最近、毎日早朝にしか出ない。レジスタンスのアクアトレインテロのせいで、バビロニア皇国軍による警戒が強化されたからな。これは、前者の答えにも該当する。よつて、対象はこの船に乗つているはずだが、居ないという現状に行き着いている……」

言い終え、頭を搔き始めたフェンリルの指先には、徐々に力がこもっていく。

そうして溜まるのは、苛立ちだ。

「依頼主はこれを追加と言った。カイ・エディフィスを殺す依頼に追加だと！……いいか、ヘル。俺達はプロ、そうプロだ。だがいくらプロと言つても、全知全能なんかじゃない。なのに依頼主は少ない情報と乗船していないガキの写真だけで探し出し、殺せと言つて来ている！」

怒りの言葉を発しながら、フエンリルは一つの画像ファイルを開いた。

そこに写っているのは、黒く長い髪とパツチリとした濁りの無い目が特徴的な少年だ。

それを見るヘルは、瞬きを二回程して頷いた。

では、探しめしょ、と言いながら。

その言葉に、もちろんフエンリルは反応した。

「…………探す？　このガキを馬鹿広い船内からか！？」

「もちろんです。ここで無駄な時間を過ごすよりかはいいと判断します。何分、面倒な提案ですが、プロである私達は仕事を優先すべきかと」

言つて会釈し、フエンリルの返答を待つ。

対するフェンリルは、無表情で電子端末を操作し始めた。

キーボードで打ち込む文字は、”報酬は上乗せだ”の一言。

たつたそれだけの文章しか書かれていないメールを、彼は送信した。

そして、送信完了の報せを確認せずに立ち上がり、部屋の隅へと向かった。

そこには、大型の長方形で灰色一色のトランクが置かれていた。彼はそれをベッドの上まで持つて行き、横に倒して開く。

すると中には、真っ黒な拳銃ハンドガンが三丁と、それと異なつたT字の形

サブマシンガン
をした短機関銃” イングラム” が二丁入つていた。

そして、それらの物であるう黒く長細い弾倉マガジンが、上蓋にゴムで敷き詰められていた。数は、軽く五十を超えていた。

その中から彼はイングラムを二丁取り出し、既に装着されていた両サイド脇のホルスターに差込み、一番細長い弾倉を一本ずつ持つて、胸元の細いポケットに収めた。

次に、拳銃を同じく二丁取り出し、今度は後ろ腰のホルスターに差込み、先程よりも若干太い弾倉を四本ずつ持つて、ベルトに空いた、まるで弾倉を入れる為のような隙間へと差し込む。

そして、トランクをヘルへと向けた。

すると彼女は両の掌に穴を展開させ、右には長細い弾倉を、左には若干太い弾倉をそれぞれ一本ずつ差し込んだ。

その後、穴は閉じられる。

それを見ていたフェンリルは、苦笑を漏らした。

「全く、製作者である俺でも未だにわからん。腕の中にチャージャーを追加されたと設計図にあつたが、どこに入ってるんだよ……」「マスター、誰にも観測されていない領域は、何が起こっているのかはもちろんの事不明。逆に、何でもありという事です。故に、深く考えない方が今後の為だと判断します」

「支援兼近接格闘型自動人形、ヘル。この人の最後の作品であり、最高傑作……先生の……」

虚空を見つめ、呟く。

そんなフェンリルを見て溜息をつく真似をしたヘルは、トランクを閉じた。

大きな音が出るように力強く、だ。

「過去に渉るのは悪いとは思いませんが、任務中故、極力控えてください」

「……ああ、そうだな。悪い癖だ……」

顔を片手で覆い隠して苦笑したフェンリルは、少しの間を置いて立ち上がった。

それと同時にヘルも立ち上がり、彼女の傍にあつたもう一つのトルankを開いて、綺麗に折り畳まれた衣類を取り出した。

彼女の手によって広げられたそれは、真っ赤なロングコートだ。フェンリルはそのロングコートを受け取って羽織り、ポケットに手を突っ込む。

「それじゃ、行くか。仕事だ……」

その言葉に、ヘルは無言で頷く。

そして一人は、部屋を後にした。

まるで、血に染まつた赤きロングコートを羽織つた死神が、野に放たれたかのように。

第四十七話：快樂となる恐怖

暗い暗い闇の中。

僕はずつと、その時が来るまで潜んでいた。

だけど、それももうすぐ終わる。その時が来たから。

「おわあー、びっくつしたあーー、いきなり飛び出して来るな
よお」

僕が飛び出した先には、一人の少年がいた。

それはまさに、地獄絵図だった。

背後の穴に即座に気付き、回避運動をとつたのはたつた一人の少

年少女

残りの二人は逃げ遅れ、今まさに、穴から出る腕に引き擦り込まれそうになっていた。

「いやああああああああああああああああ！」

「うわああああああああ……た、助けてよ、AC-01……えーし

」

恐怖に染まつた悲鳴は館内に響いたが、いつしかその声は途絶え、静寂が訪れた。

その静寂を破つたのは、ティファアだ。

「…………ふ、ふふふ…………あはははは……！ そう、これ、コレよ……！ 恐怖に染まつた心を食らこ尽くす！ これこそ最高の快楽……！」

突然と笑い出したティファアは、片手で顔を覆いながら歓喜した。
”恐怖”。老若男女問わず持つ恐怖という感情を、彼女は楽しんで食らつていると、そう見えた。
だが、その状況下で動く者が居る。

「…………何が、恐怖だ……！」

少年だ。

AC-01と呼ばれた少年は、恐怖では無く怒りを露にして、詠唱の構えを取つた。

「…………殺^やるぞ、AC-03。あのイカレた女を、殺す！」

その言葉に、AC-03と呼ばれた少女は顎き、同じく詠唱の構えを取る。

そして、動ぐ。

AC-01は回り込むようになり疾走した。

田にも留まらぬ速さで、まるで光のよつてだ。

そんな彼を田で追おうとして向きを変えたティファアに、詠唱を終えたAC-03が魔術を放つ。

「……”ライティング”……」

瞬間、無空間から稻妻が生まれた。

その稻妻は、ティファアが気付くよりも速く彼女に到達する。

「 んあつ！！ …… 危ないわね！ ” ライン・アロール ” ！」

衝撃を堪えるティファアは、素早く指を鳴らして、現れた光の矢をAC - 03に向けて射った。

だがそれは、軽々と避けられる。

同時に、ティファアの真下に、片膝を立ててしゃがみ込んだAC - 01が現れた。

「 え？」

「 稲妻が直撃してそれって事は……魔術耐性か」

言いながら、床に手を付ける。

そこに浮かび上るのは、白魔法陣だ。

「 ” ジヤッジ・レイ ” ！！」

AC - 01が大声で言い放つと、それに答えるかのように光が生まれ、

「 そんな！？ まだ体勢が 」

白魔法陣から上に向けて、太い光の柱が放たれた。

その光は天井まで達し、風穴を空ける。

しかしティファアは、寸でフォース・フィールドを開いた為に逃れる事が出来、二人から距離を取っていた。

そんな中、彼女はある疑問を持った。

……詠唱が、短すぎるわね……

通常、魔術を使う際には詠唱が必要不可欠だ。

それは、言葉を鍵として特定の魔術^{「いとわざ」}を生み出す為の行為。ちなみに、禁術を得た際に魔術の理を知るティファアには詠唱はほとんどない。

代わりに、更に上の禁術を知つており、これには詠唱が必要である。

だがその理を知つているのは、ティファアと彼女の祖父、そして僅かな事だけだがシルクと、その三人だけだ。

もちろん、その三人だけという確証はないが……

それでも彼女は、子供達が魔術の理を知つているはずが無いと、内心で断言していた。

けれど、そこに生まれるのは矛盾。

だからこそ、ティファアはそれを確認する為に仕掛ける。

遠く離れた所で、油断が僅かに見えるAC-03に向けて、指を鳴らす。

「”ウインド”」

言つと、距離に関係無く魔術は発動し、AC-03の周囲に風を生んだ。

その鋭い風の刃は、まるでカマイタチだ。

それは容赦無く、AC-03の衣服を切り裂き、肌を露にした。

まるで眠っているかのような表情のAC-07を見るクレアは、ダガーナイフに付いた血を振り払い、太股の革ベルトに差し込んだ。そして、テクノス王国の忘れ物であるAC-07の頬に手を触れる。

「……死んだ後なら、情を少しくらい移してもいいわよね……」

咳き、ビートなく懐かしそうな表情を作った。だがその表情は、すぐに変わる。

AC-07の衣服の、少し破れた部分。その場所に、模様が見えたからだ。

けれどその下に、何かを着ている様子では無い。つまり、直接肌にその模様があるという事だ。

それが気になるクレアは、ダガーナイフを取り出して衣服を裂いた。

「 つ！？ こんな物が……！」

驚くクレアの目に入ったのは、隙間がほとんど無く、敷き詰められているかのように書き刻まれた紋章だ。

たぶんそれは、全身に刻まれているだろ？

その歪な紋章に、彼女は耐え切れず目を逸らした。

「 こんな……これじゃあまるで……」

「人間兵器ね。しかも、どびつきり危険な」

言つティファが見たのは、衣服を切り裂かれて露にした肌に、ビッシリと書き刻まれている紋章だ。

それを、彼女は知つてゐる。

「……魔術式……その中でも、一番厄介なヤツよ。いいえ、もつと厄介。強制魔力定着式と魔術詠唱記憶式の二重紋章。空気中の自然魔力を強制的に身体へと吸収させて、身体を魔力貯蔵庫にし、同時に紋章に記録されている魔術を素早く発動させる事が出来るの」

言いながら、ティファは本棚の裏に隠れ、深呼吸をする。

戦闘中の魔術師に重要なのは、集中力と判断力、そして応用力だ。どれか一つでも欠けていれば、危険を伴う事になる。

その為に彼女は、とりあえず会話で集中力を強める為に、冷静になつて説明を始める。

「……説明が途切れちゃつたみたいね。とりあえずは、ただのドーピングなんだけど、その分デメリットがあるの。人が生きていく上で、空気中の魔力は酸素のように、自然と体内に巡回させてくる。でも、その魔力に接する量が異常であればあるほど、自身に支障をきたしてしまつ。身体の成長停止、精神異常、言語障害などなど。で、成長停止は彼らを見ればわかるわね」

それは、麻薬となんら変わりのない物なのだ。

そんな物が子供に使われている、という事は、魔術師であるティファにとつては腹立たしい事だった。

だがその反面、喜んでいるのもまた事実。

彼女にとつて彼らは既に、こっちの世界で自分がどれだけの存在なのかを確かめる事が出来る物の一部でしかない。

故に、口元が緩む。

それを我慢しながら、彼女は指を鳴らし、光が集結し始めた人差し指と中指の一本を合わせて、宙に魔法陣を描く。

だが、その描いている物は一つだけでなく、多数。

通常の魔法陣である五芒星(いほりせい)という星型の絵を中央に、それを囲む

一重の円の間に、追加で文字を書き込む。

その作業は目にも留まらぬほど素早く行われ、同じ魔法陣が少し下にずれて左右と、直線状にあたる間隔の空いた真下にそれぞれ作られる。

計四つ。

その、まるで十字架を連想させる配置を見て、ティファは軽く吐息。

そしてすぐに、次の作業に移った。

一番上の、最初に描いた魔法陣に右の掌を合わせて、呴ぐ。

「……」冥界に、魔界に預けし我が神の器。魔の全てを統べる王の杖。汝のソレを、我が魔力を喰して現世に呼び寄せ……

それは、詠唱。

その詠唱を行いながら、右の掌を真下の魔法陣えと垂直にスライドしていく。

すると上下二つの魔法陣は光を宿し、同時に光のラインで魔法陣同士が繋がった。

次に、左の魔法陣に右の掌を合わせてスライドし、詠唱を続行する。

「……」呼ぶ名はゲオルギウス。龍を穿ち得た血で新たなる姿を見い出した汝に、更なる血を『えん事を契りとし、今ここに生まれ出事を望もう』！」

言い、同時に掌が右の魔法陣に到達すると左右の魔法陣も光を宿し、光のラインで繋がる。

そうして出来る形は、まさに十字架だ。

その上部、柄のような部分を掴むように右手を握り、叫ぶ。

「”契約者、ティファは欲しそう！ 今こそ、魔術が何たるかを愚か者に身を以て思い知らせるが為に！！”」

その詠唱を終えたのとほぼ同時、それがきた。

光のラインは粒子となつて弾け、新たな姿を生む。
ソレは刀。鍔が無く、先端から刀身、柄の端まで黒一色の刀が、
ティファの右手に握られていた。

「……あまり時間を掛けてしまつて、私の姿をクレア達に見られる
わけにもいかないのよね。だから、一気に終わらせるわよ……！」

言つて、ティファは動いた。

黒刀を左手に持ち替えて本棚の裏から飛び出し、彼女を探していたACの名を持つ二人の下へと走る。

だが、到達するよりも早く、AC - 03が気付き、迎撃体勢に入つた。

そして彼女の正面、無空間から稻妻が、ティファ曰掛けて走る。
対するティファはその稻妻を、黒刀を薙ぐ事によつて、掻き消し

た。

AC - 01は、その光景を見ていた。

だからこそ、驚いた。

刀で魔術を斬る。そんな事が、目の前で起きたのだから。

「……追い詰めたと思ってたら、実は誘い込まれていましたなんて、冗談にも程があるぞ！」

叫びながら、AC - 01は走った。

このままでは、AC - 03が危険だからだ。

だから、疾走する。

同時に、両の掌に魔法陣を開き、ティファを狙う。

「”フォールライン”！」

言い放つて出したそれは、掌の魔法陣から光の鞭^{ムチ}が十本ほど出て来た。

それらはまっすぐに、様々な動きでティファの下へと迫り着く。当たつた、とAC - 01は思った。

だが、それは糠騒ぎに終わる。

それは、ティファが全てを避け切ったからだ。

身体を僅かに捻らせ、仰け反らせ、低くさせ、避ける。

そうして全てを避けた後、地に着いた片足に力を込めて跳躍した。

黒刀で光の鞭を断ち斬りながら、だ。

そして、迫る。

AC - 01に、避けるという行動を取りせらる前に。

「……お前も結局は油断だな。冷静になつていれば、勝てたひつに……」

その、男口調の低い声が聞こえたのと同時、黒刀がAC - 01の胸元を穿つた。

それにより肺が破れて出血し、彼の口から血が吹き出す。だが、そんな事などお構い無しに、彼は喋ろうとする。

「ゴホッ、ゴホッ、と嘔せながら、

「……しかた……ないだろ……AC……3が……あぶ……」

言いたかつたその言葉は、途中で途切れで終わつた。喉に、血が溜まつたのだ。

するとティファアは、黒刀を横に薙いだ。

血が、噴き出す。

それを気にする事無く、彼女は黒刀を振つて血を落とし、AC - 03を見る。

「シメはお前がやれ。元よりこれは、お前の戦いだか」

ティファアの言葉が、止まる。

ただ一つ、驚きの表情を作りながら。

その視線の先に居るのは、AC - 03。

彼女は、頭に指を当てていた。

「全滅……とんだ茶番……」

表情は無。

その表情のまま、彼女は魔術を放つ。

自身の脳に、だ。

それによつて脳は崩壊し、ただの肉塊となつた身体は、無造作に本棚の下へと落^ハした。

それを見届けたティファアは、崩れるよつてに座り込む。若干、疲労が見える顔を右手で覆い、溜息をつく。

「疲れたわあー！ 黒刀を呼ぶだけで魔力使つてのに、現世に定着させる為に常時魔力放出よ！？ 底無しの魔女でも、さすがに疲れるわよ。 矛盾？ 気にしないのつ！」

誰かと会話するティファアは怒鳴るが、その声に疲れは感じ取れなかつた。

それが、底無しの魔女といつ名の由来なのだひう。
その名は、今付けたばかりの名だらうが……
ともあれ、一戦を終えた彼女の左手からは、いつの間にか黒刀が消えていた。

第四十八話・飼育する者、される者

「で、一体全体お前は何者なんだよ?」

船内の先端部、前方休憩室にあるベンチに座るカイは、向かい合いうようにして置かれているベンチに座っている長い黒髪の少年に問い合わせていた。

その少年は指を絡ませながら、困ったような、何を言えばいいかわからないような表情をしていた。

見ず知らずの者に、お前は何者か? と聞かれれば、当然の反応である。

それに気付いたカイは、微笑を漏らす。

「そうだな、自己紹介しなきゃな。俺はカイ・エディフィス。訳あって先生達と旅をしてるんだ。あ、先生ってのは、学校の先生の事だよ」

出来る限りの笑顔を作つて言ったカイに、黒髪の少年は指を止めた。

そして、パツチリとした濁りの無い目でカイを見、ようやく口を開いた。

「……僕はゼクス……っていう、名前しか覚えていない……」

「どことなく、申し訳無さそうな声。

そして同時に、自分に自信が持てないような声だった。

そんなゼクスと名乗った少年に、カイは小首を傾げて問い合わせる。

「名前しか覚えていないって事は……記憶喪失なのかな?」

「そ、かもしない……」

ゼクスはそう言つたつきり、俯いてしまった。

静寂。その状況にカイは内心、まいつたなあ、と呟く。
左腕のフラグメントという名の力を使えば、記憶は戻す事は出来るだろ、

だが、記憶が無くなつたのがいつなのか、また記憶は本当に無くなつてゐるのか、などの疑問と不安が、彼にはあった。
前回の、獣人の時のような傷は無い為、限度もわからない。
けれど、このまま放つておくのも、良心が痛む。
だからこそ彼は、思い切つて思つた事を言つた。

「……何なら、俺達についてこないか？　俺達はこれから、後二つは大陸を回る。その間に、記憶を取り戻せる切つ掛けがあるかもしない。だから、一緒に来ないか？　友達として」

言つて、満面の笑みを見せた。

その言葉に、特に最後の友達といふ言葉に、ゼクスは顔を上げて目を見開いた。

驚きの隠せないような表情で。

そんな彼に、カイは笑みのまま頷く。
するとゼクスの表情は、見る見る内に綻びた。

「……いい、の……？」

「もちろんだ！　男に一言はねえ、つてな！」

誇らしげに胸を張つて言つたカイは、徐に右手を差し出す。

それは握手の意。

対するゼクスはその手の意味に気付き、手を伸ばした。

つと、その時、

「お前ら、動くなー！」

突然の男の声が、一人に制止の言葉をぶつけた。

「……酷い結果っちゃねえ、戦後のテクノスの無責任さは……」

咳くネプチューーンは、そつと辺りを見渡した。

そこには崩れたり倒れたりしている本棚があり、その隙間からは子供の物と思われる手や足がはみ出している。

彼らは皆、既に息絶えている。

そしてネプチューーンが最後に見る正面には、ただ一人立っている者が居た。

神父だ。彼は荒い呼吸をしながら、ネプチューーンを見据えていた。片手に、極めて細く先端だけが鋭利な細剣レイピアを持ちながら、だ。

そんな彼は、何とか息を整えてから、口を開いた。

「……ど、どうやってこの四人

「どうやってこの四人を一人で倒したのか、なんて言うべきじゃないぜよ？ それ言つだけで、アンタはただの雑魚に成り下がつちゃうんやから」

肩を竦めて溜息をつきながら言ったネプチューーンは、その場に座

つた。

そして、口元に笑みを浮かべながら、神父に問い合わせる。

「……アンタがあの「わっぽ小童達の”飼育係”かんな?」

「!?”飼育係”を知ってるのですか!……つまり貴方は、戦争経験者であり、どちらかの軍の高い地位を与えられていた者ですね……?」

驚き、嬉しそうに、神父は問い合わせる。

それは明らかに、”飼育係”という名に反応しての問い合わせだ。

そんな彼に対し、ネプチューンは鼻で笑った。

「はつはん、情報に恵まれた商人に、戦争経験者であっても無くても関係無いっちゃ。……”飼育係”。幼児頃から強制的に、戦闘技術や殺人衝動の刷り込み、二重紋章の書き込みなどをする事によって生まれた殺人兵器を統括、制御する者の名」

そして、

「この小童達は、科学者キース・ヨルムンガンドによつて完成へと導かれた殺人兵器、— Assassin Children。アサシン チルドレン 略称・

A C ……で、あつてるんね?」

「……はい、まさにその通り……否定はしません。ですが、そんな彼らはやつと幕を下ろす事が出来ました」

「やつと幕を?……小童達の死を、アンタは望んでたんかい?」

問われ、神父はゆつくりと頷く。

「生憎、貴方達は仕留める為に長年待っていたバビロニア皇國軍ではありますでしたが、これもまた運命です」

「……バビロニア皇國軍に、ねえ。……なら、その望みの者の手で、

仕留めてやるっしゃ

「死ぬ前だからって、余計な事は言わない方がいいっしゃ……アン

ネプチューンはそう言つなり、ポケットからある物を取り出した。

それは、灰色の天然賢石だ。

彼はそれを両の掌で包み、目を瞑る。

「……久々だかんなあ……腕が鈍つてなけりやいいんが

その呴きとほぼ同時。

ネプチューンの掌から光が漏れ始め、次の瞬間には離した掌の間から、棒状の鋼が姿を現し始めた。

そのまま限界まで腕を伸ばして鋼の中程を掴むと、人一人分程の一六〇センチはある槍となつた。

その槍の先端の刃は、十字架の如く三方向に分かれしており、刃はその鋭さを見せ付けるかのように半透明となつていて。

その槍は、十文字槍じゅうもんじやうと瓜うり一つ。

ネプチューンはその十文字槍にスナップを利かせて身体の周りで回転させ、背の位置で止めた。

一方、その光景を見た神父は、驚きのあまり目を見開く。

「ま……まさか、その術……武装式魔術鍊金……ですか……!?」ですがそれは、バビロニアの

「言葉は、そこで途切れた。

言葉を生むべき喉は引き裂かれ、言葉を発するべき口は頭部と共に胴体から離れていた。

その切断を行つた十文字槍は、既にネプチューンの腕の動きに合わせて、背の位置へと戻つている。

夕は、理想の死を迎えたんかい……」「

その言葉のすぐ後に、神父の身体は無造作に倒れた。

後はただ、細剣が床に落ちて金属音を鳴らしているだけだ。

数々の倒れた本棚の上を行く俺は、戦闘前にジードの本を読んでいた場所へと向かっていた。

……それにしても、ほとんどの本棚が倒れたり壊れたりしてゐるな。これじゃあもう、図書館としての機能は失われている、か。元から既に使われてないだろうが、

「やりすぎだ、お前」

『わ、私だけの仕業じやないわよ！…………たぶん…………』

ティファは最後の一言だけ、自身の無む邪じやくな声のトーンで言った。

そんな彼女を尻目に、俺は先程の戦闘を思い出していた。

殺人を、いや人の恐怖を食らう事が快楽だと黙つてていたティファ。その時のティファは、ノアでの夜に戦闘があつたあの時と、同じだつた。

だからこそ、問う。

……お前の、あの殺人衝動は何だつたんだ？

『唐突ね。……癖よ。悪い癖。禁術を手に入れた時、私の全てを奪つた魔神を封じたつて言つたでしょ？ その時からずっと、殺しに繋がる行為で言葉遣いが、ね……』

俯き加減で言つたティファは、じつやり殺しが好きってわけではないらしい。

その事に、内心ホッとした。

もしかしたら、俺は殺しが好きなのかも知れない。だからこそ、殺しが好きなのは俺だけでいい。俺だけで、充分だ

「……つぐづぐ、訳のわからぬ事を言つたな、俺は……」

『？　どういう意味？』

ティファの小首を傾げた問いに、何でも無い、と答えておき、最後の本棚から跳躍して一気に本があるはずの場所へと向かった。するとそこには、クレアの姿があった。

彼女は既に本を開いており、”シャマシュ”を光源に黙々と読み続けているようだ。

どれ程前から読んでいたのかはわからないが、本の右半分の厚みからして、読み始めてから少しは時間が経っているだろ。う。その為、俺はクレアの正面に回つて、本を覗き込む。

「……で、何かわかつたか？」

「ええ、わかつてしまつたわ。何故かカイの腕の正体について、ね」

予想外の言葉に驚くが、話を聞き続ける事にする。

「まず気になつたのは『』よ。『』の、訳された言葉と元の文字」

言いながら、クレアが指で示す場所には、光る腕を持つ者の旅の内容が記されていた。

確かに、ティファが言つたのは、ティン・ガードナーって名前の男が腕の力を持つてたんだよな。

ソイツの旅の内容で、時空の柱を蘇らせるところに、クレアは指で突いた。

「これは今、カイが行っているのと全く同じ旅よね？　でも「」、「」、時空の柱の数が、四つって書いてあるんだけど……元の文字がどこと無く引っかかるよね」

「ど、言うと？　訳を間違えてるって事か？」

「間違えているのかどうかはわからないけど、他のページを確かめたところ、「」の文字は「」と訳すべきなの」

つまり、

「時空の柱は全部で三本なんだけど、訳……もしかしたらわざと間違えてあるかもしねりなのよ」

確証は無いけどね、と付け足したクレアは吐息。そして、話を続ける。

「でも、もしそうだとしたら、いくつか仮定が生まれるの。一つは元から三つで、ネプチューン達が洞窟で会った会つたっていうナンナという人物が一つ破壊されたってうそをついたかもしねりについて。一つは、本当に破壊されていて、またジードの時も破壊されていて、その結果が合計三つのかもしねりって事。けれど、「

言葉の途中で深い溜息をついたクレアは、肩を竦めた。

「」の本が真実を記す為の本だつたら、元の文字は嘘をつけない。ましてや、時空の柱の数なんで重要な物はもつとね。だつだら、優先されるのは前者。　それでも、情報が足りない為に、何の答えも見えてこないのよね。嘘をつく理由とか……ま、どちらにせよ、後二つでカイの旅は終わる。そして、私が読んだのは、最後の柱を

蘇らせるところまで。で、次のページは初見なんだけど　ツ！？「

次のページを捲った瞬間、クレアの表情が変わった。
もちろん、俺の表情も変わる。
驚きの表情に。

「……光を宿す者、全ての時空の柱を蘇らせた数時間後、身体に異変あり。光を宿していた左腕は異形と化しており、本人に意識無しだがしかし、共に旅をした者達を次々と殺したが為に、乱心と見做し抹殺。……一体、何があつたって言うんだ！？」

「でも、はつきりとしている事は、カイの旅を一時中止にしなくちやいけないって事よね！？　今すぐ追いつかないと！」

その提案に、俺は一瞬迷う。

だが、元より目的は果たされた。
この世界、グラルスに置けるジードの情報の入手。
それは既に、果たされている。この王立図書館以上に、書物があるところは無いとネプチューも言っていた。
それに……ティファ。お前はティン・ガードナーの暴走の真相を知つてたりするのか？

『知らない、わ。でも、これだけは言える。　カイを止めた方がいい』

それだけ聞ければ、充分だ。

「クレア、急いでカイ達と合流するぞ！　ネプチューを探してくれ！！」

「ネプチューなら今、こっちに向かつて来ているわ。足音が、聞こえるから。　つてそれよりも、カイ達に合流するつて言つたつ

て、間に合つの！？」

「大丈夫だ。ここから海を北に渡つた先、ミーン大陸があるだろ？
そこに、手つ取り早い移動手段がある！」

言いながら、クレアが指をさした方向へと走り出す。
その後ろを、クレアは文句を言いながらついてくるが、すぐに声
は止んだ。

これ以上、何を言つても無駄だとわかつたんだろう。
その事に微笑し、ふと上を見る。

天井のガラスから見える空は、既に真っ暗だ。
……夜間の移動は、危険だらうか……
そう思いながら、俺は走り続けた。
少しでも早く、合流する為に。

第四十九話：レジスタンス、襲撃

動くな、という制止の言葉に、カイとゼクスの一人はその通りにした。

そんな状況で、動かない方がいい、とカイはゼクスにアイコンタクトでそう伝える。

だとしても、顔を動かして相手を確認する事は忘れない。

それは、シヴァから教わった事だ。

静止を余儀なくされた時、僅かに顔を動かして、相手の反応を見る。

その際、顔を見られたくない者ならそれ以上動くな、と言つだろうし、見られる事を気にしない者なら何も言わない。

そしてこの相手は、後者だった。

だからこそ、カイは相手を確認する。

場所は右側の通路。数は男が一人で、体勢は魔術の詠唱終えた後の構えなのであろう、左手の人差し指と中指がまっすぐにカイの方へと伸びていた。

「……魔術師かよおー……」

相手、魔術師に聞こえぬように小声で頃垂れうなだ、ガックシと肩を落とす。

そんな彼を見たゼクスは、小首を傾げて問い掛けた。

その時の口は、腹話術を応用しているのか、全く動いていない。

「……どうしたんですか？ なんだか浮かない顔をして」

「ん？ お！？ すげえ、腹話術みたいだな！ 僕、そういうの全然出来ないんだよお。 む、んぐむむむつ！」

「煩いぞ！ 余り喋るなー！」

おふざけが過ぎたカイに怒りを覚えた魔術師は、怒鳴りながら一人に近付いた。

だが、次の瞬間、

「くかつ」

小さく、乾いた爆発音。

それは一発目で、男の喉に赤き薔薇を咲かせ、続く一発目で額にも咲かせた音。

やや送れて床に落ちて響く音は、金属音。

その金属音の音源を追うように、無造作に倒れた魔術師の鈍い音。その全ての音に驚いたカイは、即座にその方へと向く。するとそこには、一人の男女の姿があった。

手前に居る、赤いロングコートを羽織っている男は白の短髪で、コートの間からは迷彩柄の服が見える。

また、胸元にはドッグタグが掛けられており、左手には先端から僅かに煙を出した長細い鉄が握られている。彼は、笑っていた。

その一步後ろに立っているのは、侍女服姿の白髪の女性だ。

カイの記憶の中に、見覚えのある女性。

「あー！ た、確か……ヘル？ そうだ、ヘルだ！！」

「覚えていていただき、ありがとうございます。つまり私が、記憶に残る程の強者であったのだろうと、判断します」

言つて、スカートの裾を掴んで会釈。

その後に上がった顔は、相変わらず無表情だった。

一方、無表情な彼女を見た白髪の男は、呆れたような苦笑を漏らす。

「挨拶してゐる場合ぢやないだろ……ただでさえ、訳のわからない奴

らがこの船を襲つてゐるんだからよ」

「たつた今、それに関する情報が入りました。勢力名は反皇軍組織”レジスタンス”。該当する編入部隊種は魔術師、または魔術を扱える暗殺者です。数は不明。しかし、確実に船内を制圧しており、反抗する者は容赦無く殺害」

また、

「総員が、何かを捜索中の模様。どちらにせよ、船内全域の制圧完了は時間の問題であり、仕事に支障がきたされると判断します。

以上、大型食堂エリアに設置しておいたカメラからの中継を、お伝えいたしました」

言い終えたヘルは軽く会釈し、白髪の男は満足そうに頷いた。
そして、カイの方へと視線を移す。

同時に、左手に持つた鉄を向けて、だ。

「コレ、初めて見たか？　コレは拳銃って言つんだ。さて、それじゃあ死んでもらうか。標的が一人共揃つてんだしな」

冷酷な表情で、白髪の男は言つ。

そして、引き金に掛かつている人差し指に力が入り、

「　ツ！　マスター、六時の方向！　」

刹那、ヘルが警告したそれが来た。

炎の塊が六時の方向、一人の後方から足元に向かつて、それぞれ飛んで來たのだ。

二人はそれを、前への跳躍で回避する。

すると、炎の塊は床に激突して燃え上がり、それに反応して天井のスプリンクラーが作動した。

それによつて、水が雨のように降り始め、一人を濡らす。

「……マスター、標的は既に逃走した模様です」

告げるヘルに、白髪の男は水で濡れたロングコートを、嫌そうな表情で見ながら言つ。

「全く……邪魔者つてのは本当に邪魔だな。潰すか」

刹那、二人は動いた。

身を翻した後に低くし、大股の左足を初歩に大きく前へと出たフエンリルは、スプリングラーの雨の中を駆け抜けて、一気に新手の魔術師の下へと向かつた。

距離は大体で四メートル。

……いい距離だ。

内心でそう呟く彼は、腰のホルスターからもう一丁の拳銃を抜き、両の拳銃を前へと突き出す。

だが、その視線の先には既に、動きがあつた。

魔術師は詠唱を終えていたらしく、フエンリルが拳銃を突き出したのとほぼ同時に、炎の塊が放たれた。

「チツ、面倒くせえ」

舌打ちをしたフエンリルはそう言い、身を起こす。だがそれも一瞬。

次の瞬間には伸ばしきった右足を前に、同じく前に出した左足は

くの字に曲げ、同時に左へと捻った身を横にして床に落とした。

そうして、彼は水で濡れた廊下をスライディングし、紙一重で炎の塊を回避した。

そしてその体勢のまま、前方に見える魔術師に向かつて両の拳銃を再度向け、引き金を引く。

その瞬間に撃鉄が内部にある薬莢の後部、雷管に衝撃を与え、そして爆発が起きる。

それによつて薬莢の先端に詰められている魔力の塊で出来た銃弾が放出され、銃身の中を走つて射出される。

同時、拳銃の上部の遊^{スライド}低が前後し、撃鉄は起こされ排莢口から、空になつた薬莢が飛び出した。

一方、射出された銃弾はまつすぐに軌道上を走り、魔術師の額を穿つた。

その全てが、数瞬の出来事だ。

後に残るのは、倒れる魔術師と一度だけ金属音を立てて消える薬莢だけ。

だが、フェンリルはまだ止まらない。

前方にはまだ、増援が来ていたからだ。

数は二人。その為彼は、くの字に曲げていた左足を立てる事によつて傾いていた身をまつすぐにし、次に右足を曲げると同時にスライディングの勢いを利用して身を起こした。

そして右足に力を込め、高く跳躍する。

対する魔術師は、そんな彼を目で追うが、次の瞬間には銃弾を数発撃ち込まれ、倒れた。

フェンリルはその魔術師の上に着地し、勢いを殺さずに疾走。

「な、何だコイツ！？」

残り一人の魔術師に魔術を使わせるよりも早く懷に入り込み、横へと蹴り飛ばすと同時に銃弾を撃ち込む。

そしてその場でしゃがみ込み、銃把の少し上にあるマガジンキャッチと呼ばれるボタンを押しながら、腕を前から後ろ、下から上に振った。

すると銃把の下部から弾倉が抜け、宙を舞う。それに対する動きを取るかのように、ヘルが走り出し、掌に展開した穴から新たな弾倉を出して握る。そして、投げた。

「自動人形の投擲は、正確且つ高速です」

ヘルのその言葉通り、弾倉は素早くまっすぐ飛び、フェンリルが持つ拳銃リロードの銃把の下部に入つた。
再装填。

その結果をもって、更にヘルは動く。

「失礼します」

言葉と共に、ヘルはフェンリルを踏み台にし、跳躍した。その際、宙を舞っている弾倉を掌の穴に収めて、だ。

次にその両手は、新たな銃把を掴む。

それは、フェンリルの脇のホルスターに収められていた丁字型の
サブマシンガン
短機関銃” イングラム”だ。

その動作は、フェンリルが拳銃の再装填を終えた瞬間に腰のホルスターに收め、次に脇のホルスターからそのイングラムを抜いて前に投げた事による結果だった。

これによりイングラムを手に取つたヘルは、フェンリルの前方に着地し、両手のイングラムを、両腕を垂直に上げて前に向けた。彼女の視線の先、そこには再度の増援。

数は六、いやそれ以上は確実に居るだろう。中には、剣を持った者も確認できる。

そんな彼らに向けたイングラムの引き金を、ヘルは無表情で引く。瞬間、イングラムの上部の遊低は短く高速で前後し、大量の銃弾と薬莢がばら撒かれ、全弾撃ち尽くした。その数、三十二発。

また、射出された銃弾は軌道上を多数で走り、増援が次々と倒れ、そして道は開かれる。

ヘルはその光景に満足したのか、後ろに屈るフェンリルの方へと振り向いた。

「今のは連携は、完璧だつたと判断しますが、よろしかつたですか？」

「ああバツチリだつたなよくやつた」

「……マスター、棒読みは人を不快にさせます。それは感情を持つ自動人形であつても同じ事。こういつ時、マスターに対して言うべき言葉は、はあ？ 人としてどうかと思つしき、さいてえー、死ねばいいのに。むしろ死ね」

口調には目一杯の悪態を込め、されど無表情でヘルは言った。

そんな彼女に、フェンリルは苦笑を返す。

「お前なあ……どこでその喋り方を覚えたよ？」

「ジードにて、最近の十代後半女性の喋り方、口調を意のままに扱う事が出来るとキャッチコピーに書かれていた言語サポートソフト、ギヤル言語集／スペシャルエディション シーズン2／を購入し、インストールしました。そしてそのマニュアルに沿つて、喋らせていただきました」

「また糞ソフトか……どうせ、購入者はお前だけだろう」

「ヤー、マイマスター」

ならすぐ消せ、と言つフェンリルは、ヘルが投げ渡してきたイングラムを受け取り、脇のホルスターに収めた。

そして腰のホルスターから拳銃を二丁抜き、走る。

その後を追いつめて、ヘルも走り出した。

「マスター、標的の居場所がわかるのですか？」

「わかるわけないだろ。だが、これ程の騒動だ。レジスタンスを始末しながら、船内を隅々まで行く。その間に別の戦闘が、そう別の戦闘があれば、それがカイだろう なつ！！」

曲がり角、その先から来る足音の主に先制を仕掛ける為、最後の一言に力を込めつつ、左足で軽く右にステップし、それを軸に右足で蹴りを放つ。

すると飛び出してきたレジスタンスの魔術師の腹部に直撃し、吹き飛んだ。

そんな彼に追い討ちをかけるように、フェンリルは銃弾を打ち込む。

直撃したのは頭部、額。それは、即死を意味する。それを知っているフェンリルは、その魔術師を見る事無く、一気に走った。

彼らは既に、Aブロックを突破していた。

第五十話・混乱の中の疾走

数多の声が、船内に響く。

悲鳴、怒声、断末魔。

そしてそれらに合わせて聞こえる、生々しい声。

そんな音が聞こえる廊下を、流れるように逃げる乗客とは逆の方
に向に走る者達が居た。

カイとゼクスだ。

彼らは、次々と向かって来る乗客の間を走り抜けながら、現在B
ブロックを通過中だ。

向かうのは、自分達の客室。

その客室は既に、目の前の角を曲がるだけとなつていて、
だが、勢いよく角を曲がった刹那、

「うおあ！？」

「なっ！…」

カイはレジスタンスの魔術師と鉢合わせし、両者が声を上げた。
その瞬間、カイは反射的に相手の胸部へと掌低を叩き込んだ。
左足で床を蹴り、右足で身を支えながら、左の掌で、だ。
すると魔術師は、衝撃で少し飛び、床に倒れて気絶した。
カイはその魔術師の横を通り、更に走る。
そして、見えた自分の客室に駆け込んだ。

「シルク！……あれ？」

急いで入ったその客室内には、誰も居なかつた。
荷物さえも、そこには無い。

「移動した……のかな」

亥くカイには、皆の行った場所などわからない。

だからと言って、この騒動の中を、何の面でも無く闇雲に駆け抜けるわけにもいかない。

ゼクスが共に居るものそなが、何よりヘルとその仲間に会つわけにもいかない。

手詰まりだ。

だが不意にゼクスが、あつ、という声を上げた。

「カイ、ベッドの上に紙が、見え難いけど確かに紙があります！」

「……あ。しまった見逃した！」

言葉通り、しまったといづうな表情をしたカイは、全速力でベッドへと走り、シーツの上を見た。

そこには、確かに紙がある。

シーツと全く同じ色の白であり、簡単なカムフラージュとして皺しわが作られた紙が、だ。

カイはそれを手に取り、紙の裏を見る。

そこには走り書きで”後部、艦橋エリアにて待つ、急げ”と、あつた。

……あれ？ これって結局、駆け抜ける事になるんじゃあ……

内心でそう亥くカイは溜息をつき、紙を捨ててゼクスの方を向く。そして、苦笑し、

「ごめん、突つ切るしか方法が無くなつた……」

「あ、僕は大丈夫ですよ。走るの得意ですし」

「ならいいんだけど……それじゃ、ついてきてつ……」

言った瞬間、カイは走り出した。

ゼクスの横を抜け、そのまま客室を飛び出し、一気に駆ける。

目指すのは、船内構図で見た、後部にある関係者以外立ち入り禁

止とあつた艦橋エリア。

シヴァやシルク、ミーナが待っているであろう場所。

その場所に向け、カイは武器である諸刃の剣を組み立て、行く。

「はあ……！」

力のこもったその声と同時に振るつた長剣の一撃は、レジスタンスの魔術師を一人纏めて斬つた。

そして、長剣を振つて血を落とした彼女、シヴァは軽く吐息した。それは、自分を落ち着かせる行為だ。

「キリが無いな……」

呟くシヴァは思つ。

カイはメッセージに気付いたどうか、と。

村に居た頃、カイにした特訓の中には、有事の際に止むを得ず集合地点から移動する場合、メッセージを辺りの地形や環境に合わせてわかりにくいように残しておけ、というものがあった。

彼女はそれを使ってメッセージを残した為、気付いていればここ、艦橋エリア前の通路をカイは通る。

だからこそ彼女は、その手前の狭い通路でレジスタンスを迎え撃

つていた。

大人が二人程しか並べない横幅の通路は、しかし天井が高い為に長剣を振り下ろしやすい。

そのかわり、横に振る際には細心の注意が必要の為、戦闘は中途半端となってしまう。

しかし今、通路の床には十数人のレジスタンスが血に染まって倒れています。

全ては、シヴァアが切り倒した者達。

そんな彼らを見据えるシヴァアは、不意に口を開く。

「……こやつらは、何が目的で襲撃を……」

シヴァアはその思考の中で、カイの力が目的なのではないかと思う。その上、ネリンに居た時に駆員が言っていた、テロ行為の多発という情報がその考えを後押ししてしまっている。

しかし、だからと書いてカイの下に向かう為にこの持ち場を離れる訳にはいかない。

唯一、彼女が制圧から取り返したエリアなのだから。

それに、

「そう簡単に死なないように訓練したのだから、心配はいらんだろう……」

微笑交じりに呟いたシヴァアは、背後から聞こえる足音に気付き、素早く振り向く。

するとそこには、奥から走つてくる、この客船の船員の男一人の姿があった。

彼らは急ぎ、息を切らしながら彼女の前で立ち止まる。

「来たか。中の状況はどうだ？」

「げ、現在、船内のほぼ全域が制圧状態……！ 戦闘の出来る船員は、孤立しながらも交戦していましたが……次々と来るレジスタン

スの増援により、全滅です！！」

そして、

「レジスタンスは、捕られた民間人を邪魔と見なして殺害！　これ以上の生存者確保は不可能かと……」

「どうか……外はどうだ？」

「外は既にレジスタンスの船が接近中で、本船は行動不可。脱出用の高速艇は何とか出せますが……追撃があつた場合、振り切れるかどうかわかりません。なお、キエンギのバビロニア皇國軍に救援を求めようとしたが、魔力による伝達妨害が出ているのか、通信機器が使用できません！」

それは、極めて危険な状態を意味していた。

高速艇は艦橋エリアの通路から奥へと行つた先のドックにあり、カイの到着に合わせて、艦橋で待機している生存者達と共に乗り込む事になっている。

だが、それよりも早くレジスタンスの増援がここを攻めて来れば、間違い無く全滅だろう。

それに、脱出に成功したとしても、追撃を振り切る事が出来るかもわからない。

けれど、迷つている暇がないのも事実。
だからシヴァは決心し、指示を出す。

「……生存者を、高速艇に誘導しろ。そろそろ大群が侵入してくるだろうからな」

「せんつせーい！　間に合つたぜーーーー！」

突然聞こえたのは、威勢のいい声。

それは一般エリアからの出入口からであり、声の主は、

「カイ！　間に合つたか！　……そつちの者は？」

「ん？ ああ、ゼクスつてんだ。新しい仲間だよ！」「よ、よろしくお願ひします！」

素早く一礼したゼクスに、こちらこそよろしくな、と言つて微笑したシヴァは、すぐに真剣な表情になつてカイを見る。

「今から生存者と共に脱出する。カイは負傷者の手助けを頼む」「りょーかいつ！ 行くぞ、ゼクス！」
「あ、はい！」

その掛け声と共に、カイとゼクスは艦橋エリアへと生存者の手助けに、シヴァと船員の二人はこのエリアと一般エリアとの出入口を閉める為に、それぞれ走り出した。

天井が高く、そして広いドッグに、数多くの声が木霊する。

それらの声は、ドッグの中央に敷かれたレールの上に設置されている、縦に長く巨大な脱出用の高速艇に乗り込もうとしている者達のものだ。

老若男女問わず居る彼らの数は、二十六人程。
二十六人も、では無く二十六人しか、居ない。
そんな中、周りの声よりも一際大きな声が響いた。

「シルク！ 通路の防火壁をいくつか閉めてきたからもう少し時間を稼げるぞ！ その間、早めに誘導を終わらせてくれ！！」

それは、ドッグの出入口から入つて来たシヴァの声だ。

対するシルクは、開いたばかりの高速艇のゲートに生存者達を誘導しつつ、シヴァに向けて左手の親指を立てた。

それを見て頷いたシヴァは、走つて高速艇の先端まで行き、甲板に飛び乗つた。

ちなみにこの高速艇は、底が深い造りとなつていて、故に甲板上は一面平らだ。

その為に後部から乗り込む際は、平らな甲板の一部がゲートとして上部に展開するようになつている。

そしてそれは、先端の操縦室も同じだ。

シヴァはそれを知つてゐるが為に、甲板の先端に飛び乗つたのだ。また彼女は、床の小さなパネルに隠れたスイッチを押して、操縦室へのゲートを開く。

そこから中に入り込み、操縦室内を見渡した。

内部は非常に狭く、三人程の大人がやつと入れるくらいだ。数多くの制御装置やパラメーターがある為、仕方の無い事だらう。そして前方側には、いくつものレバー やスイッチと、横長のハンドルを操作する事が出来る操縦席があり、そこから外を覗ける長方形の窓がある。

シヴァは急ぎでその操縦席に座り、慣れた手つきでスイッチやレバーを操作する。

それとほぼ同時、後方のドアが開き、先程の船員が一人、入つて來た。

「シヴァさん！ 生存者全員、乗り込みました！ ちゃんと、シートベルトも締めさせてあります！！」

「ならば、お前達も早く座れ。すぐに出るぞ！」

「あの……操縦経験は？」

「もちろんある…」

答えた後、ゲートが開いたのを確認して、シヴァはスピードレバーオンを全開まで倒した。

刹那、高速艇はレールの上を火花を散らしながら走り、船外へと飛び出した。

第五十話・混乱の中の疾走（後書き）

ども——IZUMOです。

今回も、読んでいただきありがとうございます！
さて、ここで皆様にお伝えしたい事がござります。

この度、同時連載している「いつもの空 + 時々雨」ですが、
今年開催されるスクエアエニックスの小説大賞に挑戦する為に、一
週間後に公開停止させていただきます。

また、その準備の為に本作の更新ペースも落ちる可能性があります。
まことに勝手ながら、「ご理解と共に、よろしければ密かに応援して
いただければ幸いです。

それでは、長々と失礼しました

第五十一話・スピードレース

突然、客船の後部から飛び出した影がある。
高速艇だ。

それは海に大きな波紋を作つて海面に浮き、次の瞬間には船体の周囲に波を作りながら海面を走り出した。

その、突然の出来事に、客船を取り囲んでいた船に乗るレジスタンスは、行動が遅れた。

甲板に居る者達は、隊長と思わしき者から怒声を浴びせられながら、次々と自分達の船に戻つて行く。

そんな光景がほとんどの船で見られる中、高速艇は猛スピードで客船を離れて行く。

だがその時、高速艇に向かつて、一つの炎の塊が飛んだ。
レジスタンスによる、追撃の魔術。

それは真っ直ぐに高速艇の方へと飛ぶが、しかし逸れて海に落ちた。

灼熱の炎が海面を、音を立てながら蒸発させ、水蒸気が上がる。
同時に、海面に揺れが起き、高速艇が揺れた。

その船内の後部、シートが大量に並んでいる場所の通路で、カイは立ち上がりつて揺れを楽しんでいた。

「おわあ！　す、すげえ！」
「あ、こらカイ！　ちゃんと座つてないと駄目じゃん！」

シルクの注意も空しく、次の揺れが来て、またしてもカイはバランスを保ちつつ、揺れを楽しんでいた。

そんな彼を見て溜息をつく彼女とは逆に、隣に座っているミーナは満面の笑みだ。

一方、高速艇を操縦するシヴァーは、僅かな視界を頼りに操縦して

いる為、悪戦苦闘している。

時折、高速艇を飛び越えて正面の海面に落ちる炎の塊を見て舌打ちしつつ、素早くハンドルを切つて避ける。

速度は、優に八十キロを超えているが、それでも船体に負担が掛かっていないのは、魔術加工されているおかげだろう。

元々、高速艇は有事の際に、要人を安全に脱出させるのが目的であり、故に頑丈なのだ。

また、旧式ではあるが、魔術障壁展開装置も積まれ、起動している為に安全である。

しかし、シヴァは内心に不安を抱いていた。

いくら頑丈であるとはいえ長くはもつまい、と。

彼女が見る、左前方に設置されたモニターには、後方の映像が映し出されている。

レジスタンスの船が十隻程、甲板から無数の魔術を飛来させながら追つて来ていた。

相手の速度は、遅くも無く早くも無く、といった状態だ。それを確認したシヴァは、すぐに視線を前へと戻す。

少しでも手元が狂つたら大惨事となってしまう為、仕方の無い事だ。

だからこそ、彼女は操縦に集中する。要は、当たらなければいいのだ。

刹那、

「シ、シヴァさん！ 魔術障壁展開装置の限界値が、五十パーセントを超えました！ このままだと、装置がオーバーヒートして、魔術障壁が消滅してしまいます！」

「少しぐらい、持ちこた……全く、次から次へと問題が……！」

苛立ちを覚えたシヴァの視線の先、僅かに大きな影が見える。

次第にはつきりと見えるようになってきたそれは、多数の軍艦が横一列になり、また後方にもう一列並んだ事によつて構成された艦

隊だ。

しかもその列は、異常に長い。

「あれは……バビロニア皇国軍の艦隊ですよー。」「らしいな。しかし……来るぞー。」

刹那、バビロニア皇国軍の艦隊から、無数の光が放出された。

突然の出来事に、シヴァはとつさの動きでハンドルを素早く操作し、回避運動を取った。

その判断は適切だつたのか、大半の光は高速艇を逸れて後方、レジスタンスの船に直撃する。

するとレジスタンスの船は破碎音と共に砕け、海の藻屑となつた。飛来して来たのは、光の矢。

そしてそれは、高速艇への直撃コースだった。

「ど、どうしてバビロニア皇国軍が私達に攻撃を！？」

「そんな事はどうでもいい。とにかく、この場を切り抜ける事だけを考える。それよりも、無駄なエネルギーを全て動力源に回せ！艦隊の間を抜ける為の出力が欲しい！」

「え！？ む、無茶言わないで下さい！ 艦隊に突っ込むなんて、正氣の沙汰じやありませんよ…」

船員がそう反論している間にも、高速艇はバビロニア皇国軍の艦隊に近付いて行く。速度は落ちない。

同じく、光の矢も止まない。

「……どちら、あちら側には敵味方の認識が出来ていないらしい。どちらも高速であるが故に、だろうな。ならば、生き残る可能性に賭けてみるのも悪くは無いだろ?」

振り向かず、後ろ姿で問うシヴァに、船員の一人は考えた。だが、すぐに答えが出たのか、上部のスイッチを数個、押した。すると、高速艇は突然にして速度を上げた。

バビロニア皇国軍との距離が、見る見るうちに迫る。

「シ、シヴァ！ 電気がいきなり暗くな つあー！」

慌てた表情で入って来たカイを無視し、シヴァは視覚に集中した。狙うは、軍艦と軍艦の間にある、高速艇一隻分の隙間。それは、速度故に一瞬のズレも許されない行為。

果たして高速艇は、軍艦に触れる事無く間にに入った。幸い、バビロニア皇国軍にとって、軍艦と軍艦の間を抜けられるというのは想定外だつたらしく、まだ光の矢は来ない。

しかし、まだ油断は出来ない状態だ。
一列目は、軍艦の位置が一列目より半分ほどズレている為、直進で抜ける事が出来ないので。

「シヴァ シヴァ シヴァ シヴァッ！ ぶつかるぶつかるぶつかるってええ！」

「煩い、分かっている！ 少しは黙つていろーー！」

「はい、すみませんでした」

カイを黙らせたシヴァの手には、僅かに汗が滲んでいる。

正面は、言うならば下路地。

その手前に差し掛かつた瞬間、彼女はハンドルを左に一回一杯切った。

それに合わせて、船体が向きを変え、滑りながら水飛沫を上げて左を向く。

だがしかし、海面を滑る船にとって、急旋回による即座の直進は不可能だ。

故に、船体の右舷後部が軍艦に直撃した。

「少しの衝撃ぐらい、耐えてみせろ……」

吼えるシグヴァーは、瞬時にハンドルを、今度は右に切る。それにより、左舷前面が軍艦に直撃した。が、船体には大きな破損は無い。

頑丈さ故の結果だ。

しかし、僅かに軋みの音が聞こえる事に彼女は不安を感じながらも、目前に港が見えてきた事に安堵し、スピードレバーを逆方向に倒し、スクリューを逆回転させて速度を落とした。

その後、彼女は操縦を船員の一人に任せて立ち上がり、操縦室を出て後部に居る生存者達の前に立つた。

「皆、よく耐えたな。ようやく目的地、キエンギに到着だ」

その言葉に船内には、歓喜の声が響き渡った。

港に到着した高速艇は、後部を桟橋に寄せてハッチを開いた。その中からは、生存者達がぞろぞろと出て来、最後にはカイ達が出て來た。

カイとシルク、ミーナは揃つて手を大きく上げて背伸びし、青空を搔いた。

そんな三人を見て微笑を漏らすシヴァは腕を組み、隣に居るゼクスを見据えた。

そして、問う。

「それで、お前の目的地はここなのか？」

「あ、いえ、実は……僕、なんであの船に乗っていたのか分からないんです」

その言葉に、シヴァが眉を寄せた。

なんと言えばいいのか、と考え、自然と言葉が生まれる。

「……記憶喪失、というものか」

言葉に出しながら、シヴァは内心で、また記憶喪失か、と呟いた。ユウも最初は記憶喪失だつたなと思い、ゼクスも他世界、ジードの人間なのか？とも思う。

だが、その事は後で触れようと決め、次の問い合わせに移りつとしたその時だ。

前方に居る生存者達が、急にざわめき出した。

そして次の瞬間には、生存者達を搔き分け、十人程の兵士が一列になつてカイ達の前に立ちはだかつた。

かなり派手な装飾の付いた鎧に顔を覆い隠すメット、そして腰に一本の剣と一本の宝剣を添えた兵装からして、バビロニア皇国軍の

親衛隊クラスの者達だ。

彼らは一度足踏みし、一列になつている間を開けて道を作った。その間を通つて新たに現れたのは、白を基礎とした上に金のラインが入つた派手な服を着ている、小太りの男だ。

歩みが僅かにフラついている。

だが、カイの前まで行くと背筋をしつかりと伸ばし、不気味な笑みの表情を作つた。

「長旅、お疲れ様です。私はここシュメール大陸の首都・キエンギを統治している、バビロニア皇國軍將軍のドライゼン・セグライでござります」

そのまま自己紹介に答える様に、シヴァはカイの横に並んだ。

「私はシヴァ。まあ、代表の様な者だ。して、そのような偉い方が、何故にわざわざこんな所に？」

「簡単な話ですよ。ここに居る、貴女を含めた全員に、レジスタンスの者であるかもしないという疑いが掛けられました。ですので……おとなしく連行されていただけませんか？」

疑いという言葉にシヴァは、当然の事だろうな、と思つ。さて、この状況をどうしようか、とも。

しかし、彼女は隣りを見た。

そこに居るミーナは、彼女の視線に気付くなり、笑顔を見せた。それは、私は捕まつても平氣だよ、という意味か、それとも、戦闘になつても平氣だよ、という意味か。

シヴァがその笑顔を見て捉えた意味は、

「いいだろう。どうせ、レジスタンスでは無いのだから、逃げる必要も無い」

前者だった。

そして、その言葉を聞いたドライゼンは身体を後方へと翻して、歩き出した。

またしても、フラついた足取りで。その後ろを、兵士に囲まれながら、その場に居た者達が追い、歩き出す。

無言のまま、何の反論もせずにについてこくのは、相手がバビロニア皇國軍だからだろうか。

だがしかし、彼らの目には怯えが無い。

それはこの後、何が起こるか分からぬ状況では、幸いな事なのだろう。

ともあれ、彼らは歩き続ける。

首都であり、賑やかな街とも呼ばれるキエンギの、人影一つ見えない街中を。

第五十一話・スピードレース（後書き）

おはいんばんちわ。
どもー イズみーです。

お久しぶりです、連載スタートです。
やつと何もかもの問題を終え、再開する事が出来ました。
それでは、これからもよろしくお願ひしますー。

第五十一話・舞う脱走者達

薄暗い部屋がある。

窓には鉄格子がはめられ、出入口にも大きな鉄格子がある。
石で出来た部屋、牢屋だ。

そこは非常に殺風景であり、あるのは鉄部分が鋸びていてマット
がボロボロのベッドと便器、洗面台だけ。

その、ボロボロのベッドの上では、ミーナが静かな寝息を立て
眠っている。

また、そのベッドに背を当てて、カイとシルク、そしてシヴァアが
座っていた。

彼らは今、最終決定が下るまで、牢屋に入つていなければならな
い。

理由は、数時間前に連行された際、一人ひとりに行われた事情徴
収にて、先導した者がカイ達であると分かり、また武器を持つてい
た為に不審の対象となってしまい、別室に誘導された。

その際に、彼らはバビロニア皇国軍によつて指名手配されている
と告げられ、詳しく述べる準備と、今回の件に関しての最終決定
待ちを牢屋でする事になつたのだ。

「……俺達、指名手配犯なのかあー。やつぱり、村を襲撃した皇国
軍がそうさせたのかなあ……」

溜息交じりに言つたカイは、膝を抱えて頃垂れる。

そんな彼を見て、あははつと笑うシルクは、彼の背をバンバンと
叩いた。

「落ち込まない落ち込まない！ 悪い結果を知らされない事を祈つ
てようよつ！」

「その通りだ。さすがシルク、ポジティブだな。そんな事、私の不安よりも遙かに軽いものだ。ところでカイ、頼みがあるのだが」

言いながら、シヴァは立ち上がり、眠っているリーナを見た。そして彼女に近付き、起こさない様に両手でそっと抱き上げ、ベッドを見る。

「すまんがこのベッド、綺麗にしてもらえないか？ 鉄の脚までもが錆びてしまつていつ折れるか分からん。出来れば昔の姿に戻して欲しいのだ」

「ん？ シヴァの不安って、もしかしてこれ……？」

問うが、完全に無視されたカイは肩を竦めた後、マットと鉄部分に左手を当てる。

するとその左手が光を放ち、フラグメントへと形を変えた。彼がその力を使うと、ベッドは見る見る内に綺麗になつてこそ、鉄部分の錆びも消えていた。

それを見て、ありがとうと例を言つたシヴァは、ゆっくつとリーナをベッドの上に戻す。

「……そういえば、あのゼクスとかいう名の少年、大丈夫だらうか」「え？ それって、どういう意味？」

ミーナの髪を一度撫でた後、腰を下ろしながら言つたシヴァに、シルクが問い合わせた。

「あの子は一乗客なんだから、今頃は助かつた人達と一緒に部屋に居るんじゃない？」

「いや、彼は記憶喪失らしくてな。身分が証明出来ないかも知れないのだ。その場合、彼にも疑いが掛けられるかもしえん……」

「そ、それってヤバインんじゃない！？」

シヴァは考える。

どうすればいいのか、と。

そして同時に、最近私は考えてばかりだなつとも思った。
実は私は、教師よりも評論家に向いているのか……！
一瞬、そんな事を思つたが、すぐに止めた。

「……カイ、ここを出るか」

「わっすがシヴァ！ セツ言つと思つたよー！」

彼女の言葉に、歎声を上げたカイは急いで立ち上がり、出入口の鉄格子へと向かつた。

と、その時だ。

不意に通路側から、足音が響いてきた。

それは少しづつ大きくなつていて、近付いて来ているのだ。その音に警戒するシヴァは、優しくミーナを起こしてシルクの横に座らせ、ベッドの下部にある鉄部分の長い部分を掴み、両端を力尽くで圧し折つた。

彼女はそれを武器にし、背の後ろに隠す様にして、壁側へと向かつた。

そうしている間にも、足音は近付いて、

「皆さん、無事でしたか！？」

「ゼ、ゼクス！ 何でこんな所に来たんだよー？」

「そんな事はどうでもいいんです。それよりも、早くここを出ましょー！ そうしないと皆さん、殺されてしましますー！」

ゼクスの言葉に、牢屋の中に居る全員が驚いた。

「！」そり抜け出した時に、たまたまドライゼンって人の会話が聞

「え、皆さんを処刑せよつて……！だから、だから早く

「慌てるな、少年。元々、私達はここを出よつとしていたのだ。」

「カイ、頼む」

「あいあいわー！」

威勢のいい声と共に、カイは左腕のフラグメントを発動させ、鉄格子に触れる。

すると、鉄格子はあつと言つ間に鎧びていき、引っ張ると簡単に折れた。

彼はそれを見て頷き、次々と折っていく。

そして、充分な大きさの出口が出来ると、シヴァの方へと振り向いた。

「さ、早く脱出しようぜっ！」

「さつすがカイ～！ てつきわつがいい～」

満面の笑みを見せるシルクは、ミーナと共に牢屋を出て、カイもそれに続いた。

そして最後に出た、鉄棒を持ったシヴァは、ゼクスを見た。

彼は、カイの力を見たからか、唖然としている。

そんな彼の肩を、彼女は力強く叩いた。

「少年、外に出たければお前も來い。とりあえずは、捕まらない事を最優先だ」

「は、はい！ わかりました！」

よし、と頷いたシヴァは、カイ達の後を追う様にして走った。

その途中、牢屋が並ぶこの場所への入口にある監守室に目をやつ

た。

だがそこには、普段居るべき監守の姿が見えなかつた。

偶然、席を外しているのか？と思つたが、しかしここは首都だ。その上、つい先程捕らえたのだ、すぐに警備を緩める訳も無いだろ？。

ともあれ、とシヴァアは思つ。

安全にここを出られるだけでも良しとしよう、と。

向かうは外。

そして出来れば、途中で武器を取り返せる事を祈つて、皆と共に走つた。

通路はまるで、宮殿の様だつた。

派手で高価そうな物、金や銀などで作られた装飾品などの飾り物が、所狭しと壁際に敷き詰められる様に飾られている。

そんな通路を、五人の者達が走つていた。

シヴァアが先陣を切る形で、ただつ広い屋敷の中を走り続けている。警報が鳴り響いている通路を、だ。

「カイ、後方は任せたぞ！ 武器を持たぬ三人を、守りきつて見せろ！」

「まかせとけい！ 先生！」

右手の親指をグッと立てたカイは、横から飛び出して来た兵士に驚きつつ、交戦を開始した。

同時、シヴァアの前方からも、兵士が数人、走つて来る。数は四人。

武器は先頭に槍持ちが二と、後方に剣持ちが一。

行けるな、と彼女は内心で呟き、口元に僅かな笑みを作つた。

そして、行く。

初撃を仕掛けて来たのは、先頭の槍持ちの一人。一直線に、シヴァを狙つて突きを放つ。

彼女はそれを紙一重で横に回避し、兵士の顔面に鉄棒を持つていない右手で拳を打ち込む。

それによつて、兵士は軽々と吹き飛んで壁に直撃した。

高価な壺の破碎音が響く。

しかし彼女は、そんな事などお構い無しに、次の行動に出る。吹つ飛ばした兵士が持つていた槍に右手を伸ばしたのだ。

するとその槍は、風が起きたと同時に、彼女の手元に行く。

今、彼女が持つている武器は、鉄棒と槍。

それをしつかりと掴み、身体に回転を掛けながら振るひ。まず当たるは、左手の鉄棒。

それは勢い良く、槍を持ったもう一人の兵士の腹部に直撃し、よろめかせた。

ぐがつという声と共に唾液が飛び、前屈みになり頭部が垂れる。追撃の槍はすぐ、その頭部に来た。

鉄棒と同じ速度で横から振り下ろさせた槍によって、兵士の身体を捻らせながら、被つていた鉄製ヘルメットにヒビを入れ、同じように戦闘へと吹き飛ばした。

高価そうな額縁に入った、絵画の破ける音と共に破碎。

彼女はそれを程と同じように無視し、折れた槍を捨てて前を見る。するとそこには、間隔を空けて横に並んだ二人の兵士が、剣を振り上げていた。

だが、勢い良く振り下ろされたその剣を、彼女は鉄棒で受け止める。

次いで、即座に両者の間へと入り込み、左側の兵士の腹部に右手の掌低を叩き込む。

そして、掌低を打ち込んだ勢いのまま身体に回転を加え、右側の兵士の腹部に、左腕の肘を打ち込んだ。

すると両者は、呼吸する間も無くそれぞれの壁際へと吹き飛ぶ。高価な皿が、時間差で破碎音を響かせた。

一方、ようやく破碎音を気に掛けた彼女は、風を起して落ちていた一本の剣を拾つて両手に持ちながら、内心で呟く。

……こんなに壊して、良いのだろうか？

正当防衛だ、と言い切るには、一方的にやり過ぎた。

余計に捕まる訳にはいかなくなってしまった。

だからこそ、走る。

理由が何であろうと、とにかく走る。

途中、後ろへと振り向いて、シヴァは叫んだ。

「カイ！ 一本の剣を渡す！ 床に刺すから受け取れ！！！」

おっけー！ つという返答を聞いたシヴァは頷き、床に突き立てよつと両手の剣を振り下ろしたその瞬間、

「 つ！？」

折れた。

「何やつてんだよシヴァアアッ！」
「す、すまん！ 床が硬かつたのだ！」

謝罪の言葉を叫ぶシヴァの背を細田で見るカイは、思わず溜息を漏らした。

「怪力だよ、怪力先生だよ……」

「良いじゃん？ シヴァちゃんらしくって」

「そういう問題かなあ」

そういう問題なんだよつと、振り向いてのウインクと共に言ったシルクは、右側の通路を指差した。

数歩の差でカイには見えない場所を、だ。

刹那、その通路から、剣を振り上げた兵士が飛び出して来た。丁度、カイが前を通った瞬間に。

「うああ！？ 危ねえ！」

驚きの声を上げながら、大きくバックステップをして回避し、最初に床に着いた左足に力を入れて床を蹴った。

俊足、とまではいかないが、その素早い走り出しが、相手の懐へと容易に飛び込める程だ。

行く。

そして放つは、速度で威力を上げた体当たりだ。

「いつてえ！ 鐸、堅すぎるよあんた！」

「馬鹿だねえー」

「あはは、ばかだあ！ カイはば～かば～かつ」

「う、うるせえうるせえ！ 特にミーナ、馬鹿馬鹿言こ過ぎだつ！」

渴を飛ばすカイは、体当たりの際に落ちた相手の剣を拾い、走る体勢を立て直す。

それと、ほぼ同時。

シヴァ達の居る方向から、鼓膜や肌に響く程の爆碎音が聞こえた。見ればそこ、立ち止まつた彼女達の少し前方、左側の壁には土煙と共に大穴が開いていた。

第五十三話・意外な救い手

土煙が收まり始めた頃、カイ達の正面には一人の男が立っていた。身長が高く、大柄なその男は、羽織つている黒いローブを脱ぎ捨てて、黒い短髪を露にさせた。

全身はカラフルなシャツとカーゴパンツで、腰にはポーチがいくつも付けられている。

また、そのポーチからは筒状の爆弾がはみ出しており、先程の爆発が彼の仕業だと分かる。

そんな彼は、背中の鞄に納められている大剣を左手で引き抜いてから、振り向いた。

無精髪を生やし、眼鏡を掛けたその男は、微笑を漏らしながら口を開く。

「よう生きとつたな！ 安心したわい」

言葉と同時に、大穴から黒いロープを羽織つた者が次々と入って来、バビロニアの兵士達と戦闘を開始した。

だが、シヴァをそれを気にせず、男に問い合わせる。

「お前は、どちらの味方だ？」

「もちろん、あんたらの味方や。わいはナギ・コーワエン。レジスタンスの諜報部隊隊長や！」

「ええ！？ もしかしてタマネギ！？」

「タマネギ言うなや！」

驚きの声を上げたシルクに、素早く突っ込みを裏拳と共に入れたナギは、左手の大剣の切つ先をカイに向かた。

「とりあえず、わいが入つて来た穴から出るんや。わいらの馬車が待つとる」

「待て！ どうも信用出来ない。だからこそ、一つ聞きたい事があるのだ。……数時間前にあつた、キエンギ行きの客船襲撃の目的は何だ？」

問いに、ナギは小首を傾げる。

客船襲撃？ と咳きながら斜め上を見る動作をし、不意に口を開いた。

まるで何かを思い出したかのように。

「あれはわいの管理下じやないんやけど、客船内に重要人物が居るから、確保するようについて任務だつたそつやわ。残念ながら捕まらなかつたらしいんやけどな」

「その重要人物とは、カイ・エティフィスか？」

「カイ・エティフィス？ ちやうちやう。そいつは確保やない、護衛対象や。だから今、こいつこいつ状況になつてゐる訳や」

にひひつと笑うナギは、不意に走つた。

カイ達の方へと。

そして彼らを越え、その後方へと迫つていたバビロニアの兵士達の下へと。

瞬間、金属音が響く。

「あ、早く行くんや つとー。」

ナギは最後の一言に力を入れると同時に、兵士が構えていた剣を弾いて胴体に一撃を入れた。

次いで、近寄る兵士を足蹴にして吹き飛ばし、追撃に向かつた。その姿を見るシヴァアは、次にカイを一警し、頷く。

するとカイは、笑みを見せた後、大穴へと走った。皆も、それに続ぐ。

外に出れば、一台の馬車が停まっていた。

鉄製の扉が後部にある木製の馬車は、軽く十人は乗れそうだ。と、その時。

鉄製の扉が、ぎいっという木と鉄が擦れる音を鳴らしながら、外側に開いた。

そしてその中からは、一人の小柄な女が姿を現した。

「みなさん、乗って下さい!」

突然の登場だ。

だが、皆はそれに驚く事無く、中に乗り込む。

馬車の内部には窓が無く、天井に吊るされたランタンのみが、内部を照らしていた。

また、縦横共にゆとりがある為、カイ達は窮屈する事無く座る事が出来た。

唯一立っているのは、先程の女だけだ。

藍色の短髪の彼女は、羽織つているローブの間から手を出し、彼女の背後にあるカーテンの向こうから、一つの武器を取り出した。専用のベルトに、分解されて納められている諸刃の剣と、鞘に納められている長剣だ。

彼女はそれをカイとシヴァに渡し、会釈する。

「先に武器庫を襲撃し、回収しておきました。他の物と隔離してありましたので、合っているかと」

「ああ、確かに合っている。……だが、何故カイの為にそこまでいるのだ?」

「任務だからです。 つと、謝罪が遅れました。シルク・セシリルさん、先日は突然の襲撃、失礼致しました。こちらの者が早とち

りをしてしまい、あのよつたな形になってしまったのです

深深と頭を下げる彼女の謝罪に、シルクは戸惑いを見せた。

そして、あははっと苦笑を漏らしながら、両手の平を振った。

「いいよいよ、過ぎた事だし。ユウに助けられたから、私は無傷だつたしね。……えと、他の人は大丈夫だった？」

「はい。他の者は、気絶していたものの、命に別状はありませんでした」

意外な答えにシルクは、おかしいなと思つたが、すぐに面白く思えた。

……しょーって意外と優しいのかなつ。

思わず漏れた笑い声を、片手で口を塞ぐ行為で防ぎ、良かつたと言葉にだしておく。

一方、話が分からぬカイ達は小首を傾げるが、シヴァはすぐに話を進めるべく、口を開いた。

「一悶着があつたようだが、どうやらもう解決したのだな。それで、これから何処に連れて行くつもりだ？」

「貴女達にはこれから、私達が利用している隠れ家に向かつてもらいます。まずは安全第一、です」

「そう、か……」

眩ぐシヴァは、顎に手を当てて考え方を始めた。

暫しの沈黙。

それから少し経つて、彼女の顎から手が離れた。

「ミーナ、ゼクス。お前達一人は、先に隠れ家に向かつてくれ

「……え？」

突然の言葉は、ミーナを畠然にさせた。

だがすぐに、眉尻が下げる首を左右に振った。
力強く、拒否の意味を込めて。

「いや、いやだよ！一緒に！私も、わた」

「ミーナ！……聞いてくれ。私は、やらなければならぬ事と、確かめなければならない事が出来たのだ。市民を力で捻じ伏せるドライゼンに会う事が、な」

それと、

「それと、この場所は何かおかしい。容易に脱走と襲撃が出来るなど、余りにも脆弱ぎる。だから、それを確かめに行きたいのだ」「で、でも……でも……！」

「大丈夫だよ。大丈夫」

不意に、そう言いながらミーナの頭を撫でたのは、シルクだった。彼女は、涙を溜め始めた目をそつと拭つてやり、小さな身体を正面から浅く抱いた。

あやすように、慰めるように。高等部を撫で、言葉を掛ける。

「大丈夫だよ。だって、カイやシヴァはとっても強いもん。だから、すぐに終わつて、すぐに追いつくよ」

「……本当に？」

シルクの胸元に埋まっていた顔を上に向け、ミーナは上目遣いで問い合わせる。

可愛いと、素直にそう思つたのは、不覚にもその場に居た全員だった。

ともあれ、頬が別の意味で変形しそうだったのを堪えるシルクは、

飽くまで普通の笑顔をミーナに向ける。

「本当だよつ！ カイの力にシヴァちゃんの神速剣技、ついでに私の魔術！ もう完璧だよ百人力つ！」

「自信満々なのな、シルクは」

「あつたりまえじゃん」

へへ～んと、豊かとはいえない胸を突き出して誇らしげな顔をするシルクに、カイは失笑した。

そんな彼らを見て、ミーナの表情は緩み始め、一度だけ頷いた。

「うん、分かった……絶対、帰つて来てね？」

「ああ、約束しよう。ありがとう、ミーナ。……とにかく、ゼクスは良いか？」

「あ、はい。もちろん良いです。僕には反論する意味がありませんから」

少し困ったような表情でそう答えるゼクスは、膝を抱えて座る体勢になつた。

騒がしい事続きだつた為か、一般人であつて彼はかなり疲れてい るようだ。

カイはそんな彼を一瞥してから、シヴァを見る。

「それじゃあ、いつきますか」

「だな。それでは……つと失礼、名は？」

「……メルディ、メルディ・エルマンです」

「ではメルディ、二人を頼む」

「お任せ下さい。無事に、私どもの隠れ家へお連れ致します」

その言葉を最後に、シヴァ達は武器を持つて立ち上がつた。

次いで扉を押し、出口を開放する。

「つむ、やはり妙だな」

馬車から降りたシヴァは、唐突にそう呟いた。
それを聞いたカイは、走り出した馬車を目で見送った後、小首を傾げて問い合わせる。

「どうしたんだ？ 蔵からポウに」

「……まで。見逃しはしないぞ。なんなのだ、ポウって」

「あつはは、何言つてんだよせんせつ。ポウはポウだよ。蔵からポウがこう、シユビツ！ つと。そんでもつてシユババッ！ つてなつてもう」

「すまん……教師として担任として、生徒であるお前の発言が理解出来ん……」

「おいおい先生！ いくら担任でも、人の心までは読めないんだから、気にする事無いんだぞ！？」

「シヴァちゃん大丈夫？ 珍しくカイの空氣に呑まれてるけど」

問われ、片手で顔を覆っていたシヴァは、深い溜息をつく。

ついでにもう一度溜息をつき、吐いた分の息を深呼吸で補給した。
そして、顔を覆っていた手を下ろし、辺りを見渡す。

中庭であるこの場所は、建物によって周りを「」の字型に囲ま
ており、当然出入り口も多数存在している。

だが、人影は三つ、カイ達の分しか確認出来ない。

また、目前に開いた大穴からは音が聞こえず、どうやら戦闘を終

えた様子。

だが、ナギ達が出てこないといふを見ると、戦闘は他で行われて
いるのだろう。

しかし、だ。

シヴァは、疑問を持っていた。

「……やはりおかしいな。兵士の数が少ない。その上、馬車内と今
の会話で時間はかなり経っている筈なのだが、一人として外に出て
来ていない」

「だったら、サクサクっと中を見回って、原因解明に勤しまなきや
ねつ！」

簡単に言つてくれるなつと、苦笑混じりに言つたシヴァは、大穴
を見て頷く。

「では行くか。今度は問題事に巻き込まれる前に、首を突っ込む為
にな」

第五十四話・猛攻

廊下に発砲音と金属音が、連續して鳴り響く。

また、それらに続いて悲鳴も上がる。

鎧を纏つていないう者は、四肢の各急所から鮮血を流し、豪快に転倒する。

頑丈な鎧を身に纏つた者は、僅かな隙間から鮮血を噴き出し、同じく豪快に転倒した。

状況は圧倒的だ。

片や負傷者多数にして、片や少人数にも関わらず無傷。
その状況の原因でもある発砲音を放っているのは、半田で標的を見据える青年、ユウだ。

彼は一向に減らない兵士にうんざりしつつも、撃ち続けている。時折、銃弾が切れ弾倉を補充しつつも、撃つ事を止めない。そんな彼の後ろには、ネプチューンとクレアが、床に座つて会話をしていた。

何処と無く、暇そうである。

「 それにしても、まさか空飛ぶ乗り物が森の中にあるなんて驚いたわ。それを操縦出来るユウも凄いけど」

「少なくとも、わっちはあんなもん見た事ないかんなあ。でんも、狭い場所に押し込まれたときや、勘弁してほしかったつちや」

「小窓付いてて、外が見れただけマシじやない」

「ま、そつなるんけどねー」

あははははと、一人分の笑い声が重なり、響いた。

「つてえか、こんな所にカイ達は居るんかいな」

「大丈夫。私の野生の勘が、ここに居ると告げているの」

「野生の勘？ それ、嘘つちょ？」

「まあ、所詮は勘だから仕方ないわ。それに、ここだつて言ったのはユウだしね。シルクの魔力がどうとか呟いてたし」

「結局、嘘だつたわけかいな。ま、仕方ないさね。あんさんは既に野生じや無くつて飼い猫だかんなあ」

「うつさいわね、このインチキ商人」

再度、重なった笑い声が響く。

だが、その笑い声を聞いて不愉快な感情を溜め込み始めている者が居た。

他でもない、ユウだ。

「お前らー、休憩してないで手伝え！」

怒りを露にした彼の怒声は、一人の方を向いていなくとも笑い声を停止させていた。

そして、二人は顔を見合させる。

瞬き数回でアイコンタクト。

次いで、ネプチューンがユウの方を向いて口を開いた。

「で、でんもよ、わっちらは空酔いしてるんさ」

「いやいやいや、それは流石に苦しい言い訳でしょ」

「うつはあ！ まさかの速攻裏切りい！？」

オーバーリアクションで驚くネプチューンを無視し、クレアは立ち上がった。

少しフラつきがあるようだが、両足を仁王立ちの形にして、体勢を固定する。

そして、太股のベルトからダガーを両手で抜き取り、構えた。

「ごめんなさいね。それで、どうすれば？」

「酔いは本当だつたか。まあ、立てるのなら良いんだ。……多分、兵士の波が弱まる瞬間があるだろう。そこを一気に攻めるぞ」

言いながら、ユウは拳銃を持っていない右手で、腰の鞘から長剣を抜く。

そして、今撃っている分の弾倉が空になつた瞬間、一人は走つた。姿勢を低く、左右に展開して、行く。

対し、先頭に居る三人の兵士は、突然に走つて来た事に驚きつつも、追撃体勢に入った。

左右の二人は斧を横に、中央の一人は剣を縦にそれぞれ薙いだ。それをユウはスライディングで回避し、クレアは振るわれた斧を跳躍で紙一重に回避する。

また、それと同時にユウは足を、クレアは首筋を斬つた。

鮮血と悲鳴が噴き、吹き出す。

だがまだ、猛攻は止まない。

クレアは着地と同時に、しゃがんだ状態の脚をバネのようにし、駆ける。

正面、薄い鎧の兵士を狙つて、だ。

速度は、猫型獣人特有の俊足。

故に防御は遅れ、兵士は腹部に膝蹴りを容易に受けてしまった。くの字に折れ曲がった身体に、彼女は見向きもせずにダガーを振り下ろす。

斬るのは、またしても首筋。

次いで、左に向かつて身を一回りさせ、その勢いで一人同時に斬つた。

そんな彼女に、一人の兵士が長剣を振り上げる。

しかし、彼女はその兵士に対応する動きを見せない。まるでそこには、誰も居ないかのように。

刹那、その兵士に向かつて蹴りが飛んで來た。

「コウの回し蹴りだ。

その蹴りは兵士を吹き飛ばし、壁に叩き付ける。

次いで、まだ行く。

立ちはかかる者を全て斬り、薙ぎ倒し、道を開く。対する兵士達は一人に対し、成す術も無く、その数を減らしていった。

と、その時だ。

不意に、コウの長剣を防ぐ金属音が鳴った。

突然の異変にコウは驚き、長剣を防いだ者を視界に捉える。

「…………シヴァか！」

「コウ！？ 何故、ここにいるのだ！？」

交えていた長剣を即座に離した一人は、現状を把握する為にお互いの背後を見る。

どうやら兵士は殲滅したらしく、どこにも姿は見えなかった。すると、シヴァの後方からはカイとシルクが少し遅れて走つて来ていた。

その上彼らは、コウの背後にクレアが居る事に、かなり驚いている。

「質問が増えたな。何故、お前が殺した筈の獣人が共に居るのだ？」

「ああ、それも含めて、伝えるべき事を全て話そう。なに、すぐ終わるぞ」

第五十五話・疑い深き行動

とりあえず、話そうと思つていた事は全て話した。

クレアが生きていて、共に行動している理由。

クレアを操つていた男と、海の船上で一戦交えた事。

テクノス王国の王立図書館で襲撃にあつた事。

そして、その図書館にて、カイの腕に関わるジードの歴史が記された資料を見つけ、内容を知つた事について、だ。

ちなみに、カイ一行からも、少なからずこれまでの経緯を聞いた。

特に、シルクが魔術でカイを助けたと聞いた時は、ティファアがかなり喜んでいた。

俺の頭を叩くのは止して貰いたいものだが。

対して、弟子は笑みを浮かべて、一礼をしてきた。

隣に居たカイの「え？ 急に何してんの？」とでも言いたげな表情は、可笑しかつたな。

ともあれ、聞くところによるとシヴァア達は、ドライゼンなる男を捜しているらしい。

なんでも、こちら一体を牛耳つている独裁者、常連者らしい。一部、俺の解釈が含まれているが。
にしても、独裁者、か。

「で、そいつを見つけ出しどうするんだ？ 殺すのか？」

「ストレートな男だな。……だが、確かにそうだ。私はドライゼンを殺す。独裁者は太古の昔から市民を傷付ける事しかしないからな。私はそれが許せない」

グッと、シヴァアの拳に力が籠る。

見るからに、相当な怒りを溜め込んでいるようだ。

まあ俺も、独裁者は許せないから同意だな。

良し分かつたと、そう言おうとしたその時。

言葉が喉まで出掛かつた瞬間、ティファアが先に口を開いた。

『ユウ！ 急に変な魔力が溢れ出してきたわ！ 場所は……』
地下よ！』

『地下？ つて事は、ドライゼンとやらはそこか？

『分からないわ。でもこれは……なんか、気持ち悪い……』

探せるか？

『やつてみるわ。だから、入れ替わつてもらえる？』

『どういう理由かは知らんが、良いだろ？』

同意して目を瞑り、入れ替わりの体勢に入つた瞬間、意識が一瞬途切れ、目を開ければ隣に俺が居た。

……俺が俺を見ているつてのは、どうも慣れないな。ある意味、ドッペルゲンガーより質が悪い気がする。

ふと、シルクを見れば、おお！ と言つてるかのように口を開け、小さく拍手していた。

無視、すれば良いのか？

「シヴァア。なら俺が、ドライゼンを見つけ出してやるつが？」

「……何？ 居場所が分かると言うのか？」

「ああ、ばつちりだ。奴は、強力な魔術結界の中に居るつだ。だが、それが仇となつてな、魔力を俺が感知出来た」

なるほど、そういう理由だったのか。

つまりは、その結界を解除する為に、魔術を使わなければならな

い、と。

言つと、ティファは頷く。

それは他者から見れば、シヴァに対しての反応だろうが、俺に対するものだらう。多分。

兎に角、俺であるティファの提案に皆は同意し、走り出した。ティファを先頭にして。

走りながら、カイはユウに對して警戒していた。
理由は他でもない、客船での一件で彼に不信感を抱いていたからだ。

また、ドライゼンの居場所が分かるといふ言葉が、更に不信感を積もらせた。

……ユウは、俺達を罠に掛けようとしている?

結果、そのような信じたくない事さえ、脳裏に浮かび始めていた。
だが、皆さんにも信じてもらえるかどうか、分からぬ。
笑い飛ばされるのがオチだらう。シルクやネプチューンに。
けれど、殺した筈のクレアを実は殺しておらず、共に行動していたのも解せない。

もしかしたら、最初からグルだったのかもしない。

いや、もしグルだったとしても、クレアと交戦したのはユウだけだ。

俺は彼女にフラグメントを使つただけ。

故に、クレアは何のメリットも得ていません。

しかし、ユウが別行動を取ると言つたのはその後だ。
それが計画通りの行動だったとしたら……。

分からぬ。切りがない。

カイは内心でそつ眩いで、思考に休憩を挟む。

とりあえず今は、ついていくしかないと、そう決めておいた。そして暫く走っていると、急にユウが立ち止まつた。どうやら、彼の横にある壁が気になつてゐるようだ。周囲を見渡し、再度同じ壁を見る。

明らかに、壁を疑つてゐるようだ。

すると彼は、指を鳴らして壁に掌を添えた。と、その時だ。

壁に、まるでガラスのように輝が入り、次の瞬間には砕けて、下りの階段が姿を現した。

「 つ！？」

その場に居た全員が驚く。
ユウを除いて。

「すげえー、さすがユウだっちゃ」

「喜んでいるようには聞こえんぞ？ まあいい。ユウ、これは降りても大丈夫なのか？」

「分からん。ただ……どうする？ 一気に駆け下りるか？」

問ひに、シヴァは少し考えてから、後ろの者達の方を向いた。無言で、いいか？ と問いかけているような表情で、だ。対して、問われた皆は頷いた。

その答えと同時に、走る。

暗い階段を、駆け下りて行く。

途中、人が来た事を察知したのか、壁に掛けてある松明に、自然と火が灯つた。

だが、シルクを除いた皆は、見向きもせずに走つた。螺旋のような階段を、ただひたすら駆け下りる。

そして到着した場所は、円錐のような大部屋だった。

装飾品などは何も無く、ただ金属製の壁に囲まれた場所。明かりは、かなり高い天井があり、正面より少し上を見ると、円で例えるなら四十五度くらいの位置に、大きなガラス張りの部屋があつた。

そしてそこに、ドライゼンが立っていた。

見下ろす形で、不適な笑みを浮かべながら、だ。

「見つけたぞ、ドライゼン！」

叫び、長剣の切っ先をドライゼンに向けたシヴァは、睨みを効かす。

そんな彼女に、ドライゼンは鼻で笑つて返事を返す。

「見つけたからと云つて、なんだと云つのだ」

ガラス張りでもクリアに聞こえる声は、どうやらスピーカーを通して喋つているようだ。

「どうせお前達は、もう地上には戻れんよ。そして、我らが野望は果たされる！」

「野望……？ 何だ、何を考えている？」

「簡単だ！ それはせ ぐぶう！？」

刹那、ドライゼンの腹部から銀色の刃が生えた。

それは、背後から刺されたという事だ。

するとその刃はすぐに引っ込み、次いでドライゼンが倒れた。

「全く、キースが要らぬ部分の感情を残した所為で、お喋りが過ぎる男になつたな。おかげで私の刃にヘドロが付いた」

声は、ドライゼンを刺したであるの者の声。

そしてその声の主は、皆に見える位置へと出て来る。

真っ黒なスーツを着た長身の、茶髪をオールバックにした男が、見下し侮蔑するような視線を向ける。

対し、その姿を見たシヴァの眉間に力が籠り、歯軋りを鳴らして怒りの表情を露にする。

男も、彼女の姿を見ると、わざとらしく驚いて見せた。

「おや、誰かと思えば賢妹か。相変わらずの表情だな」

「こんな所で何をしている、愚兄！？」

両者の声が、室内に響き、静寂を生んだ。

第五十六話・愚兄

シヴァの言葉を聞いた皆は、驚きの表情を露にした。だが、彼女はそんな事など御構い無しに、ただ一人の男だけを見る。

彼女が愚兄と呼んだ男を。
対する男も、シヴァを見据え続いている。
そして、彼が最初に言葉を発した。

「愚兄とは、全く酷い言い草だな。何を根拠に私を愚者と?」「とほけるな!一族を戦争の道具として使い、市民を大量虐殺した恥晒しが、愚者に値せぬと思っているのか!?」「待て待て、それだとその作戦に少なからず参加していたお前はどうなる。同じ愚者ではないか」

「ち、違う! あれは命令で、当時の私は仕方無く
「仕方無く人を殺し、命を奪つたのか? 無責任だな。それは進んで殺すよりも罪だぞ。神にでもなつたつもりか? 賢妹」

ほくそ笑むその表情は、口で笑つて目で冷めていた。
憎たらしく、そう評価する事も出来る。
だが、次の言葉は予想外の者から発せられた。

「あ、ちょ、ちょっとちょっとー シヴァちゃん、大量虐殺とかつて何の事?」

シリクだ。

彼女は、まるで他の皆の代わりとでも言つかのよつな、疑問多き表情で問い合わせた。

対するシヴァは、罰の悪そうな表情をし、男は眉をピクリと微動

させた。

同時に表情が変化し、妹を呆れた目で軽蔑する。

「賢妹、まさか話していなかつたのか？」　　いいか、貴様ら。そこに居るのは、報復戦争時代にテクノス王国の聖五騎士の一人だつた、シリル・ヴァード・コリウス・ファリエトスといつ女だ。最も、戦況を傾けさせる程の裏切り行為をして、脱隊している身だがな」「黙れ愚兄！　それは関係の無い話だ！！」

「関係あるさ。隠し事は良くないだろう？　ともあれ、貴様ら。私の賢妹が世話をなつたな。おかげで、全員揃つて立派な邪魔者だ」

言いながら、男は後ろへと振り向き、誰かに指示を出し始めた。そしてそれが終わると、再び皆の方へと向き、微笑する。

「めでたく邪魔者に当選した貴様らには、表舞台から降りてもらいたいのだ。　やれ」

刹那、皆の周囲に複数の巨大な魔法陣が展開し、光を放ち出した。僅かに目を細めるほどの光を、だ。

それらは白や黒、青などの色を持つており、皆の周囲を取り囲むようにして固定された。

「ななな、なんだつちやー！？」

「何よこれー？　多すぎるじゃないのー！」

「愚兄！　これはなんの真似だー！」

ガラスの向こうに居る男に問うシガアは、長剣の切つ先を真つ直ぐに向けた。

対して、呆れた表情で口元に笑みを見せる男は、当然だとでも言うかのような表情で、妹を見下ろす。

「つい先程言つただらう。表舞台から降りてもいいたい、ヒ。さ
よづならだ、賢妹」

別れの言葉と同時に、それは来た。

魔法陣の放つ光が強さを増し、次第に目も開けていられない程になつていく。

それと同時に、周囲に空間の歪みを生み出し、やがて光は圧縮を開始する。

途中、男は告げた。

「それとコウ・ウラハス。中にいる者を返してもらひやう。」

言葉は伝わつたのか分からぬ。

けれどもただ、男は一応として告げた。

そして、告げた先に居る者達は、圧縮されていく光に飲まれ、消えていった。

第五十七話・激戦後の静けさと

地平線の彼方まで澄み渡る空と海。

スカイブルー一色のこの場所には無数のカモメが飛び交つており、群れを成している。

その眼下、海面上には一隻の船が浮いていた。

船体に？レジスタンス？と書かれているこの船の甲板には、Tシャツ一枚の男がハンモックに揺られていた。

太陽の光によって銀色に見えなくも無い白髪の彼は、ここ暫くは全く眠つていなかつたが為に、問題の無いこの時間に睡眠を取つているのである。

また、同じく太陽の光を受けている、彼の首に掛けられたドッグタグには、？フェンリル・ヴァナルガンド？という名が彫られていた。一方で、そんな彼に近寄る侍女服姿の女は、不快な表情をしていた。

「マスター。私には雑用を押し付けておいて、貴方は南国気分を満喫中ですかこのやうー」

言いながら、左手に持っているモップを振り上げ、構える。そのモップの先端は、一度フェンリルの顔に影を作る形となり、彼の目を覚まさせる形となつた。

眠眼に、うんつと唸りながら目をゆっくりと開ける彼は、視界に入ったモップを捉えた瞬間、目を見開いた。

同時、モップが勢い良く振り下ろされる。

「わああああ！ 危ねえだろーがヘル！！」

「真剣白羽取りを成功させるとは、さすがマスターです。 おは

よつゞやこめや

「おはよつゞやこめや！ 何考えてるんだー！」

「？ 起床時の挨拶は、おはよつゞやこますしか登録されておりませんが。また、それに関連した適切な言葉は無いと判断しております」

わうじゅねえよつと溜息混じりに言つフホンリルは、起き上がって甲板に足を着き、ハンモックに座つた。

「侍女つて奴は、主人に危害を加える事は許されない。そう、許されないんだぞ」

「お言葉ですが、その機能は先日、マスターが削除要求したソフトと共に消滅致しました」

「なんでだよ！？ 何で消え えぐつ！？」

声を荒げて吠え出したフエンリルに、次の瞬間、口内へとモップの柄が突っ込まれた。

暫しの沈黙。

やがて、二分程経つた頃に、ヘルは三度頷いてモップの柄を口から離した。

そして、謝罪の意を込めて頭を下げる。

「無礼を働き、申し訳ありませんでした。マスターを一度落ち着かせるには、いづするのが一番だと判断致しましたので」

「はつ、良く言つた。まあ、口内に傷がつかなかつたから、減点は少量だ。とりあえず、罰として毎食を」

「既に用意してあります。要望とあらば、今すぐでもお持ち致しますが？」

小首を傾げて、そもそも当然のように言つ表情に、フホンリルは思わず

ず失笑した。

次いで、腕を組んで人差し指を彼女に指す。

対して、ヘルはその指先に焦点を合わせ、停止している。

「それじゃ、迅速に用意しろ。少し遅れた昼食を取るぞ」

「ヤー、マイマスター」

無表情で命令に従う伊を示し、踵を返してから来た道を戻つて行つた。

その方向には正方形の部屋があり、船内へと続いている扉がある。彼女はそこから船内へと入り、姿を消した。

……あいつ、口が悪くなつた気がするな。

内心でそう呟くフェンリルは、しかしそうに考えるのが面倒になつた為、それを捨てる。

代わりとして、気晴らしに周囲を見渡した。

周囲に目立つた物は無く、この船に乗っているのは一人だけだ。

ちなみに、彼らが今乗っているのはレジスタンスの船であり、密

船襲撃時に使われたのを奪い取った物だ。

目標を取り逃がしてしまつた彼らは、すぐに後を追おうとしたが見つけられず、現在は依頼人からの連絡待ち状態。

そして、その連絡であるメールが着た知らせが、船外に出て来たヘルによつて伝えられた。

「マスター。依頼人からのメール着信と、昼食をお持ちした事を報告致します」

彼女は右手に電子端末を、左手にサンドイッチの盛られた皿を持ち、特に急ぐ事無くフェンリルの下へと向かつ。

そして、到着すると同時に彼はサンドイッチを一つ取り、口に運んだ。

電子端末には田もくれず、一口分を含んで咀嚼する。

「……ん、ハムサンドか。卵は無いのか？」

「生憎、船内の冷蔵庫に卵はありませんでした。」J要望に沿えられず、申し訳御座いません」

頭を下げ、謝罪するヘルに、別に良いつと言いながら、また一口。それが後数回続き、咀嚼を終えると同時に汚れていない指先を舐めた。

次いで、やつと電子端末を見やる。

画面には既に、メールは展開されていた。

「差出人は当然の事、依頼人か。本当、シンプルな奴だな、」Jのヴァンツてのは。任務変更・プランB決行、だとよ」「プランBという事は、ひとまずキエンギへと向かう必要がありますね。では、今暫く船旅をお楽しみ下さい」

皿をフェンリルに手渡して一礼し、ヘルはまた船内へと入って行つた。

そして、一人残されたフェンリルは、残りのサンドイッチをたいらげてハンモックに寝直した。

視線を空に向け、右手を真っ直ぐ伸ばす。

指の隙間から覗く太陽を隠し、手の影で顔を覆つた。

明るい周囲と暗い中心。

その手の甲をジッと見つめながら、彼はある光景を思い出していた。

自分の故郷の光景を。

「……今更、捨てた筈の故郷に戻る羽目になるとはな……」

眩き、目を瞑る。

するとその時、彼の手に風が強く当たり始めた。

船が加速を始めたのだ。

それを知った彼は、不意に微笑し、右手を下ろす。

船が起こす水飛沫の音を子守唄のようにして、彼は短い睡眠へと落ちていた。

第五十八話：遅れた男

孤独だった。

目が覚めた時から、ずっと一人だった。

いや、正確には他にも居たが。

そいつらは、俺を人として扱わず、ただ実験道具としてしか扱つていなかつた。

だから、そうだ。独りだつたんだ。
けれど、いつからだろう。

俺の隣に居座り始めた奴が、現れたのは。
その時から俺は、独りじやなくなつた。
感謝の言葉は、まだ告げていない。

廃墟に近い王立図書館に、轟音が響き渡つた。

それは、入口の扉が蹴破られ、床へと落ちた際に出た音だ。

強制的に役目を終えさせられた扉は、自重で床に風を起こし、埃を舞い上がらせる。

その埃に呑せながら、長身の男、レイヴンが扉を踏みながら入つて来る。

漆黒のローブを羽織り、その下に大剣を担ぐ彼は、紅い目で周囲を見渡し、舌打ちした。

彼の視界の先、王立図書館内は、荒れていた。

数え切れない程ある本棚が倒れて本を散乱させ、中には破損し、粉碎されている物もあつた。

また、奥へと進んだ先にある大扉を抜けると、天井にあるステン

ドグラスが割れており、光が射し込んでいた。何か大きな騒動があつた、その跡のように。

「事後、か……」

レイヴンが呟いた、その時だ。

彼の顔の横に突然、光の粒子が生まれて中心に収縮し、次の瞬間に拡散した。

そしてそこには、小さな妖精が姿を現していた。

「じゃつじやじやーん！　登場シーンのバリエーション豊富な、ライト・ウィッシュちゃんとうじょーいー！」

「…………」

「あ～あ～、つれない顔しちゃ駄目だよレイヴン。明るくつ、明るくつ！」

無言のレイヴンは、無表情のままライトの頬を親指と人差し指で摘む。

ぎゅむつ、と声を漏らす彼女を無視し、顔を捏ねつた。

「ぎゅむぎゅむむつ　つふえ、や、ひやめみやひやい！　もみゅめれみや～」

四肢と四枚の羽をバタつかせて抵抗を試みるが、力の差によつて逃げられないでいた。

そんな彼女を、笑う事無く無表情で見るレイヴンは、不意に彼女を放す。

刹那、彼の頬に拳が飛んだ。

大して威力の無い小さな拳が、だ。

「「」のやうー「」のやうー。レトナーの頬を気安く摘むなんて、最低だー。レトナーの頬は纖細なのだ、アイデンティティーなのだー！」

「アイデンティティーの使い方、間違ってるわ。まあ良いが。それより、今はふざけている場合じゃないだら」
「むぐつ、話を逸らした……。にしても、ボロボロだねえ。何があつたんだらう？」

問いにレイヴンは、分からん、と呟くが、口の端は釣り上がりていた。

「分からんが……血の匂いがする」

嬉しそうな表情をする彼の目は細く研ぎ澄まされており、まるで獲物を探す獣のようだった。

その彼が、歩みを始める。

グシャリと本を踏む音を立てながら、奥へ奥へと進む。本棚の残骸を踏んでも気にせず、雪道を歩くよう、ゆっくりと前へ行く。

ライトはそんな彼の肩に乗り、眉を潜めて周囲を見渡していた。途中、彼の視界には死体がいくつか映る。様々な倒れ方をしている、子供の死体が。その度に、笑みが増す。あいつらだ、やはりあいつらが「」に来ていた、と内心で嬉しそうに呟く。

すると、彼の表情を見たライトが小首を傾げた。

「凄く嬉しそうだね？」

「当たり前だ。」「にあいつらが来ていたんだからな

え？ という疑問の声を上げたライトに答えるように、言葉を続ける。

「あいつらはこの大陸に向かっていたんだ、この王国以外に行く場所は無いだろう？ それに、船上に居たあいつの仲間の、獣人の匂いが微かに残っているしな」

「海には潮の匂いってのがあるのに、よく獣人の匂いを嗅げたね？」

「獣つてのは、臭いもんだからな」

言う彼は、不意に足を止める。

視線の先には、辛うじて無傷な大テーブルと、その上に置かれた厚い本。

その本の周囲には埃が無く、故にこの本は最近開かれた物だとう事が分かる。

彼はその本に近寄り、表紙を見た。

「……神話聖書？ エニグマ？ ……。まさか、これを調べていたのか？」

「えにぐま？ 何それ」

「ジードっていう世界の物語だ。神を造るという愚かな事に挑んだ、愚者共が前に居たって言ってた世界のな」

刹那、頭痛が起きた。

それは記憶のフラッシュバック。

映るのは、白衣を着た者、水槽、瘦せこけた男、血飛沫、スース姿の男、斬殺死体、惨殺死体。

数々の記憶が痛みとなつて彼を襲い、無意識に頭を抑える。

「大丈夫！？」 と言うライトの声も耳には届かず、締め上げるような痛みが続く。

それが長く続き、気が遠くなりそうになるが、歯を食いしばって

耐える。

ぐつという声が響かず漏れ、足元が少しうらついた。

だが、二分程経つと痛みは引き、手も頭から自然と離れた。

「も、もう痛くないの？ 大丈夫？」

珍しく困惑の表情を見せるライトを手で制し、踵を返す。

「なんでも無い。ただの頭痛だ。そんな事よりも……行くぞ。目的地は、バビロニア皇国だ」

告げるレイヴンは、本棚の残骸を踏みながら、来た道を戻り出す。今や王立図書館内には、破碎音だけ響いていた。

第五十九話・荒野の中心で

人は今、墮ちる所まで墮ち続けている。
抗争、殺戮、虐殺、殺し合い……。

争いを好む人間は、それらをいつまでも続けている。
止められない、人の闘争本能。

そして、別の何ががそれらを悪化させた時。
人は一体、どこまで墮ちるのだろうか。

鳥の鳴き声が響き渡る。
それは、円を描くようにして同じ場所を舞う、鷹のような生き物
の鳴き声。

鋭いその目は、獲物を狙い、上空で待機しているかのよう。
視線の先にはただつ広い荒野が広がり、建物どころか草一つも無
い、ひび割れた大地。

その一箇所に、六人の男女の姿があった。
彼らは死んでいるのか気絶しているのか、ピクリとも動かず倒れ
ていた。

そんな彼らを、その鳥は狙っているのだ。
しかし、不意に彼らが微動する。

次いで、手が動き出し、ゆっくりと身体も動き出した。
内の一人であるカイは顔を上げ、周囲を見渡す。
目に映るのは、青い空と茶色い地面の二つだけ。
後は、耳に入る風の音と鳥の鳴き声だけだ。

それを感じた彼は暫く睡然とし、しかしすぐに起き上がりつくる。

節々の痛みに耐えながら、他の者達も同じ動きをしており、皆が身体を起こして顔を見合わせて居る状況になった。

誰も彼もが、不思議そうな表情をしている。

すると、シヴァが最初に口を開いた。

「……皆、無事か……？」

問いかに、全員が疎らに頷く。

その事にまず安堵した彼女は、ミント色のスースについた砂を掃いながら眉を潜める。

「リリは、どこなんだろうな……」

それは、皆が思っている疑問だつた。
見慣れない光景に、混乱しているようだ。
しかし、その疑問に答える者が居た。

「リリはジード。私の住んでいた世界よ」

思わぬ答えに、全員が返答者の方へと向いた。

視線の先に居る、金色の長髪の女は、左右の色が違つオッドアイつで、周囲を見渡す。

彼女の姿は、袖が長く肩の辺りが露出した真っ黒い服に包まれており、表面にはかなり細かいラインがいくつも走っていた。

長い腕には紋章が刻まれ、まるで魔術師か魔女のように見える。そんな彼女は、間違ひ無いわ、と言つて深く頷く。

だが、その発言に関係無く、シヴァは警戒心を強めていた。

「お前は……いつたいだ」

「ああー、シショーガ実体になつてるーー。」

しかし、シヴァの質問は、シルクの驚いた声に搔き消された。
師匠と言つた彼女は、驚きのあまり震える指先で、金髪の女を指す。

対し、女は笑みを向けて手を振つて見せた。
この予想外の状況に、シヴァはむちむの事、他の者も言葉を失つてゐる。

陽気な表情をしてくる、ネブチューンを除いて。

「で、シルクの師匠つちゅーあんさんば、何者なんぜよ?」

「……私はティファ。元々はこの世界の住民で、コウの中に居た存在よ」

「お、おいちよつと待て! 次から次へと驚かされて、私は混乱してしまつてゐるー。」

片手の平で会話の制止を求め、もう片方の手で頭を押される。まるで頭痛がするかのように、シヴァの表情は険しくなつた。

「……私達は、ジードに来たのか?」

そして、恐る恐るの間に、ティファと名乗つた女は頷く。
次いで、シヴァは質問を続けた。

「地下のあの部屋で、光に包まれたと思つたら意識が飛んだのだが、もしやあれが原因なのか?」

「ええ、多分そりよ。この現状を考えると、あれは他世界に干渉する魔術ね。ジードに送つた理由は……」この世界が滅びる予定にあるとこう事を知つていたから、だと思つ

「この世界が、滅びる……？」

「ええ、この世界は滅びる。過去の歴史の過ちによつて」

淡々と問い合わせに答えるティファアは、しかし不意に表情を変えた。ハツとした表情は、荒野の果てを向いている。

その視線の先には何も無かつたが、暫くすると何かが見えてきた。先頭を走る一頭の馬と、それに引かれる大きな車体。

馬車だ。その馬車が、荒野を駆けてカイ達の方へと向かつて来ていた。

それは、偶然、進路上に彼らが居ただけだろうが、ティファアは立ち上がりて両手を振った。

すると、馬車は速度を緩め、彼らの近くで停止した。

車体の前方で手綱を掴んでいる中年の男は、どこか見た者を安心させるような笑みを浮かべている。

「どうしたんだい、こんな所で。旅でもしているのかい？」

「ええ、そうよ。でも、どうやら道に迷つてしまつたらしくって。

それで、良かつたら乗せてもらえないかしら？ 貴方が向かつている場所まで良いわ」

男と同じように笑顔で答え、問うたティファアに、彼は顎に手を添える。

そうして数刻の間、うーん、と唸つて考え、頷いた。

「丁度、帰り道だつたから荷物は無いし、良いだろ？ 美人さんが三人も居る訳だし、仲間に自慢出来るわい」

がつはつはつ、と大口を開けて笑う男は、座っている椅子の横にあるレバーを引いた。

すると、馬車側面の壁がスライドして開き、内部への入口が出来

上がつた。

それを見て素直に驚くカイとシルクを見て、男は更に笑う。

「まっさか、そこまで驚いてくれるとはね。作った甲斐があるってもんだよ。さ、入りな御一行さん！」

言われるままに、彼らは中に入り、備え付けの椅子に腰掛ける。全員が入り終えると、入口の壁がスライドして閉まり、馬車は走り出した。

それと同時に、ティファは口を開く。

「それじゃ、せっかく来た訳だし、この世界についてお話ししようかしら。もちろん、何故滅びるのかも含めてね」

第六十話・ジード

「 その者、ディン・ガードナーが持つフラグメントで、エニグマ戦争を終わらせたの。それによつて、人々には平和が戻つたわ」

揺れる馬車の中で、説明を続けるティファは一息ついた。
彼女は、戦争前の歴史とエニグマとの遭遇、開戦とフラグメントを持つ者の事などを話した。

それはネブチューンやクレアも本を見て知つてゐる事であつた為に、ところどころで口を挟んでいたが、それから先は知らない為、聞き入る体勢に入つてゐる。

一方で、カイは相変わらず混乱しており、ティファが休憩に入つてゐる今は、シルクが彼に要点を教えていた。

そして暫しの休憩の後、ティファは話を再開する。

「けれども、エニグマが姿を全く現さなくなつて数年後、異変は起きた。住処を増やしていく人間は、ある現象を見つけたのよ」

それが、と言いながら、壁の小窓から外を覗く。

「それが、この荒野。自然が消え始めたのよ。それにより、大地は枯渴し、生息していた生物は死に絶えた」

「つまり、エニグマがいるから、自然が生まれていた?」

シヴァの問いに、ティファは頷く。

「エニグマは自然を育ませ、人間は自然を利用して作物を育てる。このようにして、知らぬ内に両者は共存していたの。自然は増えすぎると大地を埋め尽くすし、かといって自然を使い続けければ、大地

は滅びる、といったようにね。けれど、それをぶち壊したのが人間。だからこれは、生き残った人間への罰ね」

魔力は今も変わらず抱負だけどね、と言つて吐息。

同時にそれは、説明の終わりを意味させた。

それ待つていたかのように、ネプチューンが小さく手を上げた。

「次はわっちからの質問ぜよ。この世界に町や都市は、今でもあるんかいな？」

「もちろんあるわ。枯渴に抗うように、一、二、三ほど巨大都市が作られ、人工自然で生活を賄つてゐる。古くから地下水が豊富な村も、いくつかあるわ。今はどれだけ残つているか分からぬけどね」

「ほへえ、巨大都市！ こりやなんかたのし」

「ティファ！ ユウはどうしたんだ？」

ネプチューンの言葉を遮つたのは、突然、質問を投げ掛けたカイだつた。

対して、ティファの表情には雲がかかる。

「その事なんだけど、じつちに来てから、私の中にユウが居ないの……。ああ、私とユウは入れ替わる事が出来るのよ。姿形が変わるのは、魔術的な事による効果と考えてもらひて結構よ」

言いながら、彼女は胸元を押さえる。

田は虚空を見つめ、表情には悲しみの色を見せていた。

「なんというか、半身を失つたような感覚がするの。ずっとあった何かが、急に無くなる感じ」

「……そういえば、愚兄が最後に何か言つてたな。ユウの中のものを返してもらう、と」

そのシヴァの言葉に、ティファはハツとした表情を見せた。

「あの時、私は表に出ていたから……中に居たユウが代わりに連れて行かれたって事、なの？ 私の、せいで……」

眩き、俯く。

彼女はそうやって、自分を責めた。
どうしてすぐに、身体を返さなかつたのか、と。
だがそれは、既に取り返しのつかない事だった。
と、その時。

次の言葉は、思わず方向から来た。

「さつきから聞くユウって名前、もしかしてセイル村のユウ・ウラ
バスか？」

前方の小窓から顔を覗かせた中年の男は、そう問い合わせた。
その事に全員が驚くが、咄嗟にティファが答える。

「そ、そ、そ、う、う、コ、ウ・ウ、ラ、ハ、ス、よ。 けど、どうして彼を知っている
の？」

「そりゃあ、俺もセイル村出身だからさ。 ウラバスにも、何度も世
話になってるしね」

言つて、彼は何か思いついたかのように指を鳴らした。

実際は鳴らそうとしたが鳴らず、ただ指同士が擦れる音しかしな
かつたが。

「もしセイル村に用があるのなら、次の村で小包を受け取つたら、
次はセイル村に向かうし、送つて行つてあげるよ」

「えー？ ゼ、是非、お願ひするわ！」

その言葉に、男は嬉しそうな表情になり、がつはつはつと大口を開けて笑いながら、正面へと向き直した。
目的地が決まった事に、皆は安堵の吐息を漏らす。
ともあれ、彼らはセイル村への道のりを、馬車に揺られながら待つだけとなつた。

第六十一話・セイツヘの一騒動

馬車に乗る事、一日と数時間。

一行は一つの村を経由して、やつとセイル村に到着した。

それもこれも、馬車の持ち主である男、マクリのお陰だった。

彼はカイ達が資金を持っていない事を知ると、珍しい物と交換するのを条件に、ジードの通貨であるセルを分けてくれたのだ。

幸い、シヴァが持っていたグラルスの通貨であるラノンは金で作られている為、それで交換する事が出来た。

マクリがラノンを見て不思議がっていたのは、言うまでも無い。ともあれ、通常よりも急いで馬車を走らせてくれたお陰で、難なく到着する事が出来たのだ。

セイル村は作物の栽培が盛んで、近くの洞窟からは銀が採掘される事から、有名な村となっている。

しかし、どこの家も木造やレンガ造りで、贅沢が全く見られなかつた。

それを不思議に思うシヴァは、道案内をしてくれて居るマクリに問い合わせる。

「銀が取れて裕福である筈だが、何故、村という雰囲気を保っているのだ？ 都市として発展する事ぐらい、出来るだろ？」

問いに、笑顔で振り向くマクリは、当然であるかのよう答える。

「村の皆は、贅沢を好まないんだよ。何せ、生まれた時からこの環境で育つていたもんだから、一生この景色を残したいと思つているもんで」

「そう、なのか。……良い村だな」

「ありがたい言葉、早速仲間内に伝えておくよ」

嬉しそうに微笑むマクリは、数回頷いて前へと向き直した。それを見たシヴァは、周囲を一瞥して、良い村だと再度思つ。次いで、後ろへと振り向くと、同じく周囲の光景を見渡している三人の姿がある。

「三人？」

彼女はその数字に疑問を持ち、もう一度人数を数えた。だが、人数は変わらず三人。

ティファとクレア、それとネプチューンだけだ。

「……カイとシルクが居ないぞ！！」

突然の大声は周囲の動きを停止させ、一瞬の静寂を生んだ。しかし、そんな事は気にせず、シヴァはマリクの方を向く。

「すまないが、連れが居なくなつた！ 探しに行くからここで待つていてもらえないか！？」

「ん？ いやいや、それなら俺が行くよ。君は……ほら、そこの酒場に居ると良い。情報収集なら酒場でつてね」

マリクが指で示す方向には、木造の大きな酒場があつた。それを教えた彼は、じゃあまた後で、と言つて小走りでどこかへと消えて行つた。

シヴァはその後ろ姿を見届けた後、ティファを見る。

「情報収集、と言つても何を知る？」

「とりあえずは、ユウの関係者を探しましょ。彼の自宅の場所が分かれれば、グラ尔斯に戻る手掛かりが、見つかるかもしつれない」

「どういう事だ？」と問うシヴァに、ニヤリと笑みを作つたティフ

アは、答えた。

「ユウガ仕事で関わった内容の中に、他世界に干渉する方法に関係する何かがあるかもしないでしょ？だから、彼はグラルスに行けたのかもしないし。とりあえずは、資料探しよ」

酒場の中は薄暗く、酒の匂いが充満していた。

また、丸テーブルが均等に置かれた席には、その酒を飲む者が多く居り、それぞれが酒の席を楽しんでいた。

一階席を含め、そこら中から笑い声や怒鳴り声が上がり、グラスとグラスがぶつかるガラス音も多々聞こえる。

酒を浴びるように飲み、酔い潰れる者も、中には数人居た。シヴァ達四人はその中を歩き、カウンターへと向かっていた。だが不意に、クレアの腕が客に掴まれた。

「おいおい嬢ちゃん、頭のそりゃなんだ。バーチャルの真似事か？」

頬を赤くしてかなり酔っているであろう男は、気味の悪い笑みを浮かべながら言った。

彼の行動につられて、同じ席の男達もテーブル越しに身を乗り出す。

クレアはそれを無視し、男の手を振り解いた。

だが、男はしつこく詰め寄り、尚も腕を掴んで来る。

「連れないと猫ちゃんだなあ。どうだい？ これから俺とにゃんに

や　　ぶぐつ！？

刹那、クレアの爪先による蹴りが、男の頬に直撃した。

それにより、彼は勢い良く吹き飛び、隣の客を巻き込んで豪快にテーブルを引つ繰り返した。

地に着く轟音と、ガラスの破碎音が響き渡る。

一瞬、辺りは静まり返った。

動きが止まり、グラスを傾けていた者は、中身が零れていっても止まっている。

そんな中で、ネプチューンは肩を竦めて溜息をついた。

「なんだっちやあんたら。この村に来て、もう一度も時間止めちよるがな。わっちや知らんぞ」

言い終えたのと同時に、騒ぎが起つた。

吹き飛んだ男と同席の者達と、巻き込まれた者達がクレアに殴りかかつたのだ。

彼女はそれらの猛攻を上手く避けながら反撃し、一人ずつ襲い来る者を床に叩き伏せる。

千切つては投げ千切つては投げ、という言葉が似合つ光景だ。それを呆然と見ているシヴァとティファは、共に溜息をつき、顔を見合ひて頷く。

まるでアイコンタクトでもとつたかのように一人は歩き出し、カウンターへと向かった。

カウンター前に備わっている椅子に座つた一人は、もう一度溜息をつき、正面を見る。

すると、一度そこには黒いタキシードを着た店員と思わしき女が立つていた。

彼女は酒場に似合わないくらい若く、整つた顔立ちをしており、濃い青色の前が長い短髪から覗く目は、澄んだ水色だ。

その目の視線は、一人の後方で起きている騒ぎを見ている。

と、その時、酒場内の空気を震わす程の歓声が響き渡つた。

何事かとシヴァが振り向けば、クレアが多数の客に揉みくちゃにされながら、勝利を称えられていた。

どうやら、悪い騒ぎはすぐに治まつたようだ。変わりに、別の騒ぎが起きている訳だが。

その事に安堵したシヴァは、カウンターの方へと向き直し、店員の女に声を掛ける。

「内の者が失礼したな。是非とも、お詫びに向かさせていただきたい」

言いながら、頭を下げたシヴァに、彼女は慌てて否定の言葉を掛ける。

「いえいえ、謝らなくて結構ですよ。この店では、しじみちゅうある事です。……それにしてもお強いですね、彼女」

「あ、ああ、それが一つの取り柄みたいなものだからな、多分。つと、申し遅れた。私はシヴァだ。見ての通り旅の者だが、ちょっと聞きたい事があつてここに来た」

見ての通り、ですか？　と言いながら笑う店員の女は、小さく会釈した。

「それじゃあ私も自己紹介しますね。私はリリイ・ウラハスです。

ここは情報が集う酒場。何なりとお聞き下さい」

「ああ、それで　ん？　ウラハス？」

聞き覚えのある名に、シヴァは眉を潜めた。

それは、隣に居るティファも同じだ。

「……失礼だが、ユウ・ウラハスの家族か？ もしや妹か姉？」

問いかに、意地悪そうな笑みを見せたりリイは、首を左右に振つた。

「いいえ、私はユウの妻です」

第六十一話・先に来ていた男

雲一つ無い青空の下、活氣あるセイル村内で、少年少女は迷子になっていた。

初めて来た村で、所持金も無く、腹を空かしている一人は、どこに行くでも無くただ歩いていた。いつまで経つても鳴り止まない腹に嫌氣をさしつつ、シヴァを探す。

「カイイ～。こんなことなら、寄り道しなきゃよかつたねえ～……」

言いながらシルクは、先程寄った店の事を思い出す。

綺麗なシルバーアクセサリーが売られていた店。

その店先には、シルクが腕に付けている赤い腕輪に似た物が置かれていた為、つい足を止めてしまったのだ。だが、カイは笑顔で、シルクに返事をする。

「いや、シルクの所為じやねえよ。俺がそこで一緒になって足を止めなけりや良かつたんだ」

「はあ～……」

俯く一人の溜息が、虚しく地面に落ちる。

だが、そんな二人の前に、不意に人影が被つた。

誰かと思い顔を上げれば、そこには安堵の表情を見せるマクリの姿があった。

その事に一人は驚きの声を上げ、同じく安堵の表情となつた。

「良かったあ～、マクリさんに会えて。一時はどうなるかと思ったよ～」

「俺こそ、びっくりしたな。こきなり、君達が居なくなつたってシヴァが驚くんだから」

そう言つて笑い、一人を手招きした。

「さ、彼女達が待つてゐるから、急いでつか」

マクリは一人の返事を聞く前に歩き出し、一人をはその後に続く。宿屋を過ぎ、酒場を過ぎ、民家を過ぎてまだ歩く。次第に煙が見え始め、それさえも過ぎて行く。暫く歩くと村の端に近付き、そこでカイが問い合わせた。

「あの、マクリさん。もうすぐ村を出ちゃう感じだけど、シヴァ達は村を出ちましたのか？」

問いかね、まくろは答えない。

ただ歩くだけで、振り向きもしない。
やがて三人は村を出、鉱山の入口に差し掛かつた。
銀が取れるとして有名な鉱山も、どうやら昼時には誰一人居ないらしい。

故に、人気の無いその場所を見て、よつやくカイはマクリを疑つた。

「マクリさん。シヴァ達、ここに居ないよね？
「……当たり前だ。お前とあいつらを分散させるのが、目的だからな」

言いながら、マクリは振り向く。

同時に、顎に手を添え、爪を立てて一気に引つ張った。

すると彼の顔の表皮は簡単に剥がれ、その下には全く別の顔があ

つた。

ニヤリと、企みに満ちた笑み。

「まさか、こんなに上手くいくとはな」

「お前は確か、ヘルの仲間の！」

「ヘルの主人、フェンリルだ。覚えとけよ？　あの世でな！」

刹那、彼の服が中心から一気に裂ける。

その中からは、重火器を持つたフェンリルの手が伸び、カイに照準が向けられた。

突然の事にカイは一瞬、混乱した。

だが、咄嗟に真横にある岩肌に左手を押し付け、フラグメントを発動した。

行うは、岩肌から直接通じている、地盤の活性化。未来へ向かう時間の早送りは、地盤の動きを早め、揺れとなつて地上に伝わる。

同時に、その揺れは鉱山の入口に影響を及ぼえ、フェンリルの前を塞ぐようにして瓦礫が崩れ出した。

彼が内側に居たのは、ミスだったのだ。

それに救われたカイは、シルクの手を取つて来た道を戻るようにして走る。

「え！？　マクリさんどうしちゃったの！？」

「敵だった、あの人は敵だったんだ！　とにかく逃げるしかない！」

全く状況が掴めていないシルクに、最も簡単な情報を与え、一気に駆ける。

背後から聞こえるのは銃声。

同時に、二人の数歩後ろの土に穴が空き、土飛沫を上げている。止まれば死だ。

だが、不意にカイは思った。

このまま村に向かうと、村の人達を巻き込んでしまうんじゃないか、と。

「……！ シルク。先に行つて、シヴァ達を探してくれ！ 僕は、ここで食い止める！」

「そ、そんな！ むちゅ つー！」

驚くシルクの視線の先、土飛沫が目前へと迫っていた。だから、彼女は前へと出る。土飛沫の方へと。

「シル

」

「？ フオース・フィールド？！」

叫びながら、左腕の赤い腕輪に触れた右手を正面に翳す。すると、彼女の手を中心に光り輝く円形の、半透明なガラスの壁が出現した。

視覚に捉えれる程のそれは、土飛沫を起こす元である銃弾を防いだ。

いくつもの銃弾がガラスの壁に衝撃をうけ、しかし割れる事は無い。

魔術を防ぐそれは、魔力で構成された銃弾に反応し、着弾と同時に打ち消しているのだ。

もちろん、魔術の発動者である彼女は、銃弾が魔力で出来ている

事など知らないが。

「私も戦えるんだよ。魔術はまだまだ未熟だけど、それでも！」

途中、命中する銃弾の数が増えた。

見れば、正面からフェンリルが迫つて来ていた。
距離にして、約三十メートル。

彼はその距離を、両手に持つ重火器をフルに撃ちながら、走つて詰める。

だが、その時だ。

不意に、二人の横を駆け抜ける風があつた。

それは人影であり、俊足のそれはフェンリルの懷へと飛び込む。
刹那、二本の刃をフェンリル首目掛けて薙いだ。

彼はそれを、身体を反らす事で避けたが、重火器を真つ一二つに切断され、使い物にならなくなる。

「 チツ！ なんだこいつは！」

突然来たそれに向かつて大声で怒鳴りながら、バックステップで距離を取る。

彼の視線の先に居るのは、頭部に猫耳を生やした女、クレアが両手にダガーを持って立つていた。

そんな彼女を見て、カイはフェンリル以上に驚く。

「 ク、クレア！？ なんで助けに来れたんだ！？」

「 獣の勘よ。少し前から鳥肌が、いえ猫肌？ まあ、そんな感じのが総立ちだったの。で、銃声が聞こえたから何かと思えば、この有様よ」

ユウが来たかと思つたじやない、と文句を追加しながら、両手の

ダガーを構える。

正面に居るフェンリルを、睨むようにして見やつた。対するフェンリルは、口元に笑みを浮かべる。

「……なんだ、獣人を飼っていたのか」

「勘違いしてもらうと困るわ。私は飼われているんじゃないく、自分の意思で味方をしているの」

「つまりは、敵か。だが、残念な事に、お前やシングヴァーに対抗する装備じゃないんだよな」

言つて、拳の形にした両手を上げ、降参の意を示す。するとクレアは、嬉しそうに微笑を漏らした。

「随分とすんなり降参してくれたわね。何？ 素直に殺されてくれるの？」

「いいや、違うな。お前は俺を逃がす。そう、逃がす事になるんだよ」

告げるのと同時に、開かれた彼の手から、棒状の何かが落ちた。刹那、強烈な閃光と炸裂音が放たれ、その場に居た者の視覚と聴覚を同時に奪つた。

キーンッという音が三人の耳に響き、暫し頭を抱えさせる。

「なんだなんだなんなんだー！」
「何にも見えないよお～」

一瞬の出来事に戸惑うカイとシルクは、かなりパニックになつている。

しかし、クレアは冷静にそれが止むのを待ち、回復した視覚でフェンリルを探した。

だが、既にフェンリルの姿は無く、その場に残っているのは三人だけだった。

その事に肩を竦めるクレアは、振り向いて一人を見る。

「全く、苦労するのね、貴方達は」

言つて、苦笑。

対する一人は罰の悪そうな表情で、眉尻を下げた。
そんな一人を見てクレアは、とりあえずつと言ひながら歩き出す。

「シヴァ達の下に行きましょう。面白い出会いがあった訳だし」

彼女の台詞に、二人は顔を見合わせて小首を傾げる。
しかし、すぐに前へと向き直して、先に行くクレアの後を追つた。

第六十二話・仲間の白痴へ

「ええ！？ ノウのお嫁さん！？ つとど、おわあ！」

驚き、勢い余って手に持っていたコップの中身を零してしまったカイは、カウンター上に広がった水を慌てて拭きだした。

服の裾で。

それを見たシヴァは拳を彼の頭部に落とし、罰を下しておく。

「少しば落ち着かぬか、馬鹿者。ノウとて既に青年。配偶者の一人や一人、居てもおかしくはないだろ？」

「シヴァちゃん、一人だなんて普通じゃないよ……。にしてもお嫁さんかあ。なんか、羨ましいなあ……」

両手の平を合わせて、目を輝かせているシルクは、カウンターの向い側に立つリリイを羨ましそうに見ていた。

対するリリイは、どう答えれば良いのか分からず、ただ微笑を浮かべているだけとなつていて。

今、一行は酒場に集合していた。

とつくに沈静化していた騒ぎの対象となつたクレアは、丸テーブルの客席にてネプチューンに注がれる酒を飲んでおり、頬が赤くなつて大分酔つっている様子だ。

残る四人は、全員がカウンター席にて、端からティファ、シヴァ、カイ、シルクという順で座つていた。

ちなみに彼らは飲むのは、純正の真水だ。

唯一、酒を飲んでいるのはクレアとネプチューンだけである。

「それでだ、リリイさん。話を続けるが、この村にあるつていうコウの自宅に案内してもらつても良いか？」

「さん付けで呼ばないのであれば、もちろん良いですよ。どうせまだ帰つて来ないでしょうし。ですが……」

「ですが？」

「あの人は貴方達と出会い、別れる時、どこへ行くと言つていましたか？」

問いかに、シヴァは一瞬、言葉を詰まらせた。

理由は簡単。

彼女は、リリイに自分達が他世界から来た者だと伝えていないからだ。

自分達は旅の者で、その途中に出会ったユウに再度会つ為、手掛けりを探している。

そんな、嘘の理由を伝えていた。

もちろん、他世界などそう簡単に信じられる物では無いと分かっているからこそ、言葉なのである。

だからこそ、シヴァは言つ。

更なる嘘を。いつか真実を明かす事になるであろう嘘を。

「仕事を、仕事を続けると言つていた。だから、手掛けりとなりそうな仕事の資料を、自宅で探させてもらいたいのだ」

「そう、ですか……。分かりました。それでは、ちょっと準備してきますね。出来次第、ユウの自宅に向かいましょう」

「店の方は良いのか？」

「ええ、大丈夫です。他の従業員も居る訳ですし、問題はありませんよ」

それじゃあまた後で、と告げたリリイはカウンターの奥へと姿を消し、残つた四人は顔を見合せた。

安堵の吐息を揃つて一つずつし、水を一口飲んだティファアが口を開く。

「……ここからが、本番ね。数多くか、もしくは数少ない資料を隅々まで読み、他世界干渉に関する資料を見つける。それでもし、無かつた場合は、」

「振り出しに戻っちゃうんだね。その時は、何か策があるの？ しょーー」

「あると言えばある、無いと言えば無い。そんな状態ね。でも、今はユウの血元に手掛けりがある事を祈りましょう」

苦笑混じりの言葉に、他の三人は浅く、カイは数回頷いた。
そして待つ事、数分。

タキシード姿からフリル付きのロングスカートを胸元まで上げた姿で現れたリリイに案内され、酒場を後にした。

向かった先は村の端にある大きな二階建ての一軒家。

そこはリリイがユウと共に暮らしている場所であり、文字通りウラハス家である。

一行はその中へと、案内されるままに入つて行つた。

ぞろぞろと、列を成して廊下を歩く一行は、リリイを先頭にして二階へと到着した。

続いて奥へと歩いて行くと、一つの戸に行き着く。

ここが夫の部屋です、と言いながらリリイは戸を開け、中に全員を案内した。

中は八畳程のスペースがある書斎で、天井まで届く大きな本棚が幾つも壁に沿つて置かれていた。

中央に置かれたデスク上には数冊の本が置かれているだけで、他には何も無い、図書室と呼んでも良い空間である。

ネプチューンはその光景を見て、思わず言葉が零れる。

「こ、こんの中から資料を探すんかいな……。何日掛かるか分かつたもんじゃないつちや……」

同時、溜息が漏れる。

だが、その言葉に、予想外の返答が返つて来た。

「いいえ、ここにはお探しの資料は無いと思いますよ

言つたのはリリイ。

彼女はそう言つた後、並んでいる本棚の前に立ち、端を掴んだ。次いで、軽く引いたその瞬間。

大きな本棚は、まるで重さが無いかのようだ、軽々と無音で床をスライドして、元あつた位置からずれた。

その光景に驚く一行はしかし、本棚の向こうに見えた下りの階段を視界に捉えた。

微かな光を放つ照明に照らされたその階段を、リリイが先に降りていく。

一行もその後を追うように、階段を降りて行つた。

果たして、彼らの目に映つたのは、上の書斎よりも広い、窓の無い部屋だった。

北と階段のある西の壁際には、無機質な色をしたミニサイズのロッカーが敷き詰められており、蓋が透明なそれは中の物が容易に確認出来る仕様となつていて。

また、南の壁際にはまるで牢屋のようなロッカーに、幾つもの重火器が収納されていた。

長く細い物、短く太い物、人の手に収まる程の物など。

それらを隔てる網状の蓋には南京錠が結び付けてあり、容易に開く事は出来ないようになっている。

まるで、誰にも使わせないようだ。

最後、東の壁際にある机の上には、一つの電子端末が置かれていた。

正方形の、薄い板のようなそれへと、リリイは近づいて行く。

「重要な情報は、この端末に収められていると思います。また、このロッカーに入っている資料は、端末内の内容とほぼ同じの筈です」

言いながら、彼女は端末の電源を入れ、数多くのキーが埋め込まれたボードを操作する。

カタカタカタ、と鳴る音は室内に響き、それに興味を持ったシヴァ、カイ、シルクの三人は、後ろから覗き込むようにして電子端末を見た。

画面の中に流れるのは、数多の記号。

だが、それが何の作業なのか到底分からぬ彼らは、ただ無言でキーを打ち、鳴らす。

「ちなみにネプチューンさん。それらを見るのは構いませんが、触らないようにして下さいね」

不意に、顔どころか視線さえも変えずに言ったリリイの言葉は、重火器の入ったロッカー内に人差し指を差し込もうとしていたネプチューンに放たれたものだつた。

すると彼は、両手の平を高々と上げて、触らないという意思表示を見せた。

隣に居たクレアも、一応として同じ動作をする。

それが作業中のリリイに見えているのか見えていないのかは分か

らないうが、彼女は無言で頷いてみせ、微笑を浮かべた。

などとしている間にも画面内の記号は流れ、最後に「Log in?」という文字が残った。

彼女はそれを、何の躊躇も無しにEnterキーを押し、Loginなる動作を実行する。

刹那、画面内に出て来たのは無数の文字。

そして、同時に新たなウインドウで出現したのは、それぞれが名前の違う幾つものファイルだった。

リリイはそれを見て、安堵の吐息を漏らす。

「……これです。これらが、ロッカー内に入っている資料をデータ化した物です。ちなみに、名前の横にある記号が、同じ記号のあるロッカーに入っている資料となります」

説明をしながら彼女は振り向き、ロッカーの方へと指差した。その指の先には、既に資料に田を通しているティファの姿があった。

「彼女が開いたのは? W - 5? のロッカー。」

だが、開いたロッカーなど関係無く、リリイは指示を出した。

「私はこれから、皆さんの提示するキーワードを使って、資料内に検索をかけます。それに関連したワードが含まれている資料を発見した時、記号をお知らせいたしますので、資料の方を取り出して下さい」

「ほう、つまり風漬しを探すよりも、少しば手間が省けるという事か。分かった。皆、早速作業に取り掛かるぞ!」

「それで、早速ですが最初のキーワードは?」

「そうだな……? 他世界? という言葉の入った資料を探してくれ」

「他世界ですか? と独り言のようになじみなくリリイは頷き、キーを打

ち始めた。

かくして、膨大な量の資料の中から、特定の情報を探し求める作業が始まった。

それは終わりが明確では無い作業だが、彼らは行動する。ただただ、元の世界へと戻る術を探す為に。

第六十四話・潜入調査依頼

資料探しの作業は、既に一時間経過していた。

その間に彼らは関連する資料とそうでない資料を大まかに仕分ける作業を終え、今はその中から更に関係する資料を探しているところだ。

電子端末を操作していたリリィもまた、実物の資料に目を通している。

彼らが探すキーワードは、？他世界？と追加で？極秘任務？？潜入？の三つだ。

最後の一つである？潜入？はカイ曰く、出会ったばかりの頃にコウガ、施設に潜入していたと言っていたのを思い出したからだそうだ。

それにより、目標はかなり絞る事が出来るが、それでも資料は多い。

と、その時だ。

不意にティファアが声を上げ、近くに居たシヴァアを呼んだ。

「これ、どうかしら？ ほら、未完任務扱いになってるし」

「未完任務？…………しました、その手があつたか！ 今まで極稀に未完任務があつたが、その全てに報告書があつた。しかし――」

「この資料には報告書が無い。つまりは、報告さえも出来ていない。だつて、この世界から居なくなつたから……」

その結論に至つた一人は、大きく溜息をつき、膝から崩れて床に両手をついた。

床に散乱した資料が音を立てて舞い、皆の視線を集めることになる。

「盲点だった。何をやつてたんだろうな、私達は……。 皆、作

業中止だ！ それしき資料を見つけたぞ！」

簡単に見つけられたであろう方法は、敢えて言わないでおこうと内心で固く決意したシヴァは、身体を起こして皆を一瞥する。

ティファも同じく起き上がり、手元の資料に目を落とした。

任務名は、北部廃墟都市周辺における不審な動きの調査と施設の発見、と書かれている。

そして、名の左側にある任務完了印と書かれている枠には印が無く、未完である事を表していた。

内容をシヴァが読み上げる。

近日、エニグマ戦争時にエニグマから襲撃を受け、廃墟となつた北部の都市周辺にて、所属不明の武装部隊が確認されたとの事。しかし、都市の周囲は荒野となつていて、偵察部隊の接近が出来ずになっている。

そこで、潜入と暗殺に関して好評のあるコウ・ウラハスに任務をお願いしたく、連絡させていただいた。

依頼する任務概要はこうだ。

潜入までの方法は全てそちらに任せると、潜入に成功した後は手順通りに事を進めて貰いたい。

まずは都市内に展開している部隊の数と配置を確認。

次いで、使用中の施設を見つけ次第、内部にて施設の使用目的を探つて貰いたい。

その中で、もし目的が驚異的な物であり、相手が少人数だった場合は、抹殺を願う。

なお、我々の偵察部隊による遠距離からの調査では、化学実験棟にて一定の間隔で閃光が起きているそうだ。

我々の推測では、兵器を開発しているのではないかと読んでいるが、真相は定かではない。

だからこそ、ユウ・ウラハスに任務遂行をお願いしたい。
良い返事を待つ。？承諾？

資料は、ここまでだつた。

最後にある承諾印は、依頼を受けた証である。つまりこれは、探していいた資料である事がほぼ確実という事になる。

一通り頭に入れた皆は、顎に手を添えたり腕を組んだりと、それぞれの動作を行う。

数分経ち、ジヴァが組んでいた腕を解いて口を開いた。

「決まりだな。私達はこれから、その廃墟都市に向かう。異論は無いな？」

問いかに、全員が頷いた。

次いでシヴァも、彼らの反応を見て頷く。

そして、リリイの方へと向いた。

「そういう訳だ。私達はこれから、ユウの手がかりとなる場所へと向かう。協力、ありがとう」

「あ、そういう事でしたら」

言つリリイは、思いついたかのよつて書斎机に向かい、引き出しへ引いた。

その中にはスイッチがあり、彼女はそれを押す。

すると彼女の背後にあつた壁がスライドし、通路が現れた。

それを見てカイは、スゲー！ 男の浪漫だー！ と騒いでおり、

その様子にリリイは微笑みつつ、皆を奥へと案内する。

短い通路を抜け、出た先は格納庫だった。

また、その中央には機体が一機、置かれている。

カイとシルク、ネプチューンにクレアは、それを見て一斉に声を上げた。

「「ユウが乗つてた奴だ！」」「まさかのアサルト！」

「あ、知つてましたか。説明する手間が省けましたね」

「いや待て、私だけ蚊帳の外だ。なんだこれは？」

焦りながら問い合わせるシヴァは、横から説明しようとするカイに片手で断りを入れる。

対してリリイは、片手の平でアサルトを指しながら、説明を始めた。

「これは、汎用航空機？アサルト？です。近年、民間技術会社が発表したもので、空を飛ぶ事が出来る乗り物です。まだ流通はないので、見た事の無い人が居て当然ですね」

「そのようなものが、何故ここに？」

「前にユウが、これを開発した民間技術会社の依頼を受けた際、報酬として金銭の代わりに預いて来たそうです」

格納庫は空だったので、ここに置いてあるんです、とリリイは付け加える。

対し、シヴァはその説明で納得したのか一、三頃いてアサルトを見据える。

アサルトの大きさはかなりのもので、シヴァ達が見上げる程の物だった。

グラルスにてネブチューンやクレアが乗ったアサルトよりも、大きな物だ。

形は、大まかに言えば三角形で、表面は銀色のフォルムが前方から後方にかけて、滑らかな曲線を描いている。

後部には板状のハッチが斜めに降りて来ており、そこが搭乗口となっている。

「これで向かえと言うのか。移動が楽になりそうだな。何から何ま

ですまい、感謝する」

「いえいえ、お気になさらずに。その代わり、私も連れていくて下さい。多分、この中で操縦出来るのは、私だけだと思うので」

一瞬、シヴァは戸惑つた。

だが、考える暇も無く、ネプチューンの声が放たれる。

「良いんじやないかつちや？ 危険を顧みず、夫を迎えて行く妻つてのは、素敵ぜよ」

「あんたが素敵って言つと、鳥肌が立つわね」

「あんさんの場合、獣肌ちやうん？」

「猫肌よ。じゃなくて、私は一応人間つ」

敢えて漫才は無視した。

しかし、シヴァはネプチューンの前半の言葉を聞いて、答えを出した。

それは、頷きであり、

「それでは、よろしく頼む。リリイ・ウラハス」

同行許可の言葉だった。

リリイが自宅の戸締りをしに書斎を出た頃。

カイ達一行は書斎内に散らばった資料を片付けていた。

そして、その作業が終盤に差し掛かった頃、ティファが唐突に一つの提案を出した。

「ねえ。私、この世界で見てきたい所があるから、アサルトを借りても良いかしら？」

その突然の言葉に、資料を整えていたシヴァが驚いた表情で顔を上げる。

どうしたのだ、急に。

ティファの中で、無言の彼女がそう言つたよつて思えた。だから彼女は、その訳を言う。

「ここから南西に向かつた方角に、キルバスという村があるの。私の故郷よ。もう、壊滅していて誰も住んでいないけど、最後に見ておきたくて」

でも、

「その村に行くには、山を越えなければいけないの。だから、空を飛べるアサルトを貸して欲しい……！」

「……むう。納得はいくが、如何せん私達の移動手段がな。私達も、急がなくてはいけない。……リリイに相談してみるか」

「そこで断らないシヴァちゃんさつすが！」

称賛するシルクは、両手を挙げて喜んだ。

シヴァはそんな彼女を見て照れ臭くなりつつ、作業を再開しつつリリイが来るのを待つ。

作業が完了して暫くし、戻つて來たりリリイに事の説明をすると、分かりましたと答えた。

「でしたら、キルバス村に向かわない人達は、裏手に停めてある車を提供します。運転方法は覚えれば簡単ですよ。ご案内します」

言いながら階段に足を掛けたりリリイに、カイとシルクがついてい

つた。

そしてシヴァは、ティファと向かい合つて微笑する。

「何の用かは聞かんが、早めに終わらせて合流するのだぞ？」

「分かつてゐるわよ。大丈夫、すぐに終わるわ」

ハイタッチの音が響く。

次いで、シヴァはアサルトを見上げてゐるネプチューンとクレアを見据えた。

「お前達はどうするのだ？　まだそこで居るという事は」

「ん。わっちらはティファについて行くっちゃ」

「私も、カイを守る前にコウの妻を優先するわ」

告げ、彼らはまたアサルトに視線を戻した。

それを見てシヴァは踵を返し、リリィの後について行く。

四人の姿が見えなくなり、暫くして。

アサルトを見上げていたネプチューンは踵を返し、ティファの下へ歩み寄った。

口の端を吊り上げ、企みのある笑みを見せながら。

「シヴァ達は氣を遣つてか理由は聞かんかったけど、残念ながらわっちは自分優先主義の商人だつちや。……何しに行くんぜよ？」

「ただの、里帰りよ。それと、私の所為で滅んだのだから、直接謝罪にね」

苦笑と共にやや俯き加減になるティファにネプチューンは、分かつたぜよつと言つて、それ以上は何も言わなかつた。

そして、彼はクレアの方へと早歩きで近寄る。

「クレア、先にアサルトん中入つて、色々イジくるわやー。」
「いや、それはさすがにマズイでしょ。つていうら、待ちなさいって！」

騒ぎ、揉みくちゃになる一人。
その光景を見て、ティファは思わず笑みを溢した。
平和ね、と呟いて。

第六十五話・襲撃者、再び

村から離れた、辺り一面が荒野である場所を一台のトラックが走っていた。

大量の砂を巻き上げ、エンジン音を響かせるそれには、三人の搭乗者がいた。

ハンドルを握つて運転をするシヴァーと、隣の助手席にシルク、そして後部座席には一人の間から顔を出すカイが乗つている。シヴァーはやや緊張気味に、反対にカイとシルクは楽しそうな笑い声を上げていた。

「ま、まさか」のような物があるとは……。地上の移動手段は馬車だけかと思っていた」

「確かに、昔は主燃料となつていて液体燃料が必要な乗り物だつて言つてたね。今は燃料が取れないから、誰も乗らなくなつたとか」

「まあ、それよりも驚いたのは、記憶石という物が賢石の代わりとなつている事だな」

「俺が驚いたのは、先生がこれをもう乗りこなしているってことだぜ」

グッと親指を突き出すカイは無視された。

現在、彼らはティファ達と別行動で、廃墟都市へと向かっていた。その際、道を分からないとシヴァーが言つたのだが、ひたすら北を目指せば着くと言われた為、案内役は乗つていない。

たつた三人で、というのは心もとなかったが、できるところまで接近し、危なくなつたらすぐに撤退する、という作戦を立てていた。

「にしても、どこまでも続くなあ、荒野。景色に変わり栄えが無くつてつまんねえよー」

駄々を捏ねるカイは、周りを見渡す。

しかし、視界に入るのはほとんど何も無い荒れた大地だけだ。また、シルクも彼に便乗して見渡すが、何も無い。

だがその時、彼女は景色の変化に気付いた。

トラックの進行先、荒野の果てに巨大な建造物の群が見える。廃墟都市が見えて来たのだ。

「シヴァちゃんシヴァちゃん！ 目的地が見えてき 」

刹那、車内に衝撃が起きる。

同時にシヴァが掴むハンドルが大きく揺れ、コントロールが困難になった。

彼女はそれを必死で制御しようとすると、一度目の衝撃が起ると車体は向きを大きく変え、横に滑つて傾く。

「お前らー、座席にしつかり掴まれ！」

指令を出す大声が聞こえた後、車体は傾き続け、そして横転した。金属の軋む音と轟音、ガラスの破碎音が響き、土埃が巻き上がる。倒れてもなお、勢い任せに滑るトラックは、数メートル滑つたところでやっと停止する。

横向きに倒れた上体の車体は破損が酷く、また原因になつたと思われるタイヤは破裂していた。

しかし、三人が乗つっていた内部からは光が漏れており、それはシリクによる魔術をクッショーン代わりにした結果だ。

通常、魔術や魔力で構成された物質のみを防ぐ事が出来る？フォース・フィールド？だが、彼女が今回発動したそれは、ティファオリジナルのものである。

高濃度の防衛フィールドを構築するのと同時に、周囲に付着性の

ある魔力を放出する事によって、無理矢理魔力に干渉している状態にし、防がせるという方法だ。

欠点としては、打ち消すのでは無く防ぐだけであり、また消費魔力量がかなりの量である為に、連續して使用は出来ない。

だが、現状は使うべきだとシルクは判断し、発動した。

ともあれ、それにより傷一つ負わなかつた三人は、魔術の発動が切れたのと同時に車内から這い出て、外へと出る。

刹那、

「 ッ！？ 伏せろ！」

シヴァアが言葉を放つたのと同時、抜刀した刃に衝撃が当たる。キンッと金属同士が当たる音が聞こえ、数刻差で銃声が響く。音の遅れからして、数キロメートルは離れているだろう。

三人は咄嗟に横転していつトラックの下側に当たる場所を背に隠れる。

しかし、銃声は止まらない。

次々と放たれる銃弾は、全てトラックに直撃し、金属音を響かせる。

まるでトラックを穿とうとしているかのようだ。

「 な、ななんなんだあーーー！」

「 奇襲だ、馬鹿者！ 急いで武器を準備しろー！」

命令通り、カイは武器を組み立てる。

完成したのは、一本の両剣。

それを構え、戦闘の覚悟を決める。

「 相手、誰だか分かる？」

辺りを見渡しながら問うシルクに、シヴァアは少し考え、答える。

「フェンリルとかいう男も有り得るが、この世界には銃が山ほどあるからな。断定出来ないのが残念だ」

そう言つた瞬間、シヴァはふと何かに気付いた。

意識を何かに集中し、後方へと振り向く。

「風が、動く……右だ、来るぞ！」

同時、それが来た。

トラックの前方側から飛び出して来たのは、人影。
その人影は両手に短機関銃を持っており、銃弾が放たれた。
だが、一足早くシルクが発動した？フォース・フィールド？がそれを防ぎ、打ち消す。

次いで、銃撃が止むのを見計らつて彼女の横から飛び出したカイは、両剣を構えながら一気に接近した。

再装填は、間に合わない。

そして、二人は激突する。

「おわあ、ヘルか！」

「御機嫌よう、カイ・エディフィス。決着のお時間です」

カイが振り下ろした刃は、クロスした短機関銃により防がれ、鎧迫り合いに似た状態となる。

そのまま硬直が続くと思われたその状況は、しかしシヴァの蹴りで終わる。

右腕に蹴りを入れられたカイは横に吹っ飛び、刹那、頬を銃弾が掠つた。

表情が青ざめる。

だが身体を捻り、受身を取つてすぐに立て直し、シヴァの剣戟を

紙一重で避けるヘルへと迎撃行動に移つた。

一方、二対一は分が悪いと踏んだヘルはバックステップで後退し、距離をとった。

同時、廃墟都市の方角へとハンドサインを送ると、身構え長剣を振つたシヴァ目掛けて銃弾が放たれた。

今度は連續して放たれるそれをシヴァは全て叩き斬り、トラックの影へと退避する。

カイも同様に一時退避し、ヘルと睨み合いとなつた。

「フェンリルが厄介だね」「フェンリルが厄介だな」

言葉の重なつた二人はアイコンタクトを取り、武器を改めて身構える。

一方、ヘルは短機関銃が破損している事に気付き、投げ捨て、新たな武器を取り出した。

それは、侍女服の背に隠されていたであろう物で、大きめの機関銃だった。

黒光りしたそれはゴツゴツとしており、側面からは銃弾の束が飛び出していた。

また、その束はヘルの袖から出ている為、残り弾数は他人に把握出来ないようになつていて。

新たに出された武器を見てギョツとしたシルクは、大急ぎで？フォース・フィールド？を開く。

ほぼ同時、銃弾の雨が来た。

先程よりも耳に響く重い銃声に、障壁に対する負荷が目立つ銃撃。明らかに、魔術は長続きしない様子だった。

「お、重いよこれ！ 魔力がどんどん持つてかれちゃう！」

「後、どれくらい持つ！？」

「もう……無理！ 解ける！」

叫んだその時だ。

不意に、カイが前に飛び出して來た。

片手には鉄板を持っており、それを盾にしている。彼が持つ鉄板には着弾音が絶えず響き、しかし貫かれはしない。

その理由は、彼がフラグメントを発動しているからであり、

「トラックの後ろ、扉が脆かつたから持つて來た！ 時間を戻し続ければ、無敵の盾だぜい！」

疲れるけど！ と言い残し、カイはヘルの下へと突進して行つた。銃弾が鉄板をへこませ、しかし鉄板自身の時間はすぐに戻つて平らになる。

破壊と再生が瞬時に行われる中で、気合の叫び声を上げるカイは、疾走する。

対し、接近する鉄板を見るヘルは、後退し距離を取るつとするが、機関銃を撃つているが為に姿勢を安定させなければならず、故に素早く動けない。

反動の大きい機関銃は、撃つだけで手元がブレる為、固定が必要だからだ。

距離は縮む。

だからヘルは決断し、機関銃を投げ捨てた。

そして足を一旦縮めて、フロントキックを鉄板にぶち込む。鉄の^{ひしゃ}拉げる音が聞こえ、同時にカイの叫びが上がる。

「おわああああああああ！ びっくりしたマジで！」

驚くカイはすぐに鉄板から手を離し、スピンをかけながら左へと飛び出して右手の剣を打ち込もうとする。

ヘルの目は鉄板へと向いている為、不意打ちとなる筈だった。

しかし、彼女の右袖から飛び出した短剣に、その一撃は防がれる。

金属音が響き、視線が交差する。

「自動人形の視界を舐めてもらつては困ります」

「なんだよ、耳も目なのか、すげえな！」

違います、という言葉と同時に右足が上がり、カイの武器に絡むようにして振り下ろした。

次いで右袖を離し、そのまま両剣を地面上に叩き落す。

両剣の先端が下に、後端が上となつた。

その動きに引かれるように、カイは前屈みになり、思わずあつと間抜けな声をしてしまつた。

刹那、両剣に載つていたヘルの足が、カイの腹部を直撃した。

モロに入つた、とヘルは判断した。

その判断通り、蹴りを食らつたカイは武器を手放して後方へと吹つ飛ぶ。

ヘルが抑えている為に放さざるを得なかつた両剣を、彼女は一警し、カイとは正反対の位置に蹴り飛ばす。

そして、後ろ腰の位置から右手で短機関銃を取り出し、銃口をカイに向ける。

「チェックメイトです。カイ・エディフィスは一度死ぬ、良い響きじゃないですか」

「ま、まだ一度も死んでねえし……まだ死なねえ、よ」

咽ながら喋るカイを見据え、これ以上の会話は無駄だとしたヘル

は、引き金に指を掛け 短機関銃が破碎した。

「 つ！？」

突然の事に驚きつつ、周囲を見渡せばトライスクの、先程までカイ達が居た場所には誰も居ないが、しかし空気が歪んでいる。

そこには、確実に何かがあつて、故に左手で取り出した短機関銃を構え、銃撃する。

すると確かに空間は揺れ、大きくなつた歪みが薄れると、そこにはシルクと、

「 大量の手書き魔法陣ですか！？」

言葉と共に、それが来た。

放たれるのは、無数の光の矢。

高速で放たれるそれらは、一直線にヘルへと飛翔し、回避行動を行おうとする彼女を襲う。

スピンドルやサイドステップを使い、紙一重で避けていくが、しかし確実に光の矢は、少しづつ彼女を穿っていく。

侍女服が破れ、肌が裂け、鮮血が舞い、火花が散る。

そうなりながらも、彼女は短機関銃で銃弾をばら撒き、手書きの魔法陣を破壊していく。

シルクを狙わなかつたのは、単に防御魔術が彼女に集中して展開されていたからである。

回避と銃撃の末、シルクの魔法陣は全滅し、ヘルは負傷した。

衣服はボロボロになり、左腕は半壊し、だが頭部はほぼ無傷だ。

回避運動の際、短機関銃を右手に持ち替え、左腕を頭部の防御に回した結果である。

関節から先が穴だらけになり、一の腕も三箇所程抉れたり擦り傷になつてゐる。

左腕を失つたが、頭部を守れたのは上出来だと、彼女は判断した。

そして、シルクと会話をしているカイを見据えた。

「びっくりしたぞ、シルク！ いつの間にあんな凄い技を覚えたんだ！？」

「前に馬車の中で、しそょーに教えてもらつたんだよ。手書きは時間かかるし、作成中は隙が多いけどね」

「故の光学迷彩式の魔術を使つた訳ですか」

問いに、シルクは親指を突き立てて笑顔を見せた。

……敵にそのような表情を送るのは余裕だからか、それともマイペースだから明確な敵意を持つていないのでしょうか。

我ながら可笑しな思考だと、ヘルは内心で呟く。

しかし、彼女から見たカイ達は、今まで見た事の無い変な集団と認識している為、無理も無いだろう。

ただ、確実に思う事は。

……面倒な相手です。

味方であればどれだけ頼もしいものかと考えるが、生憎敵だ。だから彼女は、全力で相対する。

「出し惜しみは無しの状況だと、そう判断します……！」

言いながら、ヘルは動いた。

侍女服の縁を掴み、一気に剥ぎ取る。
一回戦目が始まった。

第六十六話・見せ付けられる強わ

シヴァアは、荒野を疾走していた。

ただ一点だけを見据え、鞘に収めた長剣の柄に手を添えながら。先程まであった銃撃は止み、今は静かだった。

何か策があるのかと思いながら、まっすぐに廃墟都市へと向かう。そこには必ず、銃弾を放ってきたフェンリルが居ると予想して、だ。

……カイやシルクは無事だろうか。

彼女が心配するのは後方、横転したトラックで起きている戦闘だ。カイが鉄板による防御を行つた際、シルクが視覚妨害の魔術を発動したと言つた為、彼女の勧めでシヴァアはトラックを飛び越え、フェンリル撃退に向かつたのだ。

一対一ならば問題無いとは思つが、それでも彼女は心配で仕方ない。

いくら戦う力があつたとて、彼らはシヴァアにとつて生徒なのだから。

そこまで考えて、かぶりを振る。
思考を中断し、索敵に集中する。

刹那、

「 つ！」

銃弾が来た。

空気の壁を無理矢理破りながら、音速をもつてシヴァアへと一直線に向かう。

その位置とタイミングを空気振動から読み取り、彼女は抜刀した。同時に、金属音は響き、銃弾が真つ二つとなつて地面に落ちる。彼女はただ、感覚を研ぎ澄ませる。

風を司る能力は集中する事によつて空気の振動を読み取る事が出

来、発砲と銃弾の移動によつて起きる空氣振動を感じ取る事が出来る。

感じ取るのは、音では無く感覚がリンクした空氣であるが為に、銃弾本体と音の間における時間差という概念は無い。

その範囲は障害物が無い現状では数キロメートル先まで届き、故に分かる。

それが、銃弾を叩き斬る事が出来る理由だ。

彼女はその方法を生かし、神懸りな反射神経で次々と銃弾を叩き斬つて行く。

長剣を振るう度に金属音が響き、しかし彼女には傷一つつかない。廃墟都市まで、後五百メートル。

一分以内に接敵だ。

その時不意に、銃撃が止んだ。

代わりに生まれるのは、一秒間に数十回といつ異常な量の空氣振動。

来るのは、大量の銃弾だ。

シヴァーはそれを、右前に向かつて前転し、次いで左足に力を入れて右に跳躍。

着地と同時に軽くクラウチングの体勢を取り、再び疾走する。

銃弾の雨は止まないが、初弾の数百発と比べると精度は落ちている為、回避運動は容易だった。

彼女だからこそ、だが。

「伊達に元・切り込み隊長の名は持つておらんわ！」

叫び、自らの士気を高め、走る。

戦争を思い出すな、と内心で呟きながら、ひたすら突き進む。

その時。

明らかに、今までとは違う質量の銃弾が飛来している事に気付き、しかし回避は間に合わず斬撃をぶち込むと、

「しまつ　！」

銃弾が爆碎した。

複雑な構造をしている廃墟都市の一角。

都市入口近くにある観測室内に、口笛が響き渡った。

そこには大量の散らばった薬莢と空気中を漂う硝煙が舞つており、開いている窓際には匍匐体勢のフェンリルが居た。

彼は先程まで撃っていた固定式の重機関銃を止め、片手で担いでいるRPG-7（携帯式対戦車擲弾発射筒）を放り投げた。金属が床に激突する喧しい音が聞こえ、一瞬眉を顰める。だが、RPG-7の事など気にせず、彼は手元の望遠鏡を覗き込んだ。

視線の先には黒い爆煙が漂つており、標的の姿は無い。

先程の爆発は確実にシヴァを巻き込んだと、そう確信する。しかし、次の瞬間。

爆煙の中から、煙に巻かれた人影が飛び出して来た。シヴァだ。

超至近距離で爆発を受けた筈の彼女は、無傷だった。それどころか、着ているスーツさえも無傷だ。

「なんだあいつ！？　無敵かよ、クソッ！」

悪態を吐き捨てながら、重機関銃の引き金を再度引く。連続した轟音と、飛び散る薬莢の音が室内に響く。だが、狙つた先の標的には、当たる気配など無い。

その事にフェンリルは舌打ちし、また舌打ちし、苛立つ。ふざけるな、と内心で何度も連呼し、引き金に掛かっている指により力が入る。

「任務失敗はしたくねえ。そう、もう失敗なんかしたくねえんだ……！」

誓ったんだ、先生と！ と押し殺した声で叫び、引き金から指を離す。

即座に立ち上がり、壁際に置かれたガンキャビネットを開き、いくつかの銃器を取り出して身に付ける。

最後に、床に置かれた狙撃銃を拾い上げ、窓の外を見る。

ここからの迎撃はもう無理だとそう判断し、彼は次の行動に移つた。

大量の銃器を見に付けた彼は、部屋を後にする。もう、逃げ戦はしないと決めて、次の戦場へ。

廃墟都市の中は、荒れ果てていた。

窓ガラスは一つ残らず碎け散り、木製の物は腐り、鉄製の物は錆びてボロボロになり、所々の壁には爪痕や大穴が残されていた。

何十年も放置されていたこの場所は、戦争の被害を訪れた者に見せつける。

それはシヴァに対しても例外では無く、彼女は眉を顰めて周囲を見渡しながら走る。

……ここまでくると、この光景は惨いものだな。

思い、目を瞑つて黙祷する。

多くの者の魂が眠る場所に無断で入った事に対して謝罪し、ヒヒで戦闘を行う事に対しても先に詫びて。

そして、正面を向いて長剣を薙ぐ。

同時、金属音が響き渡った。

銃弾を斬つたのだ。

それが来たのは、十時の方向。

彼女はその方向へと加速した。

行く先にあるのは雑貨屋だ。

かなりの広さを持ち、棚が大量に並べられた店舗へと、シヴァは突入する。

刹那、連続した空気振動が起こり、銃弾が彼女を襲う。

それに対し彼女は、斬りと回避を器用に使い分け、確実に発砲者へと迫つた。

店の奥、カウンターに居るのは、フエンリルだ。

彼は両手に短機関銃を構え、叫ぶ。

「よく来たシヴァ！ 是非、手合させを願いたい！
「今回は逃げ無しなら、その願い……受けてやる！」

言葉が交差した瞬間、金属音が響く。

それは短機関銃の用心金トリガーガードと長剣が鍔迫り合いになつた音だ。

両者、一步も譲る事無く、力を込めて耐える。

睨み合いになり、そして言葉が交わされる。

「全く、本当のところ私達はお前方にかまつてている暇は無いというのに」

「残念ながら、俺は契約上お前達にかまつてないといけないんだ。ここで果てる覚悟で、全力でな！」

言葉と共にフエンリルは足を振り上げ、長剣の柄を狙う。

だが、その一撃は長剣をずらす事によつて避けられ、空を切つた。舌打ちが鳴り、瞬時に足を振り下ろす。

踵落としが再度柄を狙うが、シヴァアはバックステップで回避した。同時、短機関銃が構えられる。

引き金に掛かる指に力が入り、発砲される瞬間。

シヴァアは左へと素早く跳躍し、回避と同時に棚を蹴り倒した。

大量の雑貨がばら撒かれ、フェンリルに降り注ぐ。

刹那、棚と雑貨を一閃が真つ二つにする。

シヴァアが、死角から長剣を薙いだのだ。

だが、フェンリルはそれを身体を仰け反らせる事で避け、後方へと跳躍した。

鼻頭に出来た傷の血を拭い、シヴァアを睨む。

二人の間に、真つ二つになつた棚と雑貨が派手な音を立て、数年分の埃を巻き上げる。

それは視界を遮る煙となり、しかしシヴァアは迷わず突っ込んだ。埃の煙の中を突つ切り、抜けた先には フェンリルは居なかつた。

気配を感じる先は、正面では無く、

「 下かつ !
「 正解 !」

スライディングでシヴァアの真下に来ていたフェンリルは、今度こそと引き金を引く。

対し、シヴァアはそれよりも早く突風を生んで身体を捻り、強引な動きで右へと回避しようとした。

だが数瞬間に合わず、彼女の左脚を銃弾が穿つ。

その痛みに空中で姿勢が乱れ、しかしなんとか上手く着地する。

床に左足が着くと傷から血が噴き出し、シヴァアの眉を顰めさせる。銃弾は太股の中央付近一ヶ所と脛の周囲を三ヶ所程穿ち、抉つており、噴き出す鮮血は少なくは無かつた。

しかし、風が彼女の足元に吹き、その血は瞬時に渴いて止まる。

「やつぱり、何か能力を持つてやがるな？　お前。どんなもんなんだ？」

問い合わせるフェンリルは既に身を起こしておらず、銃口をシヴァに向けている。

状況は、硬直化していた。

数秒の時間が経ち、シヴァは問われた言葉に返答をする。

「……空氣だ。周囲の大氣を回る事が出来る」

「空氣、か。つまりそれを使って傷の渴きを早くしたんだな。だが、頭を潰してしまえばお終いだよな？」

チヨックメイトだ、と呟き、引き金を絞る。

刹那、真下から雑貨が短機関銃に当たり、銃口が少し上に反れた。そのまま発砲が起きるが、シヴァが瞬時に姿勢を低くし、その体勢のまま前へと出る。

あ？　と疑問の声を上げるフェンリルは、油断から反応が遅れ、長剣で短機関銃を弾き飛ばされた。

「そん……」

な馬鹿な、と言葉を続けるよりも早く、素早くバックステップし、距離を取る。

だが、一度攻めに入ったシヴァの猛攻は止まらない。

形成が逆転し、脚のベルトに収納してあつたコンバットナイフで防衛するフェンリルと、低い位置から長剣を連続して振るうシヴァとの剣戟が始まつた。

第六十七話・かつて少女だった彼女は。

そこは、かつて村だった。

小さいながらも活気があり、何より魔術についての知識が豊富にあつた村だ。

サーべルト村と呼ばれたそこには、住む者が皆家系による関係で魔力が常人以上で、魔術師となる者が大半だった。

魔術師と言つても、彼らは戦いの為では無く、魔術師としての頂点、世界の理を知る者となる為に研究と学習を繰り返す、そういう者達の集う村だった。

一人の少女が、好奇心から禁忌を犯すまでは。

今、廃村となつたこの村は荒れ果て、建造物は一部の骨組みしか残つていない。

そんな村に、人影が三人分ある。

先頭を行く者は、少女からすっかり成長し、女性となつていた。彼女、ティファは周囲の光景を見渡しながら、しつかりとした歩みで進んでいた。

その後ろを少し間を空けて、ネプチューンとクレアが続く。

一行が向かう先、その方向には墓石の群があつた。

墓石といつても、大きさや形の異なる五個の石を使って三角錐の形にしてあり、それらが一定の間隔をもつて並んでいた。

それらの一歩手前で、ティファは足を止める。

風が吹き、彼女の髪を靡かせ、俯き氣味の横顔が露になる。

暫く経ち、片手で後頭部を搔いて一息ついたネプチューンが、口を開いた。

「……じゃあ、早速しつもんだつちや。これは何の墓ぜよ?」

問いかに、ティファは振り向かない。

ただ領き、数刻置いて言葉が生まれる。

「これは、この村に住んでいた人達のお墓よ。私の所為で死んだ人達の」

言つて、よつやく振り向いたティファは言葉を続ける。

「この村は魔術についての知識が豊富でね、特に私の家系は最もふるいところだったの。祖父が村長を務めている程のね」

彼女は言いながら、過去を思い出す。
幼かつた頃の自分を。

「当時、私はとても好奇心が強くてね。知りたいと思つた事はとことん調べ追求する、そんな子だったわ。それで、ある日祖父が禁術という物の話をしてくれたの」

思い出す。

祖父が、お前もそろそろ知るという過程で良い物と悪い物の良し悪しを考えないといけない歳じゃな、と言つて話してくれた事を。

「それは、祖父が偶然見つけた、間違つた世界の理らしいんだけどね。禁術は適していない術者の精神を蝕み、破滅に導く。だから、決して手を出してはいけないと、そう教えられたの」

でも、

「でも、私はその危険性を全く理解出来ず、ただ好奇心に突き動かされる形で、禁術に手を出してしまったの」

今でも鮮明に覚えている。

当時、禁術は危険な物だと認識したが、好奇心は自制を凌駕し

ていた。

ちょっとぐらいいなら良いと、そんな気持ちでいたのだ。

禁術は書物に記されている物だと思い、祖父の書斎を探し回ったが無かつた。

それでも諦めきれず、家の裏にあつた倉庫に入り、地下の扉を見つけ、中へ入つた。

奥に進むと、壁一面に魔法陣が描かれていて、それらがまるで生きているかのように脈を打ち、赤く光っていた。

彼女はその光に魅了され、手を伸ばし、光に包まれた。

「当然、後から知ったのだけど、その禁術は強大で危険な物だつたらしいわ。私が予想していた域を遥かに超えていたの。それは、魔王との契約術。手にした術者は全てを知り、力を得る。そして代償に、術者の全てを奪う。……その奪われた全てというのが、この村の人々」

まるで眠っているような感覚から目を覚ました時、いつの間にか村の広場に居て、辺りは焼け野原だった。

そして、自分の後ろには何かが居ると、そう感じた。

威圧感と恐怖心が全身を支配し、怯え身体が動かなくなる。

一方で両親や弟、周囲の人達は次々とそいつに殺されて、その場で生きているのは彼女だけとなつた。

だが、次の瞬間、彼女の前に一人の男が現れ、手刀で胸元を貫かれた。

同時に、後ろに居たそいつは断末魔を上げ、彼女の胸元を貫いた男に一撃を与える。氣配を消した。

不思議と彼女の胸元の穴はすぐに塞がり、鮮血を流す者は目前の男、彼女の祖父だけだつた。

「魔王を抑えきれず、暴走状態だつた私を、祖父が命がけで止めて

くれたの。魔王を私の中に封印するという形でね。でも、祖父はその際に重症を負い、死んでしまったの。以来、私の中には魔王が眠り、未だに傷跡が胸元に残っているわ

「もしかして、あんさんの強さは、魔王とやらと契約したからかいな？」

「そうなるわね。全てを知るという事は世界の理を知り、力を得る。という事は無限の魔力を得るという事。これが大魔道師となれた訳。これが無かつたら私は一魔術師でしかなかつたわ」

ほうほう、と言しながらネプチューンは三度頷く。ついでに、じゅっと付け足して質問を続ける。

「こJの墓石は、その時に作つたんかい？ つつとも、さすがにこれだけの数は無理があるかんなあ」

「墓石はその出来事から数年後に、仲間達と作つたの。でも、墓石作りと急いでいたとで、余裕をもつて謝罪は出来なかつたわ」

だからこそ、彼女は心からの謝罪の意を込めて、墓石の群へと向いて目を瞑り、黙祷する。

最初、村を壊滅させてしまつた時はただ悲しく、絶望し、謝る余裕を持ち合わせていなかつた。

一度目に訪れた時は、急いで急いでいた為に落ち着いた時間を作れず、結局謝れなかつた。

だからこそ、三度目である今回は、彼女は心から謝罪する事が出来た。

その事に安堵し、閉じていた口を開けて一息つく。

……こんな事で、許される訳がないと思つけど、それでも精一杯の謝罪をしておこう。

内心で呟き、一人の方へと振り向いた。

彼女の視線の先、ネプチューンは腕を組み、まだ言葉を続ける。

「まだ質問は続くつちや。仲間つてのは、誰ぜよ？」

「ん……そうね、別に話しても良いかしら。昔、エニグマ戦争があつたつて話をしたでしょ？ その戦争で英雄となつたディン・ガードナーの事も。私は、彼らと一緒に行動していたの。つまり、墓石は彼らと一緒に作つたつて訳ね」

「ぬうあんだつてー！？」とネプチューンが大げさに驚く横、彼を見据えるクレアは小首を傾げる。

「そんなんに驚く事なの？」

「オーバーリアクションをかましてみたつちや。けんど、そこまで冷静になれるあんさんも案外、変ぜよ」

クレアの猫耳を摘みながら問い合わせるネプチューンは、横腹に一撃を食らつて蹲る。

無様な彼を見下すクレアは、肩を竦めて言った。

「だつて、驚き疲れたもの。他世界に来たりユウに奥さんが居たりで、もうお腹いっぱいよ」

「元兎なだけに、反応が鈍いんかとおも　すまんぜよ、マジで！　武器を收めてえー」

「まあ、真面目に言え巴、向こうの世界で貴方がディン・ガードナーつて名前を言つた後この世界の歴史を知つて、なんとなく仲間か知り合いなんじやないかとは感じたけどね。それに、貴方とユウの話を聞いた時、昔の人だつて分かつた訳だし」

「本当、貴方つて察しの良い人ね。記憶力が良いつて言えば良いのかしら？」

微笑を混じえて言うティファは、その後正反対の苦笑を漏らす。

何かを懐かしむような口調で、簡潔に過去を口に出す。

「H-1グマ戦争を終結させる、所謂勇者」」一 行ね。結構、今みたいに樂しリメンバーダつたんだけど、終戦までに何人も死んじやつたわ

「どつちの世界の勇者」」一 行も、似たようなもんつてこいつちやね

」

くつくつくつ、ヒネプチューンは笑い、後頭部に両手を回す。

そのまま来た道の方へと向き、顔だけ後方のティファに向けた。

「んで、用事は済んだんかい？」

「……ええ、そうね。もう終わりよ。アサルトに戻りましょ」

告げると、りょーかいりょーかい、ヒネプチューンは言いながら、早足で来た道を戻って行つた。

その後ろをクレアがついて行き、しかしティファは一歩を躊躇つ。不意に後ろへと振り向き、虚空を見据える。

自分で壊してしまつた過去に謝罪した今、もう心残りは無いのかと自分自身に問い掛け、考える。

数刻置いて頷き、よしつと呴いてようやく一步踏み出す。

罪には謝罪した。だから、これからは死んだ皆の為に生きよつと。

……身勝手かしら。

思い苦笑し、それでも前へと進む。

彼女は、確かな決意を胸に秘めていた。

「うああ～……何度も乗っても慣れないとちや～。アサルトマジ嫌いぜよ！」

「あんた、乗る前と後じや、随分とアサルトに対する印象が違うわね」

「わっちや、気分屋じや～。けんど、どつかの自由気ままな猫と違って、計画性はありゅぶつ！」

「何あんた最近喧嘩売りすぎじやない！？」

怒声と共に、クレアは隣に座っているネプチューの腹部へと膝をぶち込んだ。

その痛みに、彼はわざわざシートベルトを外して床を転げ回り、悶絶する。

そんな光景を尻目に見ていたリリィは、クスクスと笑う。彼女は操縦を自動に切り替えており、今は休憩中だ。

「ところで、意外と早く戻つて来たようですけど、もう用事は済んだんですか？」

「ん？ ええ、そちらしいわ。謝罪したとかなんとか言つたわね。で、今はあの状態つと」

言つて微笑しながら振り向いた先、アサルトの後部席には二つの席を使って横になり、寝息を立てているティファの姿があった。彼女にしては珍しく無防備で、安らかな表情で眠つている。

皆には魔力温存の為と言つていたが、内心では長年抱えていた不安が軽くなつた故、気が抜けたのだろう。

だからこそ、皆は彼女の事に触れないようになつた。代わりと言つちゃあなんだけど、と唐突にネプチューは言い、リリィに問い合わせた。

「ストレートにこいつちや。ユウのビーに惚れたんぜよ？」

「本当にストレートですね」

ふふ、と嬉しそうに笑うリリイは、顎に人差し指を添えながら、上の虚空を見つめて答える。

「そうですねえ……。あの人は、数年前に突然、セイル村にやつて来たんです。その時のコウは、怪我はしていなかつたものの、疲労からか道端で倒れてしまいまして。倒れた場所が、偶然私の家の前だつたんです」

「え、幼馴染とかじやなかつたの？ てっきり私はそう思つてたわ」「残念ながら。でも、その偶然に押されるようにコウを自宅で看病して、居候として招き入れ、親しくなつていく内に幼馴染並みの仲良さは生まれたと思ひますよ」

何の遠慮も無く接する事が出来る、といつ訳でも無いが、幼馴染を経験した事が無い彼女にとつては、幼馴染と呼んでも過言は無かつたのだろう。

だから、と言つようには彼女は懐かしそうに話し、記憶を蘇らせる。

「そして、たくさん話して接していく内に、どちらが先かは分からぬいけどお互に好きになりました。ある日、コウが告白してきました。かなり緊張した様子で、結婚してくれって」

「……え？ ちょっと待つて、過程をいくつか飛ばしていない？」

「わっちはそつちよりも、あのコウが緊張してたとか告白したって事に驚いたんだ」

場が一気に盛り上がる。

その事にリリイは心から喜び、話を続ける。

途中、自分が惚氣ている事に気付くが、この際いいやと思い、どんどん記憶を掘り起こした。

だが、そんな空間を引き裂く音が、機内に響き渡る。

それは警報。

アサルトの操縦機器の一つが、けたたましく電子音を鳴らしていた。

「なに」となにごとく！？ と騒いでいるネブチューを気にせず、リリイは機器を操作し、原因を探る。

そうして発覚した内容は、

「こ、後方からエニグマの大群が接近中です！ モーター、出しますね！」

リリイが告げると同時に、操縦席の上部にあるモーターに映った光景は、モーターだけでは収まらず、空を覆い隠す程の大群だった。距離はまだ離れている為に、姿はよく見えないが、翼を持つた非行型だという事は分かる。

その大群が、一直線にアサルトへと向かっていた。

「な、何で私達が狙われているの！？」

「いいえ、これは私達を狙ってるんじゃない。目的地は分からないけど……そう思つわ」

「お、ティファアッちおはようさん。で、なんでそう思つん？」

そうね、と言つて腕を組むティファは眼鏡眼を擦つてからモーターを指差す。

そこはモーターの端、田につぱい広がったエニグマ。

「こ、この移動は、彼らにとつての進軍。戦争後半時にも、こんな進軍があつたわ。拠点となる場所を中心に三六〇度全方位に進軍する。けれど、どうしてこれだけの数のエニグマが居るのか、そこが私が私にとっての疑問なの」

額に手を添え、思考する。

何故これだけの数が居て、何故進軍するのか。

しかし、長く思考する暇も無く、リリイから警告が発せられる。

「エニグマの方が速度が有利な為、このままでは遅かれ早かれ追いつかれます！」

「任せなさい。私が迎撃してあげるわ」

言葉と同時に、ティファは後方へと振り向いて両手を掲げる。親指と中指を擦り合わせ、パチンッと指を鳴らした。すると機外、アサルトの後部に多連層の魔法陣が一つ展開した。そして、迎撃の光が走り出す。

第五十八話：一度目の激突

カイは見た。

ヘルが脱ぎ捨てた侍女服によつて彼女の身体が一瞬隠れた後、現れた黒のスポーツウェア姿には左腕が付いていたのを。自動人形だからこそ出来るその荒技に驚きつつ、カイは動く。姿勢を低くし、両手に刃を装備したヘルに対して、両剣を分解する事によって同じく両手に刃を持つた。

激突する。

四つの刃が擦れ合い、火花を散らす。

だがそれは長続きせず、すぐに離れて再度激突した。

離れては当たり、離れては当たる。

その動きは両者の領域を侵す事無く、一定の位置で連続して起つていた。

左で振るう刃は右の刃で防がれ、隙が出来た右腕を右の刃で狙えば、左の刃で弾かれる。

時に蹴りが出るが、バックステップや仰け反りで回避され、実際に勢いをつけて反撃が来る。

現在、両者は無傷だ。

「いい加減、諦めた方が身の為だと判断しますが？」

「諦めたら殺すだろ、絶対！ ってか、俺達はただ帰りたいだけなんだから、道くらい開けてくれって！」

「それは出来ない相談です。これは私の任務ですので。通りたければ、倒してください さい！」

最後の言葉に力を込めて振るった刃は、カイの右脇を穿ち、抉つた。

鮮血が飛び散り、痛みが彼の表情を歪めさせる。

彼は剣を持ったままの左手で傷口を押さえながら、バックステップで距離を取る。

対し、ヘルは追撃しなかつた。

彼女が見る先は、カイが押さえている右脇。

今、カイの左腕は光を放つており、次の瞬間には傷口が塞がつて、衣服さえもが元通りになつていた。

フラグメントで時間を戻したのだ。

「……その力は、本当に厄介です。それは底無しですか？」

問われたカイは口の端を吊り上げ、笑みを見せる。剣を構え、左手の剣を逆手に持つ。

その過程で、

「それは言えないね。言つたら、バレちゃうじゃん」「成る程、底無しでは無いという訳ですね。安心しました」「え？……ああ！　きたねえ、ハメやがつたな！？」

叫び声と共に、戦闘が再開される。

カイは右手の刃を振り下ろし、それを防がせた上で逆手持ちの刃を薙いだ。

当然、それは防がれるが、次いでヘルの胸元目掛けて、身体を傾ける事によつて勢いがつく右足の蹴りを放つた。

だが、ヘルはそれを身体に回転をかける事で左へと回避し、裏拳の勢いで刃を薙いだ。

カイは咄嗟にそれを防ごうと左の刃を向けるが、僅かに間に合はず腕に一閃が入る。

また鮮血が噴き出し、ヘルの黒いスポーツウェアに血が付くが、

色は変わらない。

だが、カイの顔色は変わつた。

一瞬見せた苦痛の色を、笑みの色にだ。

それを見たヘルは疑問に思うが、すぐに気付いた。左手が迫ってきていたのだ。

即座の回転運動は、思わず隙を見せてしまった。

それは、ヘルの中でフラグメントは危険な為、優先的に回避すべきだと記憶していたからこそ行動だった。

今行っている全ての動きをキャンセルし、全身を後方へと引いて避ける。

だが、その動きは次の行動への移行が不可能であり、故に接近して来たカイの右刃が彼女の胸元を横に斬った。

金属が擦れる音が聞こえ、人工皮膚が容易に裂ける。続いて起こるのはコードの断裂と散る火花だ。

傷は深い。

痛覚は遮断してあるが、彼女の脳内で警報が鳴り響いていた。フラグメントが来る。

サイドステップの要領で横に跳躍し、尚も伸ばそうとする左手が。現状を把握している内に目前に迫る。

故に彼女は、着地したばかりの左足に力を込め、後方への宙返りを行つた。

それは回避と同時に、右足でフラグメントを迎撃するサマーソルトとなる、筈だった。

一瞬だけ触れる蹴り上げは、カイが確実に右足首を掴む事によつて、失敗に終わったのだ。勢いが弱かつた。

刹那、足首を中心に入人工皮膚が腐り、フレームが錆び始め、次々と崩れ落ちていく。

ページは間に合つた。

しかし、右足を失つた事はかなり痛手となつた。
宙返りからの着地の際、足を掴まれた事によつてバランスが崩れた事と片足が無い事が重なり、大きく転倒した。

その瞬間に、彼女はミスに気付く。

カイを視界から逸らしてしまつたのだ。

後悔し、すぐさま視界にカイを捉える。

正面、日の光が背に当たり、陰となつて表情が見えないカイの姿がある。

そこに、ヘルは異変を感じた。

彼の目が光つていた。

淡い白が、フラグメントと同じ色が、そこにあつた。

同時に、左手のフラグメントは脈を打ち、僅かに膨張と縮小を繰り返している。

彼女の記憶にある物とは異なつてゐるフラグメントを見て、成長していると、そう判断した。

このままでは壊される、とも。

だが不意に、カイの目から光が消え、フラグメントもまた、元の左腕に戻つていた。

それから数刻経ち、彼の口から吐息が漏れる。

「勝負あり、つて事で良いかな？ 先生には詰めが甘いって言われるかもしないけど、殺しはしたくないから」

苦笑と共に告げられた言葉に、ヘルは拍子抜けする。
機械の彼女には珍しく、啞然の表情を見せた。

「……本当に、詰めが甘いですね。今まで何人の人間に死や傷を

「…えていたといつのに、殺したくないとは」

「シルクには偽善者だって言われつけられたくらいだしな……。それでもやっぱ、殺したくなえよ」

……本当に、甘い人です。

内心でそう呟きながら、手首に纏してあるナイフを取り出そうと思つたその時だ。

不意に、脳内に声が響いた。

それは彼女の脳内に搭載された通信機器が、無線を傍受したからだった。

全域旅游にオープンチャンネルで配信されたその無線は、女の声で

第六十九話：剣戟の果てに

蛍光灯が割れ、薄暗くなつた雑貨屋内にいくつもの火花が散り、金属音が響き渡る。

時たま雑貨の崩れる音が聞こえ、その一瞬に金属音が増す。シヴァとフェンリルの間で激しい剣戟が行われ、しかしシヴァの方が優勢と言える現状だった。

その戦いの中、シヴァは内心で思う。

戦いとは、良いものだと。

今、彼女は自分の実力を存分に生かし、また相手であるフェンリルも全力で向かつて来ている。

互いの力を最大まで生かし、ぶつかり合う。

そこには何の邪魔も無く、一人だけの空間だ。

戦士である彼女にとって、非常に好ましい状況だった。

こいつは強い、と喜びに震え、無意識に表情が緩む。

薄暗いが、相手に表情が見えていないかと心配しながら、長剣を振るう。

その途中、シヴァはふと過去の記憶を思い出した。

アクアトレインでのユウとの会話を、だ。

彼女はその時、銃を否定する意見を放つた。

しかし、今だけは撤回しよう……！

自分と相対しているフェンリルは銃だけに頼らず、己の身体の能力をフルに活用している。

だから良いと、認めるに値すると、そう思った。

故に彼女は、更に速度を上げる。

薙ぎ、弾き、防ぎ、そしてまた薙ぐ。

繰り返し行われる一連の動作は、しかし動くたびに形を変え、まるで舞っているかのようにも見える。

だが、その舞も終わりの時が近付いていた。

シヴァアが難いだ長剣は、フェンリルのナイフを弾き飛ばし、隙を作った。

そこを彼女は、一度長剣を引き構え、彼の胴体目掛けて貫手の動作を使い、勢い良く突き刺した。

すると刀身は狙いを少し逸れて脇腹に直撃し、背中を貫く。

だが、シヴァアは見た。

フェンリルの表情は痛みで歪んでいるものの、僅かに笑みを見せている事を。

口の端を吊り上げ、左手で刀身を思い切り握る。

血が掌から滲み出ている。

同時に、彼は右手で背面から新たな銃を取り出し、自身を貫いている長剣に銃口を押し当てる。

笑みが一層濃くなり、人差し指で引き金を絞つた。

銃声が鳴り響く。

甲高い金属音と共に、長剣は確実に折れた。

それは折った本人が肉眼で確認した事であり、まず間違い無いだろう。

痛みで霞むフェンリルの視線の先、折れた長剣の下半分を持つたままバックステップで後退するシヴァアは、驚愕の表情を彼に向けた。それは長剣を折った事に対する驚きか、それとも自身を犠牲にした事に対する驚きか。

どちらにせよ、フェンリルには関係の無い事だが。

今、シヴァアは武器を失つており、一方で彼は短散弾銃を手にしている。

銃身が短いそれは、携帯性には優れているものの、威力は通常の

散弾銃よりも劣っている物だ。

ならば、何故長剣を折れたのか。

それは銃弾が長剣と同じ？ エターナル？ 製だつたからだ。

同じ強度の物質は、相殺する事が出来る。

それを見越して、彼は？ エターナル？ 製の銃弾を用意していたのだ。

結果、長剣は折れ、形態は変わった。

だから彼は、痛みに引き攣つた笑みを作る。

……ヤバイなあ、鎮痛剤持つて来てたか？

内心で呟きつつ、ウエストポーチに手を伸ばすと、鎮痛剤の入ったミニボトルと注射器が手に触れる。

それを認識するとすぐに取り出して腹部に注射器を打ち、ミニボトル内の鎮痛剤を全て口に流し込んだ。

次いで勢い良く咀嚼し、無理矢理碎いて飲み込む。

一度の服用量を軽く超えているが、気にしない。

そうした後、突き刺さった刀身を抜かずに一息ついて、口を開いた。

「さて、形勢逆転だな。これで俺の勝ち。そう、俺の勝ちだ」

「その気になれば、私は折れた剣でも戦えるぞ？」

「また折るぞ？」

「貴様にそこまで戦う余力は残つてないだろ？」「……そこまでして戦う理由は何だ？」

問われ、フエンリルは苦笑を漏らした。

……お前が言えた事かよ。

敢えて口には出さずに呟く。

同時に、彼はシヴァに言われた言葉を口内で咀嚼した。

……そこまでして戦う理由、か。

痛みが薄れていく中で、思い出すのは過去。

まだ争いも無かつた頃。

三人が仲良くて、先生もまだ生きていた頃。

誓つた事は最後までやり遂げるのだと、そう約束した。

そして、先生が死んだ時。

俺と先生を裏切った兄弟を殺すと、自分に誓つた。

だから言つ。

「理由なんて簡単だ。任務だからだよ。依頼人であるヴァンって男からの依頼だから、遂行するまでだ！」

「……ヴァン、だと？」

不意に、シヴァーの表情が変わった。
眉間に皺を寄せ、明らかにヴァンの名に反応している。
それはフェンリルも気付いていた。
故に問い合わせる。

「なんだ、ヴァンを知っているのか？」
「愚兄の名を忘れる訳が無からう……！」 言え、愚兄に何と言われ
誑かされた！？」

喝が響き、思わず一步引いてしまう。
それ程までに、フェンリルの目に映るシヴァーの表情が、怒りに満
ちていた。

いや、それよりも驚いたのは、誑かされたという言葉だった。

「……どういう事だ？」

ヴァンを愚兄と呼ぶ理由としては、シヴァーは妹と言つたところだ
ろう。

それは分かる。

だが何故、ここまで憤怒しているのか、フェンリルにはそこが解
せないでいた。

だからこそ、素直に答える。

「ヴァンからの提案は、依頼を受ける代わりに、成功報酬として俺が探している男の居場所を教える、というものだ」「探している男？ そいつの名は？」

正直、何も知らない者に名を教えるのは気が引けていた。しかし、今の彼はただ聞かれた用件に答える事にした。

「キース・ヨルムンガント。俺の恩師を殺した、兄弟であり裏切り者だ」「キース・ヨルムンガントだと？ だが、それだと……ああ、そうか」

突然怒りが薄れた代わりに、疑問の表情を見せたシグヴァアは、顎に手を添えて呟く。

そして彼女は一人で納得し、フェンリルを見据えた。

「キースは、愚兄と共に居たぞ。姿は見ていないが、愚兄がキースの名を呼んだ事と返答の声、それが記憶にあるキースと一致する。……どうやら私達は、愚兄の手中で踊らされていたようだ」

その言葉を聞いた瞬間、フェンリルの思考は停止した。

……今、シグヴァアはなんて言った？ キースがヴァンと共に居ただと？

聞いた言葉を脳内で再生させ、やつと動いた思考は混乱する。まさか、長年探し続けていた人物が、協力者の身近に居るとは思いもしなかつただろう。

ふと、記憶がフラッシュバックする。

吐血する先生。高笑いするキース。再起動して間もないヘル。

全てが狂つた過去の出来事。

その時から、ずっと探し続けていた仇。

そいつの手掛かりが、ようやく見つかったのだ。

「……シヴァ。この戦い」「

『応答して下さい、マスター！』繰り返します。応答して下さい、マスター！』

フェンリルの言葉を遮ったのは、都市内に響き渡るヘルの声だ。その声は都市内の放送スピーカーから出ているのか、そこら中から重なって聞こえる。

フェンリルはその声に対し、返答しようと耳に手を当てるが、声は出さなかった。いや、出せないでいた。

通信機が壊れていたのだ。

故に返答する事が出来ず、同じ事を言つヘルの声だけが響き渡る。だが不意に、言葉が変わった。

『返答が無い、という事は通信機器の損失と判断し、こちらの報告を開始します。現在、周囲の電波にオープンチャンネルで高広域化された無線通信が配信されています。この内容は、是非耳にしておくべきだと判断して、都市内の放送機器を使い、報告に当たりました。配信内容は以下の通りです』

その言葉を最後に、一瞬言葉が途切れ、数刻置いて違う声が聞こえてきた。

思わずシヴァが反応した、切羽詰った様子が感じ取れる女性の声が。

『周辺にお住まいの方々、並びにこれを聞いた運の良い方達に警告します。現在、ジードの一部地域において、エニグマの大群が

発生しました。数は定かでは無く、また進軍条項も定かではありません。しかし、エニグマ戦争経験者によると、これはジード全域に向けて、円を描くようにして進む方法なのだそうです。これは、私の勝手な推測ですが、逃げ場はありません。このままだと、ジード全域が飲み込まれてしまつでしょう』

しかし、

『だからこそ、団結すべきです。力有る者は前へ、力無き者は避難を、権力有る者はその援助を、技術有る者はこの通信をもつと遠くに伝えて下さい！一人ひとりが助け合い、手を取り合わなければ生き抜けない現状を、乗り切ってください。どうか……どうかお願ひします！！』

そこで言葉は途切れ、また数刻置いて次はヘルの言葉が来た。

『後は、最初から同じ言葉の繰り返しです。一応、私はこの通信に、都市中枢の管理室で電波増強を追加して、高広域に飛ばしました。マスターに許可は取つていませんが、必ず許可を頂けると判断します。また、この通信の発信源は、真っ直ぐにこちらへと向かって来ています。お早めに体勢の立て直しを。以上』

放送が止み、静寂が生まれる。

今のはリリイカ、とシヴァが呟き、折れた長剣の残りを鞘に収めた。

そして、フェンリルを見据え、問い合わせる。

「この勝負はお預けで良いな。お前も、早く相棒の下へ向かわなければなるまい？」

「だが！……分かった、恩にきる」

反論と感謝をしたフェンリルの内心では、葛藤があつた。
任務に忠実になるか、私情で離脱するか。

前者では先生との約束を守り通す事になるだろう。

しかし、後者を選べば先生の仇を討てるかもしれない。

その思考の中でフェンリルは、後者を選んだのだ。

だから、彼はシヴァの方を向いて数歩下がり、踵を返して走った。

内心で先生に謝罪しながら。

同時に、仇が討てると歡喜していた。

第七十話・空中での迎撃戦

大気に轟音が響き渡る。

その音源である爆発を放つてるのは、空を飛行するアサルト。対し、爆発を受けているのは空を影の黒色で染めている、エニグマの大群だ。

今、多重層の魔法陣を展開し、魔術を使って迎撃を行つているアサルト側は、しかし距離を詰められつづいた。

ちなみに展開している魔法陣は、アサルトに近い陣から順小さくなり、計五つで一纏まりの筒状となつており、後部四つが回転しながら無数の矢を放ち、一番小さい前部は爆発の正体である黒い球体を放つ。

これが一セット分あつてしても、迎撃しきれないのだ。

そして確実に、エニグマはアサルトへと迫る。

機内、後部ではその状況にティファアが舌打ちした。

両手を宙にかざし、時折り指を鳴らしている彼女は、機外の魔法陣の発動者だ。

両手の動きに合わせて動く殲滅型魔術を放つ彼女は、操縦席のリリイへと振り向かずには言葉を送る。

「目的地まで、あとどれくらい！？」

「えと、残り一十キロ！ 到着まで十五分程度です！」

「遅いんだが、速いんだか……！」

ティファアの言葉に返答したリリイは、現在一つの動作を行つていた。

一つはアサルトの操縦。

もう一つは先ほど録音した、ジード全域における警告の音声を、少しでも多くの電波に乗せる作業だ。

生憎、手の空いているネプチューとクレアは機械作業が出来ない為、彼女一人で行つている。

多忙だが、しかし彼女は全力で取り掛かる。

と、その時だ。

不意に、機内に振動が起きた。

同時に操縦機器が警報を上げる。

「つ！？ 左翼の一部が破損！ あと数回、同じ事があれば、航行に大きく支障が出てします！」

「ごめんなさい、迎撃が間に合わなかつたわ！ ……これは、出し惜しみなんにする状況じゃないわね」

謝罪の言葉を放つティファは、右手の指を再度鳴らした。

そうする事によつて生まれたのは、もう一つの多重層の魔法陣だ。一から順に形成されていくそれは、完成と同時に攻撃を開始する。三つ同時の発動は、彼女にとつてかなりの負担だが、今は気にしている場合では無いようだ。

一方、座席に座つて小窓から外を眺めるネプチューは、ふと何かを思いつき、視線はそのままリリイに問い合わせる。

「そういえば、アサルトの基礎素材はなんだつちや？」

「素材、ですか？ えと……大部分が鉄を改良した物質ですが、翼やエンジンなどの重要部分にはオリハルコンを使用しています！」
「ほほう、オリハルコンなあ……オーリキヤルク……つとお……」

オリハルコンの名前を繰り返し呟きながら、おもむろに手遊びを始める。

誰も彼のその動作には気付いてはいない。

隣のクレアでさえ、猫耳を瞬かせながら警報の鳴る機器を見渡している為、眼中には無い。

動物としての本能が、音に敏感に反応しているのだ。そして、数刻が経ち、再度警報が上がった。

「また破損な ん？ な、なんで？」

「どうしたのよ。まさかもう大破してたり？」

「違います、逆です！ 無傷に戻っているんです。機器の故障でしょうか……」

小首を傾げ、モニターを見つめる。

しかし、すぐにこれ以上考えないようにして、作業を再開した。アサルトは、目的地までの距離を残り五キロメートルへと詰めていた。

だが、エニグマの接近はもうすぐそこに迫っていたのである。確実に、間に合わない現状となっていた。

しかしその時、エニグマの群に向けて一閃が走った。そして次の瞬間には、群の一部が横薙ぎに吹き飛び、散った。一撃を放つたのは、大鎌を持った一体の巨人。

アサルトと同じ速度で浮遊するそいつは、含み笑いを零した。

巨人が現れる、僅か数分前。

三つの魔法陣を器用に使い分け、迎撃を行っていたティファは、眉に皺を立てた。

苦痛が、彼女を襲つたのだ。

心臓を驚撃みされるような痛みが起こりそれを奥歯を噛み締める事で必死に堪える。

だが、その痛みは次第に強さを増し、額に汗が滲み出していく。

それでも、手は止めない。

迎撃が間に合わなければ、皆が死んでしまつから。

だから、彼女はその手を止めない。

そんな彼女を襲う痛みは、とうとうピークに達した。

心臓が握り潰される感覚が、確かに体内であった。

呼吸が止まり、息の代わりに血が噴き出す。

何故なのと、鉄の味を口内に感じながら自問する。

……何故、急に心臓が！？

問いに答える声は当然無い。

そう思った……のだが。

『あ～あ、魔力を使い過ぎるからだよお～。お、死ないと思つか
ら別に良いけどね』

その声は、彼女の脳内に響いた。

まるでユウと会話しているかのような感覚に、ティファは驚く。
だからすぐに、声に出さうとした。

「あなたぐふつ……ぐふつ………」

『じらじらじらじら、吐血してくるのに話さうとしない。内心で咳いても大
丈夫だよ。ユウと会話するようにね』

……ユウの事を知つている！？

驚愕は内心で咳くが、当然相手には聞こえる。

『当たり前だよ。僕は、ずっと前から君と一緒に居たんだからね。
にしても、久々に誰かと会話したなあ。何十年ぶりだろう。前にユ
ウに話し掛けた時は、一方的に喋つてたし、夢の途中だつたから拒
絶されちゃつたしで悲しかつたよ』

……独り言はいいわよ。それよりも、貴方はなんで私の中に！？

『なんでって言われるのは心外だなあ。僕を呼び起こしたのは君だと言ひの』。最も、ちゃんとした召喚じやなかつたけどね』

召喚。

その単語に、ティファは反応する。

私が召喚した者で、尚且つ内側に面する者。

心当たりはあった。

それは、自分が犯した罪によつて現れた者であつて。
だから知つてゐる名を、口にする。

「あ……おう……」

『半分正解だけど、まあいいよ。まつたく、あの時は不完全な召喚の所為で、僕は宿主が特定できなくてね。自分で制御出来ないほどの魔力が溢れて暴走しちやつたんだ。今でも、悪かつたと思つていいよ』

でもね、と魔王が言葉を付け足す。

『君のお祖父ちゃんに感謝する事だね。自分の心臓を契約媒体にして、君の中に埋め込んだんだから。そうでもしないと、最終的に僕の祖先は召喚者である君に向いていたから』

……え？

魔王の言葉に、思考が停止する。

彼は今、なんと言つたのだろうか。

祖父が、心臓を契約媒体に……？

つまりそれは、祖父の死の原因が全てティファにあるという事だ。
原因の大元は彼女だ。しかし、殺したのは魔王だと思つていた。

だからこそ、その事実は彼女にとつて衝撃過ぎた。

罪が、増えてしまった。

その事に彼女は、内心で叫ぶように嘆く。

だが、それでも魔王の言葉は続く。

『だから、君には心臓が二つあるんだよ。君の心臓とお祖父ちゃんの心臓がね。で、今潰れたのはお祖父ちゃんの物だ。老いた心臓は、人としての機能を失うからね。封印された僕が、外に出された』

ティファにとつて、魔王の言葉は心を追い込むものだった。
その上、祖父が命懸けで封印した魔王が解き放たれてしまうのだ。
不味い、と真っ先に思い、必死に適した封印術を考える。
だが、彼女の思考を読んだ魔王は、微笑する。

『大丈夫、封印する必要は無いよ。元々、僕は召喚されたんだから。今の君なら、上手く僕の魔力を使いこなせるだろう。だから、僕は君の召喚魔となり、力を貸そう』

思い掛けない言葉だった。

故に絶句し、ついでにむせる。

そして気付けば、胸の痛みは無くなつてあり、残つたのは口内の血だけだ。

ティファはそれを吐き捨て、質問を投げ掛ける。

「……で、貴方を味方に入れるのは良いけど、それは償いの意思に背く事になるんじやないの？」

『あれ？ 分かってるくせに聞くの？ 簡単じゃん。魔のと契約するつて屈辱と、反して僕の力を借りて今度こそ守れなかつた人達を守る。これつて、結構罪滅ぼしになると思うよ』

「そこまで説得力は無いのに、貴方が言うと納得した気分になるわ

……。それじゃ、早速貴方を召喚しても良いかしら?』

『良いね、早速だねえ。腕がなるよ、久々の大暴れだ!』

嬉しそうに、魔王は笑う。

それに答えるように、ティファは両手を掲げ不意に質問の言葉をまた放つ。

「そういえば、貴方を呼ぶ名は魔王で良いの?」

『違うよ。だつてさつきは、半分正解つて言ったからね。……本当は、魔王だなんて大げさなもんじゃないよ。遊び好きな、子供さ。遊びの度が過ぎて天界から落とされた、墮天使なんだ。名前は、ルシファー』

同時、アサルトの機体に黒と白が入り混じった魔法陣が一瞬にして展開し、光を放つ。

そして、次の瞬間には、世界にルシファーが解き放たれていた。全身が黒だというのに、生えている翼のみ白一色の巨人は、襤褸切れたローブを纏っていた。

手に持つ大鎌は黒光りしており、エニグマの群を薙いだ際には縁血がこびりついている。

彼はそれを払い飛ばし、再度大鎌を構えた。

圧倒的な存在感だった。

だが、エニグマ達は進軍する。

例え巨人が目前に居ようとも、それが墮天使だつたとしても、構わず行く。

対し、ルシファーは楽しそうに大鎌を振るい、次々と切り刻んだ。その光景は延々と続くと思えた。

だが、終わりの時は来る。

アサルトが、目的地に到着した。

廃墟都市に突っ込む形で、だ。

第七十一話・装置の発見、そして…

突然の衝撃は一瞬だけだつた。

それは、機体が廃墟に突つ込む直前にティファアがフォース・フィールドを展開した為、一瞬で済んだのだ。

彼女オリジナルの魔術障壁は五枚分を必要としたが、無傷を得る為には仕方ない事だ。

内部、シートベルトに固定されているネプチューンやクレア、リリイはかぶりを振つて目眩を吹き飛ばし、ベルトを外す。

また、後部座席に居たティファアはふらつきながらも立ち上がり、突つ込んで来た方向へと振り向いた。

視線の先、壁を抜けた向こう。

彼女が召喚したルシファーは、まだ戦闘中だつた。

その事に不安を抱きつつ、彼女は前部座席に居る三人の方へと視線を移した。

皆は既に席を立ち、後部のハッチを開けたところだ。

「お、ティファアっちは無事だつたかいな」

「助かつたわ、ティファア。とりあえず、ここを出ましょう」

クレアの言葉をきっかけに全員が動き、アサルトを出した。
突つ込んだ場所はホールだったのか周囲はかなり広く、故に障害物が少なかつた。

無事に到着出来たのは、そんな偶然のおかげかもしねりない。

ともあれ、その場所をティファア達は走り、通路へと飛び出す。
出た先は一面が灰色の、シンプルな作りとなつていた。

「ところで、どこに行けば良いのかしら?」

「とりあえず、都市中枢の管理室に向かいましょう。そこなら、シ

ヴァさん達がどこに居るのか監視映像で分かると思いますし、都市内放送を使って指示も出せます！」

「ナイスアイデアっちゃん！ んなら、早速向かうぜよ！」

「電力が生きていれば良いんですけどね……」

リリイは多少、不安そうな声を漏らしつつ、三人について行く形で走り出す。

途中、都市の案内板を確認しながら、中枢の管理室へと向かった。

到着した管理室は、電子端末などが全て起動していた。

まるで、つい先ほどまで誰かが使用していたかのように。

しかし、リリイはそんな事など気にせずに、電子端末に飛びついで操作を始める。

また、他の三人は役割が無い為、室内の正面へと向く。

そこには二十インチほどのモニターが均等の間隔で大量に設置されており、一つ一つが都市内を映し出していた。

どのモニターにも人は映っておらず、無人の光景がそこにある。だが不意に、ネプチューンが声を上げた。

「おうあ、カイとシルクが居るぜよ！ つと、シヴァも居た居た！」
「良かつた、到着していたのね。後は、他世界干渉に関する情報を見つけるだけね」

「もう少し、もう少しだけ待つて下さい！」

もう少しです、と呟きながら、素早い手捌きで電子端末を操作するリリイは、瞬きさえしていなかつた。

ひとつ渴いて痛みに変わるか分からぬ眼球を忙しなく動かし、次

々と流れしていく情報に目を通す。

それから何分経つただろうか。

不意に、リリイの手が止まり、画面の情報の流れも止まる。

次いで目蓋を何度も瞬かせ、吐息する。

「見つけ、ました。科学研究棟です。そこで、他世界に干渉する為の装置が研究、開発されていたようです。現在は完成しており、装置が置かれているとの事です」

「さすがゼヨ、リリイっち！ タスガコウの奥さんだつちやー！」

歓喜の声を上げたネプチューンの言葉に、リリイは頬を赤らめながら電子端末を再度操作する。

そして、言葉をぶつけた。

指示の言葉を。

「カイさん、シルクさん、シヴァさん、聞いて下さい。皆さん元の世界に戻る方法を見つけました！ 集合場所は科学研究棟の一階格納庫。案内板を見れば分かると思いますが、そこそこ近い距離です。どうか、お気をつけて」

放送を終え、リリイは電子端末の電源を落とす。

そして、三人の方へと向いた。

「では、行きましょう。すぐそこですので、先に準備しておつて事で」

ぐつと親指を突き立て、笑みを作る。

その姿に思わず笑みを零した三人は、また走り出した。

向かう場所は科学研究棟の一階格納庫。

その時は既に、都市全体が揺れ始めていた。

全員が、その揺れに危機感を覚える。

刹那、通路の壁が粉碎され、外から何かが入ってきた。

「え、エニグマ…？ タイミングの悪いやつね……！」

突入した際に体勢を崩したのか、ゆっくりと身体を起こすそいつは、見た事の無い形をしていた。

腕が異様に長く、四メートルほどの腕が半分に折れた形となつており、二の腕に値する位置の筋肉は膨張し、反対に折れた先の部分は細く、代わりに折り畳まれた翼がついていた。

そして胴体はかなり細くなつており、足は無いに等しいほど小さい。

腕と同じくらい長い首は周囲を見渡し、最後にティファ達を視認する。

同時、咆哮を放つ。

大気が震え、戦いを経験した事の無いリリイが、鳥肌を全身に立てる。

それは、竜だ。上半身が発達した、竜。

「な、ななななんだっちゃーもうー。迫力凄すぎて、手も足も出んぜよ！」

「馬鹿は放つといで……どうするの、ティファ？ あんたがやつちやう？」

「私はバス……つて言いたいところだけ、時間が無いのよねえ」

溜息ついでに肩を竦め、面倒くさそうにエニグマを見る。

そんな彼女の横を、クレアが俊足で行く。

両手にダガーを構え、エニグマの翼に振るった。

すると翼の膜が裂けて、緑の血が噴く。

しかしそれは致命傷にはなっておらず、反撃が来た。

横に薙いだ爪を、クレアは前方への跳躍で回避する。

踏み込んだ先にはエニグマの胴体があり、彼女はダガーを胴体に刺し、踏み台にしてエニグマの頭上に上がる。

一方、エニグマは胴体に刺さった刃が、踏み台にする事で身を抉られ、痛みに悲鳴を上げていた。

クレアの姿は視界に入っていない。

「クレア、首よ。エニグマは首の皮膚が柔らかいの」

ティファのアドバイスが放たれたのとほぼ同時、落下に身を任せたクレアが手片に残つた一本のダガーを振るつた。

目にも見えぬ速さを持った刃は、確実にエニグマの首の一部を微塵にする。

そして、頭が離れた巨体は轟音を立てながら倒れた。

次いで片膝を立てて着地したクレアは、刃に付いた縁血を払い、エニグマに近付きもう一本のダガーを抜く。

「さすが猫だつちゃ！ 素早いのう、強いのう！」

「喧しいわよネプチューん。迫力あり過ぎて、凄く緊張してたんだから

「わっちゃんか、ブルって足が動かんかつたんやから、それよりマシぜよ」

「凄い速さで震えてましたしね。その速さはクレアさんに負けてませんでしたよ？」

「「どうこう比べ方つ！？」

ネプチューんとクレアの揃つたツツコモリ、リリイは片手を口に添えて静かに笑う。

そんな光景を見て苦笑を漏らすティファは、さてとつと言ひながらクレアの方へと向いた。

「まあ、H二一グマの対処法は今みたいな感じね。出来たらもう会いたくは無いのだけれど……とりあえず、先を急ぎましょっ？」

怪我の痛みが強くなり始めた事に、シヴァは苦い顔をする。その度に失敗を悔やみ、だがすぐにその考えを搔き消す。

今は、科学研究棟に向かう事が先決だからだ。

そうしてようやく到着した格納庫には、既に全員が揃っていた。彼女の到着に気付いたカイは、喜びの声を上げる。

「シヴァ先生！ 無事でよかつたあー。今、グラルスに帰る為の装置を起動してるところなんだよ」

言いながら指差す方向に、大きな筒状の装置があつた。それは全面ガラス張りの装置で、床やガラスには数多の魔法陣が展開している。

同時に、それらは今、ゆっくりと光を帯び始めていた。

シヴァはそれを見ながら、電子端末を操作しているリリイの下へと向かつた。

「現状はどうだ？ 動きそうだろ？ つか

「バツチリ動きますよ。……ただ、問題点があるんです」

言ひにくいくらいんですけど、と言ひて小声になつた為、シヴァは耳を貸す。

その際に左脚の怪我が痛み眉を顰めるが、すぐにその表情を消す。幸いと言つていいのか、誰もその表情には気付かなかつた。

「もう準備は出来てるんですけど、実はこの装置、一人が残つて……この起動スイッチを押さなきやいけないんですよ。そこで、私がのこ」

「なんだ、そういう事か。分かつたぞ」

リリィの言葉を途中で遮り、シヴァアが皆の方へと向いた。

「全員、装置に入つてくれ。準備は出来ているようだ」

「おおう、とうとう初体験の世界移動だつちやーー！」

「いやいや、ここ来る時にしただろ」

笑い声が上がる。

その光景をシヴァアは微笑ましそうに見ていた。

だが、その光景は長続きしない。

シヴァアの合図で全員が装置に入り、リリィも放り込まれる。

しかしカイは、小さな違和感に疑問の声を上げた。

「先生？ なんで入んないんだ？」

「それは簡単だ。この装置は、誰かが残つて装置を起動させないといけないよつでな。故に、私が残るのだよ」

刹那、ゲートが一瞬にして閉じた。

皆とシヴァアとの間に、ガラスの壁が出来てしまつたのだ。

カイはそれを拳で叩くが、当然ビクともしない。

「お、おい先生！ なんの冗談だよそれはっ！？ 早くここを開けて入つて来いよっ！」

必死に叫ぶカイの言葉は、しかし向こう側には届かない。

時空を超える際に起きるどんな衝撃にも耐えなければならぬがラスの壁は、余りにも頑丈過ぎるのだ。

対し、仕方の無さそうな表情をするシヴァは、目を瞑つて呟く。

「……私は、人殺しだった。戦時中、いつたい何人殺してきたも、定かでは無い。人を殺す事に無関心過ぎたのだ。だが、自軍を裏切り、戦況を変え、終戦まで持ち込み、戦争を終わらせた時、初めて心から罪悪感が湧き上がり、嘆いた」

だが、

「隠居の為に田舎村に住み移った時、戦争被害に遭つて親を亡くしたというお前達一人を一眼見た瞬間から、親代わりになろうと決めたのだ。初めは、罪滅ぼしの為に。自分の罪悪感を埋める為に、お前達を引き取つた」

しかしながら

「親代わりとして、また教師として共に過ごす内に、日々が楽しい事に気付いたのだ。それは、罪滅ぼしをしようとしている私にとって許されぬ事だつたが……ただただ、幸せだったのだ。つと、聞こえてはいなか

言葉は、互いに届かない。

その事にシヴァは苦笑を漏らし、電子端末へと歩み寄る。

一方、彼女の後ろ姿を見るカイは、フラグメントを発動させた。壁を退化させて壊そうとしているのだ。

けれど、それは装置を破壊する行為であり、

「ちょ、やめるひちやカイ！ そんな事したら、装置が壊れちまつぜよー！」

「ネプチューーンがカイを羽交い絞めにし、動きを封じた。

しかし彼は、もがいてネプチューーンの腕から抜け出そうとする。

「馬鹿、ネプチューーン馬鹿！ 先生を置いていつたら、意味無いだろ！ 仲間を見捨てるぐらいなら、ここに残った方がマシだつて！」

「見捨てるなんて言わないでカイ！ シヴァちゃんは……シヴァちゃんは私達をグラルスに帰す為に、残つたんだよ！？ その思いを、踏み躡つちゃだめ！」

「だけどそれじゃ っー！」

カイの言葉は途中で止まつた。

彼の視線の先、シルクは目に涙を溜めていたからだ。

彼女も、辛いのだ。

しかしそれでも、彼女は耐え、無理に受け入れようとしている。それを見たカイの身体からは、自然と力が抜けていった。唯一、拳だけに力を残して。

その、フラグメントを発動していない拳を、壁に向けて思い切り打ち込もうとした。

だが、羽交い絞めにされている為に、虚しく空をきる。

彼が見据えるのは、電子端末の前でこちらを見ているシヴァの姿。彼女は、最後であつても微笑んでいた。

「先生の……先生の馬鹿やうおおおーーー！」

叫び声は、装置の発動とほぼ同時に放たれ、少しずつ声は消えていく。

眩い光がカイ達を包み、次の瞬間には、完全に姿を消した。

第七十一話・フェンリル・ヴァナルガンド

建物内の揺れが、増し始めていた。

天井に少しづつ、少しづつ亀裂が入りだし、その内崩れ落ちそうな様子だ。

それを見上げるシヴァは、電子端末のサーバーを背もたれにして、しゃがみ込む。

同時に我慢していた痛みが一気に彼女を襲い、呼吸が荒くなつた。左脚の怪我は、血こそ出でていないものの、皮膚を塞ぐだけの処置しかしていない為、内側の肉が穿たれたままなのだ。

その状態で走り回つた彼女には、もう限界が来ていた。

「武器も無く、怪我で動く事も出来ない。ならば、無傷で尚且つ未来のある若い者達を優先すべきだろ」と、判断したのだが……冷静になつて考えてみれば、シルクに治してもらえれば良かつたな。痛みが冷静な思考を邪魔しおつた……」

咳き、苦笑する。

いくら歴戦の戦士でも、結局は人間なのだ。
人とは脆いものだ、と内心でつくづく思う。
そして目を瞑り、一息つこうとしたその時だ。

「間に合つたと、そう判断します」

言葉と共に、シヴァの身体に衝撃が走つた。

それは、ヘルが彼女を全身でガツチリ捕らえ、装置内に突っ込んだからだ。

一瞬、シヴァは何が起きたのか理解出来ず、周囲を見渡してようやく装置に入つている事に気付く。

ヘルにワイヤーで捕らえられている事もだ。

ワイヤーは金属で出来ており、シヴァの肌に食い込み、身動きを封じる。

故に、もがいても動けず、ワイヤーが余計に締まる。

その事に彼女は舌打ちをし、電子端末の前にフェンリルが居る事に気付いた。

彼は片手で腹部を押さえながら、電子端末を操作する。

「どういつもりだ、フェンリル！」

「簡単だ。今度は俺が残つて装置を起動させるんだよ」

馬鹿な、と言葉を吐き捨て、更に問う。

「貴様は仇を討たなければならぬのだろ！？」

「それは私が引き受けました。マスターの意思を全て、です」

「そうだヘル。本当に最高だよ、お前は」

「—N i c h t s z u d a n k e n、マイマスター。しかしその言葉、礼に及ばずともありがたく記憶媒体に刻んでおきます。

では、—V i e l e n d a n k f u a r a l l e s . . . S e h e n w i r w i e d e r

「ああ、また会おうな、ヘル」

その言葉を起点とし、ヘルはワイヤーの締まりを強め、フェンリルは起動の為にスイッチに手を添えた。

装置が完全に密室となり、魔法陣が光を灯す。

次いで、再度眩い閃光が放たれ、二人は姿を消した。

それを待っていたかのように、急に揺れが強くなり、フェンリルは思わず体勢を崩して倒れてしまう。

その衝撃で、テープニングで無理に止血をしていた腹部の傷から血が噴き出す。

「ぐつ！？ ……」ここまでつてやつか……」

苦笑混じりに咳き、匍匐に近い状態で這つて、サーバーを背もたれにする。

そこで、シヴァと同じ事をしている自分に気付き、失笑。次いで溜息をつき、目だけを動かして周囲を見渡す。視線の先にあるのは、いくつもの大きなカプセルだ。人一人が容易に入れそうな大きさのあるそれがあ前面が開閉式になつており、今は全てが開いている。彼はそれを見て、ふと過去を思い出す。もう、取り戻せない過去を。

しれは、平穏な日常の光景だった。

科学研究棟の二階、個人実験室。

そこには一人の少年と、長身の痩せた男が居た。

同じ白髪で、尚且つサイズは違えど同じ白衣を纏つた三人は、一つのカプセルの前に立っていた。

彼らの視線の先、カプセルは培養液に浸されており、中には少年達より少し年上の少女が入つている。

長身の男 左胸の位置にピンセットで引っ掛けたるエロカーデに口キと書かれている彼は、腕を組んで嬉しそうに頷いた。

「これが君達にとっての、初の一大実験となりますよ。キース君の細胞複製と人工臓器の理論と、フェンリル君の自動人形に量子コンピュータを導入し、人としての意思を与える技術。これら一人の考

えが、大きな成功をもたらしました」

君達は天才です、と言いながら、口キは一人の頭を撫でる。左手で撫でられているキースは照れ臭そうに鼻の頭を人差し指で搔き、右手で撫でられているフェンリルは照れ隠しに他所を向く。そんな一人を見て微笑む口キは、腕時計を一瞥し、再度力プセルを見る。

「そろそろ時間です」

「やつと、僕達の成果が『登場だねえ』」

「……先生。本当に、これでまたヘルに会えるのか？」

不意に、フェンリルが不安混じりの表情で問い合わせた。

彼の目には戸惑いの色があり、眉尻が下がってる。

だが、その問いに口キは、不安を吹き飛ばすような笑みで答えた。

「大丈夫ですよ。残念ながら、君達と同じ年齢基準の彼女では無いんですけどね。容姿も、声も全部、成長した彼女を想定した状態であり、ヘルそのものです。ただ、彼女が一度死んで、私達が新たな肉体で蘇らせた、というのは伏せておきましょう」

「なんだかい？」

「彼女は、新しい彼女として今、生まれるのです。私達の知つている彼女では無く、新しい彼女として。……君達は、それを覚悟してヘルを作ったのでしょうか？」

口キに逆に問われ、二人は俯く。

そして、かつて幼い頃に一緒に遊んでいたヘルの姿を思い出す。

三人は兄弟であり、また孤児だった。

しかし、ある出来事をきっかけに三人の頭脳は天才と呼べるほど周囲からずば抜けている事が判明し、口キが養子として引き取った

のだった。

その頃は三人には名前が無く、「お前」や「きみ」と互いを呼び合っていたのだが、そんな彼らにロキが名をつけたのだ。

だが、不運の事故でヘルは死に、以来フェンリルとキースの二人はヘルを蘇らせる為の研究に没頭していたのである。

そしてその結果、現在に至るというわけだ。

二人は決意した。

頷き、ロキの方へと向く。

「僕は、賛成だよお」

「俺も賛成だ。先生、お願いします」

その言葉にロキは頷き、真顔となる。

次いで一步前へと出て、カプセル横のスイッチをいくつか押し、レバーを引く。

するとカプセル内の培養液が下部の排水口から出でていき、前面が開き始めて隙間から一瞬だけ煙が噴き出す。

やがて全開となつたカプセルの中には、後頭部に向けて無数の配線を繋げられている、全裸の少女が眠つていた。

彼女はまず、目蓋をゆっくりと開き、眼球を上下左右に向けて初期設定を行う。

次いで数回瞬きし、今度は後頭部を上下左右に向ける。
それを終えると正面を向き、口を開いた。

「全神経、接続確認。初期設定完了。続いて、対象の視認に移ります」

言いながら、彼女は三人を一瞥し、また瞬きをする。

「対象を確認。 おはようございますフェンリル、キース、ロキ

先生「

その言葉を聞いた瞬間、三人が顔を見合せた。互いが、それぞれの喜びの表情を見せていた。

同時に三人は同じ事を思う。

成功だ、と。

だが、喜びも束の間、ロキ先生が少女の最終チェックに入る為、彼女の電源を落とした。

それから、数ヶ月が経つ……。

口論が聞こえる。

それは通路を走るフェンリルが持つ無線機を介して、彼の耳に入っていた。

声の主はキースとロキのものだ。

『だから、だからだよう！ 僕達の技術を軍事利用すれば、あの忌々しいエニグマを駆逐出来るんだよお！？』

『確かに出来るかもしれません。しかし、私達は兵器を作る為に研究して来たのでは無いでしょう？ ただひとえに、ヘルを蘇らせるという想いで』

『失敗作だったじやないかあ！ そりやー、姿形や声はヘルだよお？ でも、記憶はヘルじやない！ 僕達は、失敗したんだよおつー』

怒りと後悔が混ざり合つたキースの声が、イヤホンを通してフェンリルの耳を突き抜ける。

彼はその会話に危機感を抱きながら、必死に走つた。

向かう先は、科学研究棟の一階、格納庫。

そこはキースが実験に使つている場所であり、ロキでさえ滅多に入つた事の無い場所。

だが、何故そんなところにロキは居て、フェンリルが無線で会話を聞いているのか。

それは先日、最近のキースの行動に不信感を抱いたロキが、フェンリルに格納庫へと行つてみる、と報告したからだ。

その為フェンリルは、こつそりと無線機をロキの白衣に忍ばせ盗聴した。

口論の始まりは、ロキが入室した際に何かを見つけた時だつた。そこから言い合いは激化し、危機感を感じたフェンリルは走り、格納庫へと向かう事になつた。

格納庫まで、あと少し。

『だから、だからだよおうせめて、せめて有効活用しなきやいけないんだ。それが、蘇る事の出来なかつた妹への、せめてもの手向けなんだよお……』

『キース、その事に関してだが』

『もおいいよう、先生』

刹那、発砲音が響く。

突然の音に思わず眉を顰めたフェンリルは、あと数歩の所にある格納庫の扉を開き、中へと入つた。

その先にある、カプセルがいくつも置かれた室内の光景を見て、彼は目を見開く。

そこには研究を持つたキースと、胸元を押さえながら倒れている

ロキの姿があった。

キースはフェンリルが入つて来た事に気付くと、微笑んだ。

「やあ、フェンリル！ 丁度今、僕達の障害になるやつを始末しようと思つてたんだよ。でも、死体は一人で運べないんだあー。だから、ね？ フェンリルも手伝ってくれるでしょ？」

拳銃を持ったまま両手を合わせてお願いするキースは、とても樂しそうだった。

その姿に、フェンリルは頬を引き攣らせる。

だが、そんな彼の表情を気にしていいのか、キースは言葉を続けた。

「こいつあね、僕達が執念かけて研究した成果を、有効活用しようとしないんだよ。変だよねえ、僕達の成果なのに。邪魔しちゃ、駄目だよねえ？」

今の彼は、兄弟であるフェンリルの顔から見ても、明らかに狂っていた。

言動こそ生まれつきであるが、昔の面影はそこには無い。その異変にロキが気付いていて、兄弟である自分が気付けなかつた事に、フェンリルは後悔した。

ど、その時だ。

唖然と立ち竦ぐすフェンリルに向けて、ロキの言葉がぶつけられる。

「行きなさい、フェンリル……！ 君はヘルを連れて……ここから……ここから逃げるのです！」

「ひみこおみひ、本当つむきこよ、邪魔者」

再度、発砲音が響く。

だが、その時は既に、フェンリルは端つて格納庫を後にしていた。故に発砲音が誰を狙ったのかは、分からぬ。

けれど走る。

ロキからの頼み事を果たす為に、だ。

階段を駆け上がり、二階の個人実験室へと入る。

そこにはヘルが入ったカプセルがあり、しかし培養液には浸されていなかつた。

いつでも起動出来る状態になつていたのだ。

だからこそフェンリルは、迷わずレバーを引き、前面を展開させる。

そうして露になつた全裸のヘルを引っ張り出して、ロッカーに入つていたロキの白衣を着させる。

途中、起動して意識が覚醒したヘルは、必死の表情になつているフェンリルを見て小首を傾げる。

「お急ぎのようですが、どうしたのですか？」

「気にするな！ 今は、俺についてくる事だけを考えろ！」

「……ヤー、マイマスター」

「ん？ ドイツ語か。いつの間に覚えたんだつと。よし、走るぞヘル！」

最後に靴を履かせ、手を取り走り出す。

その間、何一つ喋らずにヘルはついてきていた。

どこへというわけでもなく、ひたすらに走る。

それから數十分後にエニグマの襲撃があつたというのは、数日後に知る事となつた。

「それからは、ただひたすら殺とかして、金を稼いでいたなあ……」

懐かしそうに咳き、苦笑する。

彼の中で思い返される記憶は、彼が今の仕事、傭兵を始めるきっかけとなつたものだつた。

彼はそれをしみじみと回想し、死を待つていた。

そんな彼に応えるように天井のヒビは増え、時折瓦礫が落ちてくる。

直接フェンリルには直撃していないが、彼の周囲には瓦礫が積み上がり始めていった。

それらを見渡しながら、彼はふとある事に気付いた。

何気ない、ただうき通のように思つていた事に、疑問を生む。

「…………ドイツ語？ ドイツって……何だ？」

ジードの言語は世界共通だ。

故にグラルスからしてみれば、ジード語と読んでいいだろう。しかし、

「シヴァとは、普通に会話出来ていたな。他世界でも言語は共通か。確か、グラルスも世界共通だった。……じゃあ、他にも世界がある？」

思考し、だがそれをすぐに止める。

「まあ、俺には関係無い。そり、関係無い事だ」

眩き、目を瞑る。

やり残した事は、全てヘルに託した。

後はもう、死を待つだけだった。

すると瓦礫は装置を破壊し、そして次は、フェンリル日掛けて落ちた。

廃墟都市は崩壊する。

最後の命が消えた。

それを感じ取ったルシファーは攻撃の手を止めた。

するとエニグマの群は一気に進撃し、ルシファーを突き抜けて廃墟都市に覆い被さる。

一瞬にして建造物は崩壊し、跡形も無くなつた。

戦闘中の襲撃などとは、比べ物にならないくらい。

それを見据えるルシファーは、その姿をゆっくりと消していった。契約者はもうジードに居ない故に、彼もジードを去るというわけだ。

「……ジードは滅んだね。ばいばい、世界」

目一杯に口の端を吊り上げ、満面の笑みで別れを告げたルシファーは、その姿を完全に消した。

そして世界は、滅びを迎える。

エニグマを殲滅出来るフラグメントを持った者はもうこの世界には居らず、全勢力を投入したエニグマに対抗出来る力は、ジードの人間には無かつた。

無限に増殖するエニグマはやがて世界を覆い、そしてジードはジードでは無くなり、その姿は？空間？から消滅した。

第七十二話・知る眞実と、これから

夢の中にカイは居た。

その夢は無空間。

身体が浮遊し、まるで水中に居るかのよう。

それも、はつきりとした意識が彼にある状態だ。

彼はこの感覚に身に覚えがあり、思い出す。

これは、彼がフラグメントを契約した時と同じだった。

それに気付いた時、不意に彼の脳内に声が響く。

「 カイ。カイ・エディフィス。よくぞここまで辿り着きましたね。それは偶然か、あるいは必然か。どちらにせよ、貴方は一つ目の時空の柱に辿り着いた。これは、紛れも無い事実」

声の主は、ナンナだった。

姿を見せていないが、声だけが聞こえる。

必死に姿を探していたカイも、すぐにその事に気付き、声に集中する。

「さて、時空の柱を蘇らせてください。貴方のその手で」

同時、フラグメントが発動した。

それはカイ自身の意思では無く、ナンナの意思によるものだった。

刹那、眩い閃光がカイを襲い、反射的に目を瞑らせる。

暫くし、目を開ければそこにはナンナの姿があり、カイを見て微笑んでいた。

「ありがとうございます。残るは後一つ……。それは、全てが揃う場所に。全ての運命が集結し、終わりへの道しるべが示される前に

最後の時空の柱へと導く言葉が伝えられる。

それからすぐに、カイの意識が少しずつ薄れ始めた。

夢からの目覚めだ。

それは、現実へと戻る為の行為。

ナンナの姿も薄れ始め、そして完全に意識が飛んだ……。

目が覚めた時、そこは見慣れない天井だった。

彼、カイが見上げるそれはテントの物であり、周囲を見渡すと彼が寝ているのと同じベッドがいくつも、均等に並べられていた。

鼻を衝くのは独特な薬品の臭い。

そこは、医務室だった。

カイは自分が何故、医務室にいるのかと疑問に思い、気を失う前の記憶を辿つてみる。

「シヴァ先生！」

「うわあああ！？ びっくりした！」

大声を上げて起き上がったカイに驚いたのは、丁度医務室に入つて来たシルクだ。

彼女は片手に水の入った水筒を持っており、もう一方の手に銀コップを持っていた。

それは、カイが起きた時の為に持つてきたのだろう。

「わ、やっと起きたんだ、カイ！ 憐く心配したよお～」

言いながら、ふらふらとした歩調でカイに近寄り、水筒の水を銀コップに注ぎ始める。

その間、カイは少し眩がするのをかぶりをふつて吹き飛ばし、シルクに焦点を合わせる。

すると彼女は、はいっと言つて銀コップを差し出してきた。

カイはそれを両手で受け取り、一口飲む。

水の冷たさが口内に、喉に染み渡り、脳が一気に覚醒する。

次いで一息つき、再度シルクを見る。

「……なあ、二二二？」

「二二二はね、レジスタンスの駐留キャンプだよ。いやー、この世界に戻つて来た場所がキエンギだつたんだけど、周りがまさかの戦争真っ盛りでねー。ヤバかったんだよ？ カイも気を失つてるし」

そこいら中がどかんつて、と言いながら手を大きく広げ、爆発を表現する。

「でもね、そこに颶爽とタマネギが登場してね、助けてくれたんだよ。で、二二二に居るわけ。もう一日は経つたかなあ」

「そうか、タマネギが……つて、二二二…？ 僕、一日も寝ていたのか？」

「そつ、二日間もすやすや眠つてたよ。フラグメントを使はずぎちやつたのかな」

心配そうに左手を見るシルクは、深い溜息をつく。

そんな姿を見て、カイは小首を傾げた。

視線の先、シルクの田元を良く見れば、隈が出来ていたのだ。

「どうした？ なんでそんなに疲れてんだ？」

「そりゃ疲れるよー。私の治癒術が買われて、つこさつきまで怪我

人を治してたんだから。ついでにカイの事も心配だつたし

「お、俺はついでかよ……」

「冗談だよ、冗談！ つと、そういうばタマネギに起きたら連れて来いって言われてるんだけど、動けそう？」

話を逸らしたな。

そう思い、ジト目でシルクを見るカイは、すぐにそれを止めて腕を振り、軽いストレッチをする。

寝すぎたのか、バキボキと音が鳴る事に苦笑しつつ、暫くそれを続けた。

そして、勢いよくベッドから飛び出し、左手でブイサインを作る。

「大丈夫！ よし、タマネギの所に向かつか！」

「その元気が羨ましいよお～」

五月蠅いくらいに元気なカイに文句を言いながら、シルクは先導をきつて医務室を出了。

カイも彼女に続き、外へと出る。
外は雲一つ無い青空から降り注ぐ日光で暑く、今まで室内に居た一人の目を瞑らせる。

レジスタンスの駐留キャンプは平地に設けられており、周囲には多くのテントが張られていた。

そして、レジスタンスの兵士であるつ者達が、武器や医療品、資料を持つて忙しそうに走り回る。

ある者はテントへ、ある者はキャンプの外へと。

カイはそんな光景を見ながら、シルクに案内されて他のテントよりも少し大きめのテントへと入つていった。

「第三防衛ラインまで突破されたかあ……。圧倒的やなあ」

「それでも、準備不足だった部隊が三日保つだけ、まだ良い方だつちや。問題は、撤退準備をいつ始めるか、ぜよ」

「援軍と輸送部隊がまだ来てないんや、まだ離れられん。幸い、戦線からの負傷者は、セシールがかもうてくれてるから助かってるわ」

二人の男、ネプチューンとナギは、シユメールの大陸を揃つて睨んでいた。

その図にはレジスタンスの駐留キャンプを示す、大きめの赤い三角が大陸の南、海に近い所に描き込まれており、そこを拠点に小さな赤い三角がいくつも北に向けて描かれている。

それらは横一列になる形で一ライン、計六ラインあり、上から二ラインにはバツ印が付けられていた。

全滅の証であるそれを見るナギは眉を顰め、残りの三ラインを見る。

「ここは、前線一ラインを最終防衛ラインまで後退させて、守りを固めるつーのはじうや？」

「それは難しい事ぜよ。敵の戦力が全く掴めてないかんのあ。……でもま、一応一ライン分後退した方がいいかもんな」

「タマネギー、カイを連れて來たよ~」「誰がタマネギやつ！」

入室してきたシルクに素早くツッコミをいれたナギは、彼女の後に入つて來たカイを見て笑みを作つた。

その笑みのまま、スキップをしてカイに近寄る。

「カイ・エティフィスう！ やーつと田え覚めたんやな！ このま

ま起きんかったら、どうしようかと思つとつたわい

「三日も寝ちまつたけどね。んで、なにがどうなつてんの？ なんか戦闘になつてるとは聞いたけど

「なんや、なんも聞いとらんのかい。んなら、説明するわ。わいらガエティフィスらと離れた後、キエンギを制圧したんや。そしたらどうや、わいらの仲間が、いやレジスタンスと同じ服装のやつらが戦闘を仕掛けてきたんや」

その兵士達は、服装こそレジスタンスではあつたものの、一人一人の力は本物のレジスタンスより劣り、しかし数で押して来た。故にレジスタンス側は少しづつ、後退せざるをえなかつたのである。

そんな中、ナギはカイ達が向かつたと思われる階段があつた事を思い出し、数人の護衛と共に階段を下りていった。

理由は当然、護衛対象であるカイを保護する為である。ナギ達が到着した時、丁度良いタイミングで眩い閃光が起き、カイ達と遭遇したというわけだ。

しかし、カイが氣を失つていたが為にナギは不安を抱きつつ、そこから彼らは急いで外に待たせてある馬車に乗り、現在居る駐留キャンプへと移動したのだつた。

「……つと、ここまでが、キエンギ襲撃後から脱出までの経緯や。質問はあるかい？」

「はいはい！ なんで俺が護衛対象なんだ？」

「ええ質問やな。それはわいらが、皇帝から直々の命を受けたからや。……ああ、皇帝つてのはバビロニア皇國のギルガメシュ皇帝のことな」

その言葉を聞いたカイとシルクが、え？といつ反応をする。次いで、二人は顔を見合わせ、

「「ええええええええええええ！」」「

「やかましいわつ！」

声を揃えて驚いた。

ナギにツッ「//」を入れられてしまったが。

「え、なんでなんで！？ だつて、レジスタンスって反皇国軍勢力じゃないの！？」

「あ？ なんでそんなんになつてんのや？ そりや、皇国軍の敵だつたテクノス兵だつた奴は全体の何割があるけど、レジスタンスは皇帝直属の特殊部隊やで？ おい大人、なんでわいらはそんなあつかいになつとんのや」

「え、わっち？ 知らない知らない。わっちは途中からカイつち達とは別行動だつたかんなあ、レジスタンスには遭遇してないけど、皇帝直属特殊部隊つてのは知つてたつちや」

一応、レジスタンスを知つてゐるなら常識つひやよ。

そう言葉を付けたし、笑つて見せる。

だが、そんな彼に向かつて、カイは人差し指を突き出して言葉をぶつける。

「いやいやいや、シヴァアがレジスタンスの話をしてた時、ネプチューン居たじや

ん！ ほら、アクアトレインで！」

「え？んあ..... そいついえばそんな事があつた気がするようないしないような.....」

ネプチューンは暫く考え、小首を何度もかしげる。

頭を小突き、腕を組み、顎に手を添え、また頭を小突く。

そうした動きを何回か繰り返した後、拍手を打つた。

「そうだつたつたつ！ すまん、あんときは考え方してたんだつた
！ ほら、途中で退席したんる？」

「ん~……言われれば、そうだつた氣がする……」

今度はカイが頭を抱えだし、しかしそうに顔を上げる。
同時に軽く溜息をつく。

「まあ、教えてくれた人は、もつ居ないわけだからな……。よし、
じゃあまた質問いくぜ！ いっぽはあるから、一気にするぞー。」

「前置きはいらん。はよいえや」

「ぐつ、急に冷たくなった……。じゃ、聞くー。キエンギでタマネ
ギが

「タマネギやない、ナギやつちゅーてるやろー。」

「ごめんなさい！ …… 気を取り直して。キエンギでナギが管理下
じやないって言つてた、キエンギ行きの客船を襲つたやつらは、何
を確保しようつと？ それと、なんで乗客を殺したんだ？ んで、次
！ 僕を保護する詳しい理由つてのはなんだ？ ほい、次！ 皇帝
の直属なら、世界中の皇國軍の駐留地はわかる？ ミーン大陸の皇
国軍が悪さしてたんだけど。僕の居た村も襲われちまつたしな
「ほんまに一氣やな……。しゃーない、順番に答えてやるわい」

言つて、ナギは説明を始める。

まずは、キエンギ行き客船襲撃について。

これに関しては、キエンギでのシヴァの質問に対し疑問を持った
為、ナギが諜報部を動かして調べたそうだ。

それで分かつた事は、第三勢力が同時に襲撃していた、といつこ
と。

もちろん、これにはカイ達が一勢力として含まれている事を前提
としている。

そして、虐殺を行つたのは第三勢力であり、レジスタンス側も大きな被害を受けたそうだ。

また、この時も第三勢力はレジスタンスの服装をしていたという。これにより、レジスタンスは第三勢力を“アンノウン”と命名した。

このアンノウンが客船にて、何を狙つていたのかは不明だが、レジスタンスが確保しようとしていたのは、とあるルートで入手した情報に含まれていた生物兵器だそうだ。

なんでも、正体不明の組織が極秘裏に生物兵器を開発し、キエンギへと送ったのだという。

諜報部はこの開発組織とアンノウンが同一組織ではないかと推測している。

ちなみに、その客船に護衛対象であるカイが乗っていたのは偶然なのだそうだ。

続いて、ナギはカイが護衛対象である理由を話す。

皇帝直属特殊部隊である彼らの中でも、ナギのような幹部クラスの者にのみ、与えられた命令があった。

“この世界は今、危機にひんしている。それを救える者がいるのだ。神の力フラグメントを持った少年、カイ・エディフィスを保護し、私の下に連れて来い”と。

そして、キエンギに居た諜報部員が、カイを発見したと報告し、一番近くに居たナギの部隊が保護に向かつたのだ。

これが、キエンギ襲撃が起きる過程だ。

しかし、そこに疑問を持つた者が居た。

片手をあげて質問をしたのは、ネプチューンだ。

「あれ、キエンギってバビロニア皇国の領地じゃなかつたかんな？
ほら、テクノスから亡命した蝙蝠男ドライゼンが」

「まるで怪人扱いやの……。んまあ、それ故に簡単に入れると思つたんやけどな。キエンギの皇国軍のやつら、通行証見せても入れて

くれんかつたんや。皇帝の拇指印が入った通行証を無視しやがつたんやで！？」

言いながら、懐から紙を取り出し、全員に見えるようにして拡げた。

その紙にはあらゆる検問・交通機関においての通行を許可すると
いった内容がかかれしており、皇帝の名前と拇指印が押されていた。
しかし、カイ達は特に興味がなかつた為に、軽く相槌を打つだけ
で終わる。

そんな皆の態度にナギは渋々と通行証を懐に戻し、話を続けた。

「とりあえず、なんとか街にはいれてもらえたんけどな？ 突然、
わいらの部隊が攻撃されたんや。キエンギの皇国軍にな」

「ええ！？ なんでだよ？」

「わいもしらん。せやけど、やられたらやり返すしかないから、反
撃に思い至つたんや。せやから、襲撃は少しちゃうな」

だが、現在になつて判明した事があった。

それは、キエンギの皇国軍はアンノウンの一部であつたといつこ
と。

確定事項ではないが、味方である皇国軍がレジスタンスを攻撃し
たこと、キエンギがアンノウン出現地点だったこと。
この一つを踏まえれば、その線は高確率で有力だ。

「これが、ネプチューの質問に対する答えな。んで、次は……！」

「本国軍についてやな。そいつら、なにしたんや？」

「旅を始める前、俺たちの村が本国軍に襲われたんだよ。なんか、
フラグメントを探してたみたい。それ以前にも、ミーン大陸の色ん
なところで村を襲つていたんだ」

「皇国軍がそんなことしどたんかいな……。皇国の印象悪くなるなあ。……へ？ ちよいまて今なんて言つた？」

「え、皇国軍が村を襲つて」

「そこやない！ 少し前や前」

「皇国軍がフラグメントを探してたつてどこへ？」

その言葉を聞いて、ナギは啞然とする。

次いでブツブツと独り言を言い出し、頭を振つた。
しばらく思考し、答えを出す。

「……そいつらは、皇国軍やない。なんせ、フラグメントの情報を知つてんのはレジスタンスの幹部クラス。そして、命令された待機エリアはカナン大陸、シユメール大陸、アッカド大陸や。ミーン大陸はわいらみたいな軍人の上陸にはかなり厳しいんや。数年前にやつと、港の警備のみを任せただけやからな。ほら、教育面にも情報規制がかかってるほどや。その上、命令されたんはレジスタンスや。皇国軍やない」

口調とは裏腹に、表情はかなり深刻だ。
レジスタンスの幹部に選ばれる者には、皇帝への忠誠心が必ずといつていよいほど存在する。

命令違反・裏切りという考えが生まれることはまず無く、また功績を持つた者、それが彼らだ。

故に、命令に無い”ミーン大陸への上陸”を行つ者は居るはずが無く、ミーン大陸に向かつたのがレジスタンス幹部でないことは明らかだ。忠誠心に揺らぎが無い限り。

「なんも分からん。なんも分からんが……とにかく、エディフィスをバビロンまで連れていくわ。それでもええか？」

「皇帝さんが会いたがつてゐつてんなら、仕方ないな」

「カイ、頬が緩んでるよ。調子にのらなーい！」

バシイツと快音が響き、お尻を叩かれたカイが飛び跳ねる。

「いつえー！た、叩く」とないじやん！？」

「どうせカイつたら、皇帝ほどえらい人に必要とされる俺つてすげ
うつて、自惚れてたでしょ」

「うつ……そ、そんなわけないそんなわけない！そ、そういう
えばナギ、出

発はいつになるんだ？」

「輸送船が来てからや。一応、後数時間で来ると思つんやけどな」

言つて、ナギは唐突に拍手を打つた。

それは会話を終える為の合図としてか、彼は吐息する。

「そんじゃ、話はここまでや。輸送船が到着したら呼び出すさかい、
そんまでゆつくり休んでてくれな」

「おつけー、わかつた！それじゃ、行くかシルク」

「へ？行くつてどこに？」

「飯だよ飯！三日も寝てたら腹減つた」

同時、腹の鳴る音が響いた。

その事にカイは顔を赤らめ、他の三人は笑い声を上げた。

するとカイは恥ずかしさを紛らわす為にテントを出て行き、シル
クが慌ててその後を追う。

ナギとネプチューンは二人の後ろ姿を見送り、そしてネプチューン
が視線をナギに移す。

「皇帝、元氣かいな？」

「は？なんでそんな事聞くんや。商人なら、色々な情報も入るや

る?」

「いんや、一応、身近なひとの証言が一番せよ
「やうかいそうかい。あへ、皇帝は……今んといひまつこつも通りや。
よつもなく悪く
もなく、いつも通りなんや」

苦々しく言ったナギの言葉に、ネプチューンは軽く相槌を打つ。
そらした顔に、曇りを見せながら。

第七十四話・さう氣ない至福の時間

日がほとんどの沈み、夕焼け空に闇が染み出す。レジスタンスの駐留キャンプには、松明の光が所々に灯り始める。特に夕食時の食堂は活気に溢れていた。

その厨房には、四人の性が忙しそうに調理をしていた。いや、正確に言えば三人だ。

もう一人の女、ティファはつまらなそうに皿を指で回す。そんな彼女を尻目に見る、料理に盛り付けをする少女、シルクは苦笑を漏らす。

そして、次に料理を作っているリリイとメルディに視線を移し、口を開けた。

「二人とも、料理が上手だねえ。羨ましいくらいだよつ」「いえいえ、主婦となればこれくらい出来ないと駄目なものですよ」「え、リリイさんって結婚してたんですか！？」

驚きの声をあげたメルディは、思わずフライパンの上で炒めていた米を落としそうになり、慌ててバランスを取り直す。

なんとかこぼさずに済み、ホツとしたメルディは、調味料をかけながら問い合わせる。

「いいですねえ、結婚。楽しいですか？ 幸せですか？」

「はい、もちろん幸せですよ」

興味津々だねえ。ちなみにメルディちゃんはナギを狙つてるのである。

？」

「ね、ねらつ！？ そ、そそんなわけないでしょ！ それに、もし……その、『じょじょ』……どうしても、上官と部下ですし」

あきらかに動搖しているメルティイは、フライパンをコンロに置いて俯く。

なにやらブツブツ咳き、指を絡ませ始めた。

そんな彼女を見るシルクとリリィは、顔を見合させて微笑する。

「メルティイさんも、上手ですよ。厨房担当はよくやるのですか？」

「いえいえ、いつもは別の人気が厨房担当なんんですけど、その人達前線に駆り出されちゃって。ですが私は昔、よく姉に食事を作ってたので、それを隊長に言つたら厨房担当に選ばれたんです」

半ば強制でしたけどね、と付けたし、苦笑する。

だが不意に、回していた皿を止めたティファが、小首を傾げて問い合わせる。

「貴女の姉って、どういう人なの？」

「私の姉はレミィ・エルマンといって、同じ軍人です。私と違つて、かなり強いんですよ。それはもう、皇国軍の隊長に選ばれるくらいです」

「姉を誇りに思つているのね。さぞかし……え、レミィ？」

ふと、聞き覚えのある名前に、ティファは眉をひそめる。
レミィ、レミィ、と何度も咳き、記憶を辿つて行く。

しかし、答えを出したのは別の人物だつた。

「ああ！ レミィちゃんか！ 確かアクアトレインの……そう、ネ
リンで会つたよ…」

「あ、姉に会つたんですか！？ 元気そうでした？」

「うん、元気元気！ カイと一騎打ちで勝つくらい、元気だつた」

その言葉を聞いて、メルティイはホッとし、安堵の吐息をついた。

一方で、話がわからないリリイは、小首を傾げながらティファを見る。

返された反応は、肩をすくめる動作だつた。

彼女はそれに頷きで返し、調理に戻る。

だが、メルディは調理に戻る事無く、話を続けた。

「……実は、ずっと姉と連絡が取れなかつたんです。忙しいからかな、と思つてたんですけど。無事を確認できてよかったです」

「まあ、最近は治安も悪いしねえ……。大丈夫、そのうち会えるよっ

「

親指をつきたて、満面の笑みを見せるシルクを見て、メルディも笑みをこぼす。

そうですね、と自分に言い聞かせるように呟き、彼女も調理に戻つた。

「さあて、続きだよ続き！」

その言葉を合図に、厨房には活氣ある調理の音が再び戻つた。ティファも、先ほどと同じように回しを再開する、

「つて、しょーも手伝つてよ！」

「え？ いや私、料理なんてこれっぽっちもできないから。唯一無二出来るとしたら、この回しへらいしか

「「それ料理じゃないよっ！？」」

警報の鐘の音が、真っ暗な闇の中で鳴り響いていた。

だが、その警報を聞いて動く者は、その防衛ラインに居る人員の一部のみだつた。

日が沈む前に、第四防衛ラインから後退してきた部隊が合流している為に、二個小隊分くらいは居るはずだ。

ある。

握を急いでいた。

彼らの耳に、悲鳴が届いた。

断末魔のようなそれはすぐに止み、しかしまた聞こえてくる。また、その声は一箇所だけでなく、周囲全域から上がっていた。暗闇から聞こえる得体のしれない声に、次第にレジスタンス兵達は恐怖を抱き始める。

鞘から抜き、構える剣は震え、周囲を見る拳動は疎らになる。恐怖心が、彼らから兵士としての身構えを忘れさせていた。そうしている間にも、悲鳴は続き、また次第に近付いて来る。それによつて聞こえる音は、悲鳴の他に連続した金属音と低音で響く機動音だ。

普通の餽迫り合いであり得ない音は、彼らの恐怖心を更に駆り立てる。

そして……それは来た。

「ザリやああああああああああ！」

固まっていた兵士の一人が悲鳴を上げた。

その兵士は松明を持つており、周囲の仲間に悲鳴の正体を見せつ

け
る

それは、剣と言つても歪で、あまりにも残酷なものだつた。

兵士の身体に振り下ろされた剣は、何かの機動音と共に進藤しており、一振りだとの如きに出血量が異常だ。

今も肉がえぐれる音と共に、鮮血を周囲に飛び散らせるほど。そして剣は深々と身体に沈み込んでいく。

兵士達は、その光景をただ見ているしかなかつた。

目前で起きる惨劇を、啞然と見つめる。

そしてついに悲鳴は止み、兵士の身体が真つ二つに裂けた。

血溜まりの上に、二つの肉体がばしゃりと音を立てて落ちる。

剣を持ち構える者は、赤い髪を靡かせている。

兵士達は、戦慄した。

だが、仲間を殺されたという事実が、彼らの勇気を駆り立てる。震える足を手を無理矢理止め、歯を食いしばる。

剣の刀身には、無数のチヨーンがついており、それが高速で回転していた。それを持つ者は、女だ。

最初に飛び出したのは、三人。

それぞれが散開し、三方向から迫る動きで、切り込みにかかる。迫る兵士を、彼女は無機質な瞳で見つめる。まるで人形のように。あるいは殺人鬼のように。

対し、彼女は標的を一人に絞つて、剣を横に振るう。

高速回転するチヨーンは、防ごうとする剣を容易に粉碎し、身体を抉る。

一の腕から上が切り離され、文字通り真つ二つになつた。だが、迫る兵士は後二人。

赤髪の女は対応のため、剣を降つた勢いを使って回し蹴りを放つ。ゴウッと力強く空を切る音が鳴り、しかし紙一重で避けられる。二人は笑みを浮かべた。

やれると、内心でつぶやく。

だが、そんな勝氣は簡単に打ちのめされることとなる。

一人の兵士の首に、ロープのような物が巻きついた。

同時に勢い良く引かれ、兵士が呼吸を失うと共に倒れ伏せる。

次いで、ロープの先の暗闇からナイフが飛来し、もう一方の兵士の首を穿つた。

当然、バランスを崩す彼は、攻撃も防御も即座に取れず、体制を立て直した赤髪の女に斬り殺された。

そして気付けば、残りの分隊もまた、急所にナイフを刺され、死んでいた。

第五防衛ラインは全滅となつた。

残るのは、松明に照らされた多くの死体と血溜まり。

そして、チエーンソーを片手に持つた赤髪の女とナイフを持った青年だけだった。

第七十五話・アンノウン

夜が明けた頃、事態は大きく進展していた。レジスタンス駐留キャンプの近くにある海岸に、輸送船と援軍が到着したのだ。

その報告を受けたナギは部隊を指揮し、大急ぎで怪我人や物資の搬入を命令した。

今、全レジスタンスがその作業に取り掛かっている。急ぐ理由があった。

それは、夜明け前にナギの下にあった報告だ。

第五防衛ラインが落ち、最終防衛ラインが戦闘中。

この事実に、ナギはかなりの危機感を覚えていた。

最終防衛ラインが抜けられれば、すぐに駐留キャンプに辿り着かれてしまうからだ。

だから急ぐ。

隊長自らも物資の搬入作業に参加し、少しでも多く入れようとする。

だが、敵の進行があるのは必然。

その時が、警報音と共に来てしまった。

高台より確認出来るのは、一個小隊。

アンノウンはそれだけの少数で、レジスタンスの拠点に攻めて来たのだ。

それは無謀と言えよう。

だが、それはアンノウン側がただの兵士であった場合のみだ。列を作つて進行してくる群れの先頭に、存在感のある少女が居る。彼女はただ前だけを見、他の兵と同じ動きで進む。

しかし、片手に持つ剣が異様だった。

いたのような刀身につけられたチエーンが、ときおり高速回転しているのだ。

それを双眼鏡でみた、高台に居る監視兵は危機感を覚え、急ぎで下へと降り、伝令兵に報告する。

すると伝令兵は急ぎでナギを探し、脅威対象を伝えた。

その報告は、搬入の手伝いをしていたカイの耳にも入った。

「ナギは搬入作業を続けてくれ！ 僕が防衛の手伝いに行つてくれるから！」

「なんや、いつちょまえな事ゆーとるな。せやけどエディフィスに死んでもらうたらわいが困る。メルディ、援護にまわるんや」

指示を受け、隣で同じく搬入作業を行つていたメルディは、荷物をいつたんおいて背筋を伸ばし、ビシッと敬礼した。

ナギも彼女に軽い敬礼を返し、作業に戻る。

そして、カイとメルディは視線を交わして頷き、急ぎで防衛へと向かつた。

途中、何人かの兵士も合流し、正面入り口まで急ぐ。

戦闘は既に始まっていた。

だがそれは圧倒的なものであり、アンノウンが優勢だつた。

それは他でも無い、先頭を行く赤髪の少女によつてもたらされたものだ。

彼女は手に持つた武器を器用に使いこなし、次々とレジスタンス兵をぶつた切つて行く。

それを見たレジスタンス兵達は恐怖し、中には逃げる者さえ居る。力ではなく、恐怖で押し勝つていたのだ。

カイとメルディは、そんな相手と向かい合つ。

そして、気付いてしまう。

敵として立つている少女が、誰なのかといふこと。

「そんな……レミィな 」

「姉さん！？ なにやつてるんですか！」

カイの言葉を遮った驚きの声は、レミィに届いていたが、表情に変化はない。

それどころか、剣を構えて斬る体勢にはいつていた。彼女の瞳に色は無く、ただ無機質なそれは肉親ではなく標的を見る目だ。

そして彼女はチエーンソーのギミックを起動し、地面を削りながら走り出す。

対し、カイは得体の知れないその武器にどう対処しようか迷いつつも、後ろ腰から刃を一本抜いて前へ出る。

刹那、刃どうしがぶつかり合い、鎧迫り合いとなつた。

ただ鎧迫り合うだけでもあまり起きない火花は今、かなりの量を散らしている。

それはチエーンの回転が速い事を証明し、カイの手に異常なほど の負荷を与えた。

「がががっ！ やばいって、やばいってこれ！」

叫び、手を震わせるカイは、バックステップで距離をとり、刀身を見やつた。

幸い刃こぼれはしていないようだが、かなりの負荷があつたことは確かだ。

耐え切つたのはエターナル製であるからだろう。

しかし、過信は禁物だ。

カイはそう思いながら、目前に居る女を見据える。

同時に後ろ腰にあるもう一本の刃の柄に手を添え、次の攻撃に移ろうとした。その時、

「わっ、ぶねっ！」

言葉と共にもう一方の刃を抜き、両手を防御の形で構えた。

その動作とほぼ同時に両側からアンノウンの兵士が斬り込んで来ており、刃がぶつかり合つ。

まさかの不意打ちに驚きつつも、状況が混戦状態であることに気が付き、歯を食いしばりながら吐息する。

反撃は、すぐだつた。

両の刃をわずかに引いて再度押し込み、相手をわざながらにようけさせる。

次いで、刃を腰まで持つて行き、両剣の中央となる支柱に差し込み、一気に引き抜く。

左手で前へと持つて行くそれに、途中で右手を添えて力を加え、回転を掛ける。

その動作は左の兵士の胴を斬り、右の兵士の剣を弾いた。続いて、左手を右に振る形で両剣の左側を兵士に叩き込み、その勢いを殺さずに身体を回し、構えた足で回し蹴りをぶち込む。

それによつて兵士は吹っ飛び、豪快な音を立てて地面を転がつた。カイはそんな姿を見ながら、両剣を身体の周りで回転させ、身構える。

「乱戦上等！ つてな」

言葉と共に、数十人が束になつて攻めてくる。

その中にはレミィも含まれており、チエーンソーの機械音が響き渡つたつていた。

激突する。

最初の一撃は、アンノウン兵が振り下ろす刃。

カイはそれを柄で受け止め、右足で蹴りを入れる。

それによりよろめいた相手に、右上からの振り下ろしで一撃を入れ、左からくる相手に振り切つた刃で突きを入れる。

これで一気に一人だ。

だが、次に来たのはチエーンソーだった。

アンノウンの陰から来たそれはあまりにも突然すぎたために、バランスの悪い前転で回避する。

しかし、行つた先では四人のアンノウン兵に囲まれてしまつた。

そんな状況でも、カイは無駄に慌てない。

今、カイは前転の体勢からしゃがみ込む体勢に、アンノウン兵は振り上げた刃を振り下ろす。

それをカイは立ち上ると同時に両剣を上にあげて防ぎ、同時に右足を九十度上げ、靴裏で正面の剣を防ぐ。

また、そこから流れるような動きで靴裏から剣を滑らせ、剣を下に向けさせて顔に蹴りを入れる。

次いで、両側の兵士が横雑ぎに剣を振るひのを視認し、姿勢を仰向けになるように落とす。

彼を狙つた剣は目前を通過し、空振つた。

それを確認し、後転で距離をとつてしまふがむ体勢になり、まげた脚をバネにして走る。

左手に力を入れ、まず狙うは左側。

胴に一撃を叩き込み、停止した勢いを今度は左回転に込め、右の刃を後ろ突きの形で押し込む。

それは見事に右側のアンノウン兵に直撃した。

「うっし……！」

内心でガツツポーズをし、喜びの声を上げるカイは、振り向きついでに倒した兵士達に目を向ける。

彼らは皆、倒れてはいるものの、致命傷は負つていなかつた。これが彼なりの戦い方だつた。

殺すよりも難しい、不殺の勝利。

傷が浅すぎればまた立ち上がつてしまつ。

逆に、傷が深ければ放つておくと死んでしまつ。

しかし、シヴァから習つた剣術を存分に生かしている彼は、絶妙な加減で斬り倒していた。

そんな彼に、再度チエーンソーが迫つた。

振り下ろされる剣は、彼の頭部を狙う。カイはそれを、サイドステップで回避し、続く横なぎをしゃがむことで回避する。

全てが紙一重だつた。

故に、宙には僅かに彼の髪が散つており、思わず冷や汗をかく。だが、油断している暇は無い。

次に来たのは、またしても振り下ろし。

速すぎたそれにカイは回避よりも、本能的に防御を選び、両剣の柄で受け止める。

刹那、足が地面を滑るほど重圧と火花が彼を襲つた。

「あつっ！ つてかあつっ！ ちよいちよいたんまたんまたんま！」

悲痛な叫びをレミィは無視し、更に力を加える。

すると、頑丈であるはずのエターナル製の柄に亀裂が入つた。

それが意味することは一つ。

一つはチエーンソーがエターナル製だということ。

そしてもう一つは、柄が壊れれば即死だということだ。

最悪の結果を想像したカイはゾッとし、やむおえずフラグメントを発動する。

同時に、柄の亀裂は消えてなくなり、元どおりの綺麗な柄に戻つた。けれども、チエーンソーの猛攻が止むはずもなく。

だからといって、上から力を押し込まれている彼に、回避する方法は無かつた。

幸い、周囲のアンノウン兵はメルディが撃退しており、体勢を立て直したレジスタンス兵もそれに参加している。だが、誰もレミィには近寄ろうとしない。

「圧倒的な存在感が、近付く事さえも許さないのだ。

そんな彼女の色の無い表情を間近で見るカイは、混乱する心中で浮かぶ言葉をぶつけた。

「なんで敵になつてんんだよレミィ！　お前、皇国軍なんだろ？
しかも隊長なんだろ！？　だったら、なんで味方を殺すんだよ！」

「…………」

必死の問いかげにレミィは、無言無表情で返す。

歯ぎしりが鳴る。

それはカイの、悔しさにゆがむ表情から生まれた音だ。

同様にメルディも、同じ表情をしつつ、レミィを見る事なくアンノウン兵を倒して行く。

一兵士として、私情をはさむなかれと、自身に言い聞かせながら。すると突然、彼女の首田掛けて先端がフック状になつたロープが飛來した。

それは容易に彼女の首に巻きつき、呼吸を奪う。

「く……かつ……！」

反射的に声を出そうとし、だがそれは声とならない。

剣を持つていらない方の手で振りほどこうとするが、しっかりと巻きついているそれは外れる様子がない。

そうしている間にもロープは締まり、彼女の視覚が次第に薄まつていく。

刹那、彼女の首元に小さな突風が起こり、フック状の部分が勢いよく飛んでロープが外れた。

「なによ貴方、いつの間にそっち側についたっていうの？」

言葉はメルディの背後から来た。

向けられる先は、ロープの持ち主。
伸びきっていたロープを回収している人物は、ユウ・ウラハスだ
つた。

第七十六話・見知った襲撃者

ナイフを両手に二本ずつ持ち、身構えているユウと対峙するティファは、腕を組んで笑みを浮かべていた。

武器を持たず、一見丸腰に見える彼女は、アンノウンの主戦力の一人であろう青年に人差し指を指す。

「聞いているの？ ユウ。答えないのなら、力づくでも吐かせるわよ」

言葉と共に、それは来た。

ユウが振った右手から放たれる三本のナイフが、ティファ目掛けで投げられた。

だが、彼女に直撃する寸前、見えない壁に当たり、ナイフは落ちた。

二人は表情を変えない。

ティファは当たらないことが当然であつたかのように。

ユウは自分の行動の結果に興味がないように。

唯一、驚きの表情を見せるのはメルディだ。

彼女は首を押されて咳き込みつつ、落ちたナイフとティファを交互に見ている。

「ティ、ティファさん、それって　」

「気にしちゃいけないわよ。戦場じゃ、何が起こるかわからないものなのだから」

その言葉はまるで、自分に言っているよりも聞こえる。

実際、内心では焦っていた。

だが、それを決して顔に出さないようにじついつ、どう対象するか

思考する。

そんな彼女に向かつて、ユウはさうこナイフを二本投げた。
まっすぐにティファの頭部を狙つて飛ぶそれは、先ほどと同じく
見えない壁に当たつて落ちる。

「しつこいわね……なに？ それが貴方の答えだといつの？」

ティファの問いかけに対し、ユウは無言。

それを見てティファは、決意した。

親指と中指を合わせ、宙に構える。

次いで、パチンッと乾いた音が響き渡つた。

すると彼女の人差し指の先に一瞬で黒色の魔法陣が展開し、巨大な黒い槍に姿を変えた。

帶電しているのか、時折電流が走るそれを彼女は軽々と持ち、ユウに向かつて投げた。

ナイフよりもはるかに速いそれは、肉眼では簡単に捉えられないほど。

しかし、ユウはこれを避けた。

姿勢を出来るだけ低くし、前かがみになつて走る。

新たにナイフを一本ずつ構え、速度が衰える事なく前へ。

対し、ティファは迎撃行動に移つた。

両手の指を鳴らし、展開した魔法陣を自分の両サイドに振り下ろす。

同時にもう一回ずつ指を鳴らし、魔法陣を二つずつ光の筒で重ねる。

するとその一つは宙で回転を始め、彼女の合図で光の矢を放ち出した。

無数の矢は迫り来るユウを狙つており、次々と射出される。

ティファは、最初から全力なのだ。

だが、それは相手も同じだった。

ユウは飛来する光の矢に対し、上への跳躍で回避する。同時にポケットから石を取り出し、地面へと投げつけた。それは記憶石。

あらゆる物質を記憶させるそれは、煙幕を放出した。

それも、かなり濃いものだ。

これによりユウの姿は、ティファの視界から消えてしまった。しかし、それでも彼女は放ち続ける。

いくら見えずとも、弾幕を張ればいいからと。

その考えをあざ笑うように、ユウは煙幕の端から飛び出した。そこからまっすぐに、正面を向くティファへと突っ走る。彼女はそれに気付き、魔術の向きをユウへと変えるが、既に距離はほんの五メートル。

また、よつやく向いた魔術の矢を跳躍で回避され、ユウが上から迫った。

刹那、

「ブレイク」「

指鳴りと弦きはほぼ同時。

そのショートカットは、地面から大きな岩の槍が飛び出し、ユウを狙う一撃だった。

鋭利な岩の先端は、彼の胴体を穿つとその背を伸ばす。

そして、直撃が目前となつた時、彼は左手を岩につき、強引に身体を前へと宙返りさせた。

果たして回避は、右足の脛脛を犠牲にすることで成功した。

手を使った回避運動はティファを飛び越える事になつたが、着地と同時に一撃を入れるつもりで彼は武器を構える。

「ジユキ」

だが、そんな彼に横殴りの一撃がぶち込まれる。

放たれた魔術は、水の打撃。

高々度から入る水面は地面ほど硬いものだ。

今、それとほぼ同じ衝撃が彼に放たれたのだ。

地面を滑るようにして転がつて行く彼を、ティファは尻目に見ながらほくそ笑む。

「舐めんじやないわよ。緊急に備えて、魔術は蓄えてたの」

彼女は、ショートカットを用いる事により、数多くの魔術を記録していたのだ。

しかし、その全てが上級魔術であつたために、一回きりだ。

彼女が蓄えた魔術は七つ。

残り一つ、今の彼女に残つている。

一発でも上級魔術が直撃したユウを仕留めるには、十分な数だ。だから構える。

次の指鳴らしで発動させるのは、黒刀”ゲオルギウス”。

漆黒の闇をかたどつたような外見のそれは、以前使つた事のある物だ。

彼女はそれを構え、後ろへと振り向く。

一方で、吹き飛びうつ伏せに倒れるユウは、痛む身体を震わせながら、ゆっくりと立ち上がろうとする。

その過程で、脹脛を抉られた右足が上手く動かない事に気づかず、姿勢を崩す。

視線を右足に移して、ようやく右足の欠損に気付くほどだ。

人体は思つたよりあつさり壊れ、機能を失つていく。

そして、その人体にとどめを刺そと、ティファが黒刀を振り上げる。

届かない声ほど、虚しいものはない。

どれだけ必死に呼びかけても、びくともしない表情。

それを見るだけでも、カイは心を痛める。

どんな手を使ってでも、レミイを元に戻したい。

それは、先ほど彼女がメルディの姉だと知ったからこそ、余計に思うことだ。

同時に、乱入してきたコウの事も気になつていて、やつぱり敵だったのか。

それとも、何かあつたのか。

思考を深める。手はないかと。

しかし、何も思いつかない。

今、カイは集中力を戦闘に注ぎ込んでいた。

通常の剣とは違い、ちょっとでも触れば肉体をえぐり持つていかれる武器を持つ、以前負けた相手。

油断など、微塵も許されない状況だ。

途中、邪魔に入るアンノウン兵はメルディが相手をしているため、カイの武器は双剣の形状だ。

対個人戦に特化したスタイルで、苦戦しつつも迫るチョーンソーに対応する。

火花が散り、剣を持つ手が振動で震える。

「うづくうつ！」

苦痛の声を上げるカイにとつて、振動を受け続ける手には限界が近づいて来ていた。

初めての、全く想定していなかつた武器相手なのだから無理もない。

しかし、だからと言つて油断できぬ現状が、更に彼を苦しめる。

故に、その時は来てしまつた。

感覚が薄れ始めた手から、剣が抜け落ちたのだ。

初步的なミスだつた。

何が原因か、それを考えようとしたし、目の前への集中が途切れ、当然ながら思考も上手く働かない。

ただ、目視出来るのは迫り来るチエーンソー。

それが肉体に触れる直前まで迫り

「やあああああああああ！」

突如、メルディがレミィに体当たりし、チエーンソーは右肩をえぐるだけで済んだ。

鮮血が流れ出し、カイは眉をしかめるが、まだマシだと自分に言い聞かせて歯を食いしばる。

次いで、フラグメントを発動し、右肩を修復する。すると痛みはすぐに消え、服さえも元通りになる。

一方、体当たりしたレミィと一緒に地面に倒れるメルディは、偶然落ちたチエーンソーを急いで拾い、身構えた。

彼女の視線の先には、素早く立ち上がるレミィの姿がある。

二人は対峙する。

姉と妹としてではなく、敵同士として。

片方は涙を堪えた表情で。

もう片方は無表情で。

その光景を見るカイは、落とした剣を即座に拾いながら、打開策を思案する。

どうすればこの状況を覆せるか。

どうすればレミィを元通りに出来るか。

考え、しかし思いつかない。

焦りが思考に対する集中力をうばっているのだ。と、その時。

カイ達に、戦闘を終わらせる合図が送られる。

それは海岸方面から走ってきたネプチューンによるもので、
「準備できたぜよー！ 後退やー後退やー！」

場の空氣を無視した陽気な声が、戦場に居る者達の耳に届く。
それを聞いた兵士達は顔を見合わせ、互いに頷き、迫るアンノウン兵を薙ぎ倒して後退を始める。

カイ達もまた、例外ではない。

ただ、対峙している相手を置いていけないという考えが、カイの足をどうしても前へと出させなかつた。

だが、多くの犠牲があつて成功する脱出を、私情で無駄にするわけにはいかない。

故に、彼はメルディの持つているチョーンソーを左手で取り、フラグメントを発動させる。

時を司る手に触れる剣は、その姿に鎧を生み、次第に朽ちていった。

それを見届けるカイは、メルディと視線を交わし、頷く。
次いでレミイを一警すると、既に数人のアンノウン兵と共に撤退を始めていた。

だが、残りのアンノウン兵はまだ前進をやめていない。

それを確認したのち、メルディの後を追つて海岸へと走る。

途中、ユウの方へと見やれば、ティファの勝ちで決着がついていくようだつた。

ただ一つ、

「……え？」

敗者に異変が起きるまでは。

第七十七話・決意の戦闘

黒刀を振り上げた状態で止まるティファは、振り下ろすまでの数秒で思考する。

ユウを元に戻す方法を。

憶測では、こうなったのはユウが一人、グラルスに残つてからだろう。

あの時、ヴァンは確かに、中に居る者を返してもらうぞ、と言つた。

目的は間違いなくティファだった。

だが、その時は偶然、一人は入れ替わっていた。

その結果、向こう側に持つていかれたのはユウだった。

それが目的通りだつたかそうでなかつたに関係なく、確かにユウは敵の手に渡つてしまつたのだ。

故に、今ユウは敵としてここにいる。

犯人は多分、キースという男だろう。

以前のクレアの件を考えれば、レイヴンの可能性もあるが、確率は低い。

ともあれ、少なくともユウには、変わる前が存在するのだ。

それが意味するのは、クレアと同じ方法。

と、そこまで考えたところで、思考を終える。

とにかく、目の前にいる敵を再起不能にしなければいけないからだ。

だから、黒刀を振り下ろす。

狙うは四肢。最初は右腕。

迷い無く、まっすぐ振り下ろされる黒刀は、しかしユウの右腕をぐにやりと曲げた。

斬れたわけではない、曲がったのだ。

まるでゼリー状の何かを斬ろうとしたかのよ

「え？……貴方、なによそれ……？」

問われるユウは、驚愕するティファを見上げ、ニヤリと笑みを作つた。

刹那。

彼の身体は霧となつて歪み始め、原型を失つていく。

最後に残るのは全裸で無毛の肉体と、賢石。

熱を帯びた、表面に紋章が刻まれた茶色の賢石。

ティファはそれの意味を知らない。

だが、彼女が心配になり、近寄つたメルディが知つていた。

「大丈夫ですか！　あ、これ……？　ネルガル？　ですね。しかも、紋章で改良されてます」

ネルガル。

それは、シャマシュと同じ太陽の意味を持つた、太陽王ではなく太陽そのものである存在を意味した名。

これは効果を發揮すると、高熱を発する熱源となる。

それは何万度にも上れる事ができ、時には蜃氣楼を生み出す。

重ねて、紋章によつて改良されたそれは、通常以上の効果を發揮するだろう。

それこそ、実体のような幻を作る事も出来るかもしねりない。

「……つまり、今まで戦つっていたのは幻だつたつてこと？　馬鹿言わないで！　そんなことが　っ！？」

瞬間、ティファはハツとなつて海岸の方へと視線を移す。

彼女は何かを感じ取つた。

知り慣れた、懐かしい魔力を。

「そう……いう事ね！ メルディ、急ぐわよー 惨劇が起きる前に
あ、はい！」

二人は急ぎ、海岸へと向かう。
すぐさまカイやネプチューも合流し、とにかく急ぐ。
この時、アンノウンの行進は緩みつつも、確実に進んでいた。

「急ぐんや！ 物資よりも怪我人を優先して運べえっ」

大声で部隊に指示を出し、自らも作業をする男が居る。
ナギだ。

彼は汗を流しながら、怪我人を抱えて輸送船に運ぶ。

余計な怪我を増やさぬよう、慎重になりながら、着々と事を進める。

作業は既に、七十パーセントを終えていた。

その事に安堵しつつ、しかし気を緩める事なく作業に集中する。
そう、油断してはいけなかつた。

場を乱す者が到着してしまったからだ。

刹那、轟音が響き、地面を揺らす。

何事かと周囲を見渡せば、それはあつた。

搬入用の馬車に深々と突き刺さる鉄塊。

誰も見た事のない、丁字に似た不思議な形をした物体。

全員の視線を集めるのは、不意に丁字の先端が開き、何者かが飛び出す。

ほぼ同時、レジスタンス兵の断末魔が響く。

それは、鮮血を宙に舞い散らせ、血が付かないほどの速度で長剣

を振る青年が原因となつたものだ。

青年はゆっくりと崩れるレジスタンス兵の身体を蹴り飛ばし、ふらりと周囲を見渡した。

その目は無機質で、見た者を戦慄させる。

全員が、動けば死ぬと。しかし、動かなければ死ぬと。

矛盾しているが、正しい考え方だと思わせるほど、異質な現状。

その中で唯一動くのは、背中に担いだ大剣の柄に手を添えようとするナギと、

「あるじいいつ！」

全速力で青年、ユウに突撃するクレアだけだつた。

瞬間、彼女のダガーとユウの長剣が激突し、金属音と共に火花が散る。

同時に視線が交差し、クレアの睨む瞳が一方的に怒りをぶつける。一瞬二人は止まり、クレアがバックステップすることによってすぐに離れた。

彼女は右足から着地と同時、膝を軽く曲げて伸ばし、バネのようにして前へ出る。

再度、金属音が響いた。

だが、次は一度だけではなく連續だ。

逆手に持ったダガーを高速で振るい、これでもかと言わんばかりの蓮撃を放つ。

しかし、その全てが防がれ、避けられ、一つも当たらない。

だから、動きを変える。

次に振るつた右手の勢いを殺さずに身体を回し、右足を軸にして左足を上げる。

放たれるのは上段回し蹴り。

剣を相手にしている状況で行つのは正気の沙汰とは思えなかつたが、何よりその蹴りは高速だった。

そしてその蹴りは、長剣による防御が間に合わず、ユウの左腕に

直撃する。

吹き飛んだ。

飛距離は無いが勢いのあるそれは、木箱に激突する事によつて効果が発揮された。

ただ吹き飛んで、地面を転がるよりもダメージがあるのだ。

「……どうしたの、我が主。あなたの力はそんなものだつた？」

強氣で言うクレアは、しかし身体中に細かな切り傷を受けていた。それは、先ほどの攻防でユウが行つた反撃だつた。

しかし、それほど痛手ではない。

彼女はそう思いながら、頬を伝う血を拭う。

次いで、追い討ちをかける為に走り出した。

一方、暫くして木屑に埋れたユウが身体を起こす。

その時、左手には黒光りする物が握られていた。

拳銃？ガバメント？だ。

彼は、リアサイトそれの撃鉄を起こし、引き金に指を掛けた。

照門でまっすぐに狙うのは、向かつてくるクレアの胴体。

無表情で無感情で、彼は引き金に掛けた指に力を込め

左手が

吹き飛んだ。

起こつたのは、内部からの爆発。

それはガバメントではなく、左手の中で起こつたのだ。

残つたのは、頑丈故に原型を保つたまま飛んでいったガバメントと、手首から先が粉碎されている左手。

動脈を流れる血は、行き場所を無くし鮮血となつて流れ出る。

ユウは、啞然としていた。

自分の手になにが起こつたのかわからず、漠然と左手のあつた場所を見つめる。

そんな彼の胴体に、勢いのある蹴りがぶち込まれる。

また、吹き飛んだ。

木箱を突き抜けて、今度は地面を滑るよつた。

次いで転がり、動きを止める。

そんな彼を見るクレアは、援軍が来た方向へと視線を移した。

「余計なお世話よ、ティファ」

「あら？ 思いつきり危ない状況に見えてたわ。だから助けたのに

……文句より感謝が欲しいわね」

悪態をつきながら歩いてくるティファは、倒れているユウを一瞥した後にクレアを見る。

すると二人は笑みを交わし、同時にユウへと視線を向ける。

そこには、既に立ち上がっているユウの姿がある。

彼は鮮血が流れる左手首に、近くに落ちていた物資の中から布を取り出して巻き、止血する。

次いで、荒い呼吸を整えて身構えた。
残った右手にナイフを握つて。

「し、しづといわね……。ティファ、カイはどこに居るの？」

「なに？ 気付いたの？ カイは今、アンノウン相手にレジスタンスと協力して防戦中よ。だから、戻つて来るまでが私達の戦いねつて、ナギ？ 早く作業再開を指示しなさいよっ！」

「お、おうー まかせときや！ ティファたちは大丈夫なんやな？」

返事は、二人揃つて親指を突き立てる事で返された。

そして、周囲で作業が再開される。

同時、戦闘も再開された。

最初に動くのは、ユウだ。

彼は前屈みになつて走る。

対し、ティファは迎撃の為に指を鳴らし、魔法陣を展開させる。

放たれるのは光の矢。

一秒に何百本と射出されるそれは、彼を蜂の巣にしようとする。だが、ユウはその矢を全てナイフで叩き落とし、潰しきれなかつた分は身体をそらす事で回避した。

速度を緩める事なく、ひたすら前へ。

それは、どう見ても怪我人の動きではなかつた。

それも左手を失つたというのに、だ。

全力を出し、前へと出続ける彼は、果たして一人の目前へと辿り着いた。

接近戦が始まる。

対応するのはクレアだ。

彼女はティファより前へと出て、ダガーを振るう。

最初に放たれるのは、右のダガー。

ユウはそれをナイフで受け、手首のスナップを効かせて受け流す。予想外の動きに、僅かに姿勢が崩れたクレアは、しまつたと思う。今、彼女の右半身は無防備だ。

それを狙つていたかのように、ユウの左手首は無防備な彼女の右腕に添えられ、右膝が勢いよく叩き込まれる。

「あ……っ！？」

折れた。

バキボキッと骨が碎ける音がし、腕に不釣り合いなコブが出来る。それはどんどん盛り上がり、折れた骨が皮膚を突き破つて出て來た。

同時に血が垂れ落ち、次第にその量を増す。

クレアはその激痛に、歯を食い縛つて耐えていた。

それに応えるかのように、ティファが黒刀を振つてユウを斬りうとする。

が、すんでのところで彼は回避し、バックステップで距離を取つた。

彼の表情は、未だに無である。

それを見るティファアは苦い顔をしつつ、詠唱を始める。

放つのは？トウル？。

クレア腕を治す為のものだ。

それにより、彼女の右腕は何事もなかつたかのように元通りとなつた。

「これで大丈夫。……後は、私に任せなさい」

「嫌よ。主を止めるまで、私は戦う。命にかえてもね」

「本当、ユウにデレデレねえ。リリイに怒られるわよ？」

「誰がデレデレ よつ！」

最後の一言と同時に武器を構え、衝撃を防ぐ。

その衝撃は、再度接近してきたユウの一撃を止めたために起きたものだ。

火花が散り、また連続して金属音が響く。

一本のダガーは的確に防がれているが、ティファアが横から黒刀の突きを入れた。

ユウはそれを、身体をくの字に曲げて紙一重で回避し、戾す勢いを生かして左足を振り上げた。

それにより、黒刀とクレアのダガーは一本とも足に持つていかれ、彼女は両手を上げる形となつて胴体が無防備になる。

彼はその隙をついて、踵落としをぶち込もうとした、が回避され

る。

一瞬の間に、クレアは左足を軸にし、身体を回転させたのだ。それによつて空を切つたユウの左足は、しかしその動きに出る。力を込め、前へ出る為の軸へと、働きを変えている。

同時、姿勢を低くし頭を下げれば、一回転して来たクレアのダガーハが彼の頭上を掠める。

紙一重の回避を見せつけつつ、右足で地面を蹴つて左足に力を込

める。

だが、俊足で前へと出ようとする彼に、黒刀の振り下ろしが迫つた。

初速で一気に前に出るユウと、ティファの振り下ろしはほぼ同時。故に黒刀は空を切るが、続けざまに行つた横薙ぎは、ユウの背を斬つた。

予想外のダメージは、彼の姿勢を大きく変えてしまう。

前転するように、右肩から地面に落ちたユウは、さきほど木箱の残骸近くまで転がり、その途中で持っていたナイフを投げる。体勢に似合わず正確な投射は、まっすぐにクレアを狙つた。

対し、追撃のために接近しようとする彼女は、飛来するナイフをダガーで叩き落とし、ユウの目前まで迫る。

次いで振り下ろした左手のダガーは、しかし防がれた。

それは長剣。

さきほど、木箱に激突し、蹴り飛ばされた際にユウが落とした物だった。

そしてほぼ同時、手首にスナップを効かせて横に薙ぐ事によって一瞬だけ隙が出来た胴体に、逆の横薙ぎが斬り込まれる。

「あぐッ……！」

鮮血が噴き出た。

それと共にクレアは体勢を崩し、地面に倒れこむ。

だが、その後ろ。

黒刀を構えるティファもまた、目前まで迫つていた。最初の振り下ろしは、防がれる。

次の横薙ぎは、防がれる。

続く斜めしたからの斬り上げは、防がれる。

反撃の上段蹴りは、身体を傾けて回避。

同時に少し引いた両手持ちの黒刀で突こうとするが、直前で弾か

れる。

こうした攻防が暫く続くと、そう思われた。

だが、次に横薙ぎに降つたティファの手には、黒刀が握られていなかつた。

同時、黒刀を弾くつもりでいたユウの長剣は、横薙ぎにティファの胴体を斬る。

だが、彼女はそんなことなどお構いなしに指を鳴らした両手を伸ばし、彼に抱きつく。

彼の背中で両手をしっかりと掴み合ひ、離れないようこじた。

「やつと……捕まえた……！」

言葉と共に咳き込み、口から血を吐いた。

それはユウの肩にかかるが、彼はティファを振り解くために身体を動かす事を優先させる。

だが、その行動も次第に取れなくなつてくる。

二人の周囲に冷気がただよい、身体が凍りつき始めたのだ。

「いくつか犠牲にして……ようやく作った、いや作らせた隙……それと、必要な力……」

今なお、咳き込み血を吐きつつ、呟く彼女は笑みを浮かべた。

「カイ・エディフィス！ フラグメントを使いなさい！！！」

叫ぶ彼女の言葉は、防戦しつつ合流して来たカイの耳に届いた。

彼女はずつと待つっていたのだ。

ユウを元に戻す、唯一の力を。

その持ち主が今、二人に向かつて走り出している。

全速力で、左腕のフラグメントを発動させて。

そして、それは触れた。

ユウに直接触れているティファを介して、彼の時を戻す。
眩い闪光が、二人を一瞬の間に包み込んだ。

第七十八話・疑つ心と信じる心

暗い暗い意識の底から、無理矢理引っ張り出される感覚が全身を襲う。

いや、それを感じているのは、俺の中身？
わけが分からぬまま、神々しい光に導かれるままに、誰かの意識と入れ替わりで、表へと意識が進む。

途中の過程で、景色は記憶となっていた。

もの凄い速さで、しかし確実に脳に刻まれる記憶。

それは誰の記憶か。

それはいつの記憶か。

それはいつ消えた記憶か。

分からない。

分からぬが、これだけは確実だった。
これは、俺の記憶だという事は。

刹那、眩い閃光に反射的に目を瞑る。
そして暫く間を置き、目を開ければ、そこには

「…………？」

光る左腕に銀色の髪。

その姿は、よく知る人物によく似ていて。

けれど、視覚が回復し、よく見えるようになれば、別人だった。

……ああ、カイか。

久々に見る仲間の姿に、勘違いした事を謝罪しようとした瞬間。
腹部に強烈な痛みが走り、意識はまた遠退いていった。

日が高く盛り、時刻は昼。

照らされる日の光できらめきを放つ海上を、高速で走る船団があつた。

大型の輸送船を中心にして、周囲を小型船で囲んでいるそれらは、まつすぐにアツカド大陸へと向かっていた。

その輸送船の内部、食堂エリアにて。

カイが抗議の声を上げていた。

言葉を放つ相手は、腕を組み少年を見据えるナギだ。

「だから、コウを出してやつてくれって…」

「せやから理由になつてないゆーてるや。ウラハスはわいりことつては敵、あんたらにとつては裏切り者なんや。そつほいほいと面会できるほど、やわな現状やないんや」

「その、敵かどうかつてのを、最終確認したいんだよ！ 正直、俺はコウを信じていね。疑う要素がありすぎてる。でも、気になるんだよ。あいつがなんで、俺を見てデインツて呟いたのか！」

「はつ。信じてへんのに、話を聞く言つんか？ エディフィス、そのデインツてのが誰か知らんけどな、ちょっと頭冷やしてよーく考えや」

不意に、ナギは立ち上がり、カイと同じ田線の高さまで腰を曲げる。

その瞳はまっすぐにカイの瞳を見つめ、離れない。

「ええか？ 信じてへんやつの話を聞いても、エディフィスは理解出来んやろうな。無意識に、どの言葉も嘘と言い訳にしか聞こえんくなる」

「だから、その最終確認を取るつて何度も言つてるだろ！？」

「あかん。例え誰が許可しようど、わいは許可できん」

「なんでだよ！ もしかしたら、コウは操られてたかもしけな」

「せいらへんにしておけ、坊主」

必死に声を上げるカイの言葉を遮ったのは、レジスタンス兵の人だった。

スキンヘッドに大きな傷跡があり、筋肉が強調されるタンクトップを着た男は、ゆっくりとカイの元へと歩み寄る。

身長は一メートルを超えているのだろう、カイが見上げるほど彼は、真剣な表情をしていた。

「……か？　お前はあの男とどんな旅をしていて、どんな思い出があろうとな、俺達にとっちゃ第一印象は仲間を殺した敵なんだ。それは、ここに居る全員が思っている事だ。そんな奴が、餓鬼の我儘で口一つでも解放されたとなっちゃあ、我慢ならねえんだよ」

「止めや、中隊長！」

「俺達の役目は、お前の保護だ。けどな、坊主の言つ事をなんでも聞けって訳じやねえんだ。もし、お前の保護が皇帝の命令じやなかつたら、とっくにぶん殴つてるとこりだ。そう思わせるほど、お前は我儘過ぎるんだよ」

「止めや中隊長！」

ナギの怒声で、中隊長と呼ばれた男は口を開ざす。

同時に姿勢を正し、失礼しました！　と大声で謝罪の言葉を放つた。

それを見て、ナギは溜息をつき、椅子に座つてカイを見る。

「すまんなあ。せやけど、部下達は同じような不満を抱えてるんや、分かってくれな。……わいは、向こうについたら一度、ウラバスと顔を合わせる機会がある。そん時に、聞きたい事を聞いといでやる」

「隊長！　それは甘すぎです！」

「ついでやついで。わいも聞きたい事あるんや。こんな理由はあか

んか？」

部下に問いかけるナギは、自嘲の薄ら笑いを浮かべていた。

彼自身も、分かっているのだ。

自分がやろうとしている事が、先ほどの部下の意見に反していると。

だが、彼はある可能性に賭けていた。

「……エディフィス。わいらは、仲間を殺されて怒ってる。その怒りと苦しさは、わかるか？」

問われ、カイは頷く。

するとナギも頷き、

「ウラハスは、あんたらの仲間やつた。これは事実や。せやけど、その仲間を疑つてるお前には、会わせる事はできん。せやからわいが会つて聞く。エディフィス達を、仲間と思つているかを」

瞬間、食堂内はざわついた。

皆、意見を言い合い、「仲間に剣を向けてましたよ！？」「まさか答えによつては助ける気じや！？」という超えも聞こえてくる。だが、ナギが睨むと、全員が口を開ざした。

「別に助ける為やない。知りたい事を知りに行くだけや。ウラハスをどう処分するかは、軍が決める事やからな」

その言葉に、中隊長も席に戻り、皆は納得半分不満半分な表情をする。

ナギはそんな彼らを見て苦笑しつつ、拍手を打った。

「さ、あとはエディフィスが、何を質問したいのか聞いてから終い

や。……で、なんや？」

「コウは、最初から俺達を裏切るつもりだったのか。もしくは、いつ裏切ろうと思つたのか。それを聞きたい」

「裏切る事前提かあ。エティフィスは、随分と鬼畜やな」

そう言つナギは、笑う。
しつしつしつと、楽しそうに。

「はい、これで大丈夫ですよ」

怪我をした部分に、キュッと包帯を巻く。

真っ白だと素つ氣ない気がして、リリイは蝶々結びにしたのだが、その完成度に自分自身で喜んでいた。

怪我人の男も、応急処置をしてくれたことに感謝し、彼女に向かつて何度もお礼を言つていた。

そんな彼に対し、リリイはいいですよと言い、次の怪我人の元へと向かつた。

今、彼らが居るのは、広めの医務室だ。

先の戦闘で負傷した者達が運び込まれており、レジスタンスの衛生兵数十名に混じつて、リリイとシルクが応急処置や治療を行つていた。

初めて内こそ、怪我人の数はかなり多く、重傷者もいたものの、シルクの魔術によつてなんとか数を減らす事が出来た。

そして今、一段落ついた一人は支給された水を銀コップに入れて飲みながら、床に座つて休憩を取る事にした。

二人はレジスタンスの駐留キャンプで戦闘が起きてから動きっぱなしであり、輸送船が到着した時はすぐに乗り込んだ為、戦闘は見

ていなかつた。

故に、ユウが現れたのを知つたのは出航後だつた。
レジスタンスが捕らえた事も、だ。

だが、リリイは全く笑顔を絶やしていない。
その事に、シルクは疑問を持つており、よつやく口に出す。

「……ユウ、戻つて来たんだってね」

遠慮しがちに出た言葉に、リリイは嬉しそうな表情を見せる。

「はい、正直嬉しいです。けれど、いつ会えるかは分からないんですけどね」

最後は苦笑混じりに、しかし笑顔を保つ表情に、シルクは言葉が詰まつた。

何故、そこまで明るい表情でいられるの？　と。

敵となつて戻つて来たのに、何故喜べるの？　と。
決して口には出ない言葉が、彼女の心の中で生まれ、膨れていく。
それにより無言になり、間が空いたからか、リリイは慌てて両手の平を振つた。

「ああ、ごめんなさい！　不快な思いさせてしました」「うえへ？　いやいやそういう訳じゃ」

「私も、気付いてます。悪い事をする為に戻つて来たのに、なんでも悲しみより喜びの方が強いのかつて。多分それは、夫だからだと思います」

俯き、手に持つ銀コップを見つめて揺らす。
まだ残つている水は、その揺れで波紋を作り、鏡のよつて映るリリイの表情を歪めさせる。

「全くの音信不通でしたからね。もう、会えないんじゃないかつて思つてました。だから、嬉しいんです。会えるとしたら、鉄格子越しかもしれませんけど、それでも……」

眩き、苦笑を漏らす。

表情には僅かな曇りがあり、しかしそれを振り払うよつこ水を一氣飲みし、咽せた。

突然の事に驚き、シルクが背中を摩りながら声をかけると、暫く咳き込んだ後に顔を上げ、大丈夫ですよと告げる。

「一氣飲みに失敗してしまいました。でも、もう大丈夫です」

「もあー、無茶しないでよ。……あ、とこりでしょー見なかつた？」

「ししょー？　あ、ティファアさんですね！　戦闘以来、姿は見ていませんよ」

「そつか……。いや、まあしょーはさーきょーだから、大丈夫！」

グッと拳を突き上げ、おー！　と声を張り上げる。

そうして自分も一氣飲みし、咽せた。

二人して咽せていた事に、光景を見た医師が微笑し、彼女らに近付いた。

「今回は協力していただき、ありがとうございました。重傷者はもうお居ませんので、お二人は食事を取つてから、ゆっくりと休んで下さい。夜通しで働き続けるのは、身体に悪いですよ」

深々と頭を下げる青年に、シルクとリリイは顔を見合わせ、深い溜息をついた。

「終わった……のかあ。お疲れ様、リリイさん！」
「はい、お疲れ様でした。貴方も、お疲れ様です。後は頑張つて下さいね」

言われ、青年は笑顔を浮かべ、もう一度頭を下げてから持ち場に戻った。

医務室の責任者なのか、数人の医師に指示を出す彼を見て、二人は自然と笑みをこぼした。

その後、二人は立ち上がり、医務室を後にする。

「よっしゃー！ 寝るぞー！」

「声、大きいですよ」

「これくらい出さないと、逆に体力が保たないよー！」

大声を上げながらスキップするシルクに注意しつつ、リリイは笑みをこぼす。

無邪気なシルクの後ろ姿を見ていると、彼女自身も楽しい気持ちになっていた。

だからだろうか、普段はしないスキップを、自然としていた。
軽快なステップの音が二つ、通路に響き渡つていた。

夕刻、海の彼方に太陽が沈み始める頃。それは海を橙色に染め上げ、まるで血の海のよう。クレアは、輸送船の甲板の端に立ち、その景色を眺める。彼女はこの船に乗つてから、ずっとこの場所に居た。少しづつ変わっていく景色を目に焼き付け、潮風に長髪を靡かせながら、微動だにしない。

まるで人形のようだ。

と、不意に彼女は溜息をつき、手すりに拳を振り下ろした。打撃音と振動が響き、拳に痛覚を生む。

それでもなお、拳を打ち付け、手すりを少しづつ歪ませていく。音がなり、痛みは増し、血が滲み、手すりに血がつく。

怒りと悔しさと慘めさの感情に身を任せた彼女は、下唇を噛んで声を上げるのを堪える。

同時に瞳から滲み出る物を堪え、身体の震えを紛らわすために身体を傷つける。

そして、最後の一撃であるう、最大の打撃をぶちこみ、動きは止まる。

聞こえるのは、風の音と船が海をかき分ける音、それと海猫が鳴く声だけだ。

この時間、甲板上で作業する者は既におらず、音は無い。

ほとんどが自然の音しか無いこの場所で、彼女はある光景を思い出す。

コウに斬られ、地面に這い蹲りながらも顔を上げると、そこにはティファアの姿があった。

コウに抱きつく形で、全身に氷をまとわせながら、だ。

次第に氷は厚くなり、二人は一体となっていく。

ほぼ同時、フラグメントを開いたカイが迫り、時を戻す力が発

動した。

眩い閃光が放たれる直前、クレアはたしかに見た。

ティファアが、彼女に微笑みかけている表情を。

刹那、ティファアの姿は氷と共に消え、元に戻つたであらうコウはレジスタンス兵に捕らえられた。

それを思い出すと、また拳を一撃打ち付ける。

……私がもっと、強ければ！

内心で己を責めたて、怒りは歯を食いしばる事で内側で燃やす。だが、下唇を噛んでいる上で歯を食いしばったために、唇が裂けて血が出た。

彼女はそんなことなどお構いなしに、噛み続ける。

もつと強ければ、自分がコウを押さえつけていれば、結果は変わつていただろうか。

思い、更に拳を振る。

だが、そんな彼女に、場違いな声が掛かる。

「おうおう、クレアも釣りかいな」「…………え？」

呑気な声を出すのは、ネプチューンだ。

彼は釣り竿と餌の入った箱、それと海水の入ったバケツを両手で持ち、クレアの下へと近寄っていく。

対し、振り向く体勢でネプチューンを見ているクレアは、啞然としていた。

そして、開いた口が放つ言葉は、

「なにしてんのよ、貴方」

「そういうクレアっちは、なにしてるんぜよ？　あれ……あー、船を壊してたんな！」

なるほどなるほど、と呟きながら、クレアの真横に立つ。

次いで、じつこじょ、と書いて荷物を床に置き、腰に手を当てて身体を仰け反らせる。

すると彼の背から、骨の鳴る音が響き、同時に唸った。

「くあ～……重くて重くて、腰痛めそつだっちやー。そ、クレアっち、釣りするぜよ」

「……へ？ 何言つて　」

「ほれ、竿。安っぽいけど、我慢してな」

よく見れば、ネブチューンは釣り竿を一本持っていた。彼はそのうちの一本を取り、クレアに差し出す。

暫くその状況で固まっていたが、結局クレアは渋々受け取った。確かに安っぽく、細いそれをマジマジと見つめる彼女は、ネブチューンへと視線を戻す。

「で、なんで釣りなの？」

「そりゃ、簡単ぜよ。釣りは乱れた心をおだやかにして、なんだ、リラックスさせてくれるんっしゃ」

「リラックス……ねえ」

半信半疑に聞きつつ、釣り針を弄くつてみる。

時々、皮膚に引っかかる感じに、クレアは癖になっていた。

一方で、ネブチューンは淡々と準備をし、釣り針に小さな肉団子をくっつけて天に掲げた。

「よつし、よつし、準備おつけいぜよー」

「あれ？ 餌は虫を使うんじゃないの？」

「都合よく虫は積んで無かつたっぢや……。んだから、厨房から肉団子を取つて来た！ ささ、クレアっちも付けて付けて

「わ、分かった、わから急かさないでよつ

「」

半ば強制に肉団子の入った箱を押し付けられ、仕方なく釣り針に付ける。

粘着性が高く、釣り針にしつかりとくつつくそれを何の肉か考えながら見つめ、すぐに止めて片手で竿を強く持つ。

次いで、竿を振つて釣り針を飛ばし、海に投げ込んだ。ネプチューーンもそれに続いて投げ込み、二人は手すりにもたれかかる形で水面を見つめ始めた。

釣り針と繩がつているブイは波に揺れ、しかしそれ以上の反応は見せない。

そのブイが変化を見せるのを、ただひたすら待つ。それから無言が続き、どれくらい経つただろうか。

數十分とも數時間とも錯覚してしまいそうなほど、永く感じられる時間が過ぎ、しかし魚はいつこうに釣れない。

ふと、時折り竿に反応があり、クレアはブイをジッと見るが、変化はない。

どれだけ待つても釣れない、そんな状況にクレアの中で少しづつ苛立ちがわいてきたころ、突然ネプチューーンが竿を引き上げた。

「釣れたの！？」

「いや、肉団子なくなっちゃるわ」

「……え？」

クレアは嫌な予感を覚える。

その予感に突き動かされるままに釣り針を上げて見れば、肉団子は跡形もなく無くなっていた。

刹那、ネプチューーンの頭部に平手が直撃する。快音。

「いつあ！ な、なあにするん！？」

「やつておかなきやいけないと、本能的に思つただけよ」

「なんね、また獸の勘かいな」

「獸に突つ込みスキルなんてないわよ」

「なんや、これで笑い取るんかい？ ボケ担当か ふばつ！」

クレアの猫耳を触つた瞬間、横腹に蹴りが入つた。

次いで、歯をむき出しにしている彼女は、完全に威嚇体勢に入つていた。

対し、ネプチューンは横腹を押せえて暫く悶絶し、転げ回つた後に急に止まり、クレアを見た。

「ヤリと笑うその表情には、痛々しさが見えつつも、してやつたぜとでも言つたそつだつた。

「どう？ 少しば、悩みを紛らわせたんろ？」

「は？ ……代わりに、うつとおしさが増したわつ」

「んでも、代わりになつたんから、わつちの計画通りぜよ」

んくくつと歯を見せて笑うネプチューンは、ゆつくつと立ち上がつてクレアと向かい合つ。

対し、クレアは腕を組んでよそを向き、唇を尖らせた。

拗ねてるような、照れ隠しのようなその表情に、思わずネプチューンは吹き出す。

「なあんやその傷ついた乙女みたいな顔しちょつてふばあつー！」

指を差して笑つていると、突つ込みが入つた。

腹部に蹴りが入るという、強烈なものが。

その衝撃をなんとか耐え切つたネプチューンは、フラフラになりながらも手すりにもたれかかる。

己の身体を休める為に、一息つく為に。

深く、重い溜息を一つつき、またんぐくと笑う。

「心配する事ないっちゃ。コウは、わっちがなんとかすんから」
「あんたが、なんとかするつて？　ただの商人に、なにが出来るつてのよ」

「お、やつぱコウの事かや。鎌はかけるもんだつちや」

クレアの両眼がネプチューーンを睨む。

それに悪寒を感じた彼は、両手を上げて苦笑を漏らした。
だが、すぐに両手を元の位置に戻し、遠くを見て口端を釣り上げる。

半目となつてゐるその瞳は、先にある大陸を見据えているよう。

「ただの商人でも、わっちは情報通な方ぜよ。んから、コネはある。後は、あん人が正氣であればいいだけだつちや」

その言葉は、クレアにかけた言葉のよつとも聞こえるが。
まるで、自分に言い聞かせていいようでもあり。
しかし、クレアは後者だつた場合の氣の利いた言葉は持ち合わせていない。

故に、ネプチューーンに託そうと思つ。
グッと握り拳をつくり、真顔を彼に向けた。

「なら、あんたに託すわ。従者が主人を他人に託すなんて、許されることじやないけど……今回ばかりは、あんたに頼るしかなさそつだしね」

「おおう、やあつと信用された感がするつちや。ん、任せとけってな

胸を拳で叩き、次いでその拳をクレアに向ける。

それは、獣人族の戦士同士が交わす、誓いの儀式。

彼女はそれを、獣人族でもないネプチューングが使う事に可笑しく思ひ微笑しつつ、拳をぶつけた。

重い打撃音が鳴り、だが両者はビクリともしない。

そして、誓いは交わされた。

笑みを浮かべる二人の小さく堅い誓いが。

痛みと眩暈が全身を支配する。

まるで、つい先ほどまで深海に沈められていたような、そんな感じだ。

左手を見てみれば、いつの間にか治っている。

だが、時間感覚はとうに鈍つており、今が何時なのかもわからな
い。

腹も空かず、用意される食事には手付かずだ。

もつとも、出て来た物がチーズ一切れで、砂をトッピングされちゃあ、食べたくても食べられないが。

ついでに言えば、両手足は縛られているため、這つて食う必要がある。

そんなことするぐらいなら、食わない方がよっぽどいい。
ふと、閉じていた目を開ける。

だが景色は相変わらずの薄暗い倉庫。

壁に設置された名も知らぬ賢石が唯一の光となっている。
かなり光量が絞られているが、無いよりマシだ。

そう自分に言い聞かせ、ただひたすらにアクションが起きるのを待つ。

もしかしたらこのまま置いていかれるかもしれないし、来た者が

死刑宣告をするかもしない。

だが、そこにどんな結果が待つていようと、受け入れよう。

今の俺は、何もかも覚えている。

カイのフラグメントによって時間を戻されたはずだというのに、元の記憶を失った。

同時に、記憶の奥底にモヤの掛かった記憶がある。

まだ完全に思い出す事を許されず、だがそれは俺であって俺でないような記憶。

懐かしさを感じさせるような記憶。

……それを思い出せば、俺は俺じゃなくなるのだろうか。
確信はない。

ただ、ぽつかりと空いた記憶の穴が、漠然とした不安を抱かせる。思えば、ジードでリリィに会つ前の記憶が、全く無かつた。

どれだけ記憶喪失になれば気がすむんだと、自分に文句を言ったいくらいだ。

と、その時。

不意に倉庫を照らす光量が増し、木製の扉が開いた。

入つて来たのは、長身で大柄な男。

カラフルなシャツとカーゴパンツを着た彼は、俺を見下すように仁王立ちになつた。

よく見れば背中には、大剣が収まつた鞘が見える。

一瞬、レイヴンかと思ったが、服装が彼らしくなかつた為に、顔をよく見る。

見覚えは無かつた。

だが、声には聞き覚えがあつた。

「よう、ウラハス。アッカドについたで。いいで、お前への処分が決まるんや」

訛りの効いた言葉に、やつと思い出す。

そいつには、確かにノアで出会ったか。

「なんだ……タマネギか」

「タマネギちやうわッ！」

「反応が速かつた。

まるで慣れているようだ。

だが、現状はふざけていられる暇も無い。
空気がピリピリとしている。

こいつが内側に抑えつけている怒りが、今にも爆発しそうな気迫を感じ取れる。

……ただ、素で間違えただけだ。

「なんや、えらい余裕やな。ほんま、操られただとは思えんほどやな」

「状況に適応しているだけだ。こいつ時、慌てるとひくな事にならないからな」

「せやなあ、確かにうくな事にはならん。けどな、ウラハス。お前は殺し過ぎた。今こいで、殺してやりたいくらいやけど、此るべき処分が決まるまで、牢屋行きや」

「そう、か」

「そんなに落ち込むなや。……つと、Hディフィスから云々。最初から俺達を裏切るつもりだったのか。もしくは、こいつ裏切らつと思つたのか、だとさ」

それを聞いて、思わず苦笑が漏れた。

……裏切る事が前提か。

疑われるような行動をしたつもりはない……とは言い切れなかつた。

敵であるはずのクレアを助け、カイ達を騙したのだから。

それは、裏切るつもりではなかつた。

しかし、結果的に疑われる材料に含まれてしまつ。

だが、それだけだろうか。

もしかしたら、あいつらがヴァンとキースの罠にはめられた時に飛ばされた先で、何かを知つたか吹き込まれたか。

よく、思い出してみる。

あの後、自分の身体から精神を引き離された俺は、培養液の中に入れられた。

その中ではゆっくりと俺の身体が構成されていき、ハツキリとした意識が戻つた頃には、全身が出来上がっていった。

意識が戻つた、とは言つてもそれは人としての意識であり、俺自身ではなかつたが。

記憶の全く無い俺に、戦闘方法や殺害対象、従うべき相手や命令などが刷り込まれた感じだ。

その状態の時、視界によく入つていたのはキースと赤髪の女だ。ヴァンの姿は全く見ていない。

そして、キースは独り言は多かつたが、カイ達に関する情報は全く言つてなかつた氣がする。飽くまで、気がするだけだが。

……それとも、もしかしたら。

今、ぽっかりと空いた記憶の穴。

これが、原因なのだろうか。

そんな昔の俺には、後ろめたい何かがあつたのだろうか。
だがもし、何かあつたとしても俺は。

「……裏切るつもりはなかつた。これまでも、これからも。だが、
クレアの件を隠していたのはすまなかつたと、そう伝えてくれ
「そうかい。分かった、伝えておく。そんじゃ、行こか」

立てや、と言いながらナギは俺の腕を掴み、無理矢理立たされる。
次いで強引に引っ張り、倉庫から出された。

外は既に暗く、月明かりが俺を照らす。
今宵の月は、満月か。

第八十話：初老の語り人

満月の明かりに照らされた街中を、カイ達は列を成して歩いていた。

アツカド大陸の西部に位置する首都、バビロンの城下町であるその街は、深夜だからかひつそりとしていた。

民家の窓は戸でしっかりと閉じられており、酒屋や宿屋には光が無い。

人が住んでいるという、形跡さえ感じ取れなかつた。

そんな街中をナギを先頭に、メルディを最後尾にして歩く一行は、まっすぐに城へと向かう。

誰も声を出さず、ただ流されるままについて行く。

ただ一人、暢気な表情で歩くネプチューンを除いて、だ。

それから、どれだけ歩いだらうか。

城内に入る門を潜り抜け、そこでよつやくシルクが顔を上げ、氣付いた。

「うつわー……でかすぎっしょ……」

呴きは出来るだけ小声で、前を行くカイに聞こえるように出す。するとカイもその言葉に釣られて顔を上げ、同じく驚きの声を上げた。

彼らが見る先、バビロンの城はかなりの大きさだった。

それは例える物など他にはなく、故に二人は言葉に詰まる。だが、ふとカイは思い出す。

「……これって、ジードの廃墟都市より大きいよな……？」

「そう……だね……」

咲く一人は顔を見合させ、もう一度城を見た。

再度、驚きの声を上げる。

それを見たネプチューンは笑みを浮かべつつ、彼も城を見上げた。

一瞬曇る表情は、しかしそうに笑みへと戻る。

そうして、城内へと入った一行は、一階の奥にある部屋に通された。

城内は白を基調とした造りとなつており、壁には金や銀で作られた装飾が成されている。

それは一行が入った部屋でも同じであり、その部屋は広く、中央には赤い円卓が置かれていた。

ナギはその円卓に座るよう指示した為、カイたちはそれに従つて各自着席した。

そこで初めて、異変に気付く。

驚きを隠せず、最初に声を上げたのは、シルクだ。

「リリィちゃんはいつから居なかつたの！？」

今、ここに居るのはカイとシルク、ネプチューンとクレア、そしてナギとメルディだけだつた。

今まで暗闇を歩いて来たからか、誰かが足りない事に気付かなかつたのだ。

だがその言葉に、ナギは冷静に答えた。

「聞くところによると、ヒーディフィスの旅とは無関係らしいやないか。せやから、今は別行動や。ウラハスの婚約者なんやて？ それ知つた皇帝の配慮で、特別に会わしたるそや」

それを聞いたカイとシルクは安堵し、ホッと胸を撫で下ろす。

一方で、ネプチューンは無表情となつており、視線はまっすぐにナギを見ていた。

暫くして、彼は口を開く。

「んで、ここに連れて来てなーにする気ぜよ?」

「あ、それ俺も思った! 皇帝来るの?」

「……いや、すまんな。実はわいも、なんの話をするかは聞いて無いんや。皇帝が直々に来るとは聞いてるんやけどな」

瞬間、入り口の扉が開き、数人の皇國軍兵士が入つて来た。何事かと皆が視線を向ける先、兵士達が列になつてつくった道を一人の男が歩いてくる。

一八〇センチは軽く超えているであろう長身を黒のスーツで身を包み、まっすぐに背筋を伸ばして姿勢を良くした初老の男。オールバックの髪と綺麗に整つた髭は全て白く、掛けた眼鏡が老紳士の雰囲気を醸し出していた。

そんな彼は、皆の前で会釈し、合図一つで部屋から兵士達を退室させる。

全員が出て扉が閉まつたところで、皺の刻まれた頬を緩め、笑みを浮かべた。

「ようこそ、いらっしゃいました。わたくし、ギルガメシュ・ラヌ・ジ・バビロニア皇帝の側近をさせて頂いております、ネルガル・クターと申します。以後、お見知りおきを」

名乗り、再度会釈する。

カイはその名を聞いて、ふと何かを思い出した。

「あれ、ネルガルって賢石の名前じゃなかつたつけ?」

「そだそだ、賢石だ! なーんか聞き覚えあつたんだよねつ」

カイは先の戦闘でティファに簡単に説明されたのを思い出し、シ

ルクは授業で習つた事を思い出す。

対し、問われたネルガルは、嬉しそうな表情で頷き、口を開いた。

「？ネルガル？」存知でしたか。実は、賢石という物は戦前にバビロニア皇国が発見した物なのです。故に、名前はその賢石に見合った功績・異名を持つ皇国軍騎士から付けられるのです」「え。つ一つことは、ネルガルさんは太陽なのか！？」

「若い頃は、？灼熱のネルガル？」と呼ばれておりました」「「かつこいいーーー！」」

カイとシルクは歓喜の声を上げ、身を乗り出した。

二人のネルガルを見る目は輝いていた。

まるで子供のような反応に、ネルガルは微笑みながら席につく。

「今でも現役ではありますが、何分老化が邪魔をしまして」「ネルガル。いらん話をすんなや」

ナギの一言で、言葉はピタリと止み、ネルガルは無表情となつた。同時に謝罪の言葉を放ち、咳払いを一つ。

「失礼致しました。では……皆様、本日はお集まり頂き、ありがとうございます。本来ならば、皇帝直々にいらっしゃる」予定でしたが、体調が芳しくないとの事で代理を立てさせて頂きました。改めて、ギルガメシュ・ラヌ・ジ・バビロニア皇帝の代理を務めさせて頂きます、ネルガル・クターと申します」

先ほどよりは浅く会釈し、上げた瞳で全員を見渡す。

最後にカイを見据え、そこで言葉を続けた。

「カイ・エディフィス様。神の力を持つ者。貴方が世界を救う為に

旅をしていろと、皇帝からお聞きしました。これから貴方が、どう動くべきかも」

「え、どうして皇帝はそこまで知つてゐるんだ？ なんか、俺より知つてそうじやん」

「それはわたくしにも分かりません。ただ皇帝は、今自分に出来るのは知る事と告げる事だけだ、と申しておられました」

まるで予知能力者のように。

皇帝はカイのすべき事を知り、助言する。

それは信じていいいのかと、ネプチューンは内心で迷つた。ここでシヴァが居れば、的確な判断が下されていただろうかと思ひ、そんな自分に苦笑する。

居ない者に助けをすがつていた事に自嘲する。

今、旅の一行で責任が大きいのは自分なのだと、そう言い聞かせて。

目立つ事は避けたいと思いつつ、口を開く。

「知る事と告げる事しかできんのなら、カイが今後、どうなるかも知つてるんかいな？」

「いえ、残念ながら。しかし、次にどう動くべきかは知らされています」

それは、

「このアッカド大陸の南部に、空中庭園と呼ばれる建造物があります。これは、古来よりバビロニア皇帝の亡骸を納める為に造られた物です。きっと、求める何かがあるでしょう」

「空中庭園つて……え、もしかして浮いてるのか！？」

「いえいえ、地上に造られていますよ。ただ、そこまでの道のりは過酷故、馬車と護衛を二個小隊、用意させて頂きます」

その言葉に眉をピクッと反応させた者がいた。
なんやそれ、と言つて意見するのはナギだ。

「わいは聞いとらんぞ」

「今、申し上げましたので」

「屁理屈はいらんわ。この、いつアンノウンが上陸してくるかわからん状況で、兵力を割く言うんか？」

「皇帝のじ命令です。こればかりは、いくら貴方に権限があつて、そして私であつても逆らえない事なのです」

「話にならん。皇帝に会つてくるわ」

言つて、ナギは勢いよく立ち上がる。

その動作と、ネプチューンが手を翳して彼を制すのはほぼ同時だった。

ネプチューンは、宥めるように手をヒラヒラとわら、眉尻を下げる。

「落ぢ着きいや、ナギつち。皇帝は今、体調がよくなじつてんる?
無理させちやあ駄目ぜよ」

「やかましいわ。ネプチューンは皇國軍の現状が分かつてないからそう言えるんや。一個小隊なんて、大きすぎる！」

「だったらわっしが、また作戦の立案に協力しちゃる。これでいいかいな?」

言い訳ないやろ、と途中まで言いかけたナギは、言葉を止める。
拳を力一杯握り締め、歯を食い縛つて言いたい事を堪え、吹っ切れたのか勢いよく座つた。
組んだ腕を、揺りす足と同調させて指で叩きながら、大きく溜息をついた。

「……せやな、皇帝の命令やからな。皇帝の、命令なんやな……。

出発はいつや？」

「装備の準備は出来ておりますので、明日の朝一番に。なに、ほんの一時間ほどで到着しますよ」

「一時間……緊急事態でも、ギリギリ間に合つかどうかのラインやな……。まあえわ。ほな、明日の朝やな」

再確認しつつ、腰のポーチの一つからメモ帳とペンを取り出す。そして、いくつか文字をすらすらと書き、ペンを途中で止めてカイを見る。

「エディフィス、これでええな？」「ん、おづー オッケーだぜっ」

グッと親指を突き立て、満面の笑みを浮かべる。

それを見たナギは満足そうに頷き、ペンを少し動かしてからメモ帳を閉じ、ポーチに戻す。次いで、吐息を一つ。

円卓に手をつき、立ち上がるつとしたその時だ。

不意に、ネプチューがナギの肩を掴み、無理矢理座らせた。何事かと、本人を含めた全員の視線を集める中、笑みを消したネプチューはナルガルを見据える。

「ところで、コウ・ウラハスの処分はどうするん？」

牢屋の中は殺風景で、何もなかつた。

視界に入るのは通路と牢屋を隔てる鉄柵と、後ろの上部にあると

思われる小窓から入る月光のみ。

暗すぎて何も見えない。

手足も後ろで縛られているため、動かす事は出来ない。

故に、何も出来ない。

ここに入れられる時、勢いよく投げ込まれた為、壁際に居るのだが、その際にぶつけた肘がとてもなく痛かった。

今はそれを耐え、自分の処分が決まるのを待つばかりだ。

……どこで間違えたんだろうか。

ふとそんな事を考えてみる。

だが、考えたところで何も思いつかない。

自分がしてきた事は全て正しいと思っていたから。

いや、そう思わないと正気を保てないことばかりして来たから、そう思う癖がついたのだろう。

ジードに居た時、人をたくさん殺した。

それは仕事だったからと、割り切っていた。

グラ尔斯でも、人をたくさん殺した。

それどころか、カイ達の味方を殺し、刃を向けてしまった。

本意ではなかつたとしても、記憶として残っている。

人殺しは、罪だ。

そんな事を平然とやつてのけていた上に、向こうでは幸せを手に入れていた。

これは、その罰なのだろうか。

……そういえば、リリイは元氣にしているだろうか。

結局、仕事は人を殺す事だったのだと、告げる事は出来なかつた。

それだけじゃない。

俺の処分が、もし死刑であつたならば、リリイを一人にしてしまう。

一度と戻らない俺の帰りをずっと、待たせる事になるのか。

これもまた、罰なんだろうな。

思い、自嘲の笑みを浮かべる。

こんなものかと、呟いて。

と、その時だ。

足音がする。

石造りの通路を歩く、一人分の音。
歩幅が疎らな音の主はまっすぐに俺の牢屋の前まで近づいて止まり、しかし通路が暗いせいか誰が来ているのか把握出来ない。暫くして、鉄柵の扉が開き、一人が中に入つて来る。

その姿を見て、俺は目を見開いた。

「お久しぶりです、ユウ」

そこには、ジードに居るはずのリリイの姿があった。
愛おしい、妻の姿が。

思わず声が漏れる。

言葉にもならないような情けない声だが、それでも発する。
発し続ける。

「あ、ああ……リ、リリ……イ……」

「はい、リリイです。ジードから遙々会いに来ちゃいました」

えへへ、と可愛らしく微笑むリリイ。

その顔を見ただけで、救われた気がした。

疲労と痛みで重い身体を無理に動かし、少しでも彼女に近づこうとする。

それに気付き、リリイもこちらに寄ろうとした。

刹那。

彼女の身体が、まるで押されたかのように一瞬揺れた。

表情は固まり、見開いた目が俺を見る。

同時に、違和感があつた。

胸元から、銀の刃が生えていたのだ。

その刃には赤い液体が伝い、流れ、切先から霊を零す。なにが起きている？

意味がわからなかつた。

どうして、こうなつているのかが。

だが、無意識に、身体は前に出て。

崩れるように倒れて来たリリイの身体を受け止める。

手は伸ばせない。

力が抜けた彼女の身体を抱きしめようと、手を縛つている繩を千

切る為に藻搔く。

簡単に取れるはずもないのに、分かつていいのに、ひたすらもが

く。
「あ……あう……う、ウ……」

今にも消えそうな声が、吐息と共に俺の耳をくすぐる。懐かしい声が、脳に響き、返すべき言葉を思考させる。肩に載つた彼女の顔を見つめ、絞り出す。

「あ……ああ、お……おれだ……」

言葉は、ただ聞かれた事に対する返事。

かけようと思つた言葉では無く、似合つた言葉でも無く。けれど、リリイはその言葉にて、笑みを返して來た。

「よかつ……た……やつと……会えま、した……」

「そつ……だな、会えた……会えた……！」

「ふふ……相変わらず、です、コウは……。でも、」

なんだ？ と、相槌を打つと、悲しそうな表情になつた。

眉尻を下げる、涙を溜めた瞳を瞑り、せり上がりつて来る血を吐きながら。

「やくそく……やぶって、あ……ひやこました……」

ただただ、申し訳なさそうに。『ごめんなさいと、もう声の出ない口で『嘘』の聞こえなくとも、わかつた。

謝罪の言葉を出す口の動きは分かりやすい。

「さ」「ある、な……俺は怒つてないし……念えて、嬉しいぞ……？」

精一杯の笑みと共に、そんな言葉を送る。

するとつりは、一瞬目を見開いて、満面の笑みを浮かべた。

田を『嘘』のようにして、幸せそうに。

同時に、呼吸の音が、静かに、止まった。

「……リリイ？ ……おい、リリイ。返事してくれよ……なあ？」

完全に力が抜けたリリイの身体を、必死になつて揺らす。意味がないと知りつつも、諦めたくない一心で声をかけ、揺らす。

「なあ、田を開けてくれよ……別に、怒つてなにって言つてるだろ……？」

……？

どれだけ声をかけても、変化はない。

もう、笑つても、怒つても、泣いてもくれない。

そう思つと胸が押しつぶされそうで、否定の意味を込めて揺らし続ける。

こんなはずないと、死ぬはずがないと、自分に言い聞かせる。

……これは、罰なんだろうか。

「往生際が悪いね、ユウは。もつ死んでるつていうの?」

声がした。

それは正面、影がかかって顔が見えない位置。

そこには血のりの付いた長剣を持った、長身の青年が立っていた。

「リリイが死んじゃって悲しい? だつたらごめんね? でも、邪魔だつたんだからいいよね?」

怒りが沸いた。

だが同時に、聞き覚えのある声だなと思つ。

こいつは、誰だつたか。

考えれば考えるほど、怒りは増幅され、殺意を追加する。刹那、一つの光景がフラッシュバックする。

そこには、血まみれの男がいた。

片目につけた眼帯が特徴的なそいつの背後には、一人の少年。

俺も、そいつも、よく知る存在。

血まみれの剣を持つ少年が、声を発する。

『もつ、用無しなんだよ?』

その声は、今日前に遇る青年と同じ声で。
思い出す今は、憎むべき奴。

「 ッ!..!..」

今すぐにでも殺してやりたい名を、叫ぶ。
その声は牢屋内に響き渡つた。

無力な男の、惨めな叫び声が。

第八十一話・騎士の意思と弟子の意思

ネプチューンの一言に、ナギは眉を顰めた。

だが、特に何も言うわけでも無く、彼の言葉に耳を傾ける。

一方で、問われたネルガルは腕を組み、頬に手を添えた。

綺麗な白髪を弄りながら、難しい表情を見せる。

「ユウ・ウラハスの処分は、残念ながら良い結果にするのは難しいと思われます。何分、こちらに多大な被害を与えたわけですし」「それはわかつちよる。百も承知つてやつぜよ。けんど、あいつはわっちらにとつて、必要なやつなんよ」

「理由が私情では、敵を味方にするという判断は容認されませんよ？」

「んや？ 私情だけじゃないっちゃ。ちゃんと、味方にいた時の特もあるぜよ。報復戦争時に異例の入隊があつた、シリルヴァード・ユリウス・ファリエトスのようにのう」

その言葉が放たれたのとほぼ同時、ナギは目を見開いてネプチューンを見、ネルガルは眉をピクリとさせた。

シリルヴァード・ユリウス・ファリエトス。

報復戦争時代、テクノス王国の聖五騎士と呼ばれる、国王直属の騎士であつた女性。

しかし、戦争中期にバビロニア皇国に寝返り、戦況を変えた者。この出来事が戦争が早期終結した理由の一つであるとされている。裏切り者の女戦士。

同時に、カイとシルクの先生であり、カイの師である人。

その名が出た事に、カイとシルクは顔を見合わせ、次いでネプチューンを見た。

視線の先、ネプチューンは笑っている。

まるで現状を手中に納めた独裁者のようだ。

「自軍の勢力に多大な被害を与えた敵兵士である彼女を受け入れ、一個中隊を任せるまでしたらいいんね？ どうして、そこまで出来たつちや？ 敵なのに」

「……皇帝の命令でした。当時、武器も鎧も投げ捨てて投降して来た彼女は、皇帝に会いたいと要求してきました」

己の未熟さを知ったからと、これ以上の悲劇を生みたくない。叫ぶようにして、シヴァは頬み込んだ。

当然、敵の言葉に耳を傾ける者など誰も居ない。だが、

「彼女の言葉が、偶然皇帝の耳に入りました。本当に、偶然に。その翌日、皇帝は王室に彼女を呼べと、そう仰つたのです」

もちろん、多くの者がその行動を止めた。

ネルガルもその中の一人であり、相手が相手国のどういった地位に居た存在であるかを事細かく説明した。

だが、その全てが、命令だ、の一言で一蹴される。

そして、反対の声も虚しく、シヴァは到着した。王室には、シヴァ以外にネルガルも許可された。つまり、皇帝とネルガルとシヴァの三人だけという事だ。もし、シヴァが初めから皇帝を殺す気であつたら、という可能性を防ぐ為に、ネルガルが無理を言つて同行したのだ。

しかし、予想外の事態は起きてしまった。皇帝は、シヴァに剣を渡したのだ。

瞬間、彼女は剣を構え、そして自身の胸元に切先を添えたのだ。

「私は、人を殺す事になんの躊躇いもなかつた。正義の為だと自分に言い聞かせて、たくさん殺して來た。だが、気付いてしまったの

だ。私のしてきた事は、理不尽に死んで行く者と、悲しみと復讐の連鎖を作つていただけだと。そして知つた。私が信じていた国は、卑劣な手を使つて皇帝の家族を殺したのだと。そんな国が戦争に勝つてしまえば、未来は酷いものとなつてしまつ。故に私は、この戦争を終わらせたいのだ。早期終結、これを貴方が望むのなら、私は貴方の刃となり、この命を捧げよう！……そう、言つておられました

言い終え、当時を思い出したのか、ネルガルは含み笑いをする。対し、ネプチューンは睡然として口を開け、不意に笑う。

「さつすがシヴァっち、やる事成す事が毎回すんごいなあ」「なんてつたつて、シヴァ先生だもんなつ

「だね」

カイとシルクも一緒になつて笑う。

今や姿を見せぬ師を想い、懐かしむよつこ。

そして、笑い疲れたネプチューンは、言葉を続けた。

「コウ・ウラハスは、そんなシヴァっちが認めた男ぜよ。実力は十分だつちゃ。後は

「後は皇帝からの信頼、というわけですか。ですが、ご存知の通り皇帝は今、体調が芳しくないもので、お会いする事は出来ません」

「そこをなんとか！ わっちの顔に免じて！」

「あんた、免じる顔がどこにあんの

「失礼します！…」

クレアの突つ込みを遮ったのは、扉を開ける音と兵士の声だった。息を切らして入ってきた彼は、ネルガルの下へと早足で行き、耳打ちする。

皆の視線を集める中、ネルガルは報告を聞いて数回頷き、最後にわかりましたと黙つて、兵士を下がらせた。

そして、視線をネプチューに移し、無表情で報告内容を告げた。

「ユウ・ウラバスが、牢屋内にて皆様と同行していたリリイ・ウラバスを殺害したそうです」

「リリイさん！？」

報告に声を上げて反応したのは、カイとシルクだ。

正しくは全員が反応していたが、ネプチューとクレアは目を見開き、ナギは片手で頭を掴んで溜息をつき、メルディは口を両手で塞いで絶句している。

予想だにしない出来事だった。

「ユウ・ウラバスは先の戦闘で所持していた長剣を使い、リリイ様の心臓を一突き。手足は縛つてあつたはずなので、第三者の手助けもしくは介入も考えられますが、ユウ・ウラバス自身が血まみれの長剣を持っていたが為に、彼が犯人と確定されました」

また、

「それを見つけたのが、処罰に関する権限のある皇国軍上層部の者でして、自身の妻を殺したという事に大変お怒りのようです。よつて即刻、郊外にて処刑が行われるそうです」

刹那、カイとシルクが立ち上がり、走り出した。

そして、制止の言葉に聞く耳を持たず、部屋を後にする。残つた者達は暫く沈黙し、場の空気は凍りつく。

そんな状況で言葉を放つたのは、灼熱の男だった。

「では、ネプチュー様。申し訳ありませんが、ユウ・ウラバスを

受け入れる件は却下という事でよろしいですか？

「ん、ああ……しょうがないぜよ」

いつも通りヘラヘラと放つその言葉に、クレアは素早く反応した。何を言っているの、とでも言いたげな表情をネプチューンに向けるが、彼女は見た。

彼が、ネルガルに見えない位置に回した手に拳を作っているところ。

そして、その拳が握る指の爪が、手の平に痛々しく食い込んでいるところを。

爪先が入り込む皮膚は赤くなり、次の瞬間には血が、少し垂れた。クレアにとつてはそれが、初めて見るネプチューンの悔しがる姿であり、また自分の望みが無残にも叶わなくなつた瞬間だった。

一方で、ナギは舌打ちをし、メルディにアイコンタクトを送る。すると彼女は、返答として頷きを返し、立ち上がり扉へと向かう。

開け放つと同時に、ナギは立ち上がりネルガルを見る。

「ほな、わいはいらで退出するわ。一箇中隊の選抜もせなあかんしな」

嫌味混じりに言い、メルディが開けた扉へと向かった。
その途中、不意にナギは歩みを止め、振り向く。
視線は、ネプチューンに向けられる。

「せや、Hティフィスが戻つて来たら、伝えてやつてくれや。
裏切るつもりはなかつた。これまでも、これからも。だが、クレアの件を隠していたのはすまなかつた、となあ」

確かに伝えたぞ。

そう言つて、ナギは部屋を出て行く。

同時に扉は閉まり、残つた者達は視線を交わす。今は、それくらいしか彼らには出来なかつた。

疑いを持ち始めたのは、いつ頃からだつただう。客船内でフェンリルの会話を聞いた時から？合流した時、クレアと同行していたから？ティファアという存在が、自分の中に居る事を隠していたから？小さな、しかし多くの疑いは、敵として現れた時に一つとなり、確信となつた。

躊躇無くレジスタンス兵を殺し、自分達に刃を向けた。だが、それでも。

彼は、カイは僅かながらに信じようとしていた。だから、ナギに伝言を頼んだのだ。

……答えはまだ聞いてないけど。

今は、それよりも重要な事がある。

「ちょ、ちょっと待つてよカイ！　は、速すぎ…………！」

カイの後ろを行くシルクは、呼吸を荒くしつつも必死に走る。時折、転びそうになりつつも、真実を知りたい一心でついて行く。彼らはユウガどこに居るのか知らない。

それでも走り続けるのは、いわゆる直感だ。

また、彼らは既に外に出ており、城に沿つて石畳の道を進んで行

く。

人気は全く無く、城と城壁に囲まれた景色が続く。暫く走り続け、カイの呼吸も乱れ始めた頃。

不意に景色が開け、そこには重鎧姿の兵士数十名の群が円を形作っていた。

まるで中心に居る誰かを隠すよつこ。アリス

カイはその群に駆け寄り、兵士を押し退けよつとする。

「あ、こちらお前、近寄るな！」

カイの接近に気付いた兵士達は彼を止めようとするが、それを避けて突っ込んで行く。

そして、彼は見た。

中央に両腕と一緒に身体中に魔法陣が絡み付き、まるで簞巻きのよになつていてるコウの姿が。

唯一、魔法陣が付いていないのは首から上と、腰から下だ。
田は虚ろで、歩調はフリフリつき、兵士に引かれてようやく歩けている、そんな感じだ。

完全に放心状態となつている。

「お、おい……コ　　」

「邪魔だ、離れる！」

言われたのと同時、カイは吹き飛ばされ、石畳に尻餅をつく。
だが、すぐに立ち上がり、もう一度割り込もうとした。

しかし、それをシルクが後ろから抱きつぶ形で止めよつとする。

「駄目だよカイ！ そんな無茶しけやいけないって！」

「コウ！ どうこうことなんだよ！？ なんで、なんでリリィさんを殺したんだ！」

必死に止め、説得するシルクなどお構い無しに、カイは彼女から離れようとがき、コウの下へと向かおうとする。

片手を口一杯伸ばして彼を制止させるように。

大声を張り上げ、返つてくるはずの無い返事を求めて。

疑いなんて感情は、どうでもよくなつていた。

ただただ、眞実が知りたいが為に、返事を求める。

そんな彼の願いと裏腹に、ユウを連れた兵士の群は遠ざかつて行き、距離はどんどん空いて行く。

だが、それでもなお、カイはもがき、求め、叫ぶ。

しかし、兵士の群が見えなくなつた頃、とうとう動きを止めた。シルクはそれに気付き、腕を離すと、カイは膝から崩れ落ち、俯いてうな垂れる。

……なにも出来なかつた。

そう、内心で嘆くように呟く。

彼が見た光景は、予想外だつた。

いつもどこか余裕で、なにを考えているのか分からぬユウ。

そして自分達を、理由はどうであれ裏切る形を取つた彼が、放心状態になつていたからだ。

今までの彼を見ていて、想像も出来ない姿だ。

それほどまでに、リリイの死は彼に影響を与えたのだ。

「……っ！だつたら……！」

歯を噛み締め、吐き出したい言葉を堪える。

……だつたら、どうして殺したりなんかしたんだよ……！

自分は現場には居なかつた。

故に、どうしてそなつたのかは分からぬ。もしかしたら、他に誰か居たのかもしれない。

だが、現状での報告は、ユウが殺したという事。

これらを理解している上で、カイはユウに対して、敵意よりも疑いの意思の方が大きく膨れ上がつた。

と、その時だ。

嘆き、震える彼の身体を、シルクが今度は正面から優しく抱きしめた。

額を胸元に押し付けさせ、頭を優しく撫でる。

まるで赤子をあやす母親のように、弟をなだめる姉のように。カイはその行動に、なにが起きたのか理解が追いつかなかつた。だが彼女が、大丈夫だよ、と耳元で囁くと、彼は抑えていた感情を一気に爆発させた。

泣く。

シルクの体温を額で感じ取りながら、彼女の肩をしっかりと両手で掴みながら言葉にならない声を上げ、肩を震わせしゃくりあげる。彼は並の兵士よりも強い。

この旅で本格的な実戦は初であつたものの、十分な戦果を上げている。

しかし、彼はまだ十七歳の少年なのだ。

街や村では、普通に学校に通う少年少女達となんら変わりないのである。

それはシルクも同じであるが、戦闘による人への殺傷、仲間を疑い続けていた事に対する不安感と罪悪感、仲間の裏切り、仲間の死、世界を任される責任感。

これらがゆっくりと、だが確実に彼の心に重く圧し掛かる。そして、今。

全ての感情や思いが一気に落下し、彼の心を押し潰す。それは涙と叫びに変換され、止まる事無く吐き出される。シルクはそれを、全て受け止める。

拒否する事無く、嫌悪する事無く、彼が落ち着くまでずっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2520e/>

フラグメント・オブ・タイム

2011年11月24日13時46分発行